



# 黄昏のゴースト トタウン

---

---

かもめ7440

---

# 黄昏のゴーストタウン

---

フェンス越しのここからなら、オレンジ色。

そして、ぼんやりとかすむ意識だけが、

ふらふらと一人歩きを始める。失われたものたちの轟めく、..

、、、、

忘却の都..湖のような碧い瞳の底に、呼ばれる方への身軽な動き..

美しさが突然砂漠に降る雨のように、歌った——

拜んでる間って、何を考えれば良いんだろう。

最後の同調かも知れない——精神汚染..

好敵手の記憶。ライトニング・ブレイド——

機械的な動き。不気味なハーモニーを奏でる..

——響き——匂い..

その非の打ち所のない真空の痛み..。

——ぬくもり——餓え..

愛が、人間のなかに永遠なる未知として存在し続けている..。

物凄い音が深閑とした廊下に鳴り響く、

ゴールを目指して疾走する——

サラブレッド..！

(昔取った杵柄..誇らしく胸を膨らませた壇上——..)

(僕にもあった——..)

否——僕だからこそ..あった——..

ぐしゃり、鈍い音のするフェードイン。麻痺した感覚が戻ってくる..  
——でも地図は、濡れたまま、黴た。——雨のノイズ..は、聞こえたまま..

「あの日は——もっと暖かくて気持ちの良い陽気..」

シムボル

手首に巻きつけた僕の腕時計は、公正の象徴だった。

ベッドを整え、花を飾るように、鉄分を含む、アクアリウム的な鉱脈。

——黒い瞳を、分厚い辞書の饒舌とし、束ねていた。..

(言葉)は、本来《生活》の中にあるものだから——だ..

ポルターガイスト

騒がしい霊..

——空中に光の残像を漂わせ、脱現実的な秘密の隠れ家。

..以前なら、すぐに出て来てくれた——流れていく星をちぎりながら..

星屑のような微笑み、あの日の微笑み。

今日の延長として続くという、息遣い。——..

夜の底をかき分けて走る極限的なアナーキー。不毛な樂園。

地雷。潜在的な殺し合い..切なさが滲み出した黄昏——

月日という透きとおる時間に、この荷物は、ひ弱な背に負いきれない何か。

.....禁じられた聖衣

ハイ・メダリオン・アーツ

...高等紋章術

——土手の上から見えるのは、川。

——土手の上から見えるのは..

「神の名は？」(誰かが聞く..)

..六メートル、七メートル、距離はどんどん縮んでいく。

別の存在に見える、無関係に、目まぐるしく往復する柱時計。

表情、視線、口調、態度、行動、

限られたひとりのいのち——(DEAD——)

悲しみを言葉にする空しさ虚ろさ..

Brushfire Knight...

紅炎の騎士は、放つ.....ごうっ、と空気を震わす熱気

——死すらも優し——い…

グラヴィティ・ブラスター

……重力砲

なのに……………なのに……………

ヘイズピラー

——陽炎柱…

そうだ、そのずっと向こう側に見えるのは、

そうだ——見えるのは…

折り重なったビル群から溢れる…

光——…

言葉の端々に現れる。視界を喪失した、棺…

アルティメットシールド——…

寄る辺なさや惨めさの筏に乗っている慈愛、

酩酊の泥がびっしり詰まった。奥へ…、

さらに奥へと踏み迷っ——て…

もうどんな退路もなくなる。憐憫も、哀愁も、熟知する皮膚…

頭をめぐる血流が静かに吸い取られていくように、

滑らかに、空中に浮かんでいた——燐光のような、不気味な薄青。

剥製——ゼンマイを限界まで巻き上げた機械仕掛けの人形…

クリスタルのような透き通ったブルーの閃光——…

「（弾丸のような速度で空気を切り裂いた——…）」

心の不思議が、少し、僕にもわかりかけてくる…

さわっ。——…

前髪を掻きあげながら、俯いて、笑うのをやめていると、  
僕も人に言えないな——と、思えてくる…

他愛もない会話を与えた。風に髪を靡かせながら、隙を与えた。

冷や汗が、服を湿らせる。無心に、冷徹に、淡々と――

――響き――匂い――

その非の打ち所のない真空の痛み――。

――ぬくもり――餓え――

愛が、人間のなかに永遠なる未知として存在し続けている――。

「人生という岸部から遠く離れてみる――

必要なことは、

本当の*Pride* だけが教えてくれる――」

## 季節の終わり

---

今夜も、薔薇の中で匂う、

音と色彩と光は一一みだらな遊び心に、

遠く過ぎ去った喜びの面影を語り、そのほか沢山の嘘を語り、

君は口癖のように憧れの美少女を語り、

(あるいはあたりが暗くなった時にだけ現われる、

一一ナイチンゲールのように、甲高く鳴き、

しかしもはや微妙な弦で時に低く、暗く…)

それでも君は、うまく閉まらない扉を鳴らし、

無我夢中の喜びの歌。君は珠玉をちりばめ、魂を振り絞る無垢の白銀。

ああ、君はまた近づきになろうと何度も試み、詩想と詩法を駆使し、

しらべ

人さまざま囚われの歳月を語り、その歌の音楽には…

脈々と流れているとは考えずにはおれない、魔法の光があふれ、

永遠のもの、いや、特色ある形跡のもの一一…

足取り危うく、近付いたり、遠のいたり…

わかえ

…肉体は何を語るか一一緑したたる若枝は何を語るか…

堰よ、ざわざわと小気味のいいあの音を、鳴らし、

ああ、葉を地虫が引いてゆくように、しじまに、

蝶が蟻に運ばれゆくように、果てしなく、ひたむきにつま弾け、

鳴らせ一一心やすらかなになるのは音の方が早い、だがしばし、

思い出の重さを確かめる憐れなさすらい人に聞かせてやれ。

黒いレースのブラジャーに、サイズの大きなTシャツ、

細いストラップのTバックにガーターベルト。

女たちは火の中を見つめて微笑む、その瞬間それらは、

ブランコに乗るわたし。ジャングルジムに昇るわたし。

滑り台で両親に手を振るわたし――

冷たい手触りは一枚のガラス板――生の記憶の幻

以前そこに扉があった、――だのに男たちは、

凹んで、硝子のように踏み砕かれ、頭まで薄くなるばかり

…しかし、それでいい、そこにヴァイオリンの弓を高く弾く気鬱なMelancholy。

――それでいい、心のグラデーションがすべて消え、暗色に染まる

## 愚かな夢――多くの仮面

わかれ

――別離ののちのあの暗い空間、星がみな薄れるとき、

ひとみ

恐れていない、太陽の熱っぽい瞳孔を君はしながら、

暗い髪をし…そしてまた昏い瞳孔を霧の中の虹のように浮かべ、

くたびれて細り、秋のまだ収穫にはやい固いその果物のように、――

ああそれでも、君は呼ぶ、美しい季節のとある美しい時刻を

——目を閉じるだけでいい

そろそろ出発を告げるベルの音が

……………ホームから降ってくる

「どうしてこの花はこんなに長く手間取るのだろう…」

と、胸のときめきでない、短い古風な歌の類…

——花片が散る…

日暮れどき、彼方に連なる丘また丘へと消えてゆく叫び…

震えているかも知れぬ——僕は震えているかも知れぬ…

——夜の衣はあつく、

言葉は夜の雪…

言葉は夜の雪…

——夜の雪…

囁く——囁けば、草むらとそよ風のやりとりに変わり、

ときめく青い影を刻みつけた、眼うらに張り付いた黒い影。

乾燥した高地の、人知らぬ花の印象のよう——

あなたは、僕にロンドンのテムズやパリのセーヌを想像させた。

光の部分と影の部分…おお、ランボウの酔いどれ船のように、

いまとなっては、何処に美少女が？…

何処に星座が、何処に夜が？…

しかしそれでも地平線は何処までも広がってゆき、董色の光に触れる、

その、裸体は大地からのめぐみのように血肉化され、

白いレースのカーテンのように、

行く先々の喜びも、刻一刻と形象化していってみせただろう…

ゆっくりした夏中、菊は燃え、向日葵は種子となる――

表紙をめくるように、ベリベリと、仕舞い込んだ年月が音を立てる。

「こちらに。」

「どうぞ、こちらに。」

死者の怒りで、自分の最高の原料を見つけたが、善悪の垂直線、

その意識の流れに北極並みのいてつく強風にあたることはやむをえない。

野太い音。甲高い音。飲み干される時をじっと待っている、お前は、

おそらく永遠に――

永遠に、そのグラスは頑丈で直立したまま、憂鬱でいて強壯な媚薬を、

価値ある痙攣を、衝突を、その微笑みを振り払えず…一粒の涙も、

とむらい

いまでは葬送の鐘がいる。

穏やかな一生はありそうにない――

そこに眠そうな蠅が一匹、この空間の一点に、

――羽根と触覚を見せながら、張り詰めていた糸が切れたように、

マシュマロみたいにふにゃふにゃとしながら。

じきに消え去る――時のルールと知りながら…、

僕の所で、胴体手足をわななかせ、どこでどう、

腐り果てたかわからぬ、あの人が来る、衰え沈んでゆく心に近づいては、

一撃を食らわせようとする。幻滅、同情の言葉ひとつもてないお馬鹿さん…

…落ち着き払った静けさの中に、在りし日の楽器、

金管楽器、ピアノの旋律が浮かんだ。ああ、何か或る祝福された希望、

ああ、生の真実を語り、幻を彷徨うことと覚えた、その祝福された希望…

連れてゆくつもりだね、——ああ、僕にどんなに遠くまで見晴らせよう、

ローマの街道、南アフリカの草原…

峡谷に、菅沼に——百万ドルの夜景に、一千万ドルのカジノ…

それでも、うたい出された以上は酔うだろう、悩み喜びに…

おお、もうじきお前はあの夏を、秋を、

さみしい見知らぬ暗い所へと、運んでいってしまうつもり。

——目を閉じるだけでいい

寝返りはやめろうつろな声がひびき

……………時だけが嘲笑う

頭上を通過する列車のひびき——鉄橋の下——

さながら崖をあがり——灰いろの眼を見たかのよう——

——おお、しかし、既に物語の扉は開け放たれている。

「お前は眠りから醒めた水鳥のように…

あるいは轍にふと生まれた水たまりで顔を洗う、雀のように…」

と、胸のときめきでない、短い古風な歌の類のように…

まだ信じているのだね——信じていると、嘯けば、お気に入りの幻が、

かつての戦士の甲冑の中から見つかりよう。亡霊よ、おまえの好きこのむ、

隠れた海の岩肌も見えよう…花は枯れよう、しかし、

甘美な言葉だけは別、輝くような若さを引き換えにした、

お前の情熱は本物——生きる意味を、

棺と共にお前は燃やしたろう…迫りくる夕陽に、

愛しい人よ、いよいよ侘びしい僕の人生が始まる——…」

## 腹黒いおばさんの話

---

腹黒いおばさんって知ってはりますか？

なんちゅうーか、全身くああーっとエリマキトカゲしとるんです…

しとる言うても、ミスト状なんですけどね、はあ。はあーっ！

いや…こちらの話。

で、腹黒いおばさんは、毎朝、踊ります。

はい、腹黒いのを悟られへんように、踊らはるわけです。

ポンポコ踊り〜ッ！とかカワイコぶって言ってたら、

それ大体、腹黒いおばさんです。自主勧めてやってください。

大体、悪いことしてます。

腹黒いおばさんは、おばはん、と呼ばれるのを極度に嫌い、

おねえーさん、とか、可愛いおじょーさん、

とか、色々バリエーションあるんですけどね、あります、

あるからなんやねん！

いやあ、どうでもいいんですけどね、

腹黒さ、隠しようがありません。真っ黒です。真っ黒な貴乃花です。

でも、貴乃花の場合は真っ黒なチョコレートの貴乃花です。

これは、食べられます。

だからニュースにもなります。

でも、真っ黒なおばさんの場合は、腹黒いだけです。

隠しようがありませんし、言い逃れしようもありません。

後生ですから、肩にポンと手を置いて、

何か最後の言葉をかけてやって下さい。

腹黒いおばさんは、大体あらゆる家庭にいる母親のことです。

けど、自分の母親を腹黒いと言ったらカド立つんで、

同級生の母親を、腹黒い言うてください。

十中八九、友達にしばかれます。しばかれへんかったら、

その子マザコンちゃいます。リリーフランキーやったらしばきます。

だって本出してしまいましたからね。

カミングアウトしたら、そりゃあーもう、死ぬまでマザコンキャラです。

でも、それ全部大体腹黒いおばさんです。

トカゲみたいなもんです。言うたらあかんけど、

それ、むちむちなパンティーストッキングみたいなものです。

幼児売ります！と書いてる変な人みたいなもんです。

そんな人おられます？ いや、おらんわなー。でも、

腹黒いおばさんは、そういうこと、ふつうに言います。

近所が物騒なった。脳内世界と現実がシンクロします。

気がつくと、マトリックスという映画の世界を根拠として、

ペ・ヨンジュンだらけになってます。

腹黒いおばさんです。・・

もうお願いですから、腹黒いおばさんに、

ビールと煙草をプレゼントしてあげてください。

あんまり腹黒くなったらあかんで、

血液サラサラにせなあかんで、と言うたってやってほしいんです。

いやまあ、別にどうでもいいんですけどね。

## 宇宙人、空中遊泳的なキスなどをすれば

---

昔 あなたとここにいた気がする

ねえ、アキコ、この時代の生物は、

いつも戦いたくていらいらしているように見える。

——フフフ、そうね…。

What's a noise.....

.....Who's that ?

Who's there ? .....

「でっかい口をあけて底抜けに明るくて…」

——加熱された回路が冷める学習能力…。

あたし————

「ねえ、こんな話…知ってる？…

帝王切開って、ジュリアス・シーザーからきてるって？」

「知ってる。帝王切開の起源は…」

.....*You want to touch me?*

あなたの本質は何でしょう、

——シルバーメタリックのボディの内側に…

…遺伝子操作の末の美少年が——いる…

でもそれは、嘘だ、ただ想像しているだけ…

——でも、どうして男の子ってあんなに物知りなんだろ？

……実は、宇宙人とか？

Let's dance...Let's dance...

気の遠くなるほど長いアーケード街…

……Come on

メリーゴーランド、ジェットコースター……

会話はいつか尽きて、でもすぐ、再開…

笑ったり、怒ったふりしたり、

……時々は、泣きそうだったり！

「自分のいい所は見つけにくいよね」と、藤堂君。

——ねえ、アキコ、と、また宇宙人の影がちらつく。

…このヤロー、と思う。どこの星雲からやってきやがった。

(もちろん、ウルトラのつきそうな星から…)

(そうよねそうよね、ウルトラクイズ！)

降るイカー——古典的ギャグ…

エロイカ！…

かたんことん、バスが揺れる――遊園地の帰り道、  
林間学習の、炎を思い出す…

円盤が見えたような気がしたんだけどな…

でも、本当は電飾凧だって、藤堂君は言いそう――

「言わないよ。…」

ぼそっと――藤堂君…

「昔、美しいバラを枯らしてしまった人がいるんだ。

…ユゴー。レ・ミゼラブル。

前科者のジャン・バルジャン…飢えをしのぐためにパンを盗んで、

それで十九年間、牢獄――信じられるかい？…

アキコ、…その昔、地球は動いてると、ガリレオ・ガリレイが言った。

それでどうなった？…地動説を放棄する旨の異端誓絶文を読み上げさせられたよ。

…魔女裁判は？――決闘は？…」

(――U F Oを見たんだよ…

おっと、こんな所にフリスビーが…)

…――一千万もの影がかしづいている――キャンプファイヤー…

――同級生に、うそうそ、この子、目立ちたくてそう言ってるのよ、といわれた。

――傷付いた。

……悪意がなくても、傷付くことを、その時に知った。

「ねえ、そこにね…」

——藤堂君がいたらよかったなあ…

What's a noise……

……Who's that ?

Who's there ? ……

つまらない中学生活だった。高校に進学して、

入学式に、いきなり告白された。

(どうして、あたし?…)

——あたしは、誰かと間違えてるんじゃないかと思いながら、

…校舎裏に行った。少女マンガにありがちだけど、うわーっ、まぶしい!

アルシンド! って…古いか——

…付き合い始めました

……私、なんとなくだけど、

——宇宙のゆらめき…

「時々、中学校時代のことを、思い出すことがあるの、

…嫌なこと。でもいい所は皆にあるよ。わかっている。

……許さなきゃって思う。苦しいけど、許さなきゃって思う。

——でもね、藤堂君、いまでは、まったく別のことを考えるの。

あれは引き金にすぎなかったんじゃないか…

本当は、もっと別のところで、

パンドラの箱はあったんじゃないか——そしてたとえば、

…もしかしたら、あの時、あたしを囃した、クラスメートも、

——実は、あたしが何処かで傷つけた仕返しに、

…あんなことを言ったんじゃないか——」

くしゃくしゃ、と髪を撫でてくれる、藤堂君。

ミャア、とネコ一匹。あたいは、ドラム缶でよお、

——酒におぼれて死んだ、吾輩猫のことを思う。

(無視——あ、こいつ、無視しやがった…

と、思ったら、顔をそむけてコソコソ笑ってる。)

……人生、いいことがあるといいよな、

——アキコ、我々宇宙に住む人びとは、

——永久平和論って誰だっけと言いながら過ごすんだ…

憲法も法律も知らず、適当にやっつけて過ごすんだ——

知識は常識じゃないよ、求めて得るから常識になる。

…耳元で、藤堂君はささやく。

「す・き・だ・よ」

——わあ、色ボケコーコーセー！

ほにゃららをたくらむ、悪いコーコーセー！

Let's dance...Let's dance...

気の遠くなるほど長いアーケード街…

……Come on

…われわれ、うちゅうじんです。

## 音のイメージの追跡における無知な足の指

---

を噛んで眼を笑はせる

を噛んで眼を笑はせる

悪寒――予感・・

(横顔が、うかび出てくる、――)

交錯する地平の果ての

交錯する地平の果ての

――は、手の・・

(踊るこすもす――)

――は...手.....

天も地も砕けず

砕けずに――うずきいでて――

おお求めずに――あらわれいでて・・

坐るだけの眼のアイデア

据わるだけ――すわ・・

すううう

はああああ

・・・はく――すう・・

――いき・・し――て・・

――いき・・し――て・・

ひつぎをみたし――て・・

いつき・・と、樹の名前を呼んで

いきき…

みきき——…

わかれ

——感慨のない離別

滄漑のないいやはて

…そして

——して…

そ——う…と、ずうい…

こえ

音色を

あざやかを——

もの問いかけを…

会いにおいで

ダルに折れ

——かさね…

(る。)

…るるる——

縷縷…吹く風を捕うるよりも

(りる…。)

——れる…足りると言いたかったのに、いまは、

…で——ん——わ…

【イ垂れる-イ垂れる、イ垂れる…

至れる、とイイイイとオオオしている】

——電…話…

…で——ん——わ…

## 恋の始まり

---

ひつじたちは おちつきなく うごきまわっている。

サイレンみたいに おおさわぎして..

...雲。

二車線道路。

バイパスは無料区間——..

踏み切り——開かずの踏み切り..

*tititi...suzume...*

ちゅんちゅん——

——眠たい..

見つけてくれてありがとうって、顔の知らない女の子が言う、

場所?..場所は分からない——

足をとめて——る..しゃがみこんで——

もっと、澄んだ声が聞きたくなる。

ドキッとする——

血が、鎮まっていく..夢...

慣れていくのが――…自分でもわかる――

目覚めて、水を飲みながら、ふっと我に返る。夢精より始末が悪い。

サカってるオスとメスの方が相応しい。恋愛ごっこ…お友達ごっこ…

でも、嫌らしい笑い方してるのも――…自分だからわかる――

こういう時は臆病な方がいい、いや、こういう時は――

こういう時は――慌てた方が負け――…

STARTボタンで始まる…

Game overのない毎日――

時々、卒業アルバムのことを思い出す――

でも――捲らない、脱いだ靴と同じだ、――

まぶしすぎる、少年時代…考えてることは、ファンタジーで、

世界が違いすぎて、カルチャーショックを受ける。――

ピュアすぎて、あそこに毛が生えていないのかと思う。

ぜえぜえ…　そこを　おさないで…

ぜえぜえ…　おさないで…

あっ。ほら聞こえる。…

波の音――…

けいとを つむぐための きかい。

ひとやすみできる ベッド。

写真立てに、花柄の布団。ぬいぐるみ。

——女の子の部屋・・

お値段は ——

と なっておりますが、

いかがでしょーかー？・・

雨が好き——・・

じつは お日様が苦手だから——・・

身体弱いし——・・運動苦手だし……

くよくよする…………

(この人は本気なんだよ。わかる?)・・

——子供のころから、あたしはそんな少女だった・・

(君の生まれの不幸を呪うがいい!) ……

「うるさいなあ——」

お姉ちゃんの彼氏・・

マンションの部屋——

何事も 逃げてばかりじゃ駄目よ やる時に やっとかないと

あとあと どうしても やらなくちゃいけなくなった時に

経験が足りなくて 苦労する..

逆立ちしたって人間は神様にはなれない一一

美少女にもなれないし..

でも、それだけ一一

いつか、女性の顔をする一一

結婚して、子供が生まれて一一

はあ..っ一一

遠近感がおかしくなる一一

カチャ、ドアノブが回る..

あれ、誰かいるの?..

ドキッとする一一

布団を、持ち上げて..目から上だけで覗く...

お姉ちゃんの彼氏じゃない一一..

やだ、すごく、カッコいい一一..

……不覚した、あたしはパジャマ

——当てようか…森の中にいるリス——

くすくす…いや——シェイクスピアの読み過ぎか…

——いや、りんさん…お姉さんだよね、コンビニに出掛けたんだ…

あの、それで多分、数時間戻ってこないな——…

…その警戒した目やめてくれない？——

……襲ったりしないから——それで、あの、どうする、

僕は部屋を出た方がいいのかな、それとも…

ふっと、表情を緩めると…首を振って笑った——

何言ってんだ、俺は…

ドキドキしながら聞いてみる…——

布団を、持ち上げたまま…上半身を起こす…

な、なっ、名前は——…

*tititi...suzume...*

ちゅんちゅん——

——“ | ”..

…どうして僕は、どうして私は、どうして自分は――

…“I”…、自分を表わすその言葉を、最初に持ってきたながら、

――いまの自分が何処の誰なのかよく分からない…

――恋の始まりだった…

## 魔力

---

じっと目を凝らしていたら

元の場所が嵐に呑まれたことを知った。

燃えがら、

燃えがら――

昼と夜の密度、胸をきつく締めあげた僕と、僕の心の

出来損いの玩具――

漕ぐのをやめた時、

野生動物の蹄で踏み慣らされ――た・・

(水深の氾濫――)

ファッション雑誌のトレンド情報・・

レジャースポット、ニュース速報――

欲しいものは、うんとたくさんあるはずだけど、

いつもワンテンポ遅れる・・そうじゃない、

・・そうじゃない――

――自然は素晴らしい創造者だが、あまりにも、むらがありすぎる・・

、、、、、、、、、、  
巨大な陥没孔が開いて、

僕はもっと暗闇に慣れる――ミステリアスな闇よ、

おいで・・破壊、・・

破滅——神出鬼没のグリフィン…

そして、溶鉄が勢いよく生命連鎖の輪に加わった…

迷える者やアンデッドでさえ、

…真理の火を恐れて——る…

身を焼かれたことを覚えているから——

覚えているから——

…腐蝕する、債務者は財布を握りしめる。

人の恐れる蛇神でさえ——

荒野を捨てて、

人の前に現れはしない…

(掻き混ぜる

種子を巻く場所)

一語一語ゆっくり区切りながら言うと、

何だか気持ちも落ち着いてキテ…

それいらない、って思エテくる…——

カードゲームがしたいな…

モンスターを出しながら戦うゲーム

随分アバウトな回答だな——

虚無の徘徊者・・

スピーク・トゥ・バーズ――

たかだか、身体中に草花を茂らせているだけ、

神経に水銀が巡る・・

銅や錫が、死からも身を隠す――

そうでなければロボットを操縦したい――

一番簡単な呪文みたいに、

――不思議・・水平でありながら垂直・・

装甲輸送機・・

要塞の賢者にして神官――・・

都邑の忠節者にして、

とゆう

都邑の奴隷・・

都邑の奴隷・・

――君は踊る

……………気味の悪いスカルノオドリ――

手のひらにあたるなめらかなあの感じが夜の砂浜にあって

僕の魔力を高める・・始原体・・エネルギーの在り処・・

象が眠り、死霊たちが道を塞ぐ――洞窟・・

「耳が悪いと、色んな聞き間違いが起きてても仕方ない……

目が悪いと、色んな見間違いが起きてても仕方ない――

でも心は違う、もう――心とは呼べないかも知れない・・・」

、、、、、、

いつの間にか、見向きもしなくなっていたもの、

少しずつ欠けていったもののことを考え出す――まあ、当然か・・・

バーコード頭にいがくり、

サラサラヘアーにパイナップルヘアー

ワカメ――に、昆布・・・

鑄造所で、門無しに、鍵有りを見た――・・・

ざぶざぶりんりん、

ざぶざぶりんりん、

どこかで味わったぶどう酒、星空、またたき、

閉じてはひらいて、眠る魚・・・――

閉じてはひらいて、感じる魚・・・

疲れも慈悲も知らない陰鬱な威嚇だけが・・・  
雨雲を生み、雨脚を速めるかも知れない――

ずうずうしいけれど堂々としてる人がいて――

笑ってるけど本当はあんまり面白くなかったりする人がいて・・・

盗賊に戦士、魔法使いに僧侶・・・

騎士――に、順応する領域、

ろれつの回らないカメレオン…

どのくらいの深さで、ねえどのくらいの高さ？——で…

、 、 、 、 、 、 、 、 、 、  
ぼんやりと考えてるよ…

身に付けているシャツは汗で湿っている…

考えている頭は、熱い——

蝉の声はまだ小さい…夏、

どこかで鳥が鳴いて——る…

、 、 、 、 、 、 、 、 、 、  
スキャンダルや中傷、

嫌なメッセージほど人が群がるのも残酷な話だけど、

見てみなよ、蟻は死骸に群がる——

ねえ、見付けられない、放置…

伝わらない悲劇からすれば、よいメッセージなのかも知れない…

[波打ちぎわで、星を見てる…首席議長、軍曹…に言う——

「鱗を剥いてあげようか？…」]

…死肉を貪る人魚——

終わりのない——不死…

星がもし魚だったら、あれはすごく淋しい——…

精鋭たち、実験体たち、

天使たち、——女神たち…

怒れる腹の音・・超然として人を寄せつけなかった神々でさえ、

前線にあっては戦いを呼び掛ける。

時には、ついて来るがいい、と皆を先導する――

焼かれる兵士、焼きついてしまう魂・・

そこで星同士を結んで、星座を作って、

・・網にしたんだ、テリトリィに――

(従順で果敢

## な希種)

暗闇の中を、泳いでゆく孤独に比べたら、毎日のさみしさなんて平気さ、

とは、もちろん、いかないけど、

排水路潜み、さーシー・ウインズ・ザ・レース・・

嘘っぱちのブランドより、妙な価値観より、

性質における、その瞳のかがやき・・

我々は、

その生皮を戦利品として身に着ける。・・

まぶしく照らしている夜の照明を脱け出して、

僕は、波打ちぎわの魔術師――

ふわり、と魚の群れ――風のひらりひら・・

ふふ、僕は、つかまえられない――よ・・

風がここにあるから・・

ふふ、

騎兵や衛兵なんかじゃ僕を捕まえられない――よ・・

侮られたもの、見くびられたもの、

罾も飛び道具も、するりさ――ふふ、

屋根裏の廊下を誰にも気づかれずに歩いている――

不毛の地、千年王国で、

――雲をつかまえようとしてる。

夕焼けに染まる墓所の怪異・・

「残された日々――」

(奪われた自由・・)

それでも砂浜の誰もいない世界に、ちいさな足跡をつくれる。

――印象的な海、見えない流れのこの岸・・

しびれている、首。濡れている、服。

不完全を承知で泳いでいる僕等は小魚――

でも聖職者は決して僕の前を横切ろうとしない。

だから夜の間、それは娯楽や遊戯になり――

時として、神話になる…

宮廷のならず者――

不毛なこいつに仕事をやろう。――

僕の拳はフェニックスの火をまとった…

火花を散らせ、報復を謳った――かつては平和を祈念する建造物であった、

あのドームが、あるいはブロンズが…

彼の前で、粉々にされ――た…

「何と言う恥しらず！」

褒め言葉をありがとう――称賛という散弾銃…

（何と言う、悪漢！）

――死にも勝る名誉…

破廉恥、破廉恥、

あはは――ふふ、

あの神々でさえ、僕の存在を恐れた…僕の復讐は、

お前達にも――及ぶ…

強大な力を求めていた――…

そして俺は手に入れる、

そして俺は本当の《力》の正体に気付く…

、、、、、、、、、、、、、、、、、、

ぽかんと開けた口元を無理に埋める生命体、

金切り声でさえ、教会の影に覆われている。

すすりなき

泣き声-歔歔でさえ、何者かの教えに、常識にさらされている。

強くならなくちゃ駄目だ、

人生を切り開かなくちゃ駄目だ――

ゆったりと泳いでいると、ほかに何も要らない、ひとりでいい、

いや違う、ひとりの時間のさみしさを楽しんで過ごす、

いつだって僕を亡き者にしようとする天界の門

焦土を歩き、

煙となり、瓦斯となろう

その為の時間はある――ふふ、

鳥は何処へ行く？…生の目撃を強いられながら、

存在を大袈裟にも未熟なものの見方にもとらえられながら――

ふふ、……

ほかにない、きっと、掛け替えのない自分を見つけられる、

祈らなくていい、

はばたかなくていい、

そしてまた目を細めてみる、じいっと、目を凝らしてみる、

引いた波、僕の手を、

ブーメランのようにゆっくりと戻ってくる――

僕の魔力、..鳥の飛翔一一

どんな商品でも新しいアイデエエアの前で

売れないようになる——その創造と破壊が、地球の終わりまで続く

(戦争のネジを巻き直す、魔女の鍋の底のような場所…)

あちこちにぶつかるたびに痛みで悲鳴がもれそうになる。

夜中に集まって隠れてシコシコやってる——…

妄想上のキャバクラ嬢と秘密の花園プレイ…

空間に漂っていた悪臭も消えて透明色沈澱帯…

——何だお前は？ 何処から入った——…

誰だあああ！ 何者だあああああああ！

な…なんだこいつ [ハンバー・ガー]にでもなったつもりか…

俺たちは風のマヤコフスキイ、さもなければシェリーのジャングルウ！

そして—————演説は始まる……………

「僕は神になりたいんじゃない、味わってみたい——んだ…

神になることでしか——もはや救えぬことがある、理不尽な天の意志！…

うおおおおおおいよオオオオオ…笑う奴は口を閉ざして泣かせてやる——

吹っ切らせてやる、色んなものを失わせる、そーゆーバカは死ネッ！

これから先どんどんひどくなってゆくラスボスキルユウ、レベル99

まだ信じる価値があるって思える奴に出会えたら——いい… 」



車の中で、全力疾走フルスピードの問いかけ！..

お前の主は私の主か？——万国の中の一国..歯車や律動を、お前は、その次の次のも、その次の次のも齟齬や瑕疵と言い切ったはずなのに、非常に緊密な言い難い愚かな息は頃合いを見計らってやる The game's over !

The game's over !

「お前の時間は、同時に私の時間か？——」

( マッチの空き箱やライターに えがかれた そらぞらしい店名.. )

酷い末路だ、返り血を浴びながら、自分が自分で正気を疑っている——

自分の能力を優れたものと過信している時は さらに始末が悪い——

お前の人生を賭けた勝負に付き合うのは、何故だ？..いや簡単だ——..

そうでなければ我々は無限に長く歩き続けなければならない！ )

( いかがわしいスリル ) がなくちゃ 《 本物のデブになれない 》

みんな面白がって、こいつ馬鹿だって言ってくれる——復讐や裏切り、自殺に殺人。リストラにリストカッター。めちゃくちゃに面白がれ、シューティングゲームの画面は開く。開発競争の波、...そう言っているのも低次元なゲームだ。これよりあんたらを地獄に送る！

( ジャスチャアアゲエエムしようぜ！ )

——拳を握る..そうそう、にぎってにぎって、相手をぶん殴る！——

( いかした、じゃんけんしようぜ！.. )

——ちょきなら、眼つぶし。ぱあなら、鼻を折る。ぐうなら、鼓膜やぶり。

でも簡単だ、そこに才能がないってことを、わからせれば——いい…、

欲しくないし、いらない…し、元々存在する価値もなかったと見せつけばいい

ワクワク

「素敵な技術を持っているじゃないか君…」

「——想像の森（で、）」という、たった一言の台詞が

僕に生きてゆくことの難しさを、春芽をふく木々の弾力によって教えた

そして僕は鳴らされた…鳴らされるたびに、考えていた

「どうして僕はTシャツのように揺れているんだろう…」

よほど深いところにある魂の真実は、軽やかな足取りで、無数の死を教えた。

——今日も星が滅んでゆく！そして真昼の星が腐敗してゆく…

（どんどん社会は壊れていく——んだ…でも俺はパイロット志望。

絶対楽しいぞ絶対に！…いかれちまった時代の奉仕活動は必要だよ…

精神的にして、調和的な行いの、脂肪燃やして暖を取る…)

ねえ 音楽が救ってくれるの 君は腹出たしい——

ねえ 芸術が 漫画が 映画が アニメが…

……それは残念、至極——新手の武勇伝…

泣き 叫び 怒り——

ああ、人間の層がたくさんいたな、

——君は腹出たしい…

あいつの名前なんて言ったっけ？ あの馬鹿、そういやロリコンっぽかったな、

——君は腹出たしい…

若いモンは苦労しなきゃダメだダメだ、老人を血祭りにあげちゃ、国のテロそのもの。

いいかなーっ、いいよねー、ワンワンワーン!

「あ……。うっかりペディグリーチャム食べてしまった。」

観客は大盛り上がり——号泣や哀訴は重い漬物石とばかりに…

だって吸血鬼なみの大型犬ですものアレ、

トマトジュウイス飲まないんですものアレ…ふへえええええ……

シートベルトをお締め下さい!

——お客様、お煙草は今しばらくご遠慮下さいませ。…

こいつ、[サン・ドウィッチ]にでもするつもりか——

しらばっくれる気が、しばかれてしまうのか——

ゴゴゴゴゴゴゴゴ オレンジ、水色、黒、赤…  
ドドドドドドドドド 緑 黄色 青…

——グッド なかなかおもしろいファミコンだ……

棺桶から手足が出てきて祖先たち、

がんばんなさいネ～

ドゥーユゥーアングスタンンンンドゥ!

ドゥーユゥーアングスタンンンンドゥ!

ねえ、君はこんな淨い、清すぎる世界で――

猛烈に怒濤に生きてるのだろう？..

ああ、トランクスから海藻が出てきそうな、――

素晴らしい自爆ミッションの世界だあ！

...君は彷徨う！童 貞たちは大根丸 齧り――

眼が眩んでる！歯を食いしばってる！

[この時代が、終わ る]

[この時代が、終わ る]

...わたしは青い朝の神経を持って余したまま

灯油を飲んでる宇宙服たちに――

Justice will conquer!

Justice will conquer!

だから低次元の足の引っ張り合いが起こる..

どんどん楽しんで生きイイイイイイる！

糞生意気に存分に脱糞しながら生きてるくらいが油揚げ..

違ったアブラハムウ！..

# 地獄という地獄を罪悪しろ。

# 混沌という混沌を絶望させろ。

## 人間という人間を虐殺しろ。

言葉が相手に響かないんじゃ、無言劇-パントマイム…ジェスチャアゲエ！…

…そして、もう、ほとんどのところ、時代という言葉の意味がいら  
ない  
夜が夜であるように、枝分かれしても、上下や横に揺れる風などない！

胸がどんどん縮んで、シャドウボクシもできない、鏡も割れない…

本当の自分の強さ、何処までやれるかも見れない！…そんなんじゃ、

目の前の猿だって反応しない——追いつ追われつの接戦じゃなきゃ経験値もらえない…

ソイヤ～来たぞほうら、——てッ、てッ、敵襲うううーッ！

雲が出て、この結核は急に凧いで静かになつた…出来そこないの静物…

カッチョンカッチョンカッチョン、[alarm] はっはっはっは、殺すぞ！

トルネエド！ [スピードワゴン] 殺すぞ！ 殺すぞ！

## 『(異常事態)』

すごく見晴らしのいい所で狙撃Lesson！

あーあ、神の代理人的使命ってタイヘンダナー。

………聖遺物のウルトラマン降臨シナイカナー。

譜面には休みなく音符が書き込まれ、

削除された日々落ちてゆく砂の音をきく鍵盤のアヴ・エマリイヤー！——

Oh!マリイヤー——お願いだから、欲求不満な眼で息子さんを見ないで！

Oh!マリイヤー—聖杯にそそぐのは、あなたですか?..

[『病气的理解不能』] (目を覚ませ..)

(目を覚ますのは、おまえさん..)

—ストリート・フリイィ!

熱さを感じだしたので、どんどん前に進んでいるだお!..化け物になる気だお!

不死身の兵士になるつもりだお!..ぐおおお、ぐおおお、ずばば!

き.....君はくるってしまったんだお!.....

いやいや気にもしない、俺は見ていた—熱過ぎても、明る過ぎて..も...

—ドミネ・クオ・ヴァディス!

樹にしない、河にしない、海邑にしない—天上に吊り上げられた容姿、

おどろおどろしき情景をまだ下痢してる。政治のニュースは奴等の砂糖だ

隣の国は奴等の蟻地獄で..スパイスだ、ちょっとわかりづらかったかしら

でも本当のところ、..自分の話をするのがそれ以外ないってだけだ!

じゃあ、表へ出てこいよ..世界中の全ての人間がお前を必要となどしていない!

それでも、ミサイルランチャーのように、どんどん、自分の気持ち、

世界中にぶちまけてこいよ。テポドン!..世界を燃やし尽くしてやる、

天と地のはざまに髪の毛をつかんで引きずりまわし。マシンガン!—

恐怖の味を思い出させてやる—やれ..でなければ死ね!

馬鹿にしたいだけの人も、いずれーその内・・・

感動するようになるさ！

だってあんたは病気に過ぎないから・・・

神を肯定しても否定しても、人間。

このヌウンゲンである限りは、バケモノニナレナイ！

彼岸の彼方も、宇宙のチリも、ダーツ・ゲーム！

「・・・人は醜くあった。もう、性善説も性悪説もは信じられない。信じられるもの、

それは、いまや、一炊の夢のみ」ー夢から 醒めたかった・・・

音楽は生命のためにあった・・・魂が発展するかぎり 傍に寄り添った

文明は滅ぶだろう、・・・それを無表情の内に 神の慈悲と思った

それでも人びとはー誰も知らない 神を 探して 旅をするのだ」

ドゥーユウーアングスタンンンドゥー！

ドゥーユウーアングスタンンンドゥー！

クン！ うーむ これは[フランク]だ

[クレージー]の香りがするこの世で最も美しいといわれる旋律だああ！

三面六臂の阿修羅

ーニヤアアア・・・

ささやきが あの重く 油のように

ささやいている姿として

汗のように また血のように流れていた

虚無の戯れている姿だ

——日々の泡 だ

one more chance. いま で は

僕は顔の欠けているもの、いわば表情の欠けているものに神を見た・・

点滴用のチューブを引きちぎり 忘却の淵から おそろしく暗い声

不揃いな形に沈澱する雲が見える またたく残像が 蝕 む

——そしてそこは深海だ ガアゼを当て

テープを数回まわして固定する 深海・・

プランクトンは 餌だ

神とは——すべての欠損の、いわば不完全の美の総称だった

——ニヤアアア・・

——震えが止まらない 音の階段をあゆむ アア この擬似関節

醜さこそ神の名である・・それはもっとも初歩的な宗教の姿である

コンプレックスこそが、彼にとっての、宗教的な神の存在！

捻じれ伸びたる靱帯 か ら ……愚劣な衝動だ 透明な感触だ

さしむけられた幻をながめながら

数万段にもおよぶ螺旋階段をゆき ——ふたつ丸い孔のあけられた

…ルーム・キーを携って *Let me join in the game!*

*Let me join in the game...*

Everybody plays the game of love.

——木々には いつも 自然のほころびが ある

蜘蛛の巣のように醜い 我々は 月のように 恥じらいを忘れた

そして僕は音楽を…また始めから 作りなおそうとしている

最高よ！ アチャー—ッ！…ウフフ…ぱよぱよ。

ああ、それは—— なんて、孤独——…

ぷくく…。ステファアアアヌ・マラルメエエ！…

イメージの官僚は、鏡の中の完了——

<< 鉄腕 >> 迎 撃 準 備

HP : 9 9 9 9 MP : 9 9 9 9

装備 : 核ミサイル

…なにをあらわしてるかなんて きみに

——わかるわけがない…

——想像を絶してしまう（[アルマジロ] だわ、ぐおおおおお！

『ハリネズ・ミ・ボーイ』…ルン！ルン！ルン！

ぬウフフフ！…フフフウ！フフ！——ぐおおおおお！

悪魔というのを本で調べたが…どうして写真がないんだ？——

幽霊は撮られた、いるってことだろ…俺をお前を俺達の闘争を

ねえ、おかしくな—い！ おかしくしくしくしくなあああああい！

そのために心が邪魔になるのなら消し去ってしまえばいい！

…気が狂っているとしか思えない愛の叫びかい？

ああ、そう聞こえるのかい！

嗜血！白痴！シシャモ！ジンベイザメ！

これも因数分解！ 簡単、これは手品！ ちょうよゆ一、簡単これも！これも！

これもバナナ！ これもバナナ！ これは林檎！ これは杏！

答えを解くのは（ テストの話 ）、考えるのは《 別の話 》——

知れば哲学者が望むだろう、（『マント』）のようになりたいと！

「（モン・キイスパナ）」のようでありたいと！

ヌフフ！フフ！そこにシビれる！あこがれるウ！

もしもお～～～しいい！

引き鉄を引く指しか持たぬ、人の業ウウウウ！

お前等は最終的に病院か刑務所ににブチこまれ、その肉の最後の一片までも、

屈辱の後悔。ああ同情するよ～ッ、それがお前たちの切り札！…

「さあ君らも早く脱出しろ、逃げるんだ…！」

俺？…俺はここに残る——命知らず？…勇敢？…

そうじゃない、僕はただ、ふっと気付いたんだ…

ひとりひとりが、人生に楽しんでる——

自分を甘やかして他人を玩具にしてる——…

そうやってここまで来た。来てしまった！

酒や煙草に似てる、麻酔に似てる。——そして ある教室での

居眠りしないかわりの落書きに似てる…ねえ音楽、ぼくは戦ってきた！

後ろ向きなナイフじゃ！ 僕等は自分を本当には守れない

そうさ！夜に盗んだバイクじゃ！ 僕等は本当に行きたい所へと行けない

…だから音楽（力強く！）——黒いもの、まやかしと呼べそうなものを、

はっきりとさせるために！ …僕はかがり火を焚いた…野生化した！

欲望のルールで僕は成長した——そしてあらゆる所に心臓を見出した

2人以上のプレイヤーが、

ゲーム機の無線通信機能を通して、

このゲームを楽しむことができる。

後はまともな話し合いをすればいい。まだ劇場の幕紐を引かせはしないぞ

みんな軽度の鬱か精神疾患決定！ その、なんていうか、アレだぶっちゃけ…

もっと何か、まだあるはずだ！…まだ終わらせないぞ…

…なあいいかい、誰も聞かないってことは従いたくないってことだ！

俺がそいつらより格下ってことだ！ いい——ぜ…

もっと奴等の脳味噌を木端微塵にする方法を考える方が楽しいさ、だから、あ—あ、

面倒臭いな、殺した方が早い、——ようは、終わらませーん！…

こんな楽しい戦争をそうやすやすと終わらせたくない——…

「必要とされなくなるのが怖いか！！ 死ぬのが、カカカ…怖いか！

忘れ去られるのが怖いか！——…ぷっ…あはははは！」

悔し涙に暮れたくらいでてめえどうした

誰かに悪く言われたくらいでどうした

俺は自分の人生の可能性を閉ざした——ぜ！

(おれのものだって言ってんでしょおお！)

自分がおかしいって気付かない社会。動物的な個人の悪-エゴが平気で表側に出てくる

病んでるってことを嬉しそうに語る奴がいるな…満身創痍だな、腕が千切れて落ちるぞ！

くう！くっくっ！…いいね！ 後ろに沢山幽霊をつけて何してるんだよお！

——うえッ、えぐッえぐッ、ヒック、ヒック、ヒック…  
子供が…泣いてる——

ドゥーユウーアングスタンンンドゥー！

ドゥーユウーアングスタンンンドゥー！

ゴゴゴゴゴゴゴゴ オレンジ、水色、黒、赤..  
ドドドドドドドド 緑 黄色 青..

—グッド なかなかおもしろいファミコンだ・・・

思い出す、拭ぐい去れない煩惱と、未完成のフィエスタアア！

あらゆるものはドレ・ツツス！ かくして役者は全員演壇へと登り..

カ・フェ、自分の足を見ながら細い手頸が卵を産むようにド・ウナツに触れるウ！

「（時限爆弾的回想）」儀式-最後尾..

侵略のため、防衛のため、故郷のため、

父と母のため、恋人や友達のため、—

主義主張はいいもんだ。そこらへんの鬱陶しい奴なんか蹴りあげてやれば

いいさ..、真剣な話し合いをしなけりゃ、世界は実際すごくつまらんよ！

戦争産業-侵略..破壊活動—存分に！ 存分に！.....乱れろ—..

二束三文のはした金、嘯きに満ちた平和..みんなみんな殺しちまおう。

死ぬにはもっと何かが必要なんだ。もっと！ もっと！

## 《永遠のシグナル》

「あっ..？」

「ひどい..残酷、..悪夢..うああーん、まくわうりイィィ！」

しかし意味の少ない動作は最も繊細に丁寧に再現される..

僕はその石みたいな頭を踏んづけよう..痛いだろう、痛いだろう、

そして顔面を蹴る、瞳を失明させ、鼻から汁を垂れさせ、口からは

赤い血が出る——それが[執拗な反抗、いまの僕に許されるviolence]

…ぼくは考えていたア！ 考えていたアア！

「マザアアア！そん——な…そんな、あんまりだよ、

こんなのってないよ…ごふ、ごぼ、うげ、うあ、ごぼぼ、ぐががあああん！」」

ピザしないィィィィー——ッ！

モンマルトルの丘しないィィィィー——ッ！

(《……ごめんなさい》) ひとり分で結構ウウウウ！

ええっ…でもそん…な、——そんなことって、ああ、

…うあああ—ん！

な…なんだこいつ [ハンバー・ガー]にでもなったつもりか…

俺たちは風のマヤコフスキイ、さもなければシェリーのジャングルウ！

そして—————演説は始まる……

「心から謝ってみることが人生を保証する。

なあ、おい、世界って自己実現能力のことさ！ 変幻自在の天衣無縫…

狂うことじゃない、演じること——そこで新しい自分を見つけること…

だって、叶わないことはたくさんあるけどな、

叶うって信じた奴のために世界があるんだからな！

生きていけない奴等も、生きていけるような考えを持ち込むことで変わる

土台、誰かを切り捨ててることで成立する社会なんか

——俺の望むところじゃない！ 安全装置を外そう！…

それがそれがたとえ那由他の彼方でも、

なに、いまさら否定することもあるまい！ 」

…あぶなア——い！

…あぶなア——い！

ドゥーユウーアングスタンソンドウ！

ドゥーユウーアングスタンソンドウ！

「えっ…？」（スライドしない扉…）ざらざら-塗装、しわがれた時間、

「え…？」 溶けだす階段…いやだっ、助けてっ——誰かあアアうあああーん！

俺は聞いて——やる…ぜ、…お前にその覚悟があるんなら、

お前のために話をとことんまで聞いてやる…疾走を——（I e t S——）

「…うん」 スライスチイズ！はいチイズ！

薬となす——（n o w——）

タジゲンテキチェスウウ！ キガテキビデエエオテエエプ！

ありのままの感情の昂りに身をまかせるんだぜええええ！

ああ、ホント、バカみたいがいい娘…

後ろからゆうに一億回くらいピストンしたくなる娘や——

バーテンや夜の蝶たち、玉つき野郎にバイク乗り、

いかれた麻薬野郎に、ストリートキング。

「...っ」（ゆっくり、と、）ベッドを乱すんだドゥーアアアを蹴破れ、

フンッ！ ふんがふんがふんがああああ！

ピカソも、ナチも歓迎する！..

シティー！..それでも、君がいなくちゃ、駄目さ——..

人生がどんなにめちゃくちゃになっても、歓迎する——（s t a r t ——）

——ドン！

まだ先がある！って言ってくれる奴は強い..さ、息耐えるまでの空白を、絶望で走り抜けな  
さい。まだどんどん笑える——さ、痛覚はまだ生きてる？ ご覧の通り..

ドゥーユゥーアングスタンンンドゥー！

ドゥーユゥーアングスタンンンドゥー！

——ニヤアアア..

そのまた向こう側 へと ゆく ああ この旋律は

し あわせの幻想を たど る.. ふしあわせ が 空中に攪拌される

開かずの間へ と 亡霊 は ギィ と

——よく見れば錆びているように見える

one more chance. 意識の 淵

僕は目に入るものすべてを、愛の苦しみを、潤わしている

もろいな。――BLACK

その根に、その幹に、その葉に…彼はいまも悩んでいるのだ

いまは夢すらも見ずに 名残を 追 う――…貪欲が湧かない

ささやきの境隔で くるぶしばかり見ている

――固く鍵を閉めている五感の闕 みな鳩のような顔形

のうてんき クルクルクルッポーテエプ 深海…

かつて…見とれたこと ときめいたこと

…どうして 音楽は すべて風のように 表情を持っているんだろう

それはねと ある日 わかった！わかったような気持ちになった

我々は神の子であった！そして…醜く、ただ、醜く歪む美しさに

一ついいことおせえてやるよ。あなた、ここでオシマイなのよ。跪けッ！――RED

名前をつけられた氷のような魂だった――「冬の夜に…雪！」

そして僕は歌った すべての人が死んでゆく この世界の片隅で

――ニヤアアア…

――陰翳のくっきりした胸部のように ……体温が残らなくとも

――アア 妄執は急性肺炎

フェアリイテイル。 の 想いも尽きて

——ひとりきりのような 苦しさ 悲しさを 歌に変えて

僕は この世界をめぐる 風の一つと なったのだ

拡声器であたり一面に撒布すればいいのだ ……ひびきは強調され

痙攣 する 筋肉 の 冷たさが

こだましていくに違いない ——無言の大衆へ

…やけに堪える夜 の bulb は *Let me join in the game!*

*Let me join in the game...*

Everybody plays the game of love.

——眠りたい、…ああ 眠りたい、

……僕は この街のルールとなる この街は 僕を必要としてる

ドアが絶望を口にしないなら！ そこから入れるだろう…！

すべての可能性に 人々が その街で 生きてゆく

最高よ！ アチャー—ッ！…ウフフ…ぱよぱよ。

ああ、それは—— なんて、孤独——…

ぷくく…。ステファアアアヌ・マラルメエエ！…

イメージの官僚は、鏡の中の完了——

# 殺人

---

空は気まぐれに晴れ渡り、月

死者は溢れてしづかな廃墟の中

奈-落-を-見-る

《俺は病気なんだ》——身が引き締まる

……とは

……きみの中 の神に

……ぼくの中 の神に

## THE END!

(たぶんぼくは) うすめをあけていた

(たぶんぼくは) あごをあげていた

たぶんぼくはめをこすっていた

たぶんぼくはいきをしていた

……現実だ。

(手も足も出ない風情。サンドバック！)

(ちっぽけな壺の中。フック！ フック！)

VIOLENCEで殺せ！

人間じゃないなら好き放題に殺せ！

(たぶんぼくは) きをみていた

たぶんぼくはかぜをきいていた

たぶんぼくはゆめをみていた

たぶんぼくはまどろんでいた

……現実だ。

「ちぢこもっている、運動不足の身体に、くりかえし、かすれる永遠。

そんなんじゃ——ひとつの鳥影さえ、ろくに、感じられな…い…

歌に酔えない——お前はお前自身に…酔えない——…ああ、酔えない」

——たぶんぼくは とき を とめた

——たぶんぼくはたましいだった

たぶんぼくはそらをおよいだ

たぶんぼくはすいこまれていた

……現実だ。

うわごとのように、ひびわれた言葉…噴き上がる想いと、関係する美の市場。

無意識すらもコーティングされた商品である。スーブニールショップである。

詩はコロンであるか？…それとも、炎であるか——



(栓を抜くと、真っ暗い街並みがやって来る。)

武装と威嚇でこれみよがしに切羽詰った暴力はもう外国にしかない、

日本は平和か？・貧しいオアシスじゃーないか・

.....きみの中 の神

.....ぼくの中 の神

タッチパネル式の携帯電話。表面をほとんど覆い尽くした  
液晶画面に電子メニューが浮かび上がる。

(拂ひ落せなみ。洒ひ落せなみ――泥土にまみれ・・・て――)

隊商が通る-あるいは在りし日のコロシウム・

遠くに剥き出しになった崖がひと月後、くりぬかれてる山・

奈-落-を-見-る

《急ぎ足に通っていく》――何かが

.....もっと遠くへ

ビリリ

時間のデッキにぶら下がり唇はなおも艶っぽく赤いろを帯び続ける。そこですさんだ瞳に

気付く。[何かいる]特設のライト-ショーウィンドーのマネキンから、空調から発せられ

る、蟲の羽音にも似た低周波特有の音。[何かいる]犬だの猫だののなまなかな匂い

ではなく、野生の獣の、ねっとりとした、息するのも躊躇うような生々しい匂い。野性の身

体中からする糞尿のにおい。あれに匹敵するのは人間でいえば赤ん坊の時と、死んだ時。情念の匂い。あるいは悪霊の匂い。そういうものがあるとすればだが[何かいる]そこからグリースや重油を連想する。朝から降り続いていた雨が夕方、うっすらと油膜を湛えている水溜まり。長く残った、マシンオイル。青い焰と赫茶けた炎。いまいましさに吐き捨てようとする唾は糊のように粘っている。[何かいる]じっとりと重く、まとわりつく獣の臭い。難しい漢字をならべつらねたように、匂いはさらに強まる。一本一本の毛根、身体中の毛穴という毛穴からおぞ気-戦慄が-旋律・・が――湖底に重なり合う。爆発と清冽な音。微動だにしないクロオムメッキの夜空。無表情にとらえていた。死んだ人もいる。静かに消えてなくなってしまうワイン エエテルようなビルディングに囲まれながら、俺は強烈な酒、体内の瀧氣を目覚めさせ、いまも奇怪に暗く、蜃気楼的ピエロ帽の月を見てる。

視界が展げてくる。つややかな樹肌に、  
今しがた産卵を終えた蝶のように。

(ドラム罐。前照燈――戯き叫ばねばなら・・ぬ――)

徐々に沈下していかなければならぬ

このプレイランド、近代の自意識と現代の思想が有刺鉄線ごと突き刺さる・・

死-に-場-所-を-探-せ

《白濁してくる瞳》――黒い体液

……そしてベッドの骨組、都市の支柱――

暗く、ふすぼっては忽ち乾いて、粉となりたちまち風に重い影ごと飛ばされて、瞬く間に、昔が灼きついてくる。ふるい落とせなかったもの、鼻孔を通過して、まわらぬ舌を動かして



そして銃の引き金を引いた――雷鳴

脚を這い上がってきた蠍のように飛びあがる。

恐ろしい気配-金属の怪鳥・闇の海に吊るしているロープ  
(を、)押し寄せる夜の闇、――  
あの意味もなく多くの想いに溢れた夜の闇…

「下へ降りてゆく気などないよ。」

…呪はれし町そ我は追はん。

ひどく下品な高橋睦朗の気持ち悪さ。擬態的良心の露出的趣味。

既に傾向的に狂気とは言えない入沢康夫の脱詩人お上品な文明開化。

(よちよちぼく、よくお勉強ちたね――)

「さふですか？」

あれは何？ 自分がいま何処にいるかわからない星よ。

あれは何？ 自分を棄ててしまったことを了解するあほんだらよ。

――日本人ですらない。大人ですらない。社会人でもない…

ただ、星のように光ってるふりしてるだけの馬鹿よ。

自分が、いま、何をしなくちゃいけないのかもわからないのよ。

「とぼけた奴だ。んとに、とぼけた奴だ。のらりくら…り。」

(よちよち、ママのミルクをゴチソーちてあげまちょーか？)

「ほほう。」

(大人げない奴だな、頭悪いんだよ。)

その時 目玉に一発お見舞いしてやれ。先手必勝。

すぐ、ぼこぼこにしる。ちゃんとちん〇こ撮って、うわーきたねーと言え。

降るエロ-振るエロ・・・フルエろ露出狂谷川俊太郎の手下たち。

モザイク出版社をよろしこー！

エロイムエッサイームでぬおお！

鼻と口を締め付け、風邪によく効く薬。

[ぶちっ、と犬歯でタグを噛みきる。

そのように踏んでいく！ 踏みつけていく！]

・・・商品名をあげようとする

企業名をあげようとする

広告名をあげようとする

以下一覧の通りです、という——台風一過

ウエディングドレスの胸元が深くえぐっていた時

ある写真が唇をひらき真っ白な歯をのぞかせ

、、、、、、、、

帽子を差し出した 鳩尾あたりの名誉が疼いた

密告者は決定的瞬間を見た

純粋な母乳にも匹敵する恋愛の陳腐な台詞が炸裂する

狭-まい国土の・・・（そなたらを迷わせんとする彼らの策謀。）

そして文字通り憎悪の宣伝や衝突が起き、オレンジの甘酸っぱい汁、あるいは繭、

口の中の粘り-海の鈍い光・・・うごき寄るを見ざるか——

「ウツクスイ・・・」（水浅きなかに眠る炬火の燃え・・・）

(簡単に解体され、ただ縮んでゆくことを余儀なくされるわたしの夢…)

十年後 ありともし思はれねど貧にして職なく

二十年後 若くて美しかった君が老いて醜くなっているか

――ギアの入れ替えの一瞬の停止…

…落ちたとすれば 這い上がるしかない――

…腐ったとすれば 肉をそぎ落とし継ぎ足すしかない――

airをくれ！ airをくれ！

彼は口数が少ない男がそうするように写真を撮り始めた

そこに悲惨と苦悩があった。たちこめる靄においてテニスボールほどの瞳にした。

やがて彼は二人のことを強請り――あの晩

…気配だけになりたがっている空気

――時空を超えて、儀式となる…太いズボンと、茶色いコート…

「ある日の僕は考えていた、数年前のつまらない記憶の場所aで、  
いま、僕がここにいる場所bが完璧に結びついているという事実。

あらゆるものが違うはずなのに、…再開する。一個の枢から。

きらきらした艶をおびてよみがえるそれは…空間のねじれ。

――つまり、過去現在という未来のc…そしてその発生の理由は、

皆目理解不能――だが、俺は理解する、無意識に脳が反応した…

ここには何者かがいる――満たされたように帰っていく…死への抗い、

自由な心のアクセスが…遠くへ後ずさるまで、意識は無限のパラレル――」

YES あの晩はひどい騒ぎ（だった、） [ね、]

頭を石でかち割られた男 呼吸を止めた男

おお あらゆる可能性を考えてみても

辿りつくべき結論は正当防衛であった

…いくつ僕等は街を壊してきたんだろう？

—そして…いくつ、僕等はうじうじ蛞蝓の伸縮してきたんだろう

ふたりは事情聴取に臨み、口裏をあわせた

心やさしい良心というアキレス腱は断たれていた

しかしふたりはやがて違う町に住み始めた

ある日 酒場でおもむろに口から出まかせで男が喋った

酔っばらうと見境がつかなくなるのだ

…たまたま、そこに女がいた。アリバイが見破られる。  
そう思うと、何故だか、しっとり下腹部がぶざまに熱くなった。

女は第二の殺人にいたる—用心深く

どんな殺人でも謎が解かれなければ

ココア一杯をのむ喫茶店の彼女が好きな窓際の席のように

ゆう陽に骨の髄まで凍る

新品とも古物ともつかぬ靴を彼女は履いている

彼女はいつもミステリーの本を読んでいる

潔癖症じみた執拗さで、両手にこびりついた血を落としていく。血の赤が、黒のように不吉で忌避されたものであることは容易に想像がつく。爪の中にも染み込んでいるから、だ。そして黒く固まっている。金だわしで指を一本ずつこすった。トイレットペーパーで手を拭い、鼻先に指を近付けてみる。だが、やはり血の臭いがする。

ルミノール (**luminol**) は、窒素含有複素環式化合物の一種。

発光するルミノール反応。

、、、、、、、、、、  
——今し方、俺は人を殺した。

しかしそう心の中で呟いてみても、まるで実感が湧かない。奥津城の門扉の閉鎖する音。無意味な疑念の裂け目。琥珀の純粋な明るみと過去の探検。余寒。水蒸気のように、消えてしまう。感情というのはそうだ。今は閉ざされている。ヴィジョンは逃避の欲望を示唆し、錯覚だけが延長している。螺旋階段。皺くちの紙と亀の甲羅が同一になる。ピロウドは無意識的記憶の腹部となる。記述の厳密性。時間軸。その衣装。思想。しかし記憶は誤魔化しようがない。見たものは確実に貯蔵され、痣のように発見されたものが、傷となって残ることはない。釈明することのできない取り換え。時間と感覚の音。創造と出発。蠟燭と懈怠。しかし、それとて生命にかかわる虚無の実態ではない。つまり、純血ではない。それもやがて悪夢のように甦るのだろうか。自我を疑わないために。あるいは鏡に向かって坐る王様であるがゆえに。噎せ返るような鉄臭い血液の臭いも覚えていた。時計が鳴っていた。息遣いが荒かったはずだ。蹴ってみても反応がない、「おい・・」（ゴムのように重くなった身体も知っている。）——まるで男性が女性にでもなったように、・・奪い去られたであろう性。何か違う袋を被せられた。人間の潜在能力の終了。時間の、あるいはその雰囲気欠如。責苦

のない圏外。不気味な一瞬の空虚さと希薄さを夢見ることもない重苦しい魂。

それでもやはり実感が湧かない――、まるで誰かがやったかのように、そいつらはただ死んでいる。何人も殺した。・・忌むべきもの、犯してはならないもの――

、、、、、、

腫物を切開する・・それは宗教の開示だ。印象がペイントされているのは、カーテンで説明できる。カーテンの向こうに家具がある。衣服がある。それで時間に俺は取り残されている。ある者は永遠に思える脳内の麻薬で、消え去るまいとする写真――否、取られまい、めくられまいとするシール。恐怖の化身の形成。

、、、、

それは、法治国家をアルコールの中に、埋めるようなもの。雪・・。永久凍土に沈んでいた幻の花を呼び起こすような、反社会的な行為。人の死は、許されざるもの。十代といえども、けして許されざる罪。でも金属バットが床に転がっていた。

不安定な連鎖はある。窒息しそうな息苦しい状況でなければ、目を回す生物的事実もある。目玉が飛び出した奴もいた。・・それに対しても、必然を肯定しているにすぎない。狂気の実事は、幾度とない否定と肯定の産物だ。隔離されている実存。もはや運動が解放されただけと蠟燭を吹き消すのみ。罪の意識は感じず、むしろ、眼玉が飛び出したということに、交通事故と併せて、そういうこともあるのだと感じた。蜜柑が自転車に摘まれていたことを思い出した。林檎。ささやかなさびしい町のしあわせを通り過ぎてゆく、人という河。とめどもなく、無限に固定される微粒子。その嘆きと呆然と見つめ合う信仰。先祖。登場人物。ああ、醒めていた。あやうい不透明な幕を斜めに斬り裂いてゆく。舞台。もはや怒りも悲しみもない。正義の味方を気取るつもりにもなれない。自分が犯してしまった罪に、ただ、二人の友達にだけ理解して欲しいと思った。なんでそんなことをしたんだ、と本気で怒られても



感じる。防衛規制。矛盾…

きっと、いくら遠離れたとしても、退避いたとしても、一めんの火の海は消えない。壁土と共にその上に落ちて来た、死の粉。腐った魚のドロドロした嫌な臭いを思い出す。よりぼんやりと見えていた心象の翳り。横たわって、まだ生気を帯びているめまいするような確実性の高い場所。現実という贅意と、幻のような自分とその行為――…

——これは夢だ、本当に悪い夢だ、胸糞が悪くなるような夢だ。

しかしいくら呟いてみた所でどうなるものでもない。そして今度は異様な台詞が胃からせり上がり、喉元でくすぶり、やがてぱんと風船のように破裂し脳内にそれが広がる。いっそ、もう、こんな自分さえも、何処かへと飛んでいけば――いい…

——俺はもう殺人者だ。

、、、、、、、、

蒸し暑い暴風雨の夜、死体の匂いを嗅ぐ。

x x x

くりか え され る……

数千億の れき し のなか で かんじて い た。

——どこで始まったのか…

どんな風にして終わるのか。

…夢を見ていた そして また 泣いてしまう…

ある時の僕等は、死に痛みを持たない。

でも死は、確実に意味を持たない。

何故なら、死はそこで終わるしかないからだ。

…人が機械なら もっと よかったのに…

…機械は 壊れる だけ…

続くことにそれほど意味はない。

変わることに、ただ、..しかし、た だ、

かわりたいのに かわ れ ない 自分 を。

揺るぎのない ところ を。

—一人は持て余す..

声をかみしめ、涙をぼたぼたこぼしながら、

もう二度とは戻れない、森へと深く分け入る。

x x x

復讐というものが脳内のある肉片だとしたら、

ピンセットを取り出して摘む人もいるだろう。

そしてそれは、新たな死をめぐる第一の怒りとなるだろう—。

## だらだらな物語

---

ひげが生えかかっているんだ

十四歳の男の子

夏休みに、田舎へ帰省する車の中、

ハッピーバースデイを思い出してる――

でも、誕生日のケーキを食べていた時

かかってきた電話…

「お前は大雪村へ来るのか？」

プツッ――つーつー…

――その村は、夏休み、帰省する場所。

朝、出発した。

カローラ。

車の中で、母親手作りのサンドウィッチ。

車と言えばサンドウィッチ。

ちなみに、サンドローラーは違う物です。

…それ、ボケ？

どうして帰省するだけなのにビクビクしなくちゃいけないんだ。

あ。本音でてしまった。

かったりーよ。

十五歳になったばかりだが、別に身長が伸びているわけでもない。

しかし感慨はある。

と、何故かいきなり別場面になっているが、

なあにあわてることはない、無茶苦茶なのが、かもめ流。

昔見たころよりずっときれいに見える。

そりゃソーダ。

ソーダー水は松任谷由実の歌詞。

「昔、このあたりにホテルを探していて、…」

うつらうつらとした気持ちで…

歩き始める。

あやつられるような感覚。傀儡師。

糸を切ると、ピアノは鳴らない。

そりゃそーだ。

でもそうだ、森の真ん中で、何か変な夢を見たことがある。

心にずっと残っていたんだ——…

と、しげみの中に妖精が…

えっちらおっちら、ぷいぷいぷい！…

せいれ一つ！

僕は、ニヤニヤしながら見た。

これぐらいじゃ、アニメ世代は驚きません。

「一匹、二匹、三匹」

「三匹の子ブタ。」と僕。

「うまい。ところでページの都合もあるから聞いて、

あたいはルル、この子はピピ、

君の傍にいるのがケケ。」

「ルルピピケケー」

「そう、暗号みたいでしょ。

…でもおどろかないのね。」

「うん。おどろかない物語だから。」

「そーなんだ。わかります。」

わかっては困る——…

「ところで、電話かけたのあたし。」

「声ちがうけど。」

と、いきなりしわがれ声。

「こんな声でしたでしょ？」

「ええ。そんな感じでした。」

ちょっとビビった。

「緊張するとだいたいそーなの。ごめんね。」

「いいえいいえ。」

「驚かないのね。」

「だからそういう物語ですから。」

(ところでさあ、と、妖精たちと日光浴しながら、  
語り掛ける。何か面白いことないの。ここ、退屈だよ。)

(温泉あるよ。入る?)

(いいねえ。って俺はジジイか!)

(若者も入れれば疲れもひとつ飛び!)

——まだ、疲れてねーし……

「そうそう、昨日ね、森のはずれであやしい車を目撃したの、

——爆破とか……何とか……」

ええーっ!

と、驚くような主人公やと思いましたか?

驚いたでしょう?

驚いたでしょう？…

「誰に喋ってるの？」

「いや、――読者に…」

しーんとした。

まあ、とりあえず、物語の流れ的に、

それ、見付けよっか。

「そうきたか！」

「はいきた！」

「やじきた！」

――馬は来ないが！…白馬の王子となろうぞ！

なんだこのめちゃくちゃなノリ。

破調。低調。なんというか、C調。

まーいい、と思ったら、妖精が、てのひらに、

ぽとんと、貝殻をおとした。

「ふしぎな貝殻、呼びかけるとあたしたちこたえる。」

「古道具ですね。」

「小道具です。物語たのしくするため」

「バズーカとかは？」

「戦争するの？」

――しないけど、読者が望むなら、

殺人狂にでもなろうぞ。ああごめんよ、おかあさん、

十五歳で、手を血に染めてしまう息子をゆるちて。

――ぼけてるのか。

ともあれ、僕等、妖精の話に頼りに、

そのあやしい車をさがしてみる。

車種はわからないので、とりあえず、住宅地へ行き、

この車か、この車か、とやる・・

そうしたら、郵便局の前に、

「あの車！」

――僕は、車の傍に段ボールがあるのを発見。

どくんどくんいう、心臓静まれ。

こんな三文ストーリーに何を荒れ狂う必要がある心臓・・

パカッと、あけると、野菜が入っていた。

「こら、悪ガキ」

「あ。おばーさん、ごめんなさい」

――まちがい…

ぬかよろこびさせやがって――

でも、もし、それが爆発していたらと思うと、ひやっとした。

夕暮れ、どこにもそんな車ないな―とおもったら、

学校に、むちゃくちゃソリクツなやつがとまったた。

「もしかして、あれ？」

「っぼい！」

「惚れっぼい？」

「どうして知ってる！」

――なんで、掛け合い漫才してる。

と、傍に人がいたので、

ととことこ、近寄って見る。わし、警察やどー、

文句あっか。ふしんしゃりょー、って、こいつか。

「いや、旧校舎の解体工事すよ」

――いや、大体車のそばに、ミスリードしただけで、

…ふつうに、軽トラがとまって、そこに、それっぼいのあったしね。

爆破しろよ、妖精。

ったく…なんだよハラハラさせやがって。

いやね、森で妖精とあったんですよ、いや、夢ですけどね、

「でも、森なんてありましたか？…」

――振り返ると、そこにあっただはずの、原生林が何処にも見えない。

まるで、狐に化かされたようだ…

いやこれが土地、というものなのだろう。

てのひらから、貝殻が消えている。

何も変わったものを見なかった日を・・

なまあたたかい血の闇に、言葉を奪われ〈わたし〉は

イメージ

像 を迂回する・・始まりも終わりもなく、

いくつも眺めている、繰返される忘却の岸・・手に負えなかった怪物を、

飼い馴らす、（この、）壁の小さな穴――死を笑ってやがる・・やがる・・・

波状にいくつもの旗の頭が浮かび、重奏な暗闇――雨に洗われ、剥き出しになる・・

（と――溢れる光の瞬き・・）

（消えていく――服を脱ぐように、自分の死体・・）

、、、、、、、、、、、、、、、、、、

思い出せないことがある――押し殺した、嗚咽。

拒むことで、中途半端な空白が生まれ、僕は知る、胸の窪みに滲んだ汗、

からかい気味に薄く色づく、光の粉にさらされた表情・・

そこで重なり合う葉叢・・張り裂けそうな葉群れ。

――スローモーションで見ている、トランポリンの上のアクロバット・・

電話ボックスの硝子越しに、白地に卵色のブラウス――ねえ、

秘密めかした囁き声で、ほんの僅かな羞恥心を麻痺させ――る・・

ほの暗い闇の中で、若干の記憶の捏造の中で、

長方形の額縁のような窓を憶う。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、

忘れることも思い出すことも

ときには不逞。深い、深い、秘密に近づき得ない態度で。

不逞。とは、歪みや誤差であるように経巡り、

(再び お前は知るのだ

——果てしなく 遠のいていく日々…

(昼も夜もさまよい続ける

はね たかえ  
——ひとつの翅はふたつの高梢、

——闇にまじわる法螺のやう。

そのピカピカ光る山脈の起伏も

——すじの協和音にまで、伸びきる…

——ひもを弛緩めて高くに飛翔べる、

…凧に我が身が投影るやう。

……………凧に我が身が投影るやう。

彼女はその時、すごく美しかった…

瞼の裏に宿る——彼女という季節の色…

颯爽たる雰囲気のある、君から…冬の浜辺の匂いがする、

指を這わせた——地図…並木路アーチ形に葉を茂らせ、トタン板の継ぎ目、

銀の鍵束、…埃まみれ赤錆びの門…

他人の感情を完全に無視することで、

僕は泣かない…でも、時計が壊れているみたいに、僕は、

(まだ強がる理由なんて――何処にある?…

工場の煙が酩酊する空に流れてゆく…あの日の僕が泳いでいる、

悪意の影響を受けず-君を見ていた-見ていた-真っ白な僕…)

足音さえも聞こえないくらい…僕の息が止まって、

僕は立ち止まってる、――心の中の、人という海に…

…わたしつて誰?

…わたしつて誰?

ねえ感じて――る…だから僕は知りたい、絶望の意味を…

本当に正しいことをして、

この世界を変える日を、見てみたい…

いや、見せてみたい、色んな人に、

本当の愛がわかるまで――…

…生きて下さい――生きて下さい…

…生きて下さい――生きて下さい…

こわれた――ねえ、くるつた…あたま、おかしくなつた、

でもそれでいい、さげびたいんだ、ねえ、くみふせたいんだ、

なみのうえも、なみのしたも、

いきをつめているときも、いきをぬいているときも、

ふくらみを見過ごすことはできない 燃やされている文字の煙だから

頭の中で 真っ白くなる 名前の知らぬ雲のように 見えるから

さはいゑ舞ふてゆく恋ならば、

こな

鱗粉は毒こそうれしけれ。

――はつきりと言い切れることなんか ひとつもない…

…世界の夜明けも 今日といふ日も――

――ひとひらふたひら花がわり、

――あさひぞたかく夜に散る。

点字のようだと思った季節の織毛も手ほどき

… [水面にこぼれてゆく]

時計の秒針が凍る――

オブジェ

対象――

天候が波の狭間に機をおりはじめる――ずり落ちていく、布、狂おしい黒の塊…

エッチング

腐食銅版画――

馬鹿でかい焼却炉。正気じゃないがらんどうの内部の――石…擦過する…

建物は夏草のように伸びてゆく、執拗にいじりまわすのが好きな大きな魂の塊に、

リトグラフ

石板画――

こどものころは、金色の星-ヴィーナス…

それでも金色の星-くすんだレモンの月のことを見ては、冷えた肉の塊を思った。

胸騒ぎををおぼえながらチクリとした、あの何億もの河に無表情でいる空の下、

野原や、空地がたくさんあって、犬がけたたましく鳴き、虫が脚の足りないリズムで、  
ぴよんぴよんやっていたっけ——ちょうど、血の流れる時のもどかしさみたいに、  
恋ができました、モーツアルトのような恋……。

…一度死んだ 心の内側から ふくらみながら あふれて来る

作ったものがすべて壊れてしまったことを知りながら

孤独と絶望のBLIZZARDがさくらはなびらのように降る

(渴く おまえは…

「異様な世界を作りあげている

ふと感動に誘われるほどに——」

徒労を否定しようとする。思考の流れを遡って、

ひなげし、野バラ、やぐるま菊、

災厄をも平然たらしめている、情緒。魂

は震えているか——亡き魂は震えているか…獣、メトロノームは破壊され

植物、無生物、機械、精神がそれ自体の能

力を超えた領域で人は訪ね始める。——最初の階段に——

やがて皺を嗅ぎつけ深い水面に沈んだ碇のように、険しい旅になる。

(偉大な靈感のなかで おまえは…ある楽曲の音程

どんなに 目を凝らしても 肉眼では 見えない

咲かせない筈の いのちのはじまりを抱いて 歳月は 過ぎ去ってみれば

乾かないインク きらめく繊細な黒い脈・・

れんげや菜の花が、朝、狐火、鬼火のようにゆらめくのを知っていますか

アンドロイド-ロボット・・人の顔にふっと見える植物の不思議な表情を知っていますか、

蝉が樹の模様のように見え、飛び立った瞬間に――

てのひらの生命線を想像させるのは――どうですか？・・あのあたりでしたよ・・

蜥蜴だか守宮だかいて、土・・物の形が渦巻く世界でやけに、凶鑑の、

十二指腸みたいに思えましたっけ――

いまも無学文盲にあこがれる、あの雲のちりぢりばらばらな様子は・・どうです――

モノクロの中で透明な扉を想像する――カレンダーの日付、増えていく・・

夜の間にごったこと、昼間のこと、洗濯物・・

押し殺した喘ぎのようなもの、排水溝に流れていく酔っているもの、

入浴剤、観覧車のでっぺん間際の皮膚にあたる携帯の光・・了解せよ、

了解する・・その痕跡によって釣りあげられていく点けっぱなしの画面の奥、

いまも、秋のイチョウがきいろい河をつくり、さみしい、秋の風――

名づけることのできないもの、しかし――鳴り続けているもの、

温度と湿度、場所と名前・・それらが複雑に結びついている、感情の惨劇、

そのよごれた敷物に、まだ見ぬ物語がつづられているのを知っていますか――

冬の雪が、白髪のようにおちていくと見える真夜中の街燈を…………。

…はじめてキスした時、

…はじめて僕のペニスが女性のヴァギナのなかへ入っていった時――

――すごく混乱してた…真っ暗闇の中で、誘導されて…

あん、とか、うん、とか、いってる女の顔を見ていたら――

僕、何かとんでもなく間違っただけの行いをしている気がして…

(あなたはわたしのことが最初から好きだって知ってたわ…

その決心を変えた理由は何？…

あなたが劣等感を感じる理由は何？…)

周囲の人が、ああしろ、こうしろ、って言う、十九歳の時の僕、

みんな僕が君のことを好きだって知っていて、恥ずかしいのに、

でも、声もかけられないのに、周囲はみんなそんな扱いをする、

何とかしようと思えば思うほど、泥沼で、恥ずかしくなる…

(僕は鳥――空を飛べない鳥で、けれど蠅には夜、なれ…て、

醜く空想の中を飛んで嘘の粉を撒き散らす蛾にはなれたかも、

僕は神の慈悲にすが…りながら、齢を重ね――)

顔を赤らめ…いまでも胸が痛い、

恋に焦がれた顔を知ったのは、その時、

「one's first love」

ねえ――わかるかい…見えない戦争

——どいつもこいつも

笑って..

嫌いじゃないよ、すごく好きだよ——

(防護シート、バタバタ鳴るシート..)

——僕も馬鹿だから、

好きだよ...

でもね、——さみしさが消えないんだ..

蛇口から垂れていく一列の階段、からっぽのあの感じ、

(機能消えた道路——昨日消えた道路..)

[ジャングル・・]

闇の中でうずくまって、

色々な苦しさを抱え込んでた、僕の悲しみ、怒りが、

——消えない..

「見えなくなるまで..続くと思う——」

「届かなくなるまで——わかんないと言ってると思う..」

社会生活なんかどうだっていいと、僕が難しい本を読みあさってる時..

優れた詩を書いて、周囲の人間を圧倒し..高圧的な態度をとっている時、

社会で、僕が必要以上に、自分を見せようと思えない間（も、）

目に見える以上のものがそこにあった、あなたがそこで微笑んでいる理由、

あなたが、楽しそうにするたびに、あなたの幸せを希う理由――

死ぬまで、彼女と言う作品を集めるコンセプトアルバム…

「もう…君に恋を口にしなくてもいいよね――

君が好きなのは、もうわかりきっていることなのに、

そしてそれを君が知らないなんて、僕には、思えない…」

…ふっと、風が吹いて、うなだれそうになる僕だ――

流されるたびに、ねえ、まぶしい、だからまた違う暗がりへ行っちゃうんだよ、

なんて気持ち悪いことをやってるんだっていう、僕の男らしさ――

着たくもない服やズボンを買ったよ、香水だってつけたんだ、

女性をメロメロにしてやったぜ、でも、きちんと優しく別れたよ、

結局僕は僕のように、誰も傷つけることができないんだなと思ったよ、

下らないことは好きじゃないけどね、馬鹿も沢山いるけどね、

もっと誰もいない所を探す、ねえ、もっと、見つかりにくい場所を探す…

そして、失敗するとわかってて、

ふられてもやった――愚か過ぎてもういいんじゃないかって、

思えるようなこともたくさんした、カッコ悪かったかな、どうだろう…

人生なんて昨日の夢のようにも思えるし、明日があるさなんて流行歌風に言うかな、

叫び出したいのを堪え、やっぱり何だかよくわからなくなって、

——おかしい…また僕、ぼんやりと君のことを考えて——る…

でも会いたくないよ、多分気付いても話しかけないから…

もう、生身の君にあんまり興味がないんだ、不思議だろ、笑っちゃいそうさ…、

だって——抱いた女が言うんだぜ…あなた、何処かで会った？…

ほんとさ、…その時、ぼんやりと、嘘が美しい理由、

もう、一番好きな人でなくてもいいやっていう理由わかった、

好きでなくても誰かを抱ける理由、ぼんやりとしながら、気付いた——

結局、一緒なんだな、誰といたって、どんなに特別なことを心に刻み込んだって、

苦しさはなくなるしないし、さみしさは消えな——い…

ねえ、君に僕を癒せるかい？…むずかしい——ぜ…

「ねえ、才能を伸ばし続ける人間の気持ち知ってるかい？…」

(壊れそうなんだ—— )

——この国の暴力、この国の神…

飼いならしてみるかい？…

特別ってどんな気持ちか知ってるかい…

何も始まらない日々の中で、…

夜通し、

——日常にスポイルされるのさ…

——名づけることのできない瞬間——

僕は僕の才能で辿って行くんだ——

階段はいらない、道はいら——ない——

月の光もいない——太陽もいない——

俺が俺を

殺したよ——

髪だってさっぱりしたし——肌だってキレイになった、

拒むような、すがるような、どちらとも言えない表情で

瞳の強さも——睡眠時間削りまくって、仕事も死ぬほど一生懸命やって——

部屋の中から、息が大きく乱れる気配が伝わってくる

ねえ、それに頭も——頭もよくなった——人がやらないようなことを沢山やって、

僕だったら百万人は殺せるな、才能だと思うよ——

才能だと思うよ——

才能だと思うよ——

人間の常識をぶっ壊すって才能——真実を見せつけるっていう方法——

からかっていると言うより、純粋に不思議で仕方がないともいった様子

僕はみんなの考えてることが手に取るようにわかるし——わかるってこと——

——わかるってこと——

——わかるってこと..

勘違いしないってこと、そしてこれで、何度も..

笑いかみ殺しては、口の中に甘く毒のように広がってゆく

ねえ、何度も思ったんだこれから、ずっと生きてゆかなくちゃいけない、

けたたましい音を立てて目覚まし時計が朝を知らせる——発車のベル..

行ったり来たりさ、でも戻ってゆかなくちゃいけないゴールがないから、

何故こんなことをしているのか、自分自身にもよく分からないまま、月日が記録されてゆく。

でも入口だけはあって僕はまたそこで——僕を殺すのさ..

——僕を殺すのさ..

——僕を殺すのさ..

仮面劇は終わったよ、喜劇や悲劇も思った、でも、僕の演技性は終わらない、

ずいぶん頑丈な時計で、思い切り叩いても壊れない

僕のコマーシャルイズムは終わらない、..絶望さ、それでも狂えない、

ちょっと意地悪ではあるが、愛情表現であることは間違いない

一体全体どうしてかわからないけど、やれるだけだって死ぬしかないらしい、

しらばっくれる悲劇の主人公にして悪魔教..文化人虐殺の総司令官——

こんな人生誰が望んだのか俺にはわからない、——でも続く俺の芝居..

——でも続く俺の芝居..

——でも続く俺の芝居..

、、、、、、、、  
終わらない俺の戦い――

俺は世界中を粉々にする…

情熱が暴走を始める余分なものの強み――

でも、熱さが消えないんだ、深夜の蛇口が蛇になる――

でも脅迫観念のように、言い聞かせられる…

確信する、世界を変えるのは、本当の自分自身だ！と…

そして、どうして俺が世界を壊したがってるか…

憐れな詩人たちが知ってる――

僕の恋、僕の愛、僕の平和、僕の自由…

神社にも百日通って、世界平和や、愛や理想について、

心の底から願えるようになった…たくさんの感謝をしたよ、

でも、いまでも僕は嘘つきだ、――別に薄い色が鮮やかに見えるわけじゃない、

広げながら閉じるような感覚がその時生まれたわけでもない――

嘘つきだと思う――いまでも、彼女がこわくて…こわくて、たまらない、

本当に僕のことを愛してくれるのか自信が持てないんだ…

「one's first love」

僕の正義、僕の活力、僕の本能…

負けられない争いなんだ、

何百年も、

何千年も、何万年もそうさ、

生きることは同じ——

空と大地がひとつに溶け合ったように、

——（薫るでしょう？）

まじりあい、両天秤のようにみせるのは？

（空の果てを——知ってるから？…）

（いつか何処かで——考えたことがあるから？…）

——（心地いいでしょう？）

いまま宇宙開闢を覗き見たいと思うからでしょうか、

——（まぶしいでしょう？）

旅のさびしさに酔います…貯水槽にシャッター、モダンな建物、

[黄昏がとりとめのない会話のように思えたり、

朝陽に——奥床しさを感じ、誰かが手を振っているように感じるのは？…]

——（懐かしいでしょう？）

虫に、色に、ガスバーナーに…物語なんてどうでもよくて、

花茎の中、おじぎをして、鱗のように花粉が――

はるか遠い朝――ねえ、あれが君には見えるかい？

（宝石をちりばめたかのような叢ではコオロギや鈴虫が鳴き――）

（朽ちたもの、古びたものと、すれ違い続け――る…この日々…）

――（驚くでしょう？）

僕ではない誰かと…君ではない誰かとお話ししよう、

ひんやりしてはまた熱くなる、遠のいてはまた分け入ってく、

声――その言葉…輪廻…

ランシン・バルド

存 在 世 界 のざわめき――

褒められると面映ゆい僕に、青空の破片が突き刺さる。ヴォリュームの中…

ボリュームの中――走った胸に夏の匂い…

空を見上げて、太陽を見上げて、ヴォリュームの中、

ボリュームの中、眠れぬ夜の不安を、ああ、いくつ越え、

まるで霧の中に見知らぬ街の人がいるように、止まった時間が、

揺れる世界――に…

つねに新しい道をもとめて歩いてゆくかのよう……………。

――僕が負けたって誰も責めない、

むしろみんなはもう――…たぶんね、

うすうすね、気付いてる…

やめればいいのになって思ってる、でもそうじゃない、

(彼女は誰だ? ..そして彼女を知っている僕は誰だ——

その一つ一つが、僕を呼び..僕を目覚めさせる...

目覚めさせないでくれ...君を——

目を開いても閉じて、素足で見る夢..

魂の奥深くで、癒えることのない渴きが見える、人を愛する心、

——人を愛さない心..

——奪い奪われる心..

微笑みながら怒り、語りながら口を閉じる..

曇りが見える、うすぼんやりとして見える..君にとっての僕、

..僕にとっての君。

僕が他者である時、君が主体である。

——パーソナル・ヒストリー..

でも——変わらない..僕は彼女にまだ大切なことを言ってない)

そしてそれが母でしかないようなもの

そしてそれが姉や妹でしかないようなもの

そしてそれが——女でしかないようなもの..

僕は立ち止まってる..自然に息が切れたみたいに空を見上げてる、

(花が水に飛び込んだように見える錯覚..

メロディーは直視する..ああ東洋の魔術—— )

現実と向き合うべきだと知りながら、本当に不幸になってしまうよと、

知りながら——不信心の理由、神を愛さない理由…

(歩きながら走っているように思える錯覚、隣に電車——

メロディーは直視する…発育不全の脳を揺り起こすため、

目覚める-目覚めない…いえ、もう目覚めなさい——

神話があなただを待って——る… )

金儲けがしたくない理由…人生の不幸にことごとく強い理由、

恋に強い理由、他者を圧倒できる理由…それはもう、わかってる、

僕が嘘つきだからだ——日ごと鎧っていくものが重い、

人を心の底から嫌いになれない僕が重い…笑顔が鈍い…

「そろそろ…海にでも行くかな——

無性に、人恋しくて、そのくせ人を一番拒絶する季節だ…

夏が僕を追い越していく…ああ、ここにも、あそこにも、

蝉が——鳴いて…る… 」

負けたくないんだ…本当に手に入れたいもの、

——欲しかったもの、

それが愛という名前じゃないかも知れないことにも、

もう、気付いてる…

永遠とか、たとえば地獄とか…

尽きない命とか、終わりとか――

そうだ、僕にはわかる、女性たちがみんな一緒だと、

屑だのゴミだの言える美を冒涇する女なら・・顔だけ綺麗な女に、醜い女、

心が不細工な女に、金だの言ってる見下げ果てた女・・

その前の　ひと息の　ひととき

服脱がせりゃ全部一緒、腹だって出てるかも知れないし、

そうさ、腹ん中は真っ黒かも知れない、ニコニコしてる女・・

耳に近づく前の　転がり合う　こすれあう　力む　ひととき

・・そうさ、彼女・・自分の意見一つ言えない女かも知れない――せ、

でも――そう思う度に、僕の瞳が石になりそうになる・・

（彼女というものに関する嘘をつくことを拒んでしま・・う、

見なければよかった・・知らなければよかったと思うかも知れないのに、

また、彼女に恋をしてしまいそうな理由・・）

「本当のところ、僕にもわからない・・

理由をつけて納得したふりをして、わからない・・

ただ――彼女がいなければ、僕が困る、

傍にいてもいなくても・・彼女が胸にいてだけで、それでいい、

だって・・僕は彼女にだけ、何も求めたことがない　　」

呼びかけようか・・いや、それは出来ない

話しかけようか——こぼれる、砂のように、

さらさら と…しゃらしやら と——

しゃりしゃり——と…

時が止まって…メリーゴーランドのように感情が切り離されて、

僕が子供になる——小さな、小さな、本当に小さな僕にとって、

小さな、小さな——ふくらかでいて、祈りのように何かが強く張りつめ、

奥で白く輝く、その小さな、小さな、美しいもの、その何かがひそまる、

一方の空いた手が、もう一方の握りしめた感覚を欲しが、——

その愛を信じるのが、この世界をつないで——いる…

(ぼくが歩くのを止めた時、いつも、育てていかなければならぬものを感じた

肩書きが片意地を張っているような時代に、ぼくは、肩すかしを

食らわせたいたのかも… 映画のような恋をして、眼差しが絡んで、心も焦がして

あれほど夢に見ていた貴族のような暮らしが、ねえなぜ

こんなにきな臭いもののように思えるの…………。) )

ただ僕がそこにいて本当に自分が感じたままのエゴの世界に浸ってる…

どうしてこんなに惹かれるのかわからない…諦めようと、  
違う女性に目を向けようとするたびに、君のことを思い出す…

でも恋の勝利者のように、僕はたくさんの恋愛詩を書いた、

女性心理を知り尽くし、どうすれば女性が喜ぶかなんて、

わかるはず…僕はヴィーナスの影響を受けて、年齢をとらない詩人、

永遠に嘘をついて恋をしていられるかも知れない、詩人…

内側の白線、踏み越えられないゴールライン、いつまでも終わりのない絶頂の感覚、

リフレインする僕の興奮、好き勝手に感情や顔や声や言葉を変えまくる器用さ、

——多分、本当の自分がもうわかってるからそこで遊んでるんだろうな、

後悔しても遅いぜ、——どうかな…

ズタズタボロボロにしてやるぜ、…やれるかな…

裾をひいていく女中のようなさびしさ。未練がましい奇声。空の剥がれたような雨に、

胸がいたみます、定かならぬ星の数のなかで…雪崩れ込んでいく勢いの中で、

蘊奥をきわめた者がみせる永遠の日は、この僕にも、あったようです

赤道よ、ああ、教えてほしい！ 演題を………！

…見えないものに形を

…見えないものにどうか形を

作ったものがすべて壊れてしまったことを知りながら、敏感な神経、苦悩、白髪、

父では到底説明しきれぬ性質、母では到底説明しきれぬ性質——涙の苦汁 に

孤独と絶望のBLIZZARDがさくらはなびらのように降る

（渴く おまえは…

——風は四方から唸り声をあげ暴れている。孤独な人為の上の累積の干渉

心の危機…外界から発する、古代からの情熱…痩せ衰えた、おたまじゃくし

稲妻は 魂の叫びを確かに象っている、王者らしい投げやりさで…

（再び お前は知るので 進んで知り合いの誰かに言うように

(垂直に沈む 水の入った船のように 意外な間を置いて…

おくびにも出さぬまま泣き顔をよぎらせ、

ああ、…見掛けることもなくなり

さらさらと遐いところから巻き上げら

れた黄砂がぼくの頬にあたるのみ

森をそぞろ歩いて、昏く鬱く、くつき

りとした影を隈取って段だら

樹々の葉むらや茂みが、千条の滝のよ

うに月の光をあわくおとし……。

水の如く 深い闇に染みとおっていく

溺れる。ための。沈黙が。奏でられ。…

だれにも気づかれず、激しくゆがませ、そっと足を踏み入れる。

「夏の部屋よ、カーテンの色を変え、無慈悲な太陽が射し、

いちじるしく部屋が縮んで見える。拡散しながら、縮小している――」

…詩人の静かな声が聞こえてくる

…周囲は病気、真っ暗、不安

屈折する世界の鏡、さながら四重奏のように、「鏡」は  
目が覚めてからも暫く残る、メタファー。つかむことはできない。

…心に残る時代の闇 一一響き渡る 足音

震えながら透きとおって消えやすい、適切な、これ以上適切なものはない

病気の子供、たえず瀕死で、非現実的で、夏を呼び起こす 夕立ちのように…

風鈴が鳴る。空は静かで、魚を獲るようだ

(渴く おまえは…

「見えねば匂うしかない、そよ風の夏に揺れながら、

無意識のうちに生成の差異をしめすあの、夕暮れの安堵のなかへ」

こわごと窓をひらき、しつこくふり灑ぐ昆虫のように野原は

盲目の心に、陽はその下一一

……………ぼくは一日の疲れをあなたに打ち明ける、

ぼくが負ったさみしさ、くるしさ、

(これで全部だよ、これで告白は終わったよ。)

(また探すよ、一からね。)

きっと夢のように溶けて流れるでしょう、微熱の全肯定…

色がうすれた、この灰いろの街で

震えてる一一長い影を引きながら、倒れながら歩いてる一一

生き残った僕のそしてそこにいるはずのない誰かのように僕は…

はじめて心をひらいた時の笑顔、…すべて、

月の満ち欠けとともに見る――

耐えること、覚えること、忘れること、そのずれの一瞬――

ブラックボックスに確かに、見えなかったものがちょっとだけ見える、

ことばは糸くずに似て、ほつれやすいから、ねえいまも、

繕っている、いとしい人のそばで、

(じゃあね、)

(またね。)

(多分それっきり、ツーツーツー…さ――)

――ただ、星のかがやきを……。

変わることはない、命のかがやきを――

…ねえ――そのかがやきを…

僕は現代として、若者のエゴとして、この胸に刻む…

(じゃあね、)

…のあとに、行き着く細い眼があって、息遣い。

(またね。)

――がきて、はばたかせて、

…鳥がいる

――田や畑の向こうに点在する

(多分それっきり、ツーツーツー…さ――)

一一汗·

## 集合中の最小値よりも小さく

---

解析は遊戯であるか？…だ——…

法則は駆け落ちする、ずれた仕草で——」

ある物とある物との関係を示す——

数学的考案物あるいは数学モデル。

たとえば濃度が薄まる、（あの、）感じ…

ずれていたら、[言葉が、]減っていったかも——…

数学で方程式を結び付けることによって、  
未知の数学量を取り除く行為…

ロボットになってしまう！

チェス好きになってしまう！——…

でもきっと、決闘していた！…

たとえば、二つの式が等しい数学的命題…

…幾何学，確率論，統計学[と、]連想するのだ——

体育の授業のあと、男も女も汗ばんでいる中、

言葉でない溜息が真っ白いノートで麦畑する…

既約？…

ノートには、隙だらけの自分に哲学を求める交流の声がある。

水平線にかすかな愁いが帯びるほどに、雨上がりの虹――

(だが、) 私が言っているのは、

線と線が交わる所のことであり、

(つまるところ、) 僕が言っているのは、

一般角という角、一般式という式…

それは…

それは……………

[問題]のことではなく、

《数学の》純粋な結果――…

、、、、、、、、、、  
正の数を示す記号は、

弓形という円の部分と、

…と、いう展開を辿って…

ほら忌々しく！

蛇と数学を平均化させる――…

ずいぶん錆びついた、

あやしくなった――…

神童――これでも昔は、手先が器用とばかり、

難問を楽々解いてみせた！..

演奏していた一炭を焼いていた..

でもいつか、飛沫の中に消えていっーた..

(証明を検証しよう、  
三〇ページから五〇ページまで..  
足もとに寄りつける者が無い！  
太刀打ちできない！  
一砂に寝ている、波さえ砂となる、砂のひびきは地球にも似て、  
絶え間ない孤独だっーた..足跡のついた地面..)

でも不安だった、私の脳裏にはいつも、

宇宙の構造は数学的にできている、という、

クラインのつぼ、メビウスの輪..

その苦しい胸一ー..限界を持たない、科学知識の集約した小型機械、

数字-電卓..点、線、曲線、および面の..

しかしマッピングは文学的な文体を必要としていた。

「もとの比とは逆の比である..」

と、呟いている時の私は、ただ、それだけ..

明らかに、線分を外分している..

数学の規則に従いながら初等数学の程度を遙かに超え、

履修するまでになると、精度または正確性によって、

特徴づけられているにすぎないということがわかってくる一ー

プレイ・オフ

ピックアップ一ー

そして、夜の孤独な玉突き・・

複素数のための数学関数のよさは、

言葉の出ない溜息――

それは・・・

それは・・・・・・・・

[問題]のことではなく、

《数学の》純粋な結果――・・

教えてくれ、解決方法としての仮定法！・・

教えてくれ、外点という位相空間における点！

教えてくれ、完全帰納法！――・・

たとえば日常生活で、むやみやたらな、

空間座標という座標で――・・

所要の作図を求める問題・・

格子を構成する点は、・・私は、なった――

樹形図という、数学的な図形を、・・形状は、想像した・・

推移法則――組み合わせ？

変数の増し分か、対合という変換か、・・

非可付番集合？――

列ベクトルという行列

連鎖比…

乱れ――た…

宇宙は、昼も夜も絶えず何処かで、

絶えず、乱れて――青い…

…未知数を満足させよ！

…わたくしの、未知数を満足させよ！――…

宇宙を貫く数字よ――…

ああ、されど、数時よ…



フ、フフ、フウフウ、フーフー、――

医療とは最適化のことではなく、

死を先へ延ばすためのものだ――

成熟…蝶、噫々、御覧、

時のない時計/シロップの時計…

――真ッ逆ア様アニ落ちィル結末！

医療技術の進歩と高度医療の普及もあいまって、

医療費の増加は著しい！…

「鋏を持った男が、じゃきじゃきいわせながら走ってくる。」

――じゃっきんじゃっきんじゃっきん…

嗚呼――――見ルモ無惨ナ

…心臓の収縮に伴う電流を記録する

……脳によって発生する電流を記録する

ルーペと光――…

…医療ロボットや人工臓器

器具を使用しての切開が、

非医療目的に精神変化をもたらす行為となる…



警察が医療事故の立件に消極的――

介入できない聖なる肉体という分野――…

ペニスがいま、屹立し、アメリカ合衆国的医療活動！

アットがゴシック化する！――崩れてゆく聖地――精子…

「ペットがストレスを緩和すると聞いている…るる――

音楽が、モツアルトがいらしいと、――るる…」

脅迫文のよう、るる…死の舞踏――るる…

『こんや、0時、だれかがしぬ』

針金が飛び出た指の感覚

へーっへっへっへー

ひーっひっひっひ

[笑う] [溺れる]

……スプリング・ハズ・カム

……日ごと見つける、僕等の新たな包帯――

…なんて単純、なんて無様――…

、、、、、、、、  
アイスクリームと、  
、、、、、、、、  
ウエハースみたいな…

――幼稚かい…理由…

この世にまつわるあらゆる苦悩から救いへと至らしめる最後の道

自殺-あるいは、死ねばすべて楽になるという刹那的な考え…

ロープ-藁、腕がちぎれるように痛い…

――でも痛いのは、笑い声の方かも知れない

「昔はいい子だったんだけどね…」

「「ごねんね・・・」」

女の声に変なエコーが」かかる

弱点や失敗を攻撃するだけの声が」かかる

無価値な線) 蛇行した線)

折れ線グラフ) 心電図)

この仕事をするには我々が

非常に気持ちをしっかり持つことが必要だ。

——クエ・エエ・ス・チョオ・オオオ・ン

(あなたを、誤解していました。

お赦してください——…) という懺悔の時、

人は——それ以上の罪を停止し、

水に流す効果がある——…

ああ

笑い声は世にも得がたい

葉のそよぎとなって

水の音となって雨となって

風のうなりとなって

——ふと、ロシアの野を愛し、それを歌った、

エセーニンを思い出す…

ロシアの田園詩人——…

、 、 、 、 、 、 、 、

アイスクリームと、

、 、 、 、 、 、 、 、

ウエハースみたいな…

ねえ、他人との繋がりは大切だよ。

友達のいない人生なんて何の意味も価値もない。

ねえ——わかっているかい、

他人に君がどう思われるかなんて聞いて——ない…

君がどうしたいのかって聞いてん——だ…

民族ないし伝統に似たいのちを抽象」する

主義制度を優位とする反論だけの国民の不満を曖昧と」する

だれとも合わない自分の歩幅

ばらばらになった人の心

しばらくおろすことができない

深い深い谷川を見おろす

[笑う]- [溺れる]

……スプリング・ハズ・カム

——人々のだらけきった暮らしぶりを見ながら……

——差別ではなく区別と分別を持たねばという視界が開けてくる……

、、、、、、、、  
アイスクリームと、  
、、、、、、、、  
ウエハースみたいな……

……まぶしくててのひらで隠したその眼の向こう側——

あきれるほど弱々しくて

それは自然に、無意識に。僕等の嫌悪をあきらかにして

——でも、そうじゃないを受け入れようとして……

ねえ、人はきっとまだ変わるんだと考えようとして——

……いた——いた……

いたん——だ……

傷んだ——間抜けな僕の視界に……

絶えず見えてる人の醜さと美しさ——……

## 正しいと信じる夢

---

フラッシュバック{U}

—— (You...冷え冷えと..... )

路地や下水道なら知っている、

そこで煙のように消える怨霊たち..

——ふとえだの くびの くびれし..

通り雨..蝉しぐれ——

夕立ちに..空っ風...

「都市という巨大な本が捲れる..」

(生存のために全く敬意を持っていない遊戯..

人格を持たぬ本質、規範や制限のない本能の敵を、

制御する業を人は持たな——い..)

少し背の高い岩に座った天使 (は、)

いつも——ぼんやりと思い出す..

なつか

そして可懐しさのあまり、誰かに話したくなる..

かなかな の なきがら

ぬれねずみ の なきがら

致命的な…蜘蛛の巣――に…

タランチュラが迷い込む――

少し青みを帯びた、闇夜のハンターは…

彼の前では小さな蜘蛛、ただちに喰われた…

(いのちを感じる――体内で…

蜘蛛の子がうごめいている――

ぐじゅぐじゅ…と、うごめいている――)

「重大な夜…」

(そこに、さらに大きな蝶がやって来る――

やがて、そこに本当に大きな獣がやって来る――…)

フラッシュバック{U}

―― (You…冷え冷えと…… )

制御する業を人は持たな――い…

三角に形を変え…

その身を柱に隠し、影は分離して――ゆく…

何故我々は従うのだろ――う…

何故我々は光を殺さないのだろ――う…

## 栄光の道

---

じられてゆき、

過去――夢の扉が見えてくる…

それが、在りし日、頭部-頭髪のあった場所に、

じゃらり-ルン、とかかる――

「偉大なる師よ――甦れ！…」

髑髏はカタカタケタケタと揺れる、

よくぞ言った、と、受けとめると

胸のあたりで止まっていた手がゆれ、

来れ！偉大なる賢者よ、と…

懐かしい言葉の連なりが聞こえてくる…

やがて、おびただしい光芒…

そこから立ち現れる杖を振りかざした司祭――

不思議に入り組んだ森を、

馬に乗った兵士と司祭が行く――

微笑をたたえて…森が燃えてゆく――

迷いの森は消えてゆく――…

「人生とは火の中のようなものだ。…」

弟子よ——観るがいい、

古の炎の威力を！…」

——ようやく、彼は見つけた…

皮膚の内側に息づく-脈打つ

マグマを…

## 斜めにぴよおおんとジャンプするうさぎ

---

僕がたまに驚くのは夢の中のことだ

たとえば先程の夢は

夢の中で僕はシナリオのあるアニメーションを見ている

夢の理解は罵声の数々（笑）

——いや、ピュアさんがリツイートしてた下らないお人がね、

ちょっと創作してるけど、

「（笑）とつけてる奴は馬鹿と決める」みたいなね、

おお、この馬鹿、かわいいじゃないかと思ってね、

いじめたくなるね——いや、ピュアさんじゃなくて、その馬鹿・・

思い知るよりほかにない

美的存在としての馬鹿になれない馬鹿は

多分カシミアのセーターが好きだ（笑）

ミニマムなパティキュラーだけど

雪山の

雪が降る街路——雪が降り積もった公園

・・エレヴェーター

透明だけど、緩やかな昇り方をする

その斜かいから、——

夢の中の記憶は必要のない情報であると思っ

どんどん忘れていく宇宙の意志の導かれるままに

いじらしく黒のいとおいしい波にひたっ…ひたっ—

夜半の目覚めが眠りを趨う

かわし方、避け方、転じ方、

したたかさ—

胡瓜の話をしていても、何と言うかね、塚元君、

ふん、

それを股間に持っていないような奴が—

本当のポエットを探そうぜ…

何の虚飾もない、ポエットがいるはずさ…

老人のエゴもただ刈り込みたくなるようなものじゃな

…だから—したたかさ…とぼけてる、

ぼけてると書いたら悪口かな、でもギャグ詩の専門家み

—ふざけた後に黙るのが一番…気恥ずかしさに辟易した人だけが

動物の顔をしていな…

北川冬彦が突然

この人は恋をしていた人だとわかる

—失われたもの、空想があたかも実在だと信じる

シュールさ…おそらく戦争の痛手を、恋と気付かずに、

詩を書いてきた人が後年そのことに気付いた節のものとして

浮き彫りにされた

ちょっとセンチメンタルじゃないか

でもうまくいったな

——取りだしてみなければ落ち着かない

ねえ…あれ、とってよ——あれだよ、あれ…

世俗的なものから超俗…

でも不思議だなあ、苦痛だよ、

苦痛って言葉自体見るのも嫌——

西脇順三郎が突然わかる

彼が現代詩的な詩人であったことや

しかし実はそれ以上に現代人的な恐れとか不安を持っていた詩人であ——

## 正義

---

窓を塞いで来た・・・！

暴風と活ける音楽——多少強い風が吹こうとも、

細い眼が覗くことはない・・・！

[人間の眼を開きうるかの試練]

火の粉が舞う——部屋の隅にしかもう闇は集まらない——・・・

同時に、新鮮な自然の花——

大自然に咲くが如き大輪の花——

自覚の成熟を待っていた-神もいる。

ある気付かれなかった意味が／

鳴動する

(隠されて-いる・・・語り掛けても返事がないから。

枷をはめられた意識-あらぬ方向へ走り始めて-いる・・・

「シャッターを開けて車庫に俺は車を停めた。・・・一時間前だ」

なのに、溶けるように眠りこけている暖炉の前、——ワイパーはない。水溜まりを踏む音は

聞こえない。会社もない。法律も憲法もない。だから——スピード違反もない-ないんだ。

まるで何者かに麻酔をかけられ、身体中にメスを入れられたように、消毒液の臭いがする。

無数の針の気配がする。腹立たしい爆発-絶頂。しかしそこに再び息を入れられる。ようやく

、俺は深呼吸できる。

、、、、、、、、

地下室に誘導する。ボイラー室の耐火用の赤錆びた鉄扉。

、、、、、、、、

地下室に誘導する。一一雨の中の火事・炎上する家屋。

「暗黒と憂愁と混乱に漲りながら噴火寸前の脈拍・」

、、、、、、

保険金受取人一一)

、、、、

ギシリ――

かすかな実感を頼りに黒白の濃淡を凝視する。俺の胸が渴いている。

銃で撃ち抜かれたように俺の声には生气という、人間らしいものを取り戻す契機を失ってる

。焼けつくような甚深な快活-綱渡りするようなリスク。病的に地獄を求める俺の体温-醒め

ない俺の理性の夜だけが、そっと、頬を緩める。爪を立ててロッククライミングする光景さ

ながらの不安とそれゆえの興奮を嘆美する。

チェックアウトできない部屋-チェックメイトできない悲しみの遊戯。

一一続けて・る……!

生還が目的じゃない。真理の普及が夜の口を抑える。埋葬される。俺に砂がかけられている

、時間。復讐が芸術的衝動となり・天使が、そっと仮面を外す。俺の目の前で、悪魔となり

、蛇となり・地位や名誉も、財寶も一一魂の中にある、と言う。苦痛の舞踏の日々。

幻覚に さようならを――

誓約に さよなら――

俺は俺を知るために俺を殺してきたのだろうか――

俺の一日は俺を殺すための日々だった――

俺は才能というものがどういうものか本当に理解したような気がする。

そして俺はそいつらの腐りきった脳味噌を木端微塵にする。

むくむく、と俺の身体に秘められていた暴力が、その形や色を変えていく。

無惨にも踏み躪るもの-蟻だの弱者だの奴隷だの――聞き飽きた・・

「お前はただの屑だ。」

本当は-残酷な所がある。人がロボットに見えるといつか俺は言った。

あれは嘘だ。人が道具に見える。だから人は生き物ですらない。

俺は睨みつけている。本当に人間であるために、人間が人間らしくあるために、

俺は一瞬にして焼き付いてしまうほどの強烈な視線を送る。

夜が怯み、時間さえ怯む――俺の五感、引き摺りだす俺の内臓感覚・・

忘れていた過去の時間。流星よ――さあ、この星に降り注げ！・・

甘い罨-嘘の言葉・・

（星は生まれ変わるのだから。）

そして俺も生まれ変わるのだから。

光の破片-ありのままの言葉・・

（朝のつぼみは開こうとしているのだから。）

そして夜その花は萎もうとするのだから。



うわー、とか、ぐあー、とか

---

風に揺れて歌っているみたい——十二月が終わる

…私に触れないで、雪よ…

あなたと別れてから毎晩つづいた。見物人も俳優も、聴衆も立役者も、

何もかも一しょくたになって、長い夢も、ひと晩で終わる短い夢もあるけれど、

それらがすべて物質文化の始末に負えない刹那的な感情で、それにもう飽き果てた、

だからもう、新しい靈感を求め——る…ハートのエース、

おだやかに、ゆっくりと目覚めるまで、いまの自分を突出するまで、

この自分が別の地点へと切り替わってゆくまで、

この恋は——きっと、忘れられ…ない…

"Good-by, sweetheart!"

こんなに急ぎ足に町を通り過ぎてゆく。食糧、身の回りの足りないもの、

それでも、生きなければならない、——いや、それでも、何となく生きている、

——長期連休。

こんなに大きな都会の中で、

誰かと誰かの顔がちかづき、もごもご言い、

唇を合わすことを、幸せな恋人、と言う…

意地悪い私は、その傍で、「フンッ」とか「ハクシュン」とか、

やって——る…二十代の馬鹿な娘…不良な娘…

でも、高校時代から何年も付き合ってきた大切な彼氏だったのよ――

でも、何も言えな――い・・長距離恋愛、

浮気どころか、子供までこさえて、来月に結婚、

そう・・おめでとう――

血の気がサーッと引いて、本当なら平手打ち、喫茶店目の前のコップの水を顔にかける、

――などの当然の答えがあるのだが、それはドラマのカッコいい女の話。

顔面蒼白で、柄にもなく低い声で、そ・・う――おめでとう、

と、言って、彼が謝るのを黙って聞き、慰謝料らしい数十万円を封筒に入れて渡し、

許してくれ、と言って去った。・・

奥の席に座るんじゃなかった――誰にも見えないから・・と、

それから、十分ほど涙が流れて止まらなかった。

[人々は遠い春をはるかに望んで、力弱い溜息をもらす。]

(ストーヴの傍で、あるいは快適なエアコンの傍で、

いいえ、電気カーペットの上で――)

人界から遠く隔絶された失われた世界の住人に、私はなって、

吹き消えそうな蠟燭・・凍えた瞳――黒の誘惑・・

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

電燈はもちろんうす暗かったし、締めたはずの蛇口から洩れて来る、

ちゃぷちゃぷ、という水音は消えなかった――し・・

窓を開ければ、凄まじい風の音につつまれ、一瞬で、重苦しい生のすべてを、

理解したつもりになる。脊柱がずっと尾鰭の真ん中をつき抜けて伸び出ているように、

息が咽喉をつきぬければ、あたかもそれは妙に気の滅入る沈黙の世界――

朝が、新しい日の第一歩が、中々、訪れなかった。

時々やけになって、コートの下素っ裸で、お金持ちのおじさんとか、

あわよくばカッコのいいお兄さんに犯してもらおうと馬鹿なことを考えたが、

――こんな不景気だし、A Vじゃあるまいし、

いつまでだって馬鹿な女の相手をしてくれる男はいなかった。

レズる友達を探しても、よっぽどのヘマをしたりしない賢い女たちのこと、

男はがっちりキープしている。

「屁だってこくんですよ、その女！」と言ったって、おほほ、

何ヒスってるのこの女みたいな扱い。

「ふられた腹いせで自爆テロするのやめて。」

――冗談よ…ただ――恋人がいないから、グスン、グスン、

友達にずっと一緒にいてほしいだけ、ねえ、一緒にレズろうよ、

男なんてろくなもんじゃないよ、ろくなもんじゃない――！

…馬鹿。

でも、恋人優先のスケジュール。

しょうがない――みんな、女なんだもの…

ふざけてみたって、泣きを入れてみたって、本音じゃ、

アンタの気持ちわかるけど、こっちだって必死なのよ、

クリスマスに大晦日に新年、どういうイベントかわかっているの？

..気持ち高まって、Hして、あわよくば、男から、

そろそろ結婚しようか、という言葉を引き出す。付き合っている以上は、

そして年齢がどんどん高くなれば、必死だ。幸せだ、楽しいな、

ねえ、ずっと傍にいてね、とジョシチューガクセーしてられない。

けれど、淋しいのよ..

気持ちが切り替わらない夜が支配する。孤独な海に、透かし絵のように月が忍びこむ。

—淋しくてヴェランダで凍えながら、相変わらず友達にtellいれまくる弱い私で、

..切ったら、今度から口きかない。口きかなくなったら、アタシ泣いちゃう。

..泣け。それが恋からの卒業だ。

—うあーん、うまい。うまいけど、さみしい。一緒に鍋つつこ、ベストフレンド！

—すまないベストフレンド、彼氏が部屋に来た。

...うあーん、ふられろふられろ、いやごめん、さりげなくふられろ。

...わかった。さりげなくふってやる、—お前をな！..じゃまた！

、、、、、、、、、、、、、、、、、、

窓を開けるらしい音がするのだが、あわてて眼でその場所を追うのだが、

ぴしゃん、と閉まる。子供の頃の黒い門を思い出す。

門限を守らなかったのも、締め出しを食った幼い少女の姿。

—神秘のヴェールの彼方に隠されたまま、闇から闇へ葬り去られた、

私の剥製が、..あるいは化石が、いまこうして幻のphotographyの中で交錯する。

ビューーと吹く北風..学生時代の、思い出のしみ込んだ、シャープペンシルが、

実のにろのろと出かかっているように、毎日のように、暗い空からは、

とめどもなく粉雪が降りつづき、手の代わりに、あああの芯のかわりに、

のろのろと、ややっこしい風や、黒い雲まで出てきて、

それが人々の生活の上に重苦しくおおいかぶさっている。

温室の花なら—スーパーで売られている花なら、

そんなことはないのに、そのつぼみは、ふくらむことを拒んでいる。

クラクションが遠くで聞こえる。誰かの怒号。

じっとしゃがんでいると、影だけ分かれていくような気がする。

「ほら、間違えた..」

(あやとり—でも..しているみたいだ..)

—天上まで巻き上げられる、私は、

雲の上では歩けないよ。無数のまばたきをしている天使のように、

なかなか、勿体ぶって降りてこない。

「ほら、間違えた..」

水車がゆっくりまわっている—何事も..平静で、澱みがなくて、

仕事もないから退屈で、かといって、プライベートの充実をはかるのはもはや不可能で、

やっぱり何事もなかったように川が流れていく。美空ひばりが流れていく。

沁みるあの曲が流れていく。おばさん、おばさん、あの歌好きだわ。

――地平に雲が乱れ飛んでいく。町の音が、遠い。

途切れ途切れに、猫か幼児の泣き声。長い葉を伝って滴り落ちる、雫が、

アップモーションで、ディズニー映画する――盥に溜まる水のような、

私の部屋に、砂や石が増えつづけてゆく。朽ちていく過程を共有する、

仮の砂とまじわりつづけ頭の中いっぱいまでコンクリート…

ねえどうして浮気したの――十二月が終わる

…風の言伝て…

大晦日の夜、日記帳に、彼との思い出を書きつづ――た…

初めてHした日にそういえば、初めてビールを飲んだとか…

掃除機が壊れたので、彼の掃除機を借りたまま使い続けて、新しいのを買って、

返したときには、もういらなくなっていたとか…

「男らしくない！ 贅沢じゃ…雑巾で磨くがよい！」

――ハハ、…よく笑う人だった。

確かに浮気したけれど、それで、子供までつくったけれど、

本当のところはどうだったんだろう。冷静に思った――

廊下で暗い顔をして歩いてるわたし。知らず識らず足を早める、闇。

でもそこから、かぐわしい花を隠す、緑色のカーテンが見えてくる…。

"Good-by, sweetheart!"

「こんなに急ぎ足に町を通り過ぎてゆく。

都会の中で、誰かと出会って、恋に落ちるなんて、

すごいことかも——知れない…

そしてそれが、当たり前のように、今度も、起こるなんて、

すごいことかも——知れない…」

日記の最後の文面を書きながら、わっ、いいの書けた、

わたしポエムガール、天才の薫りがする、と馬鹿言っている内に、

——切っていた携帯電話に、友達からのメールが入ってる。

「あけましておめでとうO(´へ`#=")O」は小柄でナイスボディーのユミからで、

「あけおめo(▽≦o)≡(o≧▽)o」は、長身で二枚目のアキコから。

…大切にしよう。よくはわからないけれど、大切にしよう。

——絨毯を敷いたローテーブルから立ち上がり、ぴしゃっ、と窓のカーテンを開けると、

夜だったけれど——コンビニエンスストアの光が見える…

高層マンション。

携帯で、

「あまりにも寒いので、はやく恋人を作ろうと思います。」

「もちろん二枚目なの。モデルみたいななのよ。それで優しいの。お金持ちなの。」

——そうだ、ハーレクインを読もう…

…本棚からすっと引き出したのは、タイトルから煽情的なねっとり系、

社長がやらしいのだ、秘書といいながら愛人や恋人みたいに扱うのだ。

…いいなあ、——いいな。おい、すげえな、とか言いながらかぶりついて読む。

あさましいほど貪欲な恋のエネルギー。

圧倒的に強い男性像。アメリカ的マッチョを連想させつつ、優しくて、賢くて、

いつも巧い言い返しをする。お金持ちで、高級車で、ヘリ持ってて、

大きな会社を経営してる。そしてたくさんの女遊びをしてる。

でも、そういう男が、「愛してる…。」と言う。

「もう君なしでは生きていけない…。」と言う。

うわー、とか、ぐあー、とか、いう、すさまじいテクニックを駆使して、

ハッピーエンドまで持ち去っていく。

こんな男がいい。こんな男いないかな？ いないだろーな、

でも、こんな男がいい。

読み終わると、ぼろぼろ涙を流してる。好きだなー、アタシ。

ばたんと閉じると、ハートマークの乱れ飛び。

――朝、初詣に出かけると、高級車にうろたえる。

偶然の出会いならぬ無理矢理な展開が欲しく――て…

ヒール折りそうな朝。

昔の言葉って面白くてね、

春日野は、大和国の歌枕なんです…

おっと、カッコつけだったかな、ご存知ですよ、

などと後頭部をポリポリやりつつケロリと笑えば、

甘え上手な僕のこと、

優しいお姉さまに甘えられますー

ここ、喫茶店で、

大学のすぐ近くなんです。

僕、古典の話をしたくて、

大学で古典を教えてる人と、会談。

さっき、

少し案内してもらったんですよ。

すごいですよね。

なにが？…と聞かれるけど、

もう、感嘆符ですよ。ビックリマーク。

色んな人が、色んな勉強をされていて、

すごいなあ、と近頃思います…

大学っていいなあ、

僕もいつかこんな所で学びたいな――

いえいえ、僕などは、不良かヤクザみたいなもので、

文化五流国認定してもらって、

この国を少し、変えてもらいたいです…

でもお姉さま、少しわからないけど、

聞いてもいいですか？…

と聞くのだが、どうも、僕が道行く女性に、

フェロモンを撒き散らしてたのを、

うわーこいつ、と思われる節があったらしく、

いや誤解なんです、

どうしたのどうしたの、この、と――つつく、

つつく、若い男…

恋人なんていませんよ、

女遊びなど滅相もな――い…

学術のため、文化のため、

身を捧げる覚悟で――

などと言っても、おねえさまのしろいめ、

ひじょうにしろいめがあるので、

よし、コホン、咳払いして、話つづけちゃおう…

この、歌は、由緒正しい場所を詠んだ歌で、

確か。天皇に献上せよと命じられて詠んだ歌…

つくづく考えるに、あ、僕の見解ですが、

のどかですよ、

遠くからぼんやり若菜摘みに行くらしい女、

あるいは少女を眺めてる、

遠くから眺めてるのは、ぼんやり症の、

僕がお答えできる、いま、犬のような顔をして、ワン！

目をつむって、きらきらしてるなあ、うわー、

雲キッラーだな、ねむてーな、

と、すっとぼけたことを考えている時です。

え？——僕が、頭脳明晰ですか？…

ちがうちがう、僕はぼんやり症で、

天井を眺めて蜘蛛の巣ないかなあ、

と思っているだけです。

多分これは、あの女、もしくは少女が、

ぶんぶかぶんぶか進んでいきやがるのを、

勇ましいなあ、でもお仕事あるしなあ、

おお、これでよいではないか、

と思った一種の感性爆発、

いわばテキトーの中の靈感といったもので、

僕はどちらかといえば、

この歌を詠んだ彼のコメディアンな表情を、

活写するのが筋と思えるくらいです。

——あ、なんか、おねえさんににらまれてる。

あ、にらまれてるぞ。

えい、コホン、と咳払い。

…そ、それですね、非常にこう、と——

オーバーリアクションな彼、

ひじょうにエレガントな、…いわばシックな、

オーマドモアゼールな歌。

ぽこん。いて。

ぽこんぽこん。いたた。

「—お願いだから真面目に話して、

あなたのジョークだか本気だかわからない話きいてると、

古今和歌集は全部、

コメディーになっちゃうから。」

喫茶店には、明るい曲が流れてる、

コーヒーはおいしいし、

ケーキも頼んだので、やった—と思いながら、

小さくフォークで切って、口に入れていく。

## ひとりだけにんげんのいるくに

---

リサイクル・ショップ

通称マーケット区を通り抜けようとした時

白線にまたがって駐車しているかぶと虫をみつけた

しゅーしゅー、焦燥

[\*\*\*DATA不足 CASE 4 2\*\*\*]

ぶうううん、走馬灯．．．ぶうううん、太陽電池．．．

空まわりしている、うずうずのカラテみたいな足

——ムカデみたいなあし。けれど、ほんとうのところ

空手形をしようとしている自分にきづきながら

ウィンドウを覗き込むと、こしゃくにも、

「とおぶん・ぶそく」の札が貼られ

かれは董の花をしがしが甘噛みにやっていた。

昆虫ゼリーマイナス70パーセント

おそろしい勢いで、ぴーぴー下痢状の鳴き声を発している

または果物のリンゴやバナナ等ほしい

しかし。さっきからかぶと虫のやつ、じろじろと

コチコチになりながら、さながらゴム長をはいた

ドジョウのように、ぼくを見ている

ヤシの木に吊されたテディベアー

と一瞬。なぜか。目が合う。

…………と。そこへ。モンロー・ウォークをする

ショルダーバッグを提げた

すかしたボンキュッポンの猫が通り過ぎる

—右目で ウィンク うっふーん

—左目で ウィンク トランク

「（花粉症か…、ドライアイか、結膜炎か…。）」

と思っていると、チッ、と舌を鳴らし

ぺっ！ おとといきやがれ

マカオ帰りの

ニューハーフ猫だったのかも知れない

テディベアーは笑った

本官も笑う。しかし。気を取り直し、えーと、えーと、

すこし黄ばんだ。しわしわのメモ用紙を

ゴムを引っ張る要領でぐっぐっと両手でのばし、

エマルジョンボールペンのキャップを、ぷつん、とあけると

待 っ て / 待 っ て

エナメル風にてかてかして垢ぬけた、くわがた虫や、

油をさしていた、かみきり虫が

自分にか

それとも自分にか

「とおぶん・たりてる・たりてる」と

電話の音や、オペラ・ハウスの音をまねて、

あわれ黒パンいろのかぶと虫を庇う

お 腹 が 痛 い の で す

しょうがないので。よはくだらけのメモ用紙を

ぴりりっつ、とやぶいて

かぶと虫の前でイエローカードのようにちらつかせ、

道交法の警告をし、しかしすぐに。制服のポケットにしまい、

おっほん。以後気をつけるように、と

南通りの交差点へと歩いてゆく

と。うしろで、ずりずり、と動くような音がきこえ

一瞬。猛烈な罵声がきこえ。すぐ。止んだ。

振り返ると、すみれの花を

くわがた虫と、かみきり虫に袖の下としてわたしていた、

おやゆびとひとさしゆびでつくる

OKサインの要求にこたえていた

天 気 予 報 の 亀 が 裏 返 っ て い た

下駄のつもりなのだろうか。

ーいや、たこ焼きをひっくり返すのに失敗したみたいだ

うらしまたろう歩行者道路、

二色の歩行者用の信号機

とうりゃんせが鳴る 通称あびいろおどのパクリの

パンダロード。

クラクションが鳴るクラクションが鳴る

くらくしょん・べいべえ

くらくしょん・べいべえ

「プロペラァ・プロペラァ」と赤とんぼが

…ペンキ屋ではたらいていて、すっかり、

「むらさき」になって、「赤」をにおわせない

とんぼになっていたが…

自動車のハンドルを握りながらうなっていた

よくみると、信号機に鎖ごとぐるぐる巻きになった犬が

きょうきょう、と咳をして怒鳴るようなリズムで

いような空気をつくりあげていた

すぐに助けた、本官の仕事です

りんご売り / しらゆきひめ

平和もいいね、

公園には煙草のけむりと、アルコールのにおいがして

眠りを軟体動物のように。あるいは開脚のように。

ビリビリほぐしてゆく

泡ノ世界、噴水とかすかなフローラル系の花のよいにおい

そこでぼくはキャンディーを舐め、

自発的清掃員のねこに、配給されたビニール袋をわたし

「いるかはいるか。」

「いららいかいららいか。」

ぼくらはとても仲良しなのだ。——お役御免、

公園の蛇口をひっくり返して上向けて水をごくごくとのみ、

四つん這いになって芝刈りしているカニに汗をおとした

小型のつかいやすそうな、砥石で

みがかれたナイフのような、えんげい道具

「わたしはクマデか・わたしはクマデか」

クマのように芝生でねころがり、

革靴に泥と草のよごれをつけた

新聞や雑誌やこどものおもちゃが転がっていた

ぼくたちの目は点になる

ぽつぽつ、と雨が降り始めて軒下へ移動する

ぽつん、ぽつん、とあかい屋根からおちてくる水滴が

「シャボンふき・しゃぼんふき」

それは、おっぱいみたいにふしぎな光景だった

アイロンされた革靴にあたる、覗き込む

そのたびに、くつの中の爪先を、夢で見たような気分になりながら

ぴくぴく器用に動かした

ミルク・シェイクがのみたくなった。母親に感謝したくなった。

雨は三十分ほどして、きれいな虹にかわる

ふらいぱんの天気が嘘みたいだ

むしがた乗り物、とかかれた看板のところで

監視カメラと。センサーがある。

そこに警察手帳をかざすと。

[\*\*\*認証完了しました\*\*\*]

…まるで億万長者の家みたいだ、高級車があるわけでもない、

ケチなのだ。そこへ店主。五分遅れてやってくるまでに。

さらさらさら。さらさら。さら。

よはくだらけの紙に川音の仔細をかいて、渡した

「御苦労さま・御苦労さま」

と店主のたぬきが、耳まで申し訳なさそうにさげて頭をさげる

おまえの家は迷宮でもあるのか、と恫喝する

きっとぼくのことを安倍晴明（=キツネ）と思っているのだ

あるいは化け猫と思っているんだ

ひええ ぽんぽこ。ぽんぽこ。

——いやな気分になりながら、森の水道、

みょうなつづりのトラン・スレ。いっそトランスにしてしまえという店を過ぎ

川沿いのサイの水浴びにでて、鬼たちが石を積んでいて、

ぼくは銃でぱんぱんと撃つ。鬼は逃げ惑う。死ね死ね死ね

因果応報だ。しかし嫌な気分はおさまらない

犯 罪 者 な ん て い な い か ら だ

…ベンチのまえの自動販売機。ちよりんちよりんちよりん。

レモネードを飲み。かめの橋をわたりながら。

またすこしずつ飲み、古臭い派出所に着く

か め と う さ ぎ は 仲 が よ い

帽子をぬぎ、制服をコート掛けにひっかけると

いち日の事件をしるし始める

スキマだらけの記録にたくさんのモノを詰め込む

レトリックに溺れた詩人みたいに、ブランコがゆれている

ゾウの鼻もぱおおんとゆれている、

また、日常語の羅列でぴのきおのはながのびる

“感動”を忘れたみたいに――

目覚まし時計で目覚めて、

シャワーを浴びて 歯を磨いて、

髪をセットして、さあ服に着替えてネクタイをして

黒 板 消 し で 消 し て 、

チ ョ ー ク で ま た 書 い て

「それがホーリツ・それがドートク」

と壁に掛けられた、とけい型のオオムが

舌を噛み切りそうな職業的早口で啼いている。

「交換手になるか？ それとも、…司会者にでもなるか？」

ドナドナだ。夢は牧場に行くこと、市場にはない

う り と ば さ な い で

シャワーを浴びて、タオルで水気を丁寧にふきとる

すると皮膚がめざめ、乳くびがぼっ起してくる

すると、R指定とかX指定の映画が急にみたくなった

「それがホーリー・それがドートー」

品変え、ことばを変えて、貝採らないで…買い取らないで、だ

そこへ。文句なしにきれいなエプロンがゆれる、奥さんだ

パンティとブラだけつけた牛である

胸に十字を切って、手をあわせ、

ご馳走をいただくつもりだ。甘酸っぱい、だらだらだら、

はあはあ。黄なる液がこぼ れ た

## 遊覧飛行

---

アラスカのデナリは

エベレストよりも

大きな山体と比高を持つ

六一九四米

デナリの麓からの差は

五五〇〇米

眉毛をそった神秘的なマスク

やぎ髭もつららのように

凍っているのか

俗塵にまみれたわが身

神よ、

侵略をふせぐため築いたのか

教えてくれ

…航路を南西にとり

アラスカ山脈の鋭鋒にそって

パイロットを含む七人を乗せた

セスナ機の遊覧飛行

うららかな日射しにさそわれて

鱗のようなさめ肌も露わに

われわれを乗せたバスは

マッチ箱

あれは事務所よ、と妻が

一だめよ、眩暈がしそう

すこしおくれて

溜息がはじける

みな、鳥の鳴き声

山岳氷河

もの憂くただよう

セスナ機のしずかな飛行音

神秘の蓋はこの瞬間

あーっ、と声をあげ

ピシリ！

とつぜんひび割れの音

いびつなうなりをあげた

…厚さおよそ一八メートルで

臨界質量に達し、

氷は水分を含んだ粘土のように

変形し、蠢動する

巨大化した氷塊は地球の引力、

すなわち自重によって押し出され、

緩やかに流れ下る

空にすわれしわが心

「…人よ、死んでよみがえり

その胸に生き続けよ」

ご拝顔を前に

肝を冷やす

全身に幾千もの針を刺されるという

つめたい氷河をあとに

鑪。 身も心も錆びをおとし

観光客のいうマッキンリー山から

デナリという

白き偉大なるものへ

夏。 振り子のように白銀の世界

ラブレター・フロム・アラスカ

妻のかがやくまるい眼

未知との遭遇

ことばにできぬ美の極致を

一瞬にして感じ取った妻でありながら

不安そうに何度も握ろうとする手

か細い声でなき

「あ……、う……、」

と繰返している

おまえの皺のはしった手を

ゆっくりと掩い裹む

気分は怪盗

ウィッカーシャムの壁

さながら天空の城

澄んだ大きなひとみの

お姫様をさらう

かすかな狼狽とはじらいが

わたしの眼というシャッターを

さかんにきらせている

壁の中の書は見えない

雪意を催おしたように

歳月がおおい隠してしまう

宇宙の羊水が液状化した

玉手箱の

紐が見えない

北米の最高峰

迫力ある操縦

スリル満点

アクロバティックにゆく

時は豆粒

山のつづくかぎり

空の涯

## 即興曲

---

よくあんなもの聴くよね 神経疑うね あんなちゃちなやつ

でも気持ちいいよね 他人の神経につれまわされるってのは

ゆかいな この感じは ひかる道

いくつもある山なみを すぴやあああああ スピード

とんでいけるほど爽快 翼がはえないまま とぶことってできるかい？

できなくていい この感じが ぼくは好きさ

筏に乗ったらすぐしずめちゃう でも笑っちゃうね そうだろ？

水より魚より木が好きなんだ この二車線道路

自転車でいくかい それでころぶかい それで空想の夢におちるかい

あんぜんな航海ってなんだい りんりん… また雨さ

えんぴつか ふでか そうでなけりゃ黴か

ともあれぼくはゆくのみ 笛にのって 船のところ へ

きみの気持ちわかるっていったら怒るかい？ 見透かされたかい

しょうがないよ きみは貝のように だまっちゃいられない

真珠があるんだもの 髪どめだもの すずしい雨のにおいをまとった女神

…いやっ、いやっ、いやっ、 キスしちゃいや、 伝染るもの、

そしてバス停 ぼくはこの世ならぬ うるおいあるキス

あまくて やさしくて そしてそしてそして きれいさ きみは

# アーホな演説

---

たかだ一か

一〇〇年だっていーう

ぼ一くら

の人生

ず一と こ一やってきて

いまさ一ら ないものねだり

してどうする？

ほんと ど一する

あめ一ば

とけ て

あめ

は とろ け て――

んと に

はずかし一

んと に

それだけ――

なーに

かたりゃーいいーのー

かったるーい

まちだるい

気象庁がんばってねー

アリの兵隊おくるから

税金はらうからがんばってー

民主党も自民党も

たかだーか

ー〇〇年だっけーう

ぼーくら

の人生 おさーきまっきゅら

ドル相場あがったりー

じゃなかった下がったりーするしー

援助金はらってー

借金大国だしー

まねーげーむついでに

ものまねうまいひとにかんしんするしー

げいにんどんどんいっぱつするしー

あいつはあいつで麻薬でポン

がちゃぽんみたいだしー

はなーびみたーい

って きれーにいけないしー

ぐち こぼしそーだしー

たかだーか

一〇〇年だっっていーう

ぼーくら

の人生 おーくらだいじん

のこと すこーしまえまで

おくらだいじんとおぼえてました

ごめんなさーい

まちごめん

はんせーしません

かいぼーしつのかえーる

してまーす

はらをえぐりー・えぶりでい

はくぶつかんに

しーんかーんせん

かざられーるじだいはもーすぐ

もーすぐ で す

たかだーか

ー〇〇年だっていーう

ぼーくら

の人生 み ん な

きっと死んどローム

だーれのせいでもありーませーん

しいーていやあ

ちり紙のせー

まのびしてーまーす

わーけわからなーい

じだいのせーでーす

めーでーめーでー準備はいいか ？

たかだ一か

一〇〇年だっていーう

ぼーくら

の人生 かえーれません

あんた

かえーる とった くち？

どん な 口？

すぼんだくち の へびしてまーす

あと 一年もつらーい

あと かんがえーるのがつらーい

じんせーってなに？

こーもんみたい

ああ たかだ一か

一〇〇年だっていーう

ぼーくら

の人生――

## 意味のないものにこそ――

---

忘れたところにかがやきだ――す…ダイアモンド――

十年前…へと巡るようにはず――む…

[い たずらな微笑み… ]

時を超えて――風に目が覚めてゆく 未来

[――歩いて ゆく 春の陽射し… ]

苦かっ――た…青かっ――た…

けして見つかることのなかっ――た…

銀河 海 時間。…

星と同じ記憶

魂と同じ顔…

僕は泣く――んだ…それでも強く感じ――る…

プロポ オオオ ション！

[こ の気持ちは消えない―― ]

ダイアモンド――パール…

鼓動…の熱――ずっと傍にいたいから…

燃える――の…欲しいか――ら…

ねえつよ――く抱きしめて欲しいか――ら…

から――だの奥が…震え…るの――…

[きれいな肩… ]

( う つくしい手―― )

つな――ぐということ…

待――つということ…

[ 永 遠にこの胸は満たされてゆくのか…

僕は――知らな…い… ]

( 永 遠は子供の謎のように君をとらえて離さないのか…

…花 のように――咲く…のかも―― )

でも散らな――い…そしてもう壊れな――い…

消えることがな――い…

愛す――るということ…

あなた――ひとりということ…

誰にも見せない心の奥が言って――る…

また会うだろ――う…今度は君にもわかるだろ――う…

何千年もの智慧の終幕…

何十億年もの深い孤独の理由――

( も う僕は知ってい――る…ごめんよ、ごめんよ、

予 想以上に色んな事が長引いてるん――だ… )

夜…理解した――よ…

誰にもわかることができない…だからこそ――

地上においてただひとつ必要なもの…

淋しさが、強がりか、

Like が、Love が…

もっと別のものに触れようとして…あなたの肉体を求める

語り尽くせないほど長い夜…

アメンバーになって、ねえアメンボになって——

[無邪気に問い掛ける——

あなたを選んだ理由…あなたが欲しい理由…

あなたが美しい理由…あなたが僕のすべてである理由…]

強く——幾晩も、あなたの眠りを見守れたら…

希望の光は消えない——だろうか…

愛し続けることに終わりはないと知るだろ——うか…

永遠に透きとおる、流星群、月の浪間に浮かんだ雫…

あなたを知る、ずっと前から、

僕も、ねえ君も——

ダイヤモンド——

求め合う…不思議——口付けをしたくなる…不思議——

すべてを許してしまう…神のような心…

[——あなたの何かが…]

僕をとろとろにする…

息もしないでよいと思えるくら——い…

ねえこの人生を終えても構わないと思えるくら——い…

[——あなたの何かが…

そう…原始的な衝動の何かを——動かしてる… ]

そして…ただ、僕を壊してゆき——

ただ、僕を最初からつくりあげてゆく…

——愛？…それは愛？

だか…ら…愛なの？…

それだけが僕の人生にとって——の…

すべてのわたし——？…

時間 故郷 魂…

いま——あなたを知りた…い…

いま——星を燃やし——て…

四月五日

---

星は

雨雲が空に出ていないのですから

叫びをあげます——…似ていませんか——

見知らぬ砂漠に小さな花が咲いている

のだと思っている——

くらし

生活の中で…

いのちに課せられ

どこまで吹かれてゆけばよいのかしら

自分の役割——

見えないものが 考えながら走っている

さまざまの道具やそのこわれた切れっぱし

星が綺麗だから 風が出ているから——

時間の中で月が小さくなってゆく

……む、む、む、む、むうん……

卵のかけみみたいに うす青く…

その呼吸——その流れによって消えるでしょう…

波が寄せてきたら わたしを さらって行くでしょう…

……む、む、む、む、むうん……

、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、

わたし達は永遠の中から――

時間と空間を与えられました・・

ほらほら 夏の艸のほひに噓せ

ほらまた 土のかをりに七色の花・

――いいえ・・

――いいえ……

――それはきれいな紅色の珊瑚・・

空間の奥で太陽も消えてなくなり――ます・・

定めがたい不安定な虚無の地点・・

説明も不必要な個体 霊長類という個体

神経は一斉に不思議な舞踏をはじめるとその運動をくり返す

――誘惑の色あざやかな陰鬱な死の節奏・・

海は

水を飲むわたしの前の姿です

ふわわあと心を幾通りにもつなぐ・・

――それでも・・

――それでも……

——それはしずかに眼をとじる夢だから..

砂はだんだんと重なり 塵は人の心を持ち始め..

嘘ですか 本当ですか?..

人は泥人形のように 重い身体を持った砂人間のよう——

.....む、む、む、む、むうん.....

わたしは

思い出さなくてはいけない——生まれる以前..

なぜこの世に生れたのかという理由..

「でもそれは..」

とある夜 わたしの口から飛び出す——

でもそれは いま 目の前にある..

わたしは——人びとに逆らいました..

そうして 夜の木枯らし——..

あのきこえる声は何なのだろう と

と めぐり来ない夢のひとつとき——..

酒場も消えて 天国ばかりが熱くなる

理想はお前の涎れがよごした 空はあの日のままに美しく澄んで

澄んで——いるのに..ゴオストタウンに魅入られ...

わたしは 歩く..

どこというあてもなくさまよい歩るき

渡り鳥が暗夜の空を旅するように しづかに 黙る…歩けない――

もう歩きたく――ない…

世界は

常に二つに分かれてゆく――…

一切のいきものを何かにあてはめずにはいられない

みんな忘れてしまったように…

でも一切のことばを何処かへと置かずにはいられないなら

みんな思い出す あのときめき――

おしまいまでわからなかった あの物語の続き――…

――さみしさのなか…

――奴隷のような気持ちの中…

――自由を求める…

そして考えました 自分の名前を丁寧に書くのだ と…

丁寧に明日の切符を手に入れるのだ と…

苦しんでみることだ 本気になってみることだ、

信じてみることだ まちがってみることだ

と そうして丁寧に明日の切符を手に入れよう…

と 思ったんだ.. まだ 俺の眠りは浅い—

—四月五日..

## 残された日々

---

地震と地球のメカニズムの特徴から

ドップラー効果のように――

エネルギー形態への転換に関する電磁気の現象を考えていた

ガスの密度を研究してアルゴンを発見したように――

これが別れなのか――始まりなのかもわからずに

、、、、、、、、、、  
波動方程式と、超伝導性――

電子を分離させその電荷を測定するように、

（科学は新たな一般概念の素材を得、

僕は、自然や自然の中の生息するものの

関係についての新しい概念を、

期待し始めている――)

その両つが、大陸移動する・熱と摩擦が、

ウィルスを殺菌する――動作する物理的システムの容量

自然界のエントロピーの総和は増大し続け

コンピューターを使って複雑な方程式を数値的に求める。

[でも、滑稽ではありませんか？

（服を着たり飯を食べることが理）と人欲が完全に肯定された、都市

そういう因習を断ち切れない人びとが、平和とか、愛だとか言ってる、

天才になりたいとか、馬鹿なことを言って――る…]

――孤独です、孤独な社会に、

先験的方法の誤用を思い起すとき、

すべてがスポイルになるのです。

結果は、見るまでもありません、

過去が、すべて証明しているからです…

――伝承されてきた事項についての知識の不足は、

もっと本能的に考えていかねばいけません…

科学的な見地から否定されるものが、

まだ発見されていないだけで、オカルトだの、

非科学的だのといった輩は――ダーウィンからやり直すか、

あるいは、コペルニクスから…

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
単純な振動や揺れの動きを見ながら、

物理的あるいは化学的变化で次第に破壊される街を思った、

科学者が破壊兵器や、細菌兵器を作ってしまうのは、

そういう振り子が、あるからだろう――潜在的な危険性、

もしかしたら真面目で勤勉な物理学者ほど…

人間の本性の要求を、知るのかも知れない…

――疑うことが必ずしもよいわけではない、

だからといって、疑うな、と言っているのでもない…

わたし達がいま考えなければいけないのは――

運動中の物質や力、衝突、物理的反作用…

物理的な刺激と、その心理学的効果――

爆発とエネルギーの放出！

別の元素、物質または素材で結ばれている！

――そのものまたはその人自身に直接向けられた…

（ガスまたはエネルギーの）放出――…

ベッドはからっぽなのに、

部屋が存在するホテルルーム…

絵画のある、花瓶のある、

絨毯のある――けれど、誰もいないベッドルーム…

（昨日はどこにもありません、

写真も、その時間も…考えも――

仮にあるとして、華やかな記憶と嘘ばかり…)

――そんな夢物語、僕だって欲しくない…

そんなものに祈りたくない、

祈るくらいなら、神がないと言ったほうがいい、

科学だけでいい、宗教はいらない――…

、、、、、、

光速を測定して、



最初の原子爆弾を開発に協力し、

後にすべての核兵器の使用に反対した物理学者のように…

硬さと強さと匂いと弾力——…

複雑な問題についての長い議論——

I Qの低すぎる人びとのさらに始末におえない墮落…

「言葉に対する言葉の考え——

心に対する心の考え——

生きることに對する生きることの考え——…」

(ウラン塩によって放たれた光線が

写真乾板に影響する——… )

それらは、発見および提案そして開発——

デマが、無関係に構築されたと考えているとしたら、

それは誤りだ。インパクトについては、税金も、取り巻きも、

利用も利害関係も一筋の道となる。

芸術や音楽に耽溺するように、

僕は文学や詩が何をもたらすかということ、考える。数秒とかからない。

言えば…殆どのところ、無価値としか思っていない、

芸術の情熱に比べれば安価な商売ほど稼げない、

挙げ句、芸術はコピープリントされる。

音楽は、無料ダウンロードされ、その結果、

アーティストが飯を食えなくなる可能性について言及しない。

文学が、詩が、ネット上にあふれているが、

ただのひとりとして、

「金を払わなければ、そいつは食えない。」

という、発見をしない。

「食えないのは、お前のせいだ」

と、ただのひとりとして、言わない――

時間の無駄だ、俺一人で十分すぎるほど十分、

社会のゴミを見るたび、俺の知能の好奇心が減退する、

お前が辞めてくれれば、俺が楽しく詩を書ける。

ゴミは存在するだけでゴミなんだ・・

新しい発見の物質的、物理的な説明より、

神話的、寓話的な解釈より――

現実的、実際的な問題において、

あまりにも乖離した人々、困ったちゃん達が、

ブランドを振り回したり、

現実的視座を持たない奇行的なそのありさまは、

ギャグにしか思えない――・・

ああ、そして僕は、

深い神秘ないし宗教的感受性を持ちあわせながら、

天文学的複雑な設計の中に信仰の飛躍、

あるいは神の目的の領域、もしくは神の人物造型的モデル、

あるいはその数値、予測、観察可能な無知の介入まで、

——ねえ、それはね、科学物質や物理作用…

いわば、崇りや邪心や悪魔やその儀式——…

人間というその姿や人間の肉体にしてその人間における心が

大きく変化した不気味なもの——

たとえば、運動している物体の経過時間は、

静止している——…

僕は、こういう瞬間、神とおそろしく一致した自分を感じる、

——あるいは神の考えと、重ね合わせられていく自分を感じる…

民衆批判？——違う…神は、お前等が嫌いなんだ…

そして神は、それゆえ、僕のように淘汰についての知識と力を与える、

——リハビリが必要だ、もっと、前進が必要だ、

——あの方はミサイルみたいな人…

（そうさ、マシンガンで撃ちまくれ、

爆弾で木端微塵にしろ！…

お前は死ぬ、死ななくちゃいけない——

仮想の死を踏まえて、新しく生き還る体験を、

何度もしなくちゃいけない——

だらだら生きるな、ブタになっている場合か、

さっさと目覚めろ、一秒いますぐ始めろ)

## 夢の描写

---

(ネット機能を失ったケータイは、すぐに飽きた…)

(ロックがかかっている、メールすらできない、飽きた…)

まるで物語を見ているかのように、詳しく思い出せる、

墓地から追放された鴉——…

細い枝のかたちが特徴的な…湿気からくる、広い門——…

迷路自体は幻にすぎない——言葉を途切れさせながら、曲がりくねった、

丘の上へと続く、くねくねと曲っていた——

…幸か不幸か迷路はその名の通り、迷わせることが目的で、

出られないことを目的としたわけではないからだ——…

ねえ、1985年、ダイナミクスという、物体の運動に関する物理法則。

ああ、あれは象徴的で、開発の波に洗われる前の、いわば、

…部屋が琥珀いろのかがやきに染まり、やがてブロンズになり、

大きな火の玉が沈んで行くように——1985年…

僕は吸い込まれそうになった。亜熱帯のジャングル、地殻の隆起で出来た、断層…

$n=0,1,2,3,4,5,\dots$  背中全体に痛みが走った藪の中、

同時に耳が圧迫された。鼻の奥に水が押し寄せてきた。

もがこうにも手足が反応してくれない。

(宇宙に対する見解、飽きた)

(インフルエンザウイルスの生態、飽きた)

…未熟な絵の具の色なんかじゃあ、わからないさ、

色は無限にある——…生まれては、ほらまた、新しい色が生まれる、

曖昧な色の感覚の中じゃあ、表現の海は、泳ぎきれないぜ——

たとえば、夜のドアを開けよう、すると、夜の虫が、闇夜の中に溢れだす…

赤いテールランプ——

## Blues Brothers

### Opening: I Can't Turn You Loose

…

……

でもわりと、監獄ロックが好き——…

ビートルズのシャウト思い出す…

シャウトの意味はショートの意味があると信じてる、

感電までのショートカット——

わりと、監獄ロックが好き——…

いくつかの自然科学上の神話がガリレオの観測によってくつがえされた

しいては、ガリレオの実験はアリストテレスの物理学にとどめをさしたってこと…

僕も同じ…ものの本質と、それを支配する力——

拡大して、心理学的に締め付けられていない、触れられるような心理学…

知覚されなくとも存在する、詩の×感覚――

《浮体の重心》

宗教的信条とか、民族的闘争とか、

誤解とか、偏見とか――

いまじゃ、白いコンクリートになって、骨になったって

コーヒーにミルクを入れたように、掻き混ぜられたって

…カモン クロールでどこまでもいけたら、もっと心地いい！

――カムオオン！…緑の島！…

しなければいけないことって何さ？

抜く、その物質に固有の重さ――諦めるにはまだ早い、

五寸釘にそっくりな細長いローソクが見える

しなければいけないことって、その下らない描写のことかい？

…大勢の人が行き交っていたから、僕を見失ったのだろう、

人の中にいるってことかい、いないってことかい？

憧れてたんだって？…知らないよ、死ねよ、時間の無駄。

言葉の中にいるってことかい、いないってことかい？

散歩する、ウォーキングする。それで、ビールを飲む

タバコを吸う、働く、あくせくする…それで、人生おしまいかい？

コミュニティを分解したって、しきれないものだし

ねえ、大量生産は大量消費の引金と同時に、価格崩壊の合図となり、

社会を困らせる悪魔の誘いとなる。悪魔は、破産が大好きだ。

引き留められはしなかった。映画館前、デパート前…

駅前—言葉を喋る動物、言葉を歌わせる動物—

誇り高い動物を怒らせて、—

生きていられる動物なんか一人もいない。

しかし考えてみれば、それが俺の不幸の始まりだったのかも知れない、

社会は残酷な仕打ちに慣れきっていたし、おごそかな儀式を求める僕とは、

あまりにも多くのことが、違い過ぎて—た…

実際、出会った人はみんなバスで、ブサイクで、

屑で、あほんだらばっかりだった—詩人のほぼ百パーセントは、

生き方も、考え方も、詩に対する答えの求め方も適当だった…

僕の不幸は、世の中の駄目さ加減を完璧に理解した上で、

その中で、スポイルされることを、了解できない不器用さだ—

そしてそれと同じくらい、ロマンチックということかも知れない…

「ニューオリンズにはずっと憧れてる…

ジャズが、好きだから…」

「一番好きなジャズ—決められないな…」

「だって、君は好きな野球チーム…」

ああ僕はメジャーリーグが大好きでね、

兄と一緒に、メジャーリーグ関連の本を読みあさってたよ。

マイクシュミット、ウィリーメイズ、..

好きだったなーレンタルビデオで、

マイクシュミットがホームランを打ってるシーンを観た時、

すごく感動したんだよ..わかるかなー」

「スポーツで、サッカーやバスケは嫌い。ルールも知らないし、興味もない。

ちんぷんかんぷんだよ。フットボールなんかいまだってわからないよ。

でも、いつかは、ルール覚えようと思って、将来やることのリストに加えてるんだ。」

「本当言うと、クラシックでは、ベートベンより、ショパンが好き。

ショパンと同じくらい肩入れしてるのは、チャイコフスキー。

画家だって、ターナーが一番好きだな。カラバッチオも好きだけどね。

ターナーのあの馬鹿馬鹿しい真面目さって、どうしようもなく、好きだよ..

失礼だけどね、画面見えないくらい、もやもやさせてるのを見た時、

ああこいつヤバイなあって本気で思った。そんなもんだよ。

シュールレアリストだったら、

あの馬鹿..違ったージョアン・ミロね。オレ、あいつに惚れてんだよ。

百科事典の別冊だったかな、

それで目撃して以来だけど、こいつ本当に馬鹿だなあ、宇

宙とエロイムエッサムしてるのかあ、波の音だなあ、

ああ、本当に馬鹿なから騒ぎだなあーいや失礼、でも、すごく感動した。

ー風景画家がその当時は好きだったんだ。テオドール・ルソーの勤勉さ、

ー途さに惚れこんでた。ああいうのはやっぱり、いまでも憧れだよ。

でも、SFが好きだったりしてね、幻想的な画風には惹かれるな…

うん、本当、あんまり、

こいつが好きだなんて言えないんだけど…。」

「兄が好きだったからかはわからないんだけど、ヘビメタ聞いても平気。

ポールといえば、マッカートニー？…なんて言われるけど、

いや、最終的にバンドオブザランでゲームイズオオバァさ、

ポールといえば、もちろん、速弾きの方さ。」

(最近の発達、実験の分かれ道…)

(宗教的、超自然的な説明なしで、科学的に理解できる観測…)

## Blues Brothers

### Opening: I Can't Turn You Loose

…

……

でもわりと、監獄ロックが好き——…

ビートルズのシャウト思い出す…

シャウトの意味はショートの意味があると信じてる、

感電までのショートカット——

わりと、監獄ロックが好き——…

市民プールのエントランスを抜け、生命力、活力、生命の根源、

女たち一でもトランクを担ぐみたいに、ホテルまで誘いたくなる女はいない、

案内板にしたがって更衣室に行く、とある日の夏、 ..

僕は、そういう女たちばかりだったらいいな、と思ってた一一..

特別な場所って、そういう美の意識が洗練して、発達した圏内のことだから..

貴重な生の時間を、

*Closed.....*

(神の存在証明としての物理神学的証明...)

(素粒子論という、物理学上の理論)

痩せてはいるけれど、しっかりした顎の輪郭と、瞳の硬い印象と、

深い優しさを感じさせてくれる、瞼毛..誠実さと威厳が、

一一放っておいても、果物は育つ。水をあんまりやらなくてもいい植物みたいだね。

ギリシアの男が、妻に何も言わせないっていう話みたいだね..

いたわりながら、心を許しながら、幸せな思い出を作る一一..

キックボードに乗るよ、スピードは向上するし、

体力の消耗は少なくなる一一

*Open.....*

「山羊の乳から作ったチーズだろ、

それと地方色豊かな、薫り高いジャムに、パン..

それと、——それと、バニラアイスクリームと、

オレンジジュース…」

「終わっていないさ…遠ざかる岸部——

欲しくないさ…退屈な日常…」

「マリーゴールド、ばら、ゼラニウム、

きょうちくとう、ポインセチア…」

「ねえ、ビールを夏、飲みたくなるのは、

夏の風の匂いが好きだからだろうね——

よく、夢を見るよ…不思議な夢——…

あまりにも謎過ぎて、誰にも喋りたくない——

そしてたまに、思い出して、これはああかな、

これはこういう所からかなと考えてる…

いや、そんなものだよ、僕の詩って——」

彼は、まるで妥協を許さない政治家のように言った。

「こんなノルマもクリアできないでやれると思ってるのかい？」

、、、、、、  
見せしめだ――

機械工の作業台みたいに、ボルトやネジが組み込まれていく。

大きな蜘蛛の巣の中に囚われた、蝶のような気分だった。

掛け時計を見ると、午後六時半を回っている。

重役や社員たちはじっと僕を見ている。そして僕の番が終わった。

声のトーンが落ちる。そこにいる誰もが、氣勢をそがれてゆく。

椅子にしなだれかかるように座っても、背もたれはただ冷たいだけだ。

次は――誰かが、やられる・・

古代の呪怨――

(大きいカニがオスで、お腹の膨らんでいるのがメスです。)

…駐輪場に直行した。屋下がり而降っていた雨は上がっていて、  
アスファルトがきらきらと陽射しを受けて輝いていた。…

――長い飛行機雲が消えかかっている。

雲を見ながら、僕は思った――・・

普通に育った若者にとって、社会で働くということはストレスに満ちている、と自分は思った。ブラック企業は沢山あるし、サービス残業、上下関係や、確執。慣れない仕事。どんな会

社でさえ毎日新しい問題が起き、それに対応せざるを得ないから、一日が終わるとぐったりと  
疲れる。学生時代のようにはいかない。人生経験が浅いうえ、お金を貰い、それで生活する、  
となれば殊更堪えるだろう。食事に洗濯に掃除。羽目を外したくても金がない。そして周囲に  
、友達がいなければ淋しくもなるだろう。両親にべったりだったら、すぐホームシックになる  
。それを弱さとするのには誰にも抵抗がある。また、甘えと、愛情は違う。ただ、慣れていな  
いだけ、ただ、少しくまくいかないだけと思えずに、鬱になる。自分だけだ、と後ろ向きにな  
る。そうなってもやむをえない社会。暗い顔をしてても煙たがられる。

そのうえ給料が少なく、不満を漏らせなければどうか。

社員からアルバイトに降格されればどうか。派遣社員、外国人雇用――

煙探知機よろしく、煙草を吸うと、人が見る

マナーにエチケット

機能回復訓練って知っているか？

プッシュアップ運動をしたり、

座っている状態からよつんばいになったり、

そんなことをえんえん繰り返すんだ――

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
時代は大きく変わってきている。

そのストレスに押しつぶされてしまいそうなのは、まず、若者だ、と自分も思った。もちろ  
ん、高齢者もそうだ。社会の不安は、老後にダイレクトに伝わる。また国は彼等の死を望んで

いる。しかしそれよりも深刻なのは、脂がのりきった四十代、五十代。金食い虫どもを何とかして減らしたい経営者は多いだろう。リストラに、給料カットは避けられない。もし長期休暇でもとれば、長年勤めた彼等に、肩たたきはやって来るだろう。

日本はバブル崩壊後の失われた二十年といわれた後も、景気低迷から浮上できないでいる。二〇〇八年秋のリーマン・ショック後は、さらに厳しい企業社会に変容した。企業は生き残るために、一生面倒を見る必要のある正社員の採用を抑制し、人件費の安い派遣や契約社員などの非正規社員で補うようになった。このような時代の変化に乗じて、人材派遣会社、ネットビジネスが成長してきた。

だが、給料の安い非正規社員が生活設計を立てられないような社会。非正規社員が増えて、新卒の若者が就職先に困るような社会。

このような社会に、若者は将来の希望を見い出せるのだろうか？

資格や肩書が物を言う時代――

それについていけない人を、見て見ぬふりする時代――

ノート――

ノートに挟んでいたカラー下敷きの冷たい硬さ。

「桜、散ってしまったね」

僕は無数の枝を見た。

涙をこらえているのが、声の響きでわかった。

――女性…二十代くらいだろうか…

「――切ないですね…」



出勤恐怖症に、無気力症状――

勸奨退職制度という名のリストラ――

四週五休。あるいは四週六休制。・・職場より家庭にウェートを置きたくなるだろう。公園がサラリーマンのオアシスとなるのをやむをえない。

高級車は買えない。大きな家は買えない――

それは、いつも雇われている側の言葉だ。全員が幸せになるのが目的だったら、こんな差別あるいは区別は生まれない。だから金を稼がなければいけないんだ、そのためにネットビジネスや資格が必要なんだ。お金持ちにならなければいけないんだ。それが社会の常識なんだ。

――色んな人と会って、話を聞いて、それはよくわかった・・

ケチな人も、リッチな人もいる。気前のよい人や、優しい人、嘘つきな人――人はさまざまな顔を見せる。でもそれら全員を、僕は弱い、と思った。だって日本は大都市の勤勉なサラリーマンによって支えられている経済。英会話教室に、海外留学。確かにそれは正しい。でも、根本はそういうことじゃなく、弱いなら強くなるように、合併でも吸収でもいい、それがネガティブな意味じゃなく、もっと、社員の生活を守る意味や、もっと違う意味になっていかないか。時間に追われた生活を改善できないか。もっと自由な仕事を提案できないか。

そこでもっと新しい体制を作っていくことは出来ないか――

青臭いと言われても、次の時代もこれでいいのか、と思う。

会社が駄目だから、転職、あるいは人脈を使って――悪い考えじゃない・・でもまた新しい犠牲者は生まれないか。競争は生物の原理だ、本能的なことだ。でもそれは元々は、自分たちの身を守るために、寄り集まった末に生まれたもののはずだ。

それは社会の間違いだと、時代の間違いだったと思った。

勇気を出して、そう思った。

目先の損得から、明るい未来は生まれない、と思った――

回想をやめ、感傷を胸に仕舞った。思い出さなきゃいけないかは思い出せるのにそこから一歩も進まない昨日。パネルにはめ込まれた各階の表示が横に点灯していくエレベーター。無言で唸りながら悩むこと数分。

――海へ行こう、と思った

無数の消波ブロック、防波堤――きれいな海なんかじゃない

でも、ここに来てよかった、と思った。

時計の秒針が二周するまでに思い出した、

公孫樹の葉が落ちていく秋、雪がひらひらと舞い落ちてくる、冬。

あの頃の自分の気持ちが、あざやかに染み込んでくる。

冷たい風が流れている。来たときは向かい風だったが、今は追い風。

遠くで鳥が鳴いている。夜が始まる――





たまにブローチや指輪をもらいながら（というのが、彼女の唯一の  
自慢といってよい代物だった）、たまに写真を撮り、自動販売機に  
硬貨をいれ、封筒に手紙を入れて郵送するのだと思った。

それは新聞の過剰な広告のある一部分のようにネジがゆるんでいた。

それは終止符とか改行とか言われるものだった。

しかし勘違いしてはいけない、その発信元は、この部屋からである。

この部屋にはいかなる魅力も風貌もない。

それでも初夏の匂いがわたしに奇跡の新薬を求める。

——鈍い金属音が響く、空の階段…  
光のきらめきと終わりになき願望…

何の意味もないって大声で言ったことが君にあるか？

掻き乱される強張った笑顔を僕は見せて、最初から身を捨てている。

葉脈の中を下る認識の闇、モノクロオオムの闇に重さは増しながら、

迷いのない目だ。複眼と単調な諧音…哄笑と喘ぎ…

、、、、、、、、

我は枢の闇を感じ、逝こう永遠の夏——…

化石の曠野、冬の海原の水脈、

マストの皺にはためく真鍮の扉…

もてなし

…葬列、死するもののための饗宴。

きれはし

——果てしなく馨しい夜の、断片…。

（果てしなく遠の-お-イイ-てイイ-く…

——あれは邪悪…

遠く旅だった者らの額縁・・

魚のように、石のように、自由・・

地面を焦がすような音が、一一する、叫ぶ、何処かで、いつか、

こんな風に、やさしい愛情をこめ一一て・・、

脈を打つ草のように、紅潮する頬のように、燃える一一

もてなし

・・・葬列、死するもののための饗宴。

きれはし

一一果てしなく馨しい夜の、断片・・。

大きな雨がポタリ、ポタリと落ちる・・  
風に動く木々、かすかに音をひびかしている鳥や虫・・

庭に子供の声が聞こえてきた。その子が自分を見るなり、さも生涯の

伴侶でも見付けたように、この自転車を貰っていいかしら、と言っ

た。親戚の子供のようだった。女の子だった。彼女はモンゴメリと

言った。くしくも、あの素晴らしい作家と同じ名前だった。

自分は初夏、眼に映る以上に耳鳴りする発作的神経痛のぎいぎい、とい

う音をさせた。それは具体的な商売人の顔を抽象的にさせた。誰かが

壊れないかな、と言った。自分は病弱な犬のようにひそかに怯えた。

モンゴメリはおお！親愛なる地方的魅力を放つ異彩よ、と自分のことを

呼んだ。自分は数少ない状況の変化によって、モンゴメリと同棲した。

相互的作用によって、離別したくない、と思った。

モンゴメリは十になろうとする夏だった。彼女は、自分が三角形のピラミ

ッドのように、夜空の星を結ぶことを発見した。でもそれは既に多くの

天体望遠鏡たちの実体および非実体によって発見されていた。

しかし主人モンゴメリよ、そこは禁断の国である。

なにしろ彼女は男性用の黒の背広を着たくてたまらないボーイッシュな女

の子であり、そばかすだらけであり、幸か不幸か赤毛であり、痩せぽっ

ちである。そして彼女はアイロンのように時たま熱しやすい。

機動戦士ガンダムでいうところのラァ・スンの最期・・

ヨハネス・フェルメール・・

いや、ピーテル・パウル・ルーベンスの、

――シュザンヌ・フルマン・・

笑 顔が歪められた時、

ね えそれを血で汚されてしまった時、

TV版エヴァンゲリオンの流血描写・・

コンセント部やパイプ取り付け部の処理・・

ぶるう..ぶるううう..  
パーキングエリアー

え？ 車上荒らしをしたの？

ショッキングなその一言、違うが、異和う、違和うとなる、

変化が加速する。無色透明のはずの風が色付く。無色が有色に、無形が有形に、

## その一言――

(でも、aさん、床スペースサイズの型紙のことを、

僕は考えていました。)

されたのかも・・・？ 身をまかせている、蒼白い顔・・・

蒼白い腕――周囲の木々に絡み付いてゆく。蛇たちのあまりの数・・・

樹上から舞い落ちる無数の葉。

(aさん、ネズミほどのビーバーって言われた時、

どうしてか、巨大なネズミのことを考えてました。)

空間は確実にさまざまな音を取り入れ、飽和を目指す――  
絶頂や限界は、しかし、飽和のことではない・・・

彼女は学校へと通い始めた。どのような経緯で、彼女が少量の紅茶に、ジン

ジャーをいれはじめたのか説明できないように、諸事実は無言のうちにあ

らわれた。暗黙のうちに我々は了解した。自分は彼女の多彩でない衣服に

、あるいは思い描く夢想ほどには生き活きしていない現実には自分は溜息し

た。いつまでも決着がつかないほど、自明の謎はついてまわった。

陶器のように、自分が壊れる日、終着駅には彼女がいた。

しろいやわらかい手で自分を撫でた。石鹼入れのような香りがした。

自分は道路にいた。彼女はそれによって新しい自転車を手に入れた。

彼女は自分を洗面器に水を張って覗きこんだ時の表情のように見た。

自分は安全ピンで名札をつけられたように非常に満足した。

考えてました・・・

乱雑に載せてあるトランク、

何を？ スペースを・・・？

繰返される忘却と、

繰返される指紋のついた紙――

貼り出されるセンセーショナルな広告と、

貼り出される額縁の中の絵――

そして僕はたっぷりと目を浴びてきた、  
空のふくれあがった末の驟雨、末期的な症状、  
感じてきた――傷付いた旗のように・・

変化する明と暗・・きびしい抽象に耐え――

静止した速度、たたみ掛ける重さが――柔らかな乳母車に思えだす・・

雲と泥の差に思えだす――ゆるやかな ゼロ・・

吃りがちな ゼロ――

中心に閉じこめられた原初の音に耳をすま――して ゼロ・・

あんたの煩惱って楽しいじゃん。てへ☆

メインディッシュよりもデザートな

(四つのフォームが出現する画面…)

ハリソンフォードがハーブティーを飲んでいた春

レオナルドディカプリオがバンジージャンプしていた夏

ブラットピットがピザーを宅配してくれる秋

冬はまだ少し考え中…

腐女子はそれらをすべて童貞同士の愛の営みと記す

ボーイズラブとする

いやいやサクランボの営みと記す

いやいやーファンキーモンキー

いたずらなあたしはレイディーと自虐る

いやいやナルシスも三島由紀生のトンデモ小説も

いわゆる一つの世界平和と記す――…

彼女たちは不感症である自分を興奮させたいがために

「アチチ！」なキスを男性同士に要求する…

(これらの用法は、レズ同士の禁じられた遊び、

天国への階段にも見られ、実はジョンレノも、オノヨーも、

大体そのよーな感じ。)

愛ってあまりにも複雑なので殿堂入りの複雑骨折を要求する、

男同士がちょめちょめしあうことをラヴとするなら、

女同士のそれもラヴ、

しかしそれを求めているのは大抵オタクであり、腐女子であり、

実はナチス…しかし実はこのナチってるむちむちな感じから、

秘密結社イルミナーもしくは海外だからいいじゃん

カリビアンコミオなどを出現させているラヴー

ここからわかるように文化五流国というのは

いかれた愛の稲妻を求めており、はい。

よくわからないけど、はい、と言っておけばそれでいいのよ。

はい、それで大体事足りるエイズ王国。

ワクチンはあるか？ いいえ、ワクチンは麻薬です、

とでも言うておけば、どうせ京都の市役所に生えてるんでしょ、

あるいはロックスターの夢、もしくはアメリカンドリームに、

むらむらむらがってるんでしょ？…アウチー

ああ、フロイトの口吻要求なんて楽しいシーモじゃん！ うほっ☆

いま俺たち、マリオカートにあわせて身体を左右にうごかしていく

(八つつのフォームが出現する画面…)

ハリソンフォードがハーブティーを飲んでいた春は

かもめ7440がお尻に薔薇を挿している春

レオナルドディカプリオがバンジージャンプしていた夏は

性同一性障害者たちがそれぞれの自由のためのセクスをする夏

ブラットピットがピザーを宅配してくれる秋は

国会議事堂をピンク色にペイントする秋

冬はまだ少し考え中…だったけど――

もうどうでもいいやフリーメイソンの陰謀！…

時代は変わって宇宙人が次々とやあやあする銀魂な舞台設定

てんやわんやな江戸二刀流たちの夜遊び！…

もちろんそんな時でも僕の大好きなアベサダは永遠だと思うけど

また違うアベサダが現れると思うな――…

壊れていく時代に一体何の良心があらう

上司が部下を酒に誘っても「いや用事があるんですみません」と、

普通に断る、酒飲まぬ車もいらぬ電車快適な我々の時代に

ツイッターで自尊心肥大させ、

有名人にフォローされると自慢する始末に負えない察して下さいな人に

あるいは手遅れな神風に…

で、あと、なに書いたらドレミファの詩になるんだっけ？

音楽の歌詞？ で、権威づけ？ それとも、誰かのパクリ？

それとも陥り易い老人症候群はやく死ねよ！

腐女子はそれらをすべてかもめ7440の困った性癖と記す

アヴだけどイヤンとする

いやいや桑田圭祐のアーンと記す

いやいや——真夜中の修羅場と記す

いたずらなあたしはゲイネスを求めと書く人を軽蔑する

いやいや尺八も三味線もたぶんそれらそのよ—な意味

いわゆる一つの宇宙平和と記す——…

## この詩自体が水俣病です

---

水俣市立水俣病資料館とか言う所があるとです

頭ん毛のうずくことに

きれいな何となく逆らえない気がずっと

し ことわり

確かつ謝罪もきらんとかい

シカツコトワリモキラントカイ

…頭ン中でぐるぐる回ろうもん住所を頭の中で念仏唱えて、

香典たくさん貰ろうた。

メチル水銀、[水俣工場が触媒として使用した

無機水銀の副生成物である…メチル水銀]

チャントキビットカントハズルルバイ

——停車場、すててーしょん

神変助かったな、何でンかんでンよかばい

…（ああ、ぼく、い世界と話してるみたいだ、

い世界はもちろん、イ世界ではありません。）

あまりああしないほうがこうしろのためである

時間が逆回しになったみたいに赤ん坊の頃に、ひともどきして

いわゆる、い・わ・ゆ・る（ところで余談であるが、

僕は戻って、色んな声の出所を思う…呪力！魅力！

「あんやつ、最近しこっとんね！」

(気取ってる！か・熊本弁では)

ドキッとする・読み辛い、難毒

ましてや数分間で全てを思い出すことは全く不可能だった

え？ ドウモ〜〜〜ッ！パチパチ

大阪には、馬鹿な詩人もいるのですよ、この場合み・づたまもように

な・つぱしてしまう「水俣病なのですよ

僕の場合、オナっとんね！マイセルフをハイレベルにディスプレイ

(気取ってる！か・かもめ弁では)

パンツくってます。不必要で無意味で役に立たなくて

毒古、ぼく、好きですよ (誤字 あ、舌だった)

わざとdろ dとしたらなんy

小熊さんだって、川崎さんだって、好きですよ

その場合 パンつくってます天網恢々疎にして漏らさずと雖も、

――資料館と聞くと、原爆資料館を考えるしかないのであった！

これはもうまぎれもなく絶対的にそうとしか思わないことなのであった！

“広島”は不思議な恐山的ふいーると、です

イージーリーディング・アンドナイスコミュニケーション

はだしのゲンを小学校時代キュートでハッピーにつまり、

なんて言うんですかね、んー、(くちびるをすぼめて、うめぼし

をしゃぶって、つーんとわさびはなをぬけるのとはちがう、)

読んでいたはずであろう僕には「インスパイア」と「パクリ」の

協会(x)が急浮上しカルマとパナマの違いがわからなくなってしまい

失語症か！と疑われ緊急入院結核により核兵器灯火(x)してしまい

中二(禁止デスx)校の、それからさらに弟と突撃隊カモミールに広島へ

行った歴史が…(歴史、)か…

うわあ沁みる死歴カルマカルマパナマがなる！どなる！オナる

小説“ミスタアパイアップル”を書かせ、入水自殺したくなる太宰は嫌いだって

そう言っておけば文学青年以外の奴に好かれるかな、ははは手書きモード

平和への気持ち、屈折し～手書きモード～て て て て

鬱屈している～手書きモード ～僕(注、傍点)の人生に、

愛の影を落とすのですよ…唇を噛みしめ、言った

…噛み締めて喋るの？ 腹話術？

八釜」しい」 非道」い」

——(どうして、利益優先なんでしょう…)

父親の、お兄さんが1000円を超える水を、および？等について

何ケースも送ってきて、詩を書いています

また、このようなぶんしょうをかくひとはたいてい、

…健康に気をつけろよ

てん かつこ てん かつこ

話が変わるけれど大神神社の水一大きな鳥居をくぐってね、

ブンショウヲ ツカウノハ

直進すると、駐車場があるんです。そこで駐車、このように書くのは。

これは取り上げます、

もう一つもじにんしきがあまく

トイシ (x) してください、ジエ (x) 一スあっちにあります

この誤解を避けるため、意味が、読者のようになって、

それで徒歩、ググッと、左折、右折、そしたら池があるんです、

いけ

海があるんです、

ここらへん神社だらけなんです、伝統の信仰に打たれます、

夜…ここへ来るとね、うわあっと真っ暗でしてね

ああ…あ！あ…あああああ…あ…っあ………！

すいこまれーるーあーるーなんといーう

…いや。ゆふお。出そう。なん。です、六甲。山。に。着。陸基。地はあるか！

知らねえよ馬。鹿野郎！はんぱねえ！ムーの読み過ぎ！新聞の文字切り抜きすぎ

どういう批判？まさか！…まさかって何…い、いんもう説…

おそるべきかもめーるの罨

狭井神社、ここの水、有名なんですよ

…（味、わからないけど、）「というか、おまえ、何の話してるべや」

いわば、歩いて疲れりゃ何でも美味しいの論理！

きゃちちふれれーず

水って、いのちを育てているんですよね、

よかったな、

ですよね、

三島由紀生さんの金閣寺でね、

川の描写があって、僕、すごく好きなんです

よかったな、（幽霊？）

文学って何だろう芥川龍之介が好き・・ロボシト

・・流れてます、流れるでしょう、わしら（憑依現象？）の水、

おいどん、水や海の気持ち、雨の気持ち、雲の気持ち、

空気の気持ち、風の気持ち、わかるんです――

よ か つ た な

魚が浮かび上がった、ネコの狂死

これ、水俣病の初期段階なんだけど、実は

読解力が低いんじゃと逆襲されることもあるからちょっと注意

地震の前に鳥が集団で、船の鼠が集団で・・

文章、下手（経た

“趣旨”や《主旨》や『論旨』

タイ、エビ、イワシ、タコが水俣湾で獲れなくなった

やだ、やだ、やあーだあー！ やーまーだー

どうしてだろう、水が汚れたからですよねサトーのきりもち

あるいは、死んじゃったのかな、不条理劇的説明ですけど…

どんどんどん、垂れ流した廃液、

無処理で垂れ流した廃液、みなまたびょう、は、

水俣病、と違いますここはイ世界8762827128190星

両親がドイツ製であることは大変遺憾に思います

化成品メーカーであるチッソが海に流した廃液により

引き起こされた公害病である

ちゃんときびっとかんと外るるばい

タガがな

脂肪死亡志望

死詩イ世界死芒

## 道案内

---

おいこら道案内したるからついて来ンかい早よせえや

日ィ暮れてまうがなマジで疲れるやろ早ヨ歩け

とろとろすんな

おまえがな！女途端に超早口

大体うちは疲れとるんやお前ごちゃごちゃヌカすな

どんだけ空気読めへんねんだからお前はモテへんのや

ナルシストかお前は気持ち悪い顔しやがって

鏡見て笑うな

大体カメラでお前なんか撮らんわ

気持ち悪いことヌカすなや！はっ！

笑わせんなうちらは全員お前のこと嫌いやで

何泣いてんのさっきまでの威勢どうしたんや

おまえ本当は臆病やったんか！

さっきまでの饒舌もういっぺん言うてみいや！

アンタのおかんやおとんに言いつけたるか

このドラ！ドラってなんやってアホか

頭悪いんと違うか髪ィ長ごウしとるから

栄養とられてもうたんと違うか

おら道案内早ヨせえや真っ直ぐか曲がるんか

立ち止まんなや蹴るで！

いいからさっさ行け！

## 散歩ロマンチカ

---

夜は砂 どんな悲しみを 引き起こすことにも 意図はない

くもの網のように 隙間にこもらせる 心臓の音 硝子を押し上げた

灰白色の化粧煉瓦！ …いつでも ハートに 積み上げている

魅せられている——ピン送り

「なんだって」／「じゃあさ…」

ねえ、そんな台詞の何処が重要だって言うんだい！

最近…細菌が繁殖してる。

——「ジガ・ヴェルトフだったらこんな日常をどうするかな…？」

…問うていたのだろうか、明るい空を背景にして、

僕は小さく撮られる…絞りは空に合い、僕は黒くなる！

…小さい窓は外部から覗き込まれている

…小さい窓は外部から覗きこまれている

…小さい窓は

…ちょっと前までなら、赤文字という美しい衣装で、蛇の狂死してた

建物の重みさえ ——ウォーム・アイ

象牙色の午後 すべての建物の壁は 網目に見えた

ア・ラ・モード 学生の生態

「濡れたシャツを乾かす間にノート取る」／「人形が遊禽類になる瞬間！」

ねえ、そんな台詞の何処が重要だって言うんだい！

最近…ぺちゃくちゃ話してる中学生たちを見るよ…

…「衝動的で！不規則で！不合理な——

僕等のinspirationよ！ 海が干上がる」

ざくろ ざくろ ざくろ

どす黒い空気と 鱗のような皮膚と エナメルの靴で

…「踊り子は噴水してる！噴水は蝶の花粉の如き！噴水は噴水してる——

僕等のinspirationよ！ 海が干上がる」

すすめ 覆される 引っくり返される前に

とまれ 亀がサイコロになる前に 多面体が立体鏡になる

…ちょっと前までなら、

——「何処が始まりで、何処が終り…」

…ちょっと前までなら、

こらえていた息を俄かに強く外方へと押し出したらと思う。

むせるような若葉の匂いよ、永遠となれ。

そうしたらランプがとまる！とまる！…ともるさ、

終ることもなく繰り返される叙景。夕方の景色に街燈で止まる。

すると、つい太陽の位置知りたくなるのさ。山際へ目を向けるのさ。

赤文字という美しい衣装で、蛇の狂死してた…と一一思う…

おそろしくスローモーションに

明暗の鋭い切れ方

…ふつと切れて巻き返す夜の部屋に

僕の視力が戻る

遠慮なく/思う存分

、、、  
存在の意味、..動きの再現

—君が僕のレンズに映った

蛇口がひらく—気泡

泡（は、）すぐいつぱいになる..

息のしづらい視感度

明るく/あらはに

いま 愛を語っていた—波間に上衣をぬぎ捨てた月の光

…pianoは鳴った

—「鳴らさないで、鳴らさないで..」

止めないで…この一音の連なりが渦を捲く

不安にさせる甲高い音が鳴り響いて夜に呑み込まれていった

メロディー（は、）いずれ発展し、音階を変える

悲しいほどに、切ないほどに…胸を乱し て

おそろしくスローモーションに

君の笑い声、泣き声、やり場のない怒り…

「大丈夫、」——何が大丈夫なの？

大丈夫…傷付いてない——まだ…傷つけてない

それは夜だった…誰も知らない夜のことだった

霏がかった その声は…「何処へ行くのだろうか？」

——僕は知らなかつた

僕はいつか世界が滅びてしまうように思っていたし

人は理性よりも本能を尊重すると思っていたし

まして…夜ともなれば…

人は人の心の中に匿れてゆく——

——おそろしくスローモーションに

目を瞑る…まだ消えていない器がある…

僕等は何処へ行くのだろう…愛を信じられない人達は

欲望を いまも うまく…信じられない 人達は

一一瞳の奥に シャボン玉が見える

、、、、、、、、、、

君にも見えるだろうか こはれやすい命の繊細が

ソファ へ ダイビング

ソファ へ ダイビング

Touch typing 法律 契約書 協定

Touch typing 通告された終わりのない B L U E S

…もういいや いや

…いいってこと いいや

イメロ・ヴヴァリ・シェンホア

水牛神話

…からだか熱い

パスワード

それでタベさらに——暗証番号 を

……………変えてみた それで！ もう

## 巣【ネスト】

ソファ へ ダイビング *part 1*が終わった

ソファ へ ダイビング *part 2*が終わった

ダイアル

Touch typing ディスコ・コンビナトーレ／盤面

Touch typing 再起動する

## 巢【ネスト】

Next weak 音楽がある、ヴェルヴェットアンダーグラウンドが聴ける

Next weak 共和国がある、旗の色はソレイユ・オセアーノ・・・アルマース

・・・でも もういいや 情いし

・・・そう もういいや 面倒臭いし

ファイシネーション・ピープルの時代は終わった

・・・People どんなフューチャとドライブ

こんなかったるい時代に――それでも まだ続けている

…………アトラクティブ・ピープル

## 巢【ネスト】

俺は言った―俺は言った―俺は言った

この時代は真っ逆さま―もうROCKは必要ない―必要ない―必要ない

ポーズのROCKなら知りたくない―知りたくない―知りたくない

・・・ポーズの包茎臭いROCKも嫌だ―嫌だ―嫌だ

巢【ネスト】に屈んだ

無意味かも知れない—無意味だろう—無意味のはずなんだ

でも—から教えてよドアノブを回すから.....ドアノブを.....

## 宇宙人

---

エイリアン・アブダクション

血。洗脳実験。記憶は感覚記憶、短期記憶、長期記憶

そのより深い、より確実な性能の

触手。空気ノ家。捕虜。電気椅子ノヨウナモノニ坐ラサレ

無心ノ石

……………。

ぴっくりするとともに激しい怒りが湧いて来た。

少くとも何らかの事件に巻き込まれていることは確かだった、

事件が公けになったら、法廷で証人になる覚悟はこの時に出来た。

ビイイイイ！　ぷつん、と（暗い部屋に音が響いた、）

目の前にスクリーンがあったのだ。距離にして3、4メートルだろうか、

悪魔が囁ク。しかし顔は映らず、首から下、おそらく机に座っている状態の、

シュールな映像だけが流れた。おそらく、痩せている。…

「〇月〇日ニツイテ語レ」

声は愉快犯がそうするように、いかなる特徴もつかませず、

あるのは機械的なねじれだけだ。

しかしその声がこの部屋の何処かに内蔵されているスピーカーから

響いたと同時に、ビクン

微弱な電気が身体中を流れた。

やめて下さい、頭が痛い。・・痛いです。

コイツヲ知ッテイルカ

見ない。・・見ずに答える

そんな顔見たことない。

し  
識らない。「コイツ記憶ヲケサレテイルナ」

え。とぼけても、譲らない。こんなの犯罪だ、ナチスだ、

ハッキリコタエロ！

恫喝。コノ理由ハマダ自分デモハツキリワカラナイガ、

.....。

イイカイ？ 主ノ大イナル御名ノ讚美サレ、

トカ、戦争ノ放棄戦力ノ不保持交戦権ノ否認、今日ヨリ危急ナルハ今コノ時

平和ナ時代ノコトハ忘レタマエ

極めて苛酷な取調が暗示されていた

直線的カツ規則的ナ

.....。

世界五分前仮説とは、

「世界は実は5分前に始まったのかもしれない」という仮説のこと。

ミタ？ 生命体――

「機械」だった「金属」だった「無機」だった

ショウジキに言ワナイト

アアアアアア！

イウカ？ 言うコトガキケナイカ

……………。

小人でした、小学生くらいでした。…

巨大な頭部でした。

小型の爆弾を積んでいるようでした。

ソレハ背丈ニスルトドレクライダ。

(どれほどの熱が、この身体中に滾っただろう、)

80センチから100センチくらいだと思います。

しかしすると、「オカシイナ、齒ギレガヨスギル、嘘ハイラナイ」

迫力をつけて高く速く。…ぞおっと、した

本当ノコトヲキイテイルモット痛メツケテヤロウカ

やめてください。…や。

AAAAA！

強情ナ奴ダナ、聞カレタコトニ素直ニ答エロ

嘘発見器でもあるのかも知れない

デナケレバ、コウダ

アアアアアア！

イウカ？

言います。言いますか…、らー、

ヒト型でした。僕と殆ど同じ、生身の、…ハアハア

はぁ…痛い、一一眠たい、飯も食ってない

(電流が流されるたび、静電気のように身体中のまわりが、

光った。ホタルイカかと思った。ぎしぎしと荒屋のように突風で軋んだ

骨が。頭蓋骨が。)

……………

喋ッたら喰ワセテヤル好キナダケナ。

エイリアン・アブダクション。

誘拐サレタ場所ヲ覚エテイルカ

…確か、雑踏を歩いていました

映画ノヨウニ何ノ関係モナイ人バカリノコトカ？

はい。

デパートがありました。太陽の…太陽と一一

街路樹と…街路樹の一一車でした、日傘でした、

そして、人の…人がいっぱいでした一一

一応断ッテオクガ、オマエノ、ソノ日ノ

Schedule

コレダ。画面にぬうつとうつしだされる、絶望ノヨウニ

腿ノ上ニ蟻ガ攀ジ登ッテクルヨウダ

書物ハ重タイ。(ソレハ何月何日ノ場合ダツタンデスカ。)

オマエノ一日ハ把握サレテル

我々ハ出来ルダケ手荒ナ真似ヲシタクナイ

……………。

そこから南へ歩きました、歩道橋をのぼりました。…

オカシイナ、何時クライダ？

(僕は心臓まで鷲掴みにされたようになりながら、)

陽がもうとっぴりと落ちていました。五時か六時だったと思います。

それで路地裏に入って、急に空が暗くなったように、

足下が見えなくなりました。

頭上ニ何がミエタ？

見えませんでした。次の記憶…目覚めたら、

ここに連れて来られていました。

質問ヲ変エヨウ、ソノ黒イ影ハナゼオマエノ所ニキタ。

わかりません。(些細ナカノ消費ヲカンズル。)

二、三度、水ヲクグリタイラシイナ

知りません！ ホントウですホントウですホントウです

ウルサイ

アァァァァ！

はぁ、…ああ、頭が痛い、…割れるように痛い、

やめて下さい。もうやめて下さい！

(たぶん鳥にでもいうように、そらとぼけた口調で、)

シャベルカ？

しゃべりますから。…

「彼等ハ何ヲ聞イテキタ。ホワイトハウスノコトカ。

国会議事堂ノコトカ。環境問題カ。ソレトモ戦争ノコトカ。」

いえ、とてもくだらないことを聞かれました。

キカレタ？

はい、好きな動物は何か、と。

(一瞬、ひやひやした。しかし…、本当にそう聞かれたのだ。)

何ト答エタ。

犬ガトリタテテ好キデス、ト答エマシタ。

「没」を「沒」へ

(最高の詩のような気さえして来た。…いつのまにか、

洗脳されてる—一言葉が、彼等のようにカタカナになっていく、

鋭く、…火花を散らしたように、僕が壊れてゆく。)

ソレハナンデスカ。

え？ …自分の顔が画面に映し出された。

おそらく、先程、流された映像なのだろう。—

おそらく、先程。…

ええと、あのお、僕です。—僕の顔です。

何を訊いているんだと思いながらも、嫌な予感がして、

舌を噛みそうになる。というか、噛んだ。

おそらく、先程。…

チガウ、…コノ人ハ昨日、別ノ所デ死体トナッテ見ツカッタ。

は？（ごくり、と咽喉が鳴った。）

オマエハ誰ダ。

〇〇です。（狐に化かされたような気持ちになりながら、

そう言うしかなかった。）——僕は〇〇です！

イヤオマエハソイツジャナイ。

いえ、僕です！ 僕です、〇〇です！

（先ほどから、震えが止まらない、足もとがガクガクして、

小便がちょろ、ちょろ、と出てパンツが湿っていくのがわかる。）

速ヤカニ誠懇ナル敬弔ノ忱ヲ表ス。

バツ、と次の瞬間、…僕の顔——たぶん、僕の死顔が画面上に出た。

ですから、と言いたかった、しかし、けれども、それでも、

言葉が続かない（二の句が継げない、）

……………。

僕は、それでは、誰なんですか？

追ッテ連絡スル待機サレタシ

待てよオオオオオ！

(オオオン、と残響が耳に残った。)

そして。

しいん、としていた。(ここはおそらく、地下室だ――)

しかし、眼はくりぬかれたように影しか映らない。

それでも、落下の力は感じられた。僕と…僕のその死顔と、

口の銃と、それと、…無力な国民としての自覚と

それと、許可の下りないためにある拘束状態と、…軟禁！

やわらかくきんじる、とかく。

ハハ、――ハハ、とその部屋に入ってから

僕は初めて笑った。

そして次の瞬間、落下が激しくなった。

混凝土の床へと落ちた。頭痛がした。

(壁から、それは聞こえてくるのだ、

壁から湧水があるのだ！)

僕は…何故ここにいるのだろうか？

ぷるっ、ぷるっ、ぷるっ。…着信のように、僕は揺れる

地下室のダンサーだ、ストリートキングだ

小便の嫌な臭いしか、もう、しない――その時、感情と膀胱が、

ひとしく絡み付いていることを僕は初めて知ったのだ。



## 公衆電話

路地の鉢植えに植えられた花。  
山羊のような街路樹。  
ミラージュ。・・・公衆電話。  
あの巻き髪をいじりながら、  
夜道を歩く蠟人形を見ながら・・・。  
コインをいれる、貯金箱みたいに、  
しずかに、おそるおそる動く指。

## 道路

下敷きになった男。轢かれた男。  
引き摺られてゆく音。  
踏切の音。レールが軋む音。  
聞き耳たてる深夜の狂気。

## Commercial

横切る。  
降りる。  
街の遊歩道。  
息を吸う。異性。視点。  
見晴らしのいい坂道。  
ヨット。遠近。ゆれる。  
石畳。  
轍。  
一芝生。墓地。  
小麦の香り。  
砂煙。  
海がある。  
開けはなたれた窓。  
黙る。黙らない。  
樹木の影。  
影がのびる。  
朝。昼。夜。  
朝。珈琲を飲む。  
汐のかおり。  
とうめいな粋。  
自由で臆病なツバメ。

フレーム。シャッター。  
カッター。カッター。  
顔をあげる。  
まぶしい日盛り。  
まぶしすぎる汗。

檻

岩間

中心にまで蹲っている。  
腰紐が緩んでいる。  
熱風が吹いた。昆虫が繁殖、  
植物が繁茂、人類は繁盛。  
男はヌルヌルしている。  
ヌメヌメした回想に耽っている。

教会

不意に開かれた扉に深い睡りがある。  
スタンドグラス。マリア像。  
敬虔な牧師。  
のみきれないほどの白靄。  
乳ぶさ。  
恍惚。葛藤。併し又、恍惚。  
神。主。種・種・種

女の部屋

「誰が轢かれたの？」

懐かしい痛みが

神経を逆撫でにする

冬枯れは切ないとか気障に言うつもりで

もっとウブだ、青い風が膨らんでゆく

晴れてカラリとした蒼空に

チョコレート色きょういの柩衣

夕闇が迫ったかのように大火事！青白い月！

蠟燭が吹き消える！と…

心の奥底から湧き上がってくるひとつの感情

遠ざかる 荘厳な太陽 マリンブルー[海の色] は

…秋から冬にかけて落ち葉が頻りに舞う

———ぼくの心…

自然のなりゆきに

もう任せること！

i r i s

長い花の茎が、柔弱で、恋のメッセージ

照り付ける陽射しの中で光を遮る

暗紫色。 ——無条件にともる

寒冷紗のような雲がちぎれ

———夏の日…

砂に書いた思い出がさざ波にけされ

午後は古い油絵のように無情に埃まみれ

だからいっぱい泣いておくんだよ、悲しい過去をね

現実を！ 受け止めるんだ 得体の知れない不気味な

あの感情…忌み嫌う——

僕等が理解できない…あの感情——あの感情を

無色映画みたいに、…柳に風

溺れる者の藁つかみ！

I R I Sが教えてくれる

I R I Sが教えてくれる

僕の天使がいる場所、

——始まりの場所

いつかは錆びてしまう、

閉じてしまう

——門が見えてくる…

でもそれはきっと！

記憶の混乱

でもかぎりなく弱い外皮のなかには

心の透明さが残っている

そして意味が残っている

意味が残っている…

——コタエラレナイノサ

小鳥が啄ばむみたいに、ささやく

ブラインドタッチで

———花卉が散る…

硝子の破片のように散る！

儂いほど に

ブリキの玩具の幼灯機

キーでありパーツの花

…たとえば、耳鳴りのようなざわめき

…さよならできない、光彩

…四次元時空のなかに縮小された六次元連動体

( 触れ合えば、記憶よ…

と、螺旋の近くを横切る破線の少女――

――子供がふたり…

三輪車で走り回っている

幼ない時のぼくなのか、

それとも性的なイメージを

スキミングしてるの？

でも、…わかってる、

君の長い睫毛がカールして

鼻はふっくらとした弓型で

微笑んでいる天使

――時が隠れる ほのおのはやさ

( 触れ合えば、記憶よ…

と、螺旋の近くを横切る破線の少女――

…傍にいたことを覚えて、

どれくらい経ただろう、季節が変わり、

歳月はいたずらに過ぎ、――そして

空想の終わりは風船に針で穴をあけるように

…いつも終わりを用意していた

――何故なんだろう…

見上げると空は蒼く

そしてそれを二人で見る、その気持ちは

どうして切ないほど柔らかいんだろう

あなたが教えてくれた

花の名、… I R I S

君の名、… I R I S

ゆめのようなそのせかいで

きみのかおにちかづくと

――あさ、きみのにおいがへやをうずめる

エイがいる

ヒラメがいる

マンボウがいる

――ぶくぶく、

と音の聞こえない

魚たちがいる

水族館・・

あるいは

巨大な水槽

・・サメが停止する

・・・イカが停止する

（膝を枕にしている。）

――だから、

・・・だから、

《この獰猛を森にしている、》

王宮、芳香のうね織り

高級――盲腸・・

マメ電球でも入っているような

キンメダイー――緋色・・

ズワイガニ（いる、）

タラバガニ（いる、）

ワタリガニ（いる、）

…伊勢海老も—

好評-凶報

そうともさ、脱皮を繰り返して

姿を変えていく、

大きくなる甲羅を持つ生き物のように、

極めて面倒なことにな、

な（の、）跡が聞こえた

な（が、）続かない…

再開する、栄養過剰

あのふやふやなものが停止する、

いまひとつよくわからない

シタビラメの動き

でも写真とは本来そういうものだ、

でもその写真は

—本当に、僕の脳内にしかない、

あ、シャコ！

ヒトデが、ゆらゆら

くらげが、ふわふわ

…この水族館は、

何にも疲れていない、

潰れることがない、

非常に慎重な正確さをもって

それはサザエの高値とは違う、

いいかいサバ読むのとは違う、

……ああ、師走のサヨリ、

透きとおるシルバークリーン

この水槽の中は

時間が止まっている

一切の機械音がきこえず、

一切の物音がしない

…まるで深海のように

冷凍されたのと生ものとの違いも

——これは身体に起きたこの変化

まったくわからない

わからないシラウオの半透明

これらの症状は消え初め、

何の血管もない

それについての記載もない

所変われば品変わる

シーラカンスも

ダイオウイカもいる、

アレルギー氏のふしぎな水槽

ああ、かまぼこなタチウオ氏

それとも貪欲なタラ氏？..

ちくちくとした痛みを感じたが、

そのものに対する感受性はない

あるのは百万匹の一匹の

生き残りという自負

いましずかに感じる誇り

いま非常な速力で泳ぎ始めた

人間種のおおくは、

ちりめんじゃこのように、

プランクトンのように、

最小の悪影響も見られなかった。

それはただ、

他の魚への配慮を断った

ナマコ氏になること..

ああ君もそう思うか？ 僕もそう思う、

何の変化も見られなかった。

数週間後も、数か月後も、

彼は優秀なDNAを見せ続けて泳ぐ

うたた寝をしそうな、

このショーケース…

それぐらい静かな水のなか

ぼくは停止する

ボク-ぼくは停止する

ぼぼぼぼぼくは停止する

っぼぼくはっぼぼぼぼくは

停止する――

あやふやな季節から離れ

どうでもよいことをうだうだ言う

しかしこの痒みを

どうすることもできない

mu-ru貝（は、）

何も知らない

そしてもう誰も知らない

川のせせらぎも知らない

潮騒も

浪打際の打ち寄せも

知らない

大きな図体で、だまって、

おとなしく、いつまでも黙って

彼は泳いでいる――

それが好奇心の事柄なのか、

何か助けになる目的があるのか、

いやそもそも何かの意味があるのか

それ自体 不明だ――

## ジョージ・グロスの“恋の病”

---

その燦然たる雲の衣裳を

——地平線のうえに脱ぎすてた時、

目に入ったものは、

「け む り…」

(マザー・テレサの瞳…)

時間の ことは もう 忘れよう って

誓ったんだ。夕方になってぽつらぽつら雨が降って、

でも、急に雨が上がって、美しい西日が葉裏にきらきら光って…

けむりは凍えていくつにもちぎれていった——

早くも小さな水けむりの突進者…中途半端なやさしさが、

のらくらしてる、死にゆくひとのかたわらに、死亡通知書の味気なさ、

保険の案内…社会の結末が自己の安全保証を相互に反映し、

(我慢する) —— 《当惑する》

ほらほらいくぜ、キス…透明な蒸散——キル・ミイ…死より甘い詩…

アルコールのかをり…ラムプの種類…

乾かされ堅められ——僕は日ごと慣らされ…

だらしなさの悪癖が——

日ごと増大されてゆく・過酷さを増す経験…

「井戸に投げ込まれた毒でも知り得ようか？…」

(興奮のあまり気が少し変になってくる-女を想ってる、社会を想ってる、

そして、人を愛してる…何もかもはっきりしすぎる、からだのなか

風や磁気に交叉する――すきとほってくらい風のなかを…)

…大人の秘密

……僕は迷彩色の森の中で、ジャスティス ――

けれどもなんだってこんなに空気が悪い、

エゴン・シーレのうるさすぎる『都会 1919/油彩/カンヴァス』

いつこ

そらそら、機械時代・戦争を玩具にするぜーキル・ミイ…社会の愛は何処？…

あたらしい芽をぐんぐん噴いて、都市空間の生々しい田舎をチョイスする、

どこまで延びるかわからない野生――挑発行為！…

「でもいつだってそうさ、下劣な放火犯じゃない…

誇り高い俺は――退廃的な無気力を批判する！ 主体性なき民衆を否定する！

…そうさ――そうさ…そうさそうさそうさそうさ！…

取りくまねばならない苦痛に満ちた理想のため…」

(からだに刻んでゆく、シャツのボタンを閉じてゆく…)

乳離れしていない赤ん坊たちの社会は保育器の中…

まだ口バの鳴き声させてるんですか…おい、井戸の中落としてやろうか、

――ああ、うなだれそうだねえ…

それにしたって、ひっきりなしに、何故剣の切っ先のように、

僕は空気を劈く――夜どほし、痛く、つめたく、雪どけの水がながれる・・

ああ何故、不安を紛らせようとして、いつまでも働いてる？・・

[世界の時計が、俺の心臓の鼓動と重なる――]

(ま、手荒く扱う儲けの話しか待ってないがな・・)

カチコチ――カチコチ・・踊ってる・・

オルゴオォルの中で、少年が――カチコチ、踊ってる――

忘れられない僕の手、忘れられない僕の足、

いつか、進むべき道を照らし、自然の掟となれ――るのかな・・

ねえ、なれたら、世界の歩調は合うのかな、狂ったこの世界に、

愛を灯せるのかな――ああ眠れない、夜が続き・・

…………ああ けれど またあたらしく僕等の時代は来るだろう、

死や革命が来る、争いに早天が来る、絶望や涙は来る、

ああ――そのまま・・そのまま、何か血まみれの記憶となって、

「……け む り。」

――おいで、僕が手をずっと握っていてあげるから・・

――おいで、古代ローマの二輪戦車！ 海神ネプチューン！・・

落ちこむたびに、目もあやに、あたりに散らばって ーる――

「強い者が戦いに勝つとは限らない、

だから人生は――面白いんだ・・」

蠟で固められたか、軟膏でもやられたか、彼は一度も鳴いたことがない…

でも今日は一日あかるくにぎやかな雪が降る、

…無言の領する夜半なるもの（が来て、） 宙宇は絶えず

……だんだん衰えていく何かひやりとさすもの（が来て、）

…………あなた——（が来て、）

仮睡をふりすて、いまはみなもの狂ほしいように思える、

新たな自然を形成する…

「どんな天変地異のときでも、天文学は解説してくれる…」

淡い月光にひかる石ころ、ああ、あの流れ星が、

夜どほし、なんとも情けないパンや富を得たという…

（が、）飛び立つ なめらかな水の響きを破って

（が、）やはり揺れた格好で 溺れようとする

（が、）何も——言えず…雨の中で微笑むんだ、僕は——

## 真夜中の心臓

---

ある人が言う――

君が皿洗いをしているところなど想像もできない。

どうして？ レストランという眩しい光が灯ってる――

カーテンで隠されてない…ドラクロワの民衆を導く自由の女神さながら、

灰いろにだって、見えない薔薇の表情がある。

ルーエ

正邪…はげしく、制するように僕も声を荒げる、

僕もまた、何かに怯えている…

慎重綿密にその考案、準備、構想を進めたいらしい、

物語りが頓挫したはずなのに、彼は笑ってた…

(彼とはもちろん、僕のことだ、)

「それでは、」

と、ただひとこと、言い残して…

なぎ

嵐が去った後の無風の海。

女が喋る――

彼は私に対して親しい気持ちを持っていた

だから彼が怒る気持ちがよく分かります

だが、こんな事実を彼女は知っている。

「信者の物問いたげ…

彼は神ではなく、人であった——」

今まで親しみ慣れた自然とは

大分違った感じが彼の胸を打った。

ほんの一个月と少し前——

だが同じ時、同じ時代、

水道場、裸になって。

あまりにひどい、深刻な顔をしているのに、

僕は驚いた——

ねえ、その昔、

十二三のひよろりとした女の子が立ってこちらを見ていた。

それは少年少女の病気が、

俄かに激増して来ているという事実のように、

(無論それは空想であったが、それはそのように、)

——僕の胸に残った…

記憶のカートン。

それはまるでサンタクロースの白い袋のようだ。

カチカチと時を刻む低い音。

…………この外見の生命感や静謐さに基づくカテゴライズ。

相変らず新しいアイデアではない。

だが、それが大きな癌のような形で覗かれた。

あごひげのないサンタクロースを想像するのは難しい、という、

現在都市伝説の位置の方へ、クリスマス後のように意識が曲っている。

「——ええ、ピストル…ここに持っているわ。出してみましようか？」

緊迫感のある場面。

ピアノの伴奏でテノールの独唱が聞える。

(汗でキラキラ光った顔が忙しなく呼吸を繰り返す。)

それは宿命として吸い込まれた、悲しみや愛情を壊すものの響き。

のたま

「…………宣えり…宣えり…………」

それを聞いていると、ふと思った。

むしろこれから後の一世紀の進歩が目ざましい

だが容易く、たやすく——苦痛の呻きをあげたに違いない…

(無論それは空想であったが、

それはそのように、)

先刻の闇を、再び眉間へ深く刻んだ。

死ぬ機会を見付けることだけが問題だった

子をさずけられるように祈った。

……ここは、僕だけの、僕しか入れない精神の部屋。

扉口から現在人形のいる場所、

本当の僕は、そこでセルロイド人形の瞳をしてる。

――棺桶のような扉。その扉の闕の際に、

完全に横向きになった、鍵が落ちていた。

絵と模様をついたものを右側だとすると

よくわからない数字が記された左側は、

少し煤け、少し汚れている。

拡大鏡さながら、

とうてい拭い去ることの出来ない疑問が残されていた。

物音がした。

その部屋から、

何者かが夜の祈りをあげているのだな、と僕は思った

「僕だけが住んでるわけじゃない…

僕はいつも、さまざまな人と常に交流してる。」

(無論それは空想であったが、

それはそのように、)

床板がキシキシ鳴った。

壁にぶつかる音と、それを追う白い影が夢のよう…

僕は鍵を拾い、その向こう側の世界を見る――

(容器の受け皿に、出汁が溜まっているような…

祭りの屋台のおでん、あの白い発泡スチロール。)

囁くような美しい顫音が響いてきた。女性のあえぎ声。

僕は覗きこむ。

そこにはもう一人の僕がいた。

一瞬目が合った。

だがすぐに目の前にいる、四つん這いの女性へと戻し腰を振り始めた。

素っ裸の彼は、マスクをつけたような表情で、

儀式を行ってる。

惑星の距離…あるいは聖書との距離のように、

彼はさも満足気に両手で女性の胸を揉みしだき、

「女というのはこうするんだ。」と言わんばかりに――

あの音がありありと浮んで、

やるせない妬ましさを感じるやら、いやしかし、

何故こんなことになっていると途方に暮れるやら…

何ものかの悪意によってひどく誇張された、自分の戯画だ。

ディズニー映画を観ている時のような…

しかし女は美しかった。

だが、うす暗いので、年ごろも人相もよくは判らない。

しかしひょんなこともあるもので、

(鞍の上にひらりと跨ってひと鞭あてるように、)

数年後、その美しい唇を噛みしめる機会があった。

もちろん、あれは幻覚の見せた一瞬にすぎなかったが、

(しかし、僕だけの部屋は、僕の心の中にあるのだ。)

このような偶然の一致現象、

あるいは空間・時間のねじれはいつでも起こりうる。

—思想は力なるが故に、思想は波及する、又深みへと行く。

およそ無意味でもあり空虚でもありながら、

しかも世にも烈しい欲求で、いわば種の保存で…

だがそれでも、内心では

アッと声を立てたくなるような驚きを、覚える。

ときがたい複雑な陰影。

あの場面の一コマ一コマを、

忘れることは出来なかったのだ。

眼から秘密をおおうヴェールは、否応ない爪跡として、

僕の人生に決定的な影響を与えた。

だが同時に、復元ないし浄化的な契機を見落さなかった。

……………自分を受け入れ、肯定しているような興奮。

そしていま、胸の内からふっと、僕の声が聞こえる。

言いかえればほとんど臨終の遺言の衝動のはずなのに、

そうじゃない、そうじゃない（のだ、）

そういえば今年の桜、例年より二、三日早く咲いたな、

とでも言うように――

「そして、誰を傷つけよう？」

## 空の果て、永遠のロック、みたいな感じ

---

ねえ何もないよこの世界の果て

ねえ、何も要らないよ

バッグや髪どめもスキンも勿論いらないよ

服汚れたってむしろ破くくらいのカッコよさがあるよね

高速の車も、ダッシュボードの演出もね..

ねえ、君は被害者の奥さんって顔してるんだけど

本当に何か罪を犯したのかい？

こっそり教えてよ、

ちょっと時間が余ったら、そのことだけで、

一年間は過ごせるような僕だから..

(そこにはさ、)ただ広い空があつてさ

これ以上行けないと思ってる内は見つからないんだ

ここが限界だって思っても見つからない

カリキュラムの空、ねえ、それは幻のボーナスステージ

それはたぶん神様のご褒美だよ

だってあの僕でさえ、涙がこぼれるほど感動したんだから

いつか、君も見れるといい、

本当に美しいものがこんなに身近にあるって

ああそしてそれに気付かなかって反省したらいい

頑張ってる人の孤独がそこにあるだけだよ

誰も自由になれないよ

毎日どっかで裁判や揉め事が起こってるよ

もう多分アイツだってお前だって善悪の好し悪しなんか

わかってないよ——

無情な胸の奥を掻き乱すことで、

欲しいもんがなくなる

嘘だってつく必要がなくなる

「どうせみんなレイゾウコです。」

（そうだよ、みんなカラッポです。）

将来設計に夢中になんなくてもいいよ

いま、馬鹿でもその内に頭よくなることもあるからさ

勉強が嫌いでも人生の勉強はそれにあたらないから

——僕はミスタービックなんか聴くと胸が熱くなるよ

ほっといてくれよ、とたまに思うよ、

あの人の歌を聴いてると…

毎日が贈り物なわけじゃないさ

神様なんかいない方がずっとずっといいのさ

政治と付き合ってたって自分を向上させるものなんか一つもないよ

でも一日中政治のことを考える時もあるってそういう虚しさもあるよ

退屈な青だよ

ねえつまらない水色だよ

今更何かの良さを認めたって何がかわんだなんて思える節もあるけど

そんなこと言たって何か認めなくて生きていける人はいないでしょ

ブルーだけどオレンジやレッドやイエロオ

たまにパープルにだってなるよ

「ねえ、母親になるってどんな気持ちですか？」

(ねえ、神様・・・父親ってどんなかな――)

憂鬱な気持ちになる？

それとも、愉快的な気持ちになる？・・・

毎日全速力で走ってるようなイメージで毎日をやっつけてるけど

これでいいとは思ってない家庭や子供のことだって想像するよ

かすかなオルガンの調べみたいに

潮風の匂いが嗅げる船に乗っているみたいに

いまだって愛せる誰かのことを考えているよ

「ねえ、試合に向けて気持ちを沸き立たせたりするかい？」

(ねえ、神様・・・あの人はすごく頑張り屋なんだよ――)

・・・自分のことを願ってる内は、

自分のことしか頭にないような生き方をしていたら

必ず、手ひどい天罰が下る――

「大きな大きな空だってそうだろ？..

自己主張が激しいと、みんなあの雷から建物へ..

大雨が降ったら、死者だって...」

でもこの世界はそういうものだ

何かが前提としてあるけど

そしてその前提が常に永遠不変の法則

――だから空の果てがあるよ

...これが感情の、気持ちの果て...

ねえ、何もないよ

何もないことがただ美しいよ

## うさぎさんのおしりはやわらかい

---

「うさぎさん、お尻触らせて下さい」

「何、いきなり藪から棒に――」

待てよ、藪から棒にあんまり面白くないな、

藪から猛牛に。藪から豆乳が。

「ごめん、いまのなし――」

何、藪から豆乳に」

「うさぎさん、言い換えなくてよいです」

「あらそ。」

「お尻さわりたいんです」

「お前、お尻めあてか！」

「あのお、ぼく、人間です。」

――お尻めあてか、といわれると、

すごく、引きます」

「尻っ尾めあてか！」

「…引きます」

「綱引きするつもりか！」

「しません…引きます」

「うさぎのお尻さわってどうするつもりだ」

「どうするつもりだって…あの、別に」

そもそも、それでどうにかなるなんて、

僕は誰からも聞いたことがない。

「うさぎのオスなら触らせるわ。

百歩譲って、あなたがうさぎなら、

さわらせてあげる」

「ぼく、人間です」

「そうよ、あなたは人間だわ！

どうするつもりだ」

「…あの。ニンジンあげます」

「餌で釣るつもりか！

—あの、優しく撫でてね」

変わり身の早さ、じつに、うさぎである。

ぼくは、うさぎのお尻を撫でながら、

世界がもっと真っ白ければいいなあ、

とかいうことを考えるのだった。

「ニンジン！ニンジン！…」

うさぎさんにニンジンをあげると、

がりがりがりがり、と電動鉛筆削りみたいな、

音を立てて、前歯キッ、とさせて、

いただいていた。まるで、一週間くらい、

まともな飯にありつけなかったんでよう、

腹減ってたんでよう、という感じだった。

—僕は相変わらず、うさぎさんの、

お尻を撫でながら、

いつまでも時間のむなしさについて、

考えていたいのだった。

## うさぎ体操

---

「うさぎさん、どうして…

世界は変わらないと思いますか？」

と、聞きながら、

ぼくはたぶん、うさぎさんが、

何を言うかわかっていた。

「うさぎに聞くなよ。馬鹿野郎…」

「じゃあ、政治家に聞くんですか」

「あんな嘘つきに聞くな。馬鹿野郎」

「じゃあ、誰に聞くんですか？」

「そりゃあ…神だ！神様に聞け！」

うさぎさんは、たぶん、

その時、ニンジンが目の前にあったら、

ニンジンに聞け、という感じで言った。

「神なんてこの地上にいないんですよ。

ぼく、神社に何十日と通ったから、

知ってるんです——神は地上にいないんです」

「…さみしいこと、言うなよな！」

うさぎさんに慰められる僕、

という構図の方が何かさみしかった。

「しょうがないな、ちょっくらまた、

あたしのお尻さわらせてやっか。

どうだ——好きだろ」

「あのですね、うさぎさん…

触りたいときと、触りたくない時が、

あるんですよ…第一、いまは、

そんな気分じゃないんですよ」

「そうかい。」

なんだか、息子に正論言われて、

怯む母親、という感じだった。

「じゃあ、うさぎのダンス、

教えてやろうか？」

「すみません。知ってます」

「じゃあ、うさぎ体操なんて、どう？」

「それは初耳です。」

「じゃあ、決まりだね。

一二のリズムでジャンプする、

駆け足する」

…うさぎのダンスと一緒にじゃねえか、

と、ぼく、心に思いながら、

どうしてうさぎさんは、

こんなにもうてんきでいられるんだろう、

幸せそうなんだろう、

とぼくはふしぎな気がした。

なんだかまるで、人間の方が、

うさぎのようにも、ぼくには、

思えて仕方がないのだった。

## うさぎさんと生の権利

---

このうさぎさんは草叢に住んでいて、

僕の近くの野原にいる。

ぼくが来ると、よっ、とか言って

出てくるのだ。

じつはけっこう、淋しがり屋で、

ぼくのことを、友達とってるんじゃないか、

とたまに思ったりする。

「噂によると、頭いいみたいじゃない？」

「誰に聞いたんです？」

「…へび。」

ぼくの話が蛇がするのか、違くない、

と、ぼくは自嘲した。

あるいは鴉かも知れない。

「それでどうしたんですか？」

「どうもしないわよ、

頭がいい詩人がいるって、のそりのそり、

やりながら、話して、あっちの林の方へ、

行っちゃった」

ぼくの、扱い方そのものである。

「でも、頭なんてよくない方がいいですよ。

喧嘩だってね、しないためには、

力がなくて、ひ弱な方がいいんです」

「…ふうん」

うさぎさんは、充血したような目でぼくを見、

しずかに、耳を立てて、

風の音だか、草の音だか、

まさか羊じゃあるまいな！

——雲の音を聞いていたのかと思われる。

「頭よくて、だめなことってあるの？」

「人が嫌いになります」

「むしろいいじゃん、人なんか屑だし、

どうでもいいし、腹の中腐りきってるし」

うさぎさんは、目の前にいるのが、

人間ではないみたいに、言い募った。

でも、人間でなくても、

たぶん、友達なのだ、とは思った。

「あたし、人間に飼われてたことがあるの。」

「はい。」

「…棄てられた」

「はい。」

長い間があって、ぼくはこんな時、

フォローをいれてやりたいのだけれど、

うまく口から出てこないのだ。

「たまに嫌な夢を見るわ」

「はい。」

「人間なんかろくでなし、だと思う。」

棄てられた犬は、

ずっと泣いてたわ」

「はい。」

「人間なんかのことで悩むなんて、

くだらないことだわ…人の気持ちなんて、

わからなくたって、

あなた、いい人だわ」

うさぎさんの、あの荒っぽい口調が、

静かに止んで…まるで雨から

晴れ間へ来たみたいに、

彼女の奥に潜んでいる深い傷を、

ぼくは見た気がした。

「でも、ニンジンほしいわ」

「はい。」

ぼくは、ズボンのポケットに入れていた、

ニンジンを、うさぎさんに渡した。

「でも。あたし、お腹減ってるだけなのよ」

「はい。うさぎさんは、

お腹減ってるだけです」

どうして、ぼくらはいちいち、

他人のことに口を出そうとするんだろう。

彼や彼女のことなんて、

うさぎさんほど明瞭のことじゃないか。

「ねえ。歌うたって」

ぼくは、童謡がうたいたくなかったので、

そうした。はるがきた、を歌った。

「いい歌だわ」

「うさぎさんにもわかる名曲」

「たぶんね」

うさぎさんは、そろそろ行くわ、

と言って、草叢のなかへと、

ビュン、と消えてしまった。

ぼくはといえば、三角ずわりして、

社会のどうでもいいことについて、

悩んで苦しんでいる自分を恥じた。

人間らしい生き方なんて、

うさぎさん一匹の生の権利の前で、

もろく崩れ去る。

なにより、彼女はぼくの友達だ。

そう想うと、ぼくは、

人間というものを信頼できなくなった理由を、

つかのま、思った。

ぼくの傍にいてくれるのは、いつも、

ぼくの内省であった、と、

見抜いていたからだ。

## うさぎさんプレゼントする

---

「たまには、キャベツいいんじゃないか…」

おらあ、という風に体当たりして、

ぼくの手からキャベツを奪うと、

まるで冷菓がりがり君の誇張CMみたいに、

ずうおっ…がりがりがりがり、とやりだした。

「よかった。」

ぼくは、うさぎさんの背中を撫でながら、

自分も、こんなに小さかった頃があったっけ、

と考えていた。

「いま、なに考えてるの？」

そう言えば、近頃のうさぎさんは、

優しい喋り方をするようになった。

たぶん、信用してくれているのだと思う。

「子供のころです。」

「子供のコロか…」

「ころ、です」

「コロか？」

いつまでもくだらない訂正が続きそうだったので、

コロ、とぼくも外国人みたいに言った。

金髪でもなかったけれど。

「ぼく。本好きだったんですよ」

「うん、本はいいって山羊も言ってたわ」

それ食べてるだろう、とぼくは思った。

「本を読み過ぎると馬鹿になるって、

あれ本当？」

うさぎさんは、突然、

妙なことを言いだした。

「どうしてですか？」

「だって、ほらそこチューガクセの、

登下校あるでしょ？」

「ああ。それはたぶん、

読書感想文とかが嫌で言ってるんですよ」

「なに、まるで見たように言うのね」

「いまの子供は、

文章を書くのが苦手なんです」

「…じゃあ、得意なことって？」

「ゲームです」

ぼくは、ギャグを言ったのだけれど、

うさぎさんにはやはりわからないみたいだった。

「ほかには？」

「塾通い」

これもギャグだったのだけれど、

うさぎさんは肯いた。

「ほかには？」

「そうですね、あとは、

ぼくにはあんまり思い浮かびません」

皮肉ジャアナリズム小熊秀雄の正当後継者としては、

まあ、さしあたり当然の台詞だった。

「いまのこどもたちって、

知らないことばかりしてるのね」

そう言われて、ぼかんと思い当たったぼくは言った。

「そうですね。ジャングルジムにのぼらない、

ブランコ撤去される」

「ねえ。こんど、

ジャングルジムに抱っこして、

のぼらせてくれない？」

うさぎさんは、めずらしく、

ぼくをお願いした。

「いいですよ。」

「鴉の奴が、たかいところで、

あたしを馬鹿にするのよ。

だからあたしも、たかいところで、

鴉を馬鹿にするのよ」

「そうですね。」

むちゃくちゃな理屈だったけれど、

うさぎさんが馬鹿にされていたら、

ぼくは嫌だな、と思った。

「でもうさぎさん。こころは、

くもですよ。くもは、のびのびしていて、

子供のコロから、ずっと、

自由なんです」

「雲がオレンジ色に染まると、

ニンジン食べたくなるわ」

「キャロットジュース、

こんど、持ってきますよ」

「ありがと。でも、いつも、

貰ってばかりじゃいけないなあ、

と思って、今日は

あなたにプレゼントがあるの。」

うさぎさんは、

少し緊張しているみたいだった。

「これ。きれいでしょ。」

足下に隠していた物を、ぼくに見せた。

それは、ビー玉だった。

こどものコロによく見た、ビー玉だった。

「もしかしたら、

気に入らないかも知れないんだけど…」

ぼくはブンブンと首を振った。

「すごく。すごく。嬉しい」

「よかった」

そう言うと、じゃまた、と、

たぶん照れていたのだろうけれど、

ビュンと草叢の中へ消えた。

——そのあと、ぼくはビー玉を、

つまみあげて、月を、

ビー玉を眼鏡のようにして覗いた。

ぼやけて見えた。

でもビー玉が汚れていたからでも、

そういう風にしか見えないからじゃない。

彼女が、これをたまたま見つけたのではなく、

いろいろ探していて見つけたものである、

ということが、ぼくにはわかったからだ。

嬉しかった——

うさぎさん、ぼくは嬉しい…

ビー玉は、うさぎさんのように、

小さくて、軽かった。

でも本当に、その重さは、

えがたいほど、ぼくの身長を、

小さくさせた。

やさしい夜だった。

いつまでもここに、ぼくは、

うさぎさんのことを思って、

座っていたいのだった。

## うさぎさんとジャングルジムにのぼれば

---

うさぎさんを、抱っこして、

ジャングルジムの上にいるぼくは…

たぶん、——ちょっと変な感じだ。

「どこが変なのよ」

変だといわなければ、

少女趣味！

「少女趣味って何よ」

うさぎが少女趣味でなければ、

おお！…人生のメルヘンチックな友達！

「でも夜の公園はいいわ。」

「夜の公園はいい。

頭のおかしな詩人がジャングルジムで、

うさぎさんを少女趣味に抱っこしてる」

「ねえ、…でも、鴉——

枝にとまっているわ」

そうですね、と僕もうさぎさんの、

見ている方向を見つめて苦笑した。

「でも、高いところって、

いいでしょ？」

「馬鹿ってことで？」

「いえいえ。煙の方で」

「鉄の方で？」

「ええ、馬と鹿の漢字で」

ぼくは、結構楽しくなってきた、

友達と一緒に、

公園に来るのはいい、と思ったりした。

「そろそろ、家に帰りたいわ」

とうさぎさんが、

それから数分後に言った。

「うん」

ぼくはジャングルジムを丁寧に下りる、

足を滑らせないように気をつけながら。

うさぎさんは、抱えられている立場として、

しろい卵になっていた。

「では、公園から野原まで移動しますね」

「野原？ おお！神の風を受けし

偉大なる草原・・・なむなむ一一」

あきらかに間違った宗教みたいに、

なっていた！

「ねえ、前にどうして、

世界は変わらないのかと、

あなた、あたしに聞いたわよね？」

と、うさぎさん、

目を伏せながら言った。

「はい。」

「たぶん、その答えは、

あなたの瞳の中に…

あるんじゃないのかしら？」

「どうしてですか？」

「あなたの瞳すごくきれいよ」

とうさぎさんが、

茶化すように言った。

「なんですか。それ」

「いえ。前から思っていたの。

人間って、濁った目をしているでしょ、

あれ、こわいのよ」

と、急に被害者の顔が出て、

ぼくも、ちょっとこわくなった。

「何かされましたか？」

「ううん、…あたしはされてないけど、

大きな犬がね、

ホームレスの人を噛んでた」

「…」

ぼくは、だまって、

すこし、考えた。

「うしろに、人がいた。」

「…………」

飼い主。

「—もちろん、あなたは、

そういうのじゃないわよ。」

いや、もしかしたら、

ぼくだって、

そういう人の中に、

くくられるかも知れず、

そういう風にしか見えない、

見てくれない、

うさぎさんは嫌だったけれど、

それを否定する言葉を持たない、

ぼくはもっと嫌だった。

「でも。ジャングルジムにのぼって、

あたしは少し考えたの。」

「何ですか？」

「あたし達は、

地上から少し離れた考えで、

いるべきかも知れない」

とうさぎさんが言ったので、

ぼくは肯いた。

そしてその後に、ぼくは、

とてもオシャレな台詞を思いついて、

ウィンクしながら、言った。

——ああウィンクなんて、

初めてやったかも知れない。

「でも鴉のように、

見下ろさず。」

「うん、鴉いけない。

あいつ、悪い奴だ」

とうさぎさん、笑った。

## うさぎさんキャロットジュースを手で飲む

---

ぼくはうさぎさんのために、

キャロットジュースを持ってきて、

お皿とコップを用意してきた。

ついでに、ぼくは、ビールを数本持ってきた。

「お皿とコップどっちで、

キャロットジュース飲みますか？」

近頃ふっと気付いたのだけど、

うさぎさんは、

ぼくが呼び掛ける前に、

ガサッ、と草叢から現われるようになった。

靴音を聞いているのかも知れない。

「コップ。あたしは手で飲む派なの」

ぼくは、あきらかに

使い方の間違っているうさぎさんの

前脚じゃなかった、

手に持っている、コップを見つめた。

うさぎさんは、器用にかけむけて、飲んだ。

「ウウッ、しびれるわあ」

そんな炭酸飲料とか入ってないから。

と、思ったけれど、

なにしろ、うさぎさんらしかったので、

ぼくは缶ビールを開けて、

うさぎさんと一緒におはなしをした。

「ねえ、今度、

友達とか連れてきていい？」

と、うさぎさんが言った。

ちょっと緊張していたので、

もしかしたら、

餌の量が増えることとかを、

気にしているのかも知れなかった。

「大丈夫ですよ、

でもよかった。うさぎさんにも、

友達がいるんですね」

「クレア」

「は？」

「あたしの名前。」

「クレアさんって言うんですか…

きれいな名前です」

考えてみたら、まっしろい、

ふわふわしたうさぎさんには、

そんな名前が必要だと、

ぼくには思われた。

「今度つれてくるわ。」

「うん。」

——ぼくも、友達というものを、

連れて来ようかと思ったけれど、

中国人なので、

あんまり会話が續かないな、

と思って、話さないことにした。

「ねえ、いま、何か考え事したでしょ？」

「え？」

「あたし、瞳の動きでわかるのよ。」

とうさぎさんこと、クレア。

「クレアさんは、読唇術とかできるの？」

「それは…できない。」

「でも瞳の動きは読める」

「猫だって、水の中の魚の動きくらい、

読める。」とうさぎさんこと、クレア。

ぼくは、すこし、笑った。

「いや。友達を連れてくるのなら、

ぼく、仲のよい友達を、

連れて来ようかと思ったんです。」

しかし、そういうと、うさぎさんは、

ちょっと考えるような目をした。

「あ。ですよね、

…でも、信頼できるんですよ」

「うん。わかる。」

とクレアさんは、優しく肯いた。

「でも、あなたに優しいのと、

あたしに優しいのとは違う。

うさぎにはうさぎのルールがあって、

これ、動物たち共通のルール」

と、うさぎさん。

ぼくは、黙って酒を飲みながら聞いていた。

「あたし達は、嘘をつかない。」

「そうですね。」

とぼくは言った。でも、なんだか少し悲しくて、

フォローするように言ってみた。

「人間は嘘をつくけれど、

それは内緒だったり、秘密だったり、

隠し事だったりするんです。」

言い換えているだけだ、という気はした。

それにそれらの言葉の持つ、嫌な響きは、

クレアさんの耳にも届いただろう。

「でも。あなたは違うわ」

「クレアさんも、違いますよ。」

ぼくは、そういえば、すっかり、

クレアさんの身体に触れないようになっていた。

たぶん、友達になれなれしく触るのは、

よくないことだと、

思うようになったからかも知れない。

「ねえ、背中さわってもいい？」

クレアさんは、キャロットジュースを、

もう一杯ぐんぐ、飲んでから言った。

「もちろん。」

友達って、ふしぎな響きだ。

背中のやわらかい毛に左手でふれながら、

自分の一番やわらかいところに、

触れているような気持ちにさせられる。

「触りたかったら、いつでも、

触っていいのよ。」

とクレアさんは言った。

そうですね、でも、

尊敬している存在に、好意の対象に、

はたして気軽に触れられるだろうか、

と、奥ゆかしく、

ぼくは考えながら、

ビールを飲み、うさぎさんは、

また何か話をし、ぼくも話をし、

たまにキャロットジュースを飲み、

夜が更けていくのだった。

やさしく――

くろくても、みどりに…。

## うさぎさん、ハローしてみたりする

---

こんこん。とドアをノックする気配がした。

ぼくは、部屋の中。先程まで詩を書きながら、

むうっ、としているので、

ドアの向こうの奴をしばきたくてしょうがない。

実際、僕は何人かしばきあげてしまったことがあり、

ぼくは詩の時間を邪魔されるのがすごく嫌いなのだ。

「何だ、おいこら！」

そう言うと、美人の女性がニコッと笑った。

なんだか、何処かで見たことがあったので、

釣られて笑うと、ぼぼん、と不思議な煙をあげて、

そこには、クレアさんがいた。

「あ…あ、ごめんよーっ、つい…」

ぼくはもちろん、友達に乱暴な口を聞いたりしない。

「いいのよ。詩人さんが人嫌いなのは有名なもの。」

「あ…ごめんよ、ちょっとイライラしてね」

入って、何にもないアパートだけど、と、ぼく。

そう言いながら、ぼくは金輪際、

ああいう態度をやめようと思った。うむ。やめよう。

「うん」

クレアさんは、二本足でスタスタ歩き、

小さな靴を上がりがまちで脱ぎ、

失礼するわ、と言って、中に入った。

あまりにもスマートな光景だったので、

ぼくは、シャープのCMにどうか、

と下らないことを考えたりした。

「うん。」とクレアさん。

どうしたんですか、と聞く前に、クレアさんが喋った。

「畳の部屋なので、滑ったりしない」

やっぱり、ぼくら気が合う。

「フローリングなんて邪道です」

と、ぼくは言いながら、クレアさんのために、

いそいそ、と、

キャロットジュースを冷蔵庫から取り出し、

コップにとくとく、とそそぎ、

食べもしないくせに、接客用に置いてある、

棚のお菓子の袋をあけて、皿に入れた。

「お構いなく。」とクレアさん。

すでに、部屋の隅に置いてあった座布団を、

よいしょよいしょと引っ張ってきて、

その上に、ネコのように丸くなっていた。

うさぎの世界では、これ礼儀正しいのかも知れない。

「しかし、折角来てくれたのに、

何にもしないわけにもいかないものなあ」とぼく。

クレアさんは、目の前に出したキャロットジュースを、

んぐんぐ飲み、ふひゃあ、生き返るわマジで、と言った。

お菓子-小さな和菓子は袋に入っていて、

開けられるかな、と、ちょっと心配になったのだけれど、

歯を器用に使って、開けて、むぐむぐ、食べた。

「悪くない味。」

「クレアさんの和菓子批評。」

ところで、と僕は話を変えて、

「今日はどうしたんですか？」と聞いた。

「抜き打ちテストよ。」

「本当ですか？」

「嘘よ。」とクレアさん、笑った。

「でも、ゆっくりして行って下さい」とぼく。

本ばかりある部屋で、本当に、こういう時、

何だか、ぼくは、ひと昔前の作家みたいだなあ、と思う。

「ところで詩人さん、

あなたに聞きたいことがあって来たのよ」

おわかりになって、と何故か、お上品な喋り方をした。

「さようでしたか」とぼく。

タイミングよかったせいか、プッ、

とクレアさんは吹き出し、ぼくも笑った。

「あたしね、藁のベッドが好きなのよ。

毛布とか、好きじゃないの。」

「でも、藁っていいですよね」

こういうセリフって、一見いい加減な相槌だけど、

その実、藁と毛布どちらがいい？

そりゃあ藁がいい、という思い込みからきてる。

「でしょ。」とクレアさん。

「ぼく…牧場の藁にあこがれてるんですよ。

いつか、大の字になって眠ってやるんです」

「あこがれなの？」とクレアさん。

「できれば、毎日」とぼく。

そう言うと、クレアさんは笑った。

「毛布なんて、さみしいわ。」

そう言いながら、座布団のうえで、

ごろごろしているクレアさんには、

あんまり説得力がない気がした。

けれど、さみしいといえば、さみしい。

「昔、木の枝の上で眠るのが夢だったんです」

「うん？」

「いや、ナマケモノみたいに、あるいは鳥みたいに、

眠るのが夢だったんです。でも…ある日、

それをやってみると、意外と大したことがなくて、

また、全然ねむれなくて…」

「ゲンジツテキショーガイ」とクレアさん。

「色々夢には付き物です」とぼく。

「それで？」

「木にもたれ掛かって眠ることにしたんです。

なんだ、レベル落としたのかと思うんだけど、

考えてみたら、それで十分満足であることに、

ふと、気付いたんです」

「ゲンジツテキミナオスウイ」

「見直スウイ」

「それで？」

「木の香りが好きなんだと知りました。

高く上りたかったのは、鳥や、

ナマケモノになりたかったわけじゃなくて、

少しでも風を浴びたかったからだと知りました。

だから、風の少し強い日には、

木にもたれかかります」

「うむ」とクレアさん肯いた。

「…それにしても、クレアさんがいると、

部屋の中が、野原みたいに思えてくるから、

不思議ですー」

「不思議なことは、いっぱいあるわ。」

クレアさんは、次の瞬間、女性になり、

また、うさぎの姿に戻った。

「誰も、うさぎが、人間になれるなんて知らない」

「でも、人間なんかより、ずっと、

うさぎの姿の方が素敵ですよ」

ークレアさんは、そう言うと、すりすりと、

ぼくの膝に近寄ってきて、太ももの上に座った。

「人間なんか比較するまでもなく、

うさぎの方がずっといいはずよ」

「そうです。そうです。」

とぼく、笑って応じた。

「人間とうさぎ——もし助けられるなら、

どっちを先に助ける？」

「もちろん、うさぎです」

と、ぼく、すごいことを言っているな、

でも、そのうさぎが、間違いなく、

クレアさんであったので、

ぼくは、そう答えた。それは義理とか人情ではなく、

友達だから、そう答える-またそう言ったことによって、

本当にそんな場面があったら、そうする、

という種類のものになった。

「でも、現実にそんなことをしたら、

詩人さん、すごく周囲から怒られるわ」

「慣れてます。」

と、ぼくは言うてから、クレアさんの背中を撫でた。

なんだか、急に頼ずりしたくなって、

クレアさんを持ち上げて、頼ずりした。

「人間なんか、クレアさんの百万分の一です」

ぼくは、もしかしたら、

クレアさんと接することで、

人間嫌いを深めているかも知れないと思った。

でも、そう思いながら、ぼくにとっての人間は、

クリアさんかも知れない、と、

ふと思えて、仕方がない。

そして、そう思うと、何故だか、胸が騒いだ。

人のことをそこまで信用しなくなっている自分が、

はたして人なのか――と…

ぼくにはもうちゃんとわかっていたから。

## うさぎさんは、そして、神になった

---

ぼくは、キャロットジュースとキャベツとコップと皿を持って、

野原へとゆく。クレアさんは、いつものように、そこにいた。

何故か、今日は招き猫のポーズをしていた。

「どうしたんですか？」

「崇めよ。」とクレアさん。

ははあ、とぼくは、やらせくさく頭を下げ、

ちちんぷいぷい、あだぶかだぶら、ナンジャラホイ、

「ここにありますが、キャロットジュース！

おお、我等が神、クレアに捧ぐ！」

「えーっ、キャロットあるの」

欲にくらむ、神。

「おお、我等が神、クレア、

キャベツも献上します！」

「う…うむ、キャベツとはこれは感心な—」

さらに、食欲に揺れる神。

しかしそこで、ガサゴソッと草叢から物音。

「あ。詩人さん、友達も来てるの。」

「ああ、例の？」

と、言ったところで、まっくろなうさぎさん。

「女の子よ。」

「名前は？」

「リカちゃん。」

まっくろうさぎのリカちゃん。

警戒心を露わにしながらも、おいでおいで、と、

クレアさんがすると、思いのほか、ぴゅうっと、

傍まで近寄って来た。

「いろいろ。ひどい目に遭ってる子なの。」

ぼくは、ぽりぽりと頭を搔きながら、

クレアさんのニュアンスから、人間か、と察した。

ぼくはそれ以上何も言わず、キャベツを剥いて、

なるべく食べやすいように小さくして出した。

ぼくの手を見るとビクッとしたので、置いて、

すぐ引っ込めた。

「リカちゃんは、喋らない子だから、

話しかけないであげてくれる？」

「もちろん。」

ぼくは、ポケットに入れておいた、

缶ビールを取り出し、タブを開けて飲んだ。

なんだかやけに今日のビールは胸に沁みる。

しかし、そんなぼくの感傷を余所に、

キャロットジュースをつかみ、コップに注ぐなどの、

非常にサーカスなクレアさんは、ぷはあ、やりはじめ、

キャベツをがりがりがりがり、と嬉しそうに齧り、

そうしていると、リカちゃんも、

おそるおそる、キャロットジュースを、

一一こぼし、しょうがない子ね、とキャロットジュースを、

皿にいれて、それをリカちゃんは飲んでいた。

考えてみると、クレアさんがおかしいのであって、

ふつうのうさぎは、全然しょうがない、という気もした。

「詩人さん？ 優しい目をして、どうしたの？」

くるりと振り返ったクレアさんが、ぼくに聞く。

「いや…なんだかね」

うまく言えずに、黙っていると、

クレアさんが、あぐらをかいている、

ぼくの足下に来た。

「…さみしいの？ 友達だめ？」

たぶん、そうなのだろう、と思う。

でもそれはもちろん、クレアさんに友達がいて、

それがいけない、と思っている、さみしさ、

ではなかった。

「クレアさん…ぼくはね、

だから人間が嫌なんです。想像力がないから。

話せなくたって、話したって…人間が、いかに、

弱い者に対しての眼差しを欠いているか――

そしていかに、ひどい目に遭わせているか…

それを思い知るたびに、ぼくは、本当に、

本当に――人が嫌になるんです。自分も、自分のこの血も、

歴史も伝統も…本当に、何もかも」

ぼくの語気は相当荒いもので、

それにリカちゃんがビクッリしてぼくの顔を見たので、

「あ、ごめんね。大きな声、もうしないね」

人間なんてろくなもんじゃない、

クレアさんにだって、リカちゃんにだって、

本当はもっと小さな声で、伝わるのだ。

「でも詩人さん」とクレアさん。

「なんだい？」

「あんまり考え過ぎちゃ駄目よ。

これ、友達としての忠告。」

一瞬、ぼかんとしたけれど、すぐに笑って、肯いた。

「そうですね。友達の意見は聞きます」

「今度、うさぎの国、連れてってあげようか？」

と、クレアさんが突然そんなことを言い始める。

「うさぎの国？」

「うん、あたしが…お願いしてみる。

人間ではじめての、うさぎの国のお客さまよ」

「いや—でも、人間の顔なんか見たくないんじゃないかな」

「でも、友達でしょ？」

ぼくは、その時、クレアさんが、

『でも、あなたに優しいのと、

あたしに優しいのとは違う』と、仲のよい友達を連れてくる、

という話の時に、言った、あの言葉を思い出した。

—そうだ…と、本当に思った…。

「クレアさん、人間なんか信用しちゃ駄目だ。」

そう言うと、クレアさんが首を傾げた。

「違うわ、あなた人間というだけで、

人間じゃないし、そのうえ、友達よ」

明快で、その他に理屈がないみたいにクレアさんが言った。

「…それに、あなただから言うのよ。」

ぼくはなんだか、照れてしまい、

頭をぼりぼりと搔いてビールの残りを一気に咽喉に流し込んだ。

「でも、連れて行く代わりと言ってはなんだけど…」

と、クレアさん、ぼくの手元を見てる。

「お酒持ってきてくれる？…うさぎの国では、

お酒は、かっぱらってくる種類のものなの」

かっぱらう、と聞いて、ぼくは不意に河童の姿を思い浮かべ、  
少し笑ってしまった。

「どうしたの？」とクレアさん。

「いや、ちょっと河童の想像を…」

「なに、河童に会いたいの？——どうして、言わないのよ、  
河童なんか、沼とか池に行ったら、大体会えるのに」

ぎょっとして、本当ですか、と聞くと、  
ニコッと、クレアさん。

「嘘よ。でも会いたいなら、今度案内するわ」

「つちのこ、もお願いできますか？」

「いいわよ——崇めよ！」と何故だか、また招き猫。

ははあ、と、また、頭を下げるぼく。

「…でも、詩人さん、河童だって、つちのこだって、

別にお願ひするようなことじゃないわ——」

そうだろうか、と一瞬訝しく思ったけれど、

キャロットジュースを飲んでいるリカちゃんを見ていたら、

頭が麻痺してるのか、

こちらの方がずっと不自然な気がした。

「世界はうさぎのためにある。」とぼく。

「世界はうさぎと詩人のため。」とクレアさん。

でも、とクレアさんの言葉を聞きながら――思った、

そうだよな、もしかしたら、ぼくら、

変われるかも知れないよな、小さなことで、

ちょっとしたキッカケで、

たくさんの不思議と巡り合った――ぼくのように…

色んなこと、変えられるかも知れないよな…。

「…背中、撫でていいわよ。」

何を勘違いしたのか、クレアさんは、

ぼくにそう言うと、くるりと背中を向けて、

――考えてみると、信頼してくれているから、

こうしてくれているんだよな、と思いながら、

やわらかい毛を、ゆっくりと、さする。

この背中だ、とぼくは、目をつむりながら、

愛おしく感じた。この小さな背中が、

ぼくを本当の人嫌いにさせ、

そして、本当の平等について考えさせたのだ。

## うさぎさん、ビールを飲んだりする

---

いつものことだけれど、ぼくは、

クレアさんとお酒が飲みたかったので、

(今日は、お酒をクレアさんに飲ませよう、と思ったりしながら、)

やあマダムする——野原、クレアさんは、

いらっしゃい、と言う。

心の中を友人に打ち明けるように、

「今日は、よい空です。」とぼくは、言った。

「月が昇ってる。」とクレアさん。

「今日は、缶ビールが二種類。」

「小さな缶ビール。」

ごそっと、キャベツ渡してがてら、

小さな缶ビールを差し出す。

クレアさん、前歯を使って、ぷしゅっ、と開けると、

おそるおそる、一口飲んだ。

「うまい！」

絶対嘘だア、とぼくは心ひそかに思ったけれど、

クレアさんが、喜んでいるので、

これはたぶん、友達と一緒に靴を買うようなものかな、と思う。

「ところでだけど、——うさぎの国は、ちょっと待ってね。」

「うん。」

なんだか、ニュアンス的に、ぼくがキャロットジュースや、  
キャベツやレタスやニンジンだのを、持ってくる、お返しに、

という感じが少し強くなってる。ギブアンドテイクー。

実は二三度、リカちゃんと顔を合わせていたので、

その分も持ってくるようになったことで、

クレアさんは、少し気にしているのだろうと思う。

いや、うさぎで、胃に穴あけるなんてサラリーマン！

「クレアさん…気にせず。」

耳を立てて、ビールをやっぱり前脚でサーカス玉乗りに持って、

ごくごく飲んでから、

「ちょっと前に、あなたの部屋にお邪魔したけど、」

ぼばん、と美女の姿になって、クレアさんが言った。

「あたし、心の何処かで、あなたがあたしに気を遣うのを、

あたしに対する引け目じゃないか、と思っていたのよ」

それは絶対に違う、という風に、ぼくは首を振ってから、言った。

「人間は、——最低ぼくは…ぼくの友達には、

居心地良く過ごして欲しいからそうするんです」

「人間は嫌いだけど、あなたのいうところの美德は好き。」

クレアさんに笑顔が浮かんで、

やっぱり釣られて、ぼくは笑ってしまう。

ぼばん、とクレアさんは、うさぎの姿に戻った。

「じつは、うさぎになれる薬があるの。」とクレアさん。

「うさぎ——って、ぼくがですか？..」

ここだけの話だけど、と小声でクレアさんが言った。

「あたし..あなたをすごく、気に入ってるのよ。

わかるでしょ——あなたは、人間が嫌いだって言うし、

そして、あたしはあなたが好きだし——ね..ねっ？」

クレアさんは、どうも、酔ってるらしい。

でも、クレアさんに言われると、

なんだか、ぼくも、うさぎになってしまった方がいいのではないか、

人間なんて嘘つきで、どうしようもないし、ほら、

幸福な王子という童話を書いたワイルドが、子供にこれを聞かせるたび、

ぼろぼろ泣いたっていう話。あれだよなあ、と思う。あれだ。

「クレアさんは、好きですよ。」

でも、と、ぼくは言った。

「でも、まだ、そういうのが、

ぼくには、よくわからなくて..」

「そりゃそうよ」とクレアさん、言った。

ぼばん、とやっぱり美女の姿になって、ぼくの肩に、

もたれかかってきた。

「でも、人間なんかより、うさぎの方がずっと面白いわ。」

ふう、と耳元に酒臭い息をかけられて、

ぼくは、カチンコチンに緊張してしまった。石像になった。

あるいは、太古の昔から、ぼくはパリパリの糊づけされた服だった。

「じっくり、考えていただけるかしら？」

あむあむ、と僕はクレアさんに、左の耳を舐められ、

なんだか、思いっきり、エロの世界になっていた——なっていた！…

「うさぎなんて、みんな大体そんな感じ。」

ぼばん、とうさぎの姿に戻って、クレアさんが言った。

「多産系だし。」

ぼくはなんだか、自分がいま非常にオスなのか、男なのか、

あるいは人間であるのか、うさぎであるのかわからぬ立場にいて、

でも、人間はともかく、ぼくは大体そんな感じ。

「でも、クレアさん、酔ってるでしょう」

クレアさんはぼくの膝もとにやってきて、

何も言わずに、背中を向け、耳をピンと立てられた。

「人間って、馬鹿よね。」

とクレアさんは言った。

「…車に性衝動を感じたり、馬と結婚したりする。」

と、ぼくは言った。

すると、クレアさんは低くて、凜とした声で、ぼくに言った。

彼女は多分——うさぎの中でも、とりたてて成熟した、

おそらくもっとも人間に近い考え方をした、うさぎ、だと思う。

「文明はいつか変わるわ…人間の顔が、いつまでも、

人間だなんて恐ろしい想像だと思う。

あたしのIQはあなたと同じくらいある。

宇宙人がやって来て、あたし達に薬を投与したの。」

「…そうですか」

ぼくは、なんだかSFの世界に入り込んでいた。

「いまは百匹程度だけど、もう、あたし達は、

人間と戦える——その気になったら、

あなただって…殺せる…」

でも、考えてみたら、クリアさんの存在を許容していた時点で、

こういう展開って、はじめから、あったような気がする。

「ぼくは、…クリアさんに殺されても構いませんよ」

「——そこは、冗談でしょ、と言って欲しい」

クリアさん、背中越しに首だけちょっと向けて言った。

「でも…人間は飛蝗の大量発生だの、津波だの、地震だの、

あるいは火山だの、あっという間に——死ぬ。

ある日、突然車に轢かれたりする人もいる…」

ぼくは、クリアさんの耳と耳の間を、もふもふ、した。

クリアさん、あうあう、言いながら、おお、と言った。

「人間が絶対だなんて、ぼくは、思ったことがない。

また、ぼくは多重世界-平行世界がかくあるとっていて、  
いわば、進化の過程で、うさぎや、犬や、猫が、  
自分たちと同じ知能レベル-もしくはそれ以上に、  
達するかも知れない-あるいは達していて、ぼくらの世界へと、  
いわば異次元の入口を開けて、監視したりしているかも知れない、  
と思ったことがあります」

「…どうなんだろう」とクレアさん。

「ただ、人間が…あるいはこういう人間のために、  
地球がめちゃくちゃにされている状況が、はたして、  
動物側…あるいは自然側、そしてもしそれらを苦々しく思う、  
もっと超越系の、いわば宇宙人側としては、どうなんだろう、  
と、ぼく、考えられます」

「あなたは、想像力があるから、  
非科学的なことも、平気で信じる。えらい。」

「いや、…えらいのは、クレアさんだと思う。

——あんなに、人間嫌いだったのに、ぼくのことを、  
信用して、たくさん、話しちゃいけないことを、  
話してくれてる気がする」

「うさぎは口が軽いのよ。」とクレアさんは嘯いた。

「なら、ぼくも、口が軽いんでしょう」

ぼくは、背中をさすりながら、低い声で、静かに話した。

「ぼくの、家に、犬がいて、

よく首輪をつけられた彼に、話しかけてたんですよ。

お前はこれで幸せか？・飯も食える、散歩にも行ける、

愛しても一もらえる、でも、本当にお前は、

こんな一生でよかったのかって・・・すごく優しくなりながら、

自分と犬との間に、埋めがたい、さみしさ-偽善や欺瞞を、

思った・・・どうして、話すんだろう。話せば話すだけ、

ぼくの心が痛む・・・一方的な愛のために、その犬がそこにいる」

「愛情は特別なものだと、あたしは思う」

クレアさんは、ういっく、としゃっくりを出しながら、

そろそろ、帰らないと、まずいなあ、と言った。

「ビール御馳走様でありやした。」

クレアさんは違う番組になりながら、言った。

「さらば、若き詩人よ！」

ははは・・・うはは、と高笑いしながら、クレアさんは去って行った。

なんだか、拍子抜けしたような、

あるいは肩透かしを喰らったような気分で、

・・・でも、クレアさんが駆け去っていく音を聞きながら、

人間って、もうそこまで考えていい時期なんじゃないか、

と、ふっと思った。月はきれいだった。

人間よりも、もっと人間らしいものがいたら、君はどうする、

とぼくは、問い掛けた。世界が凍りついたような孤独な闇のなかで、

あの白い霧のように走るクレアさんの姿——が…

なんだか、ぼくには、これ以上ない温もりのように思えた。

時間は、そうだ…たっぷりとある——

友達に恋をするのは、そんなに悪くない考えのように、

ぼくには、思えて仕方がないのだった。

## うさぎさん、デートに誘ったりする

---

こんこん、とドアを叩く音が聞こえた。

「あ、はい…」

ドアを開けると、人間の姿をしたクレアさんだった。

近頃、実はクレアさんが、こうやって、

ぼくの部屋へ来る回数が増えていて、もしかしたら、

何か、誘っているんじゃないかな、と痛いぼくは思ったりした。

「どうしたのよ？」

ニコッと、クレアさんが微笑むと、

やっぱりぼくも釣られ笑いする。弱いなあ、と思う。

「中へどうぞ。」

ドアをばたん、と閉めると、ぼぼんとうさぎの姿に戻り、

靴を脱ぎ、キャロット、キャロット、と慣れたもので、

ちいっ！——近頃ぼくが出す前に、キャロットを勝手に出して飲む。

コップも、テーブルにあるのを、椅子にジャンプしてとって、

冷蔵庫の傍に置いてある椅子に…実は、なんだかんだ言いながら、

クレアさんが、そうしやすいように——上って、ぱたんと開け、

キャロット、キャロット…よっこらせ、とジュースを持ち上げ、抱え、

もはや、うさぎという名の泥棒である！

そしてそれを、畳の床まで持っていき、とくとく、ふひひ…

近頃、キャロット病なクレアさんである。

「ふう、うまかべな」

でも…次第に頭が混乱してきてるぼくは、クレアさんが、

そうしたいなら、それでもよいか、と思え始めているのだ。

僕等は何しろ友達だし——また、時々、友達じゃない時もあるし…。

「詩人さん…これ、いるの？」

「これ？」

クレアさんは、前肢を猫みたいに舐める動作をするのだが、

よくわからない——すると、ぼぼん、と人間の姿になって、

小指をちょこちょこ動かしていた。

「いや、いないよ」

「勿体ない。」

なんだか、クレアさんは、うさぎの姿の時よりも、

人間の姿の時の方が、妙な含み笑いを浮かべる傾向が強い。

そのせいか、ぼくまで感化されて、妙になれなれしくなってしまう。

もし両親が見たら、恋人だと、絶対に思う。…

「…あんまり馬鹿言ったら、ネコになりますよ。」

「ネコになったら、ネズミをつかまえてくるわ。」

何の話だ、とぼくは思った。

「——せめて、魚をつかまえてきてください」とぼく。

「…違うわ、詩人さん、魚じゃ燃えないの」

と、クレアさんのネコの話。

「…たとえば、ネズミは逃げ回る、それも、奴はすばしこい！

そうなる、わたしも、本気でネズミを追い掛ける！――

でも魚はどう？ 魚屋に行けば、ふつうに置いてある」

「海へ――行ってください…」

「それは無理よ。」

と、クレアさんにあっさり却下された。

「うさぎがどうして、海などという野蛮な水溜まりへ行けましょう」

なんだ、野蛮な水溜まりって、と思いながらぼくは笑った。

「野蛮な水溜りがどうしたって？」とぼく。

「溺れます。」

と、いきなり断定が入った。

「浮き輪があります。」

「浮き輪に、あ、ネコの爪が！」

ぼくは、首を振って笑い、たぶん、

クレアさんは海が嫌いなのだろうと思った。

「ねえ、詩人さんも、海が嫌い？」

しかし、人間-美女の姿をしている時のクレアさんは、

時々ぼくを試すような言い方をする…無意識なのか、わざとなのか、

それを判断できるほどの女性経験はぼくにはなかった。

「残念。ぼくは――海が好きです」

しかしそういうと、何を思ったのか、

「溺れます。溺れます。」と不吉なことを煽る、クレアさん。

「なんなんですか、それ…」と、げらげら笑う、ぼく。

「…でも、詩人さんが好きなら、わたしも海、

好きになろうとしてみるわ。」

そうだ、クレアさんは近頃、何か、

ぼくのポイントを稼ぐような発言をすることが増えてる。

「いや、海が嫌いなのが、クレアさんのキャラでしょ？」

「いえいえ。」

と、手を振るクレアさん。

「うさぎなどというものは、まことに不安な生き物であり、

詩人さんなどというものが、違います、というと、

とても困るのであります。」

受け容れる愛、と僕は思った。

「…でもね、クレアさん、変わらなくていいですよ。

あなたは、いつだって、クレアさんだし…誰がそれを、

クレアだ、と思うんですか？—ぼくは、目の見えない人の話を、

そんな時にたまに思うんです」

「ふむ。」と勉強家なクレアさん。

「…視力が戻らない、目がもう見えるようにならないと、

医師に宣告された時の絶望—頭ではわかっていることでも、

イライラする、目の前に何があるのかわからない…こわい、気持ち悪い、

自分が自分ではなくなってしまうような気持ち——」

「人生の一時期。」とクレアさん。

「その通り…死ぬことさえ出来ないんです。でもだからこそ、  
生かされてる、と考える…生きるってポジティブな感情は明るい、  
前向きです——ぼくはたまに、そういう目の見えない人の気持ちになって、  
自分をどうしようか、と思うことが、あります…  
でもその自分って、他者の影響を受けて、どうにかなる種類のものなのか、  
とぼくは思うんです。…クレアさん、あなたは、  
ぼくに合わせることで、あなた本来の魅力を失っていく。」

「ふむ。」とクレアさん、少し難しい顔。

「出会い系って知っていますか？」とぼく。

「うん、ちょっとは。」とクレアさん。

「実は、出会い系のなかには、ひどいのがあって、  
全部やらせ、お金だけ巻き上げようとするのがあるんです。

ひどい話ですけど、人の心をもてあそぶんです。

でも、そのために、あの手この手の言葉を使うんです。

従順なふりをしたり、ね」

「でもいつか報いを受ける」

「そうです、因果応報…人の心はかく汚れやすい——」

「でもね、詩人さん？」

とクレアさんがゆっくりと言った。

瞳が合って、ぼんやりと見つめ合い、

クレアさんがニコッと笑った。やはり釣られ笑いする。

「従順なのと、素直なのは違うわ。」

「もちろん。」とぼくは、肯いた。

「今度、海へ行きましょう」とクレアさん。

「いいですよ。」

ちょっと待って、とクレアさんが人差し指を立てた。

「いま、デートに誘ったのよ？」

うさぎのくせに何言ってんだ、と言うのは、非常に簡単だと思う、

いや——ぼくも、そう思いこむべきだって、思う時もある…

でも、彼女…クレアさんは、うさぎではなく、もう、

友達でもなくなりつつあった。というより、

クレアさんのいない人生は、ぼくには、もう、想像つきづらくなっていた。

彼女は理知的だし、チャーミングだし、しかも、うさぎである。

でも、人の姿をしていると、理想的な恋人だし…でも、ただの恋人じゃなくて、

彼女が特別だと思えるから、理想的な恋人だと——思える…

「もちろんですよ」

ぼくの中にある、抵抗と言えるものが、少しずつ、

消えて——いこうとしていた…

でもそれは、多分…と、ぼくは、思った。

そんなに、ややこしい種類のものじゃなくて、これまでも、

そしておそらくこれからも、そういう易しい種類のものだと思う。

「…でも前言撤回します、

人なんてよくわからないものですよね…そんな簡単に、

魅力が消えるわけじゃないのかも知れない——」

ぼばん、とクレアさんはうさぎの姿に戻った。

「消えないわ…」

そうだ、クレアさん、もし、

ぼくがうさぎだったら、ああ、お尻をさわりたい、

と言っていた、あの頃のぼくがうさぎだったら…

どんなによかっただろう、とぼくにも、思える——

ぼくは、君からたくさんのことを教えてもらっている。

そしてそれを、何故、恋と言えないのだろうか、と、

ふっと——思えてしまうほどに…。

## うさぎさんと、海へゆけば

---

——そして、クレアさんと夜…

ぼくは、クレアさんをバッグの中に入れて、

フックにひょいと、かけて、

原付でぶおおおお、と走ったのである。

「あなた、車持ってないの？」

と、人気のなさそうな自動販売機で、

ジュースを買って、

クレアさんと飲む。トイレとか大丈夫ですか？

平気よ…それにしても、海って遠いですねえ、

という、流れで言ったのである、クレアさん。

「あんな危険な乗り物には乗れません」

ちいっ、と舌うちしたクレアさん。

ぼくは、おそらに瞬きをし、

そろそろ、クレアさん置き去りにして家帰るか、

と、不良なことを思う。

男なんて誰でも不良だどお…。

「というのは——冗談だけど…」とクレアさん。

「ほんとうですか、ほんとうですか？」とぼく。

「なに、それ？」

「いや、ほんとうですか攻撃。」

チーン、と鳴ったこともあるので、

そろそろまた走らせますか、

ぶおおおおおー

信号機でとまると、バッグのなかのクレアさんに囁く。

「揺れませんか？」

いちおう、タオルを敷きつめ、

息がしやすいように、入口はあけているのだけれど、

やはりそれでも、気が咎めると言えば…咎める。

「揺れるよお。」

と大声のクレアさん。

「でも、落とされなければ、我慢する。」

「ー今度は、電車で。」

やっぱり、計画にそもそも無理があるんだよ、

と思いながら、しかし…こういう失敗というか、

殆どありえないようなことも、

人生の中では何度となくあるんだろうな、とぼくは思った。

「また、もう少ししたら休憩しますね。」

「そんなので着くの？」

人間の優しさを介さない、クリア神。

崇めよ、の一言で、ぼく、キャロットジュース用意する。

「いつかは、着くと思われます。」

信号が、青に変わった。

「…でも、人間っていいわよねえ、

好きな時に、何処でも好きな場所へ行ける」

——原付を走らせながら、工事現場や、建物、

林や…森、道の駅、電線や、電柱や、街燈。

速度表示…色んなものを見ながら、

クリアさんの言葉を思い描いていた。

（そうだな、人間はちょっと、

贅沢過ぎるのかも知れない）

考えながら走っていると、意外と距離が稼げる、

気がつくと、僕等は関西国際空港の、何とかビーチまで、

やって来たりしていた。

「…海ですよ。」

ぼばん、とクリアさんは、

人間-美女の姿になると——しかし、

この頃つとに思うけど、見なれてくると、

美人ってそんなに大したことないなあ、

クレアさんは本当に美人だと思うけど、

もし顔だけだったら、あるいはスタイルが付くとしても、

そんなに、よい物件と言えるかなあ、

と不動産屋みたいにぼくは思った。

（人間って贅沢だ、

女のパーツを寄せ集めて、こういうのがいい、

と言ってる。下らないって、女に笑われた方が、

――ずっと、よさそうな感じに思える…でも、

女だってそうか？ 身長に、学歴に、収入、

ひどい奴なんか、それに加えて、優しさを求めたり、

性がノーマルだったらいいとか、言ってる。

まあ、不動産屋的男女の幻想…どうでもいいや！)

「ありがとう、海へ…連れて来てくれて――」

何を思ったのか、馬鹿クレア、

くねくねとしなをやりはじめ、ぼく、目をみはり、

何か新手的ダンスをしてるのか、とおもう。

しかし、そうしていると、コホンと、クレアさんは咳払いし、

「やあね、男って。」

と、わけのわからない暴言を吐いた。

「いや――急にどうして、くねくねしたのか、

気になって。別に、やらしい眼で見てたわけじゃなくて」

と、ぼく、ふつうに言った。

「ほんとに？…」

と、クレアさん、ヒト科ジョシコーセーの生態を、

ベンキョーしたせいか、ヒジョーに、マドモアゼルな具合だった。

「ほんとに、とか言われても、引きます。」

「でも…お礼は強調するのがいい、って、

おばあさん、言ってたわー」

たぶん、強調の仕方が、

間違ってるんだろう、と思われた。

「たとえば、ありがとう、と言うだけでいいですよ。

でもそれを、言わなくたって、ぼくは、大体わかります。

言わなきゃいけない、は窮屈だから、そこは、人間、

知らないふりをします。」

「日本人の鑑。」とクレアさんは言った。

「和の精神-他者をいかにスポイルするか」とぼくも応じた。

ざざ、ざざざ、と波の音が聞こえるまで、ちょっと歩いた。

「…でも、詩人さんー」

どうして人は動物みたいに仲良くやれないのかしら？」

「簡単です、人が人の天敵だからですよ。」

「なるほど。」

「…いや、前に本当にそう思ったんですけどね。

どうして自尊心肥大とか、自意識過剰とか生まれるんだろう、

どうして支配とか、束縛とかが必要なんだろうって。

パワーバランスや心理学…たとえば、言動とかね、

気になって、色々調べてみたけど、結局、

本質はそれじゃなくて、多くは、そうであるという飾り。

それが事実であろうが、そうではなかろうが、

大差ない…人が人を生きにくくさせているのは、

やっぱり思いこみです。そしてその思い込みの原因は、

ぼく、前世や、たとえば本能の中にあるであろう、

鑄型。そこに、かちっと噛み合う、ぼくらが嫌いな人、

好きになれない人。こいつは駄目だなって人。

天敵———そう思うことにしたんです」

クレアさんは、たぶん、考える表情をしていると思うのだけど、

なにぶん、顔がちょっと見えない。月も射さない夜のことだから。

「…人って駄目な生き物だと思う？」

「…駄目というより、下らない生き物だと思います。

折角の人生を台無しにしたり…でも、その台無しにする理由が、

個人の弱さからきてる。たとえば、A子さんがいるとする。

わたし、そんなに綺麗じゃない-自分を閉ざしてしまう。

でも目を見開いて、世界に目を向けたら、

綺麗じゃない、は小さなこと、価値観の相違…

世の中には、そんな人を美人だって言う人、たくさんいる。」

「なるほど。」と勉強熱心な、クレアさん、相槌。

「そしてこういうことって、何にでも言えます。

たとえば、クレアさんがいるとします。

彼女…ちょっと人には言えないような、不思議なもあもあなんです」

「もあもあ。」

「もあ子クレア。」

「もあ子クレア、うさぎ」

ぼくら、頭悪いことを話してるんじゃないか、

と思いながら——何だろう、この心地よさ…。

「でも、そういうのだって、少し時間をかけると、

なんだか、いいなあ…と思えてくる。

もあもあって、いいなあ、尻っ尾があるっていいなあ、

人間じゃなくてうさぎだったらいいなあ、

もっと楽に生きられたらうなあ、と思えてくる——

もちろん…本当にそうだったとしても、天敵はいるし、

嫌なことはあるだろうけど」

「でも、詩人さんのいわんとしてることは…

なんとなく、わかりますよ、あたしは」

とクレアさん——理解がありますよ、あなたは…。

「人の心の中に海がある。

そしてその海がどういうもので、

ぼくは、それを理解する——たとえば、ぼくの海は、

断崖絶壁の細い道が見える。そうでなければ、

嵐の夜に遭難する船…ぼくの海は、人が生きるうえで、

ほとんど敬遠したくなるようなもの」

「…でも、小さな経験だわ。

だって、その分、あなたの心が大きくなった。」

そう思う…最低、そうであってほしい、と思う——。

「クレアさんの海もそうだと思う。

——でも、海の本質は、穏やかでもあり、

優しく潮風をなびかせ、人の心を鎮めたりもします。

そして人生に疲れた人達に、

おいで、と優しく慰めてくれる母のような所もあります」

そして、その一瞬、

クレアさんの顔がライトアップされ、

彼女、やさしく目を潤ませていたのだ。



## うさぎさん、海はよいものかも知れないと気付く

---

——クレアさんと海……

さらに続くのだけれど、まずいなあ、クレアさん、

いやまずいですよね、クレアさん、とぼくは思った。

どうしよう……可愛い——。

「でもね、詩人さん、あたし、海が嫌い。」

ガクッときて、何だよ、それ、

もしかして目に砂でも入ったのあたし、ですか、

やってられないよ、ちくしょう、

と酒飲んでスルメかじっちゃうよ、ほんとに、な、ぼく。

「でも、詩人さん……」

「なんだい？」

と、すでにもうやけくそで、優しい声を出す、ぼく。

いま、いい雰囲気だったじゃん、うさぎというか、

クレアさんダメじゃん、そこ、そういうのじゃないじゃん、

とか、ぼく、思ったりしながら——肩透かし。

でも、彼女らしいと言え、彼女らしい。

「どうして、人は恋をするの？」

「それは——たぶん、あれじゃないかなあ、あれだよ、

うん、たぶん、あれだよ」

照れている時のぼくは、大抵、大体もうそんな感じだ。

あれ、と言っていれば、シモネタでも、真面目なことでも、

あれで済んでしまう人のある種の理解力の不思議。

「あれって？…」

クレアさんはやっぱり、目が潤んでいて、

もうあたし、このまま死んでしまいそうな女になりすましており、

そうか太宰治と死ねよ、と言えるような相手でもないので、

ここはやはり、真面目に話すべきだろう、とぼく、思た。

「たとえば、人生がつまらない時の処方箋ですね。

いわば、神様が作った-本能と完璧にリンクした、

人間にさらに負担をかけて成長させるようにした栄養ドリンク」

そう言うと、クレアさんは、首をかしげた。

「いや、つまり言えば、交尾ですね」

「交尾ですか？」

ふざけて言ったのだけれど、クレアさん、

俄然そうだったのか、と思われ、ぼくも、

フロイトのような顔を浮かべなければならぬ、と思った。

「いや、もちろん——そういうものだろう、と思うだけですよ。

男女関係の恋は、種族維持本能で説明できるだろう、と。

たとえば、シンクロ現象、フェロモン、DNAレベルでいえば、  
より優れた子孫をのこしたい、という声があります。」

そう言うと、クレアさんは少しシリアスな感じになった。

「生物学的に？」

「そうですね、生物学的にはそうだろう、とぼくは思います。

ただ、この国の理想主義者のひとりである、ぼくは、

恋と霊的学問を結びつけます-つまり、人間って、

地球のように丸くなりたい。」

あまりにシュール過ぎるというのに、クレアさんは、

なるほど、と肯くやいなや、ぺたん、と座り込んでしまった。

「だから、眠る時に丸くなるのか・・・」

段々、うさんくさい話になってきているな、と思いつつ、

ぼくはさらに続けた。

「そうなのです、クレア嬢、

我々は丸くなるために、笑顔でいなければならないのです。」

「そうだったのか・・・だからお婆さんは、お面みたいだったのか・・・」

こほん、とぼくは咳払いし、クレアさんを抱き起こした。

「でも、恋というのは、多くのところ、空回りします。

むしろ、ぼくなんかは、人の嫌な面が見え過ぎるくらい見えるのに、

誰かを好きになるたびに、そういうのが、見えないようになってしまう、

自分を恥じる――臭い物に蓋をすること、同じ原理ですね」

「ねえねえ、詩人さん、質問」

なんだか、急に、生徒と教師になるから不思議だ。

「……どうして、引きこもりっているんですか？」

というか、何故それを聞くかなあ、と思いつつ、答えた。

「恋をしてないからです――まじめに、言ってよいなら、

彼等が恋をできるような環境を用意してやれば、

すぐ、社会復帰できます……結局、人と人との問題は、

オッカムのカミソリ……単純なものほど正しいで説明できるでしょう」

ぱちぱち、とクレアさんは拍手したが、

なんだかぼくは、自分も引きこもりをしたことがあるので、

ちょっと彼等に申し訳ない気もした。でも、頑張れなくなる理由、

人と人とのことの傷付く理由、就職がうまくいかなかった、

とか――色んなことを考えていると、まるで答えが色々ありすぎて、

本質を見誤ってしまう……でも、ポジティブな面を発見できれば、

人って引きこもったりしない。それはきっと、障害者にとっても、

同じだろうと思う。この世界の変なところはたくさんある。

差別がもしかしたら――差別ではなく、逆に差別ではないことが、

差別なんじゃないか……と、思える瞬間があるということだ。

「ねえ、詩人さん……何か、素敵なことを言って」

拒否する！——と、なんだか、突然言いたい気持ちに駆られたけど、

やっぱり、ぼくも、クレアさんに惹かれてることを、

口にせねばならないのだろう…彼女には、不思議な魅力がある。

最低、彼女には…何か、僕の心を読むような所がある。

「おお、クレア！」

「…もうすこし、囁くような感じで。」

「うおおおおん…」

犬の鳴き声。

クレアさん、呆れた、という顔をしてる。

でも、さっき、君だって、すごくいいシチュエーション、

潰したじゃん、ぼくだって、潰したいじゃん、とか、ぼく、思た。

しかし、気を取り直して、

「…雲」とぼくは言った。

「雲。」

「人の心を知りたいという人がいる…でも人の心は霧、

知るためには、傷つくことを恐れてはいけない。

たとえば、人のことを分かりたいという人がいる——でも、

本当に分かるためには、人は、雲にならなくちゃいけない…

青空に浮いている雲のよさが、わかって、初めて、

人は人の心の中に、いることが出来る。」

「ふむ。」とクレアさん。

そしてクレアさん、何を思ったのか、

目をつむって、唇を突き出したりした。

「……」

ぼくは、もちろん、彼女がうさぎだと知っているのだけれど、

やっぱり、どぎまぎした。

「雲です。」とクレアさん。

「うん、蜘蛛だ。」とぼく。

ぼくの、それに気付いていないクレアさんは、

さらに、お続けになられた。

「…雲ですよ。」

た、たぶん——と、ぼくは思った。

たぶん、クレアさんは、何かお勘違いになられ、

人の心の中にいるための、雲に、

何故か、なられているらしかった。

でもこんな時になって、クレアさんの勇気というか、

暴走というか——素直さ、と言えればいいのか、

そういうのがどんなに素敵なものであるのかを思った。

「…クレアさん？」

「く、くっ、雲ですよ。」

段々、腹が立ってきているらしい、クレアさん。

なんだか、しょうがない感じだなあ、と思いながら、

ぼくも、やっぱりデートしに来てるんだなあ、と改めて思いながら、

唇を突き出して、頬っぺたにキスした。

「く、雲ですよお。」

ちいっ、なんというー粘り！

貴様、納豆になるつもりか！…

などという、台詞を言おうかと思ったけれど、

やっぱり、照れかくしはいけない。

唇に向かって、なんだかちょっと申し訳ない感じで、

キスをする…でもやっぱり、なんだか少し、不思議な気がした。

「うむ。」となんとか、すごいえらそうな、クレアさん。

「クレアさん、でも、ぼく、思うんですけどね…」

「ふむ。」

「—そういうのって、もっと時間をかけたりしませんか。」

もっと、奥ゆかしいものじゃないですか？」

「人間では、そうかも知れぬ。」

と、都合のいい時だけ、うさぎになりたがる、クレアさん。

「けど…想像してたより、ずっとよかった」

クレアさんの前髪をくしゃくしゃ、と撫でる。

額をすりよせてくれるような感じがあって、

なんだか、動物同士がじゃれあっているような感じがあった。

「…でも、詩人さん？」

と、クレアさんが言った。

「あたし、時々—人間だったらよかったなあ、と思うことがある。

確かにニンジンやキャベツは美味しい。キャロットジュースは好き。

でも…うさぎには、不思議な魔法のときめきがない—

きれいな服を着たいとも思わない、化粧も別にしたくない、

人間なんか好きじゃない…そう思う、—そう想っている自分が、

すごく正しいはずなのに、いつのまにか、矛盾を感じる。

簡単に割り切れない何かを手に入れてる気がする」

「クレアさんは…出会った頃から、ずっと、

人間より人間らしい—悩んで、苦しんで、でも、

それを選んでる気がします」

そう言うと、クレアさんが、耳元で囁くように言った。

もしかしたら、ぼくは、一番この瞬間ドキドキしたかも知れない。

「…海、いい音がする」

## うさぎさん、成長する

---

クレアさんのいる野原は、不思議な酔い方をしてる、

茹だるような、夏。燃える草の匂い。でも、近頃、

暑いせいか…クレアさんが、ぼくの部屋に朝まで過ごすパターンが、

増えてきている。うさぎの姿をしていると、

誰も半同棲だとは言わないけど、人間の姿になると、

それは、半同棲じゃないか、と思ったりする。

「お泊り会よ。」とクレアさんは、さっき、しれっと言った。

「――」

こわい顔を試してみるが、多分、クレアさんは、

平気なのだ。襲われても、たぶん、平気だ。

ぼくも、エロをしていいのか、いや、人間は理性、

でいるのかについて――

多少の誘惑を感じながら、天使と悪魔の葛藤…。

「なに？…」

人間-美女の姿になっているクレアさんは、

ぱちくりとする…絶対気付いているだろうと思いながら、

都合のいい時だけ、やはりうさぎな、クレアさん。

「――やっぱり、言うよ。」

「言わないで…言ったら、照れてしまう」

「いやあの、そんなこと、言いません」

「わたしもさすがに、うさぎではないので、照れてしまう」

——やっぱり、ぼくらの関係って変だ。変だけど、限りなく恋人だ。

でも、もちろん、キスしたりしない。だから、もちろん、やったりしない。

けれど、人間の姿をして…何を考えているのか、もちろん、

ぼくには知るよしもないことだけど、暑いからと言って、

肩出すわ、おなか出すわ、足出すわ…オオ、オカアサン、ヨンデコイ、

ナンデスカ、オカアサンヨ、ウサギヨ——と、腹話術してる場合じゃなく…、

やっぱりこれは、問題だ。

会話まで、なにか、ダルで甘ったるくなってきたしまってる。

「詩人さんの、パソコンを打つ音がうるさい話？」

ダイジョウブ…わたし、その音、嫌いじゃない」

「ありがとう、でも、そのことと違う」

「ありがとう、でも、わたし、

それ以外の話は、受け付けない耳」

「そうかい、ありがとう…お願いだから、

うさぎになってほしい、あなたは何故、人間の姿で眠るのですか？」

と、カタコトで喋っていると、急に韻を踏みだす、クリアさん。

「なにですか、藪からブラジャーに。

人間の勉強をしているからに決まっているではありませんか、とくれば」

「何故急に韻を踏む、とくれば」

「ありがとう、しかしわたしは人間の姿をしていないと、

いつまでもあなたに恋人と認められない、とくれば」

そうだったのか、と思いつつ、

そうされていると、ぼくまで変な気を起こしてしまうではないか、とくれば。

「何を言う、心の中の恋人よ、とくれば」

「おお、何を言う、心の中の恋人よ、と心にもない韻を踏んで、

優しくささやく、あなたとくれば」

…ぼくらは、ほほ笑み合い、ばかなことをやってるのに疲れて、

クレアさんの膝を枕にして、ごろんと寝ころんでみたりする。

「…どうしたの、とくれば」

クレアさんは、まだ、韻を踏んで、ぼくと遊ぼうとしていたけれど、

—やっぱり、うさぎだ、人間の女の子だったら、

こんな時、気の利いたセリフを言うと思う。

でも、そういうことに安心してしまふ、ぼくは、ただ、疲れて、

うさぎなのに、人間としか思えない甘い体温や、

その太ももの感触に溺れた。

「クレアさんがいると、詩が書けない。」

それは嘘だった。

ぼくはむしろ、いつもの二倍くらい、無理してでも作る。

詩が書けない理由を、何かのせいにするのは嫌いだった。

「…邪魔？」

でも、クレアさんは、そういうことを知らないから、

途端、顔が青くなる。

「いや、もう、殆ど今日の分は終わったよ。

別に明日に一回してもいい…」

「そ、そう？」

ちょっと、嬉しそうにするクレアさんを見ていると、

可愛いよなあ、と思う。しかしこんなことばかりしていると、

本当に、後戻りできなくなってしまうような気も、した。

「クレアさんは、ずっと、人間でいたいって思う？」

「…もちろん。」

クレアさんの心の内側まで、知っているというわけではないけど、

彼女がぼくに、合わせたい-近づきたいと思ってる気持ちは、本当だ。

でも、もちろん、ぼくはそんなことを望んだりしない。

彼女が人間であり、うさぎであり-しかし人間より人間らしいうさぎである、

という言葉で説明できる通り、クレアさんは、ぼくにとって、

そういう存在だった。

「一回でもしない？」

そう言うと、クレアさんは急にムツとしたように、ツンとし、

「…ここだけの話してもいい」と言った。

「いいよ。」

「――実は、ここ最近、あなたの家に押し掛けてるのは、

あなたに襲われないかなあ、と思ってるからなの」

プッ、と吹き出して、あわてて、ぼく、起きあがった。

クレアさんは、俯いて、伏し目がちに話した。

「ううん、もちろん…それにも理由がある。

わたし、あなたをうさぎの国へ連れて行ったら、

きっと、――もう、帰したくなくなると思うの。

わたし、何度も言わないけど、あなたのことを、気に入ってる。

こうやって、一緒に過ごしても、ちっとも嫌じゃない」

「うん…」

さすがに、話が話だったので――やる、とか、やらない、

とかいう話に落とすわけにはいかなかった。

そうか、君は…そんなことを考えていたのか、と…。

「だから、あなたが人間として接してくれるなら、

この際、いいんじゃないか、あなたと一緒に人間として暮らすのも、

いいんじゃないか…と、思ったりしてる。

あなたが聴く音楽、たまに観る映画、

あなたの読む本、あなたのパソコンを打つ音、あなたと食べるごはん、

——ひとつひとつはすごく小さな喜びだけど、

あなたはどうか知らないけど、わたしはすごく嬉しい。

すごく、大切に…思ってる。」

「う、うん——」

うさん臭いくらい、純粋な少女がそこにいて、

瞳の向こうには、本当にお花畑しかぼくには見えなかった。

「最低、わたしはうさぎに戻れば、嬉しい。

でも、人間として暮らせば、あなたの、したいことや、

たくさんの楽しいことを、困らせないで済む。

わたしは、うさぎ。別にあなたのように、何か、

したいことがあるわけじゃない…掃除もできない、

洗濯も、お風呂もできない、ご飯も作れない——

働いたりもできない。」

「——」

なんだか、ぼくは十代の女の子を騙して、

同棲しているような、変な気持ちになってきた。

けれど、クリアさんの瞳には、さまざまな人生の可能性が見えて、

そしてそこに、ぼくを必要としてる-あなたが欲しいという欲望が、

手に取るようにわかった。

もちろん、ぼくにそんな瞳をしたのは、

彼女、ただひとりだけだ、ということも、ぼくには、わかった。

「人間なんて、どうでもいい生き物だと、

あなたに会うまでずっと思っていたけど…あなたを見ていて、

わたしは考え方が変わった。あなたが色んな表情をしながら、

詩を書いているのを見て、あなたは、きっと、

うさぎにはなれない人だな、と思った。」

「いや、でも…」

「うん、わたしもそう思う。」

こんな時だけ、クレアさんは言葉を読む。

「あなたが、うさぎになりたい…人間を嫌いになってる、

それもすごく本当だと思う。——だから、そうなればいいなあ、

と思った。けど、正直すごく迷って…る、

実はもう、うさぎの国へ来てもいいよ、と長老から、連絡がきてる。

わたし、あなたにどう話していいかわからず、

いまのいままで…話さなかった。隠しごとをした。

嘘をついた。わたし、苦しかった。」

ぽろぽろ、と泣いているクレアさんを見て、

ぼくは——胸が騒いだ…。

「いままでのように、暮らすのも、わたしには出来る…

でも、あなたには生活がある。したいことがある。

そしてそれを歪めていいのか、わたしにはわからないの――

ほんとう・・・に・・・わからない。」

クレアさんは、うるんだ目で、ぼくを見た。

でもそんな目で、ぼくを、見ちゃいけない・・・ぼくは、

取り返しがつかないとわかっていて、そこに――踏みこんでしまう。

「一度、うさぎの国へ行ってもいい？・・・

そこでもう一度、たくさんのことを考えて――みたい・・・

もちろん、虫がいい話だけど、もう一度、ここに戻ってくる。

そこで、きちんとした結論を、君に話したい」

こくん、とクレアさんが肯いた時、

ぼくは、精一杯の誠意-あるいは好きな女性にそうするように、

目をつむってキスをした。

「でも、最低・・・君はもう、恋人だ。

だって、君はぼくの知らない間に、たくさんのことを抱え込んだ。

それも、ぼくのためにだ。そしてそれを、ぼくは今度から知りたい。

でも、知りたいからじゃない・・・聞かないと、こわいからだ。

そしてそんな気持ちをさせる誰かが、うさぎであろうが-何者であろうが、

ぼくにとっては恋人だ。小さなことはどうでもいい。

君は目の前にいる。そして君は去らない。なら、

もう一度、ぼくは君と話さなきゃいけない。」

ぼんやり—と、ぼくは思った…

もう、下らないことで、彼女を傷つけるのはやめよう、と。

彼女は彼女だし、それは、ぼくにとってのまったくの真実だ。

そしてその真実は、クリアさんを微笑ませる-釣られ笑いする。

どうしてだ？…どうしてその瞬間、抱き寄せたいと思う。

いやなにせよ、とぼくは思った。

理性なんて下らない-いま、ぼくとクリアさんの関係を滞らせ、

関係を隔てさせているのは、悲しいかな、その鉄の理性だった。

## うさぎさん、世界について少し語る

---

ぼばん、と突然人間-美女になって…

「詩人たん。」と可愛い少女風に言った、クレアさんは…

頬っぺたがにやけていて、笑くぼが出来て、すっかり、

、、、、、、、、、、

やらしい顔になっていた――

「…何だね、クレア君。」とぼく。

「あなたに一つだけ、渡さなきゃいけない薬があるの。」

「…ふむ。」

「――これ、呑んで下さい。」

てのひらに、正露丸のような丸薬があった。

「…しまったあ！ 水がない！」

「大丈夫――詩人さんの部屋でくすねてきたペットボトルの水がある。」

はい、これ、という風に差し出した。

ぼくは、じいっと――クレアさんの目を見つめた…

ニコッ、とクレアさんは微笑むと、わたし悪いことなんてしてない、

という顔をしていて、そうだな、いや騙されてるんじゃないよぼく、

と思いながら、条件反射はすでにプレイボーイなぼくも、ニコッ！…

てのひらにある黒と茶色のまざったような、丸薬を、

人差し指と親指でちよんとつまみあげると…呑み、

水で流しこんだ――あれ…何も起きない…

と、思った数十秒後、ぼばん、と、ぼくは、クレアさんを見上げていた。

ぼくの周囲には布があり、それはいわゆる、シャツとかいわれるもので、

いわゆるぼく――うさぎになっていた！…

「ほら、やっぱり二枚目だ。」

クレアさんは、ぼぼんとうさぎになると…いきなり、僕の身体をくんくんやりはじめ、

やめろよ――と、思うのに、気がつくと、ぼくの息子は、

すっかり攻撃態勢になっていた。

「やらしお。」

と、ぼくは、クレアさんに気付かれまいと、何故かはよくわからないけど、

ぐるぐるまわった。やらしお。やらしお。やらしお。

メリーゴウラウンド-やらしお…

「…どう？ うさぎ楽しい？」

「楽しいピョン、楽しいピョン」

と、ぼくは、駆け回り、しかしそれも、

たかだか勃起を隠したいがためなのだが――それでも、

段々落ち着いてくると、うさぎで一生過ごすのもよいなあ、

と思えてきた…それに――クレアさん、めちゃくちゃ可愛い…！

美人なうさぎだなあ、と思っていたけれど、ラビット・アイになると、

もうハートマークが百個は欲しいくらい…可愛い！――

そうすると、おかしなものだけど、ぽろぽろと糞が出た。

「あ。詩人さん、興奮してるのね…興奮してるのね！」

「違うよ――違わないけど、違うよ！」

ぼくはクレアさんに体当たりをかまし..そうすると、クレアさんは、

しゅんとして、でも、そろそろと近寄って、長い耳をすりすりとすりよせて来た。

(何だか、一一いま、あぶない状態です、おかあさん!..)

うさぎは年に四回もの出産ができるって..本当かなあ...

ぼくはすっかり、クレアさんとやりたくなってきてしまい、

そして、もういったいぜんたい、なんでちっともおさまってくれないのか、

わからないまま、ぼくは、クレアさんのまわりをぐるぐるまわった。

たぶん、うさぎ的本能のせいなのだと思うのだけれど、もちろん、こんな、

百獣の王ライオンが交尾した最高記録八六回という状態で、

あるいは、テントウムシは九時間にわたって交尾し続け、しかも、

毎日それを続けるとかいう蘊蓄を思い出すと、ぼくはすっかり、

穴を掘りたくなって一一うさぎらしく、穴を掘った!..

「どうしたのよ。どうしたのよ。」

クレアさんが、なれなれしく..いや、なれなれしいとかいう表現は変なのだが、

もう既にぼくは、カマキリのオスで、これからメスにいただきます、

といわれているような状態で、懸命に一一懸命に..穴を掘った...

恥ずかしかった一一でも、段々、うさぎって大変だな、と思えてきた..

「詩人さん..もう、うさぎの遊びはやめましょうよ」

クレアさんも、さすがに呆れてきて..いや呆れたいのはぼくで、

しかも、呆れたいのはぼくの息子だ。

「あ。」

と、クレアさんが目ざとく、ぼくの、隠したがっているものに気付いた。

ぼくは、すっかり慌ててしまい――さらに、さらに、穴を掘った。

しかしそうしていると、クレアさんは――ぼぼんと、人間の姿になって、

ぼくを抱きあげ、膝の上へ置いた。

立場が逆転しているとは気付きながら気がつく、ぼくの息子も、

すっかり、かわいらしい感じになっていた。不思議だけれど、落ち着いた…。

「詩人さん…気分を害した？」

、、、、、、

これはもちろん、あんに、そのことを仄めかしており…無論、ぼくは、

怒りたいのか泣きたいのかよくわからない緋い交ぜの心理で、

色んな意味で、ぼくは、すっかり疲れてしまっていた。

「いや。中々貴重な体験だったよ」

クレアさんにセックスアピールがあるというのは、きっと、よいことだ。

うさぎのメスなら、けして、恥ずかしいことじゃない。

でもそれは、クレアさんがうさぎだからだ。もちろん、ぼくがうさぎのオスだったら、

子供を産もうね、うんそうしよう、というスムーズな流れがあるにしても、

人間の場合は――最低、ぼくは…そういうのを、すんなり呑み込めない。

いやむしろ、こういうのをすんなり呑み込めたら、ぼくは、うさぎになれるだろう。

「できれば今度から、うさぎになった時は、あんまり近寄らないでくれる？」

「…もちろん」とクレアさん。

「――ただ、もちろん、避けているわけじゃなくて、

その…非常に色んな意味で、きわどくてあぶないから。」と、ぼく。

「…もちろん——詩人さんのうさぎ的貞操観念を尊重します。」とクレアさん。

「——けど、もちろん、クレアさんや…あるいは、うさぎというカテゴリーが、  
ぼくにとっての差別対象というわけじゃなく、あくまで、ぼくは、  
そういうのを、きちんと選びたい…ぼくは動物じゃない、理性のある人間だから、  
という意味で…だから逆に、クレアさんが、ぼくに従わなくちゃいけない、  
という、束縛じゃなく、あくまでも個人的範囲内の暫定的な処置として」と、ぼく。

「もちろん、詩人さんの理解を全面的に認める形で」とクレアさん。

「…なんだか、従わせるみたいで申し訳ない」とぼく。

「…いやいや、あたしも、ちゃんと説明すればよかった」とクレアさん。

「——なんだか…恋人の会話みたいだ」

「——ほんとね。」

しかし、クレアさんは、気がつくやうに、気の弱い女みたいな顔をしていて…  
それがなんだか、男性と女性の求愛行為による必然的な成り行きみたいに、  
ふと、僕には思えて——でも、感じるということが、あるいは、  
劇的な変化をもたらしてしまうということが、本能というものの恐ろしさであり、  
同時に甘美な毒薬なのだ、と思った…運命の赤い糸さえ、断ち切れるほど——  
、、、、、、、、  
うさぎになってみて、僕はたじろいでしまう…

「ねえ、詩人さん…あたしは別に、

あなたに覆いかぶさられて、やることやられても、理解できるのよ」

と、クレアさんは突然そんなことを言った。

、、、、、、、、  
それは根本的に、本能というものを強く理解した、動物的な意見だった。

「人はたんに…本能を誤魔化しているだけに過ぎない、という意味じゃなくて、うさぎにはうさぎの世界の話がある。たとえばあなたが、あたしを追っかけまわして、おしっこをかけたとする——そうしたら、あたしは、ああ、この人、  
、、、、、、、、、、、、  
あたしをモノにしたいんだ、と思う」

ぼくは、狡いとは知りながら、目を瞑って、寝たふりをした。

でもそういう行為を、無意識に取っていたかも知れない自分がいたことを、まざまざと思い出した——後ろめたく思いながら、うさぎは別に勉強しない、社会常識なんかない…差別ではなく、区別として、ぼくは強く思った…。

「…あたしはきっと、尻っ尾を上に向けて、服従する。」

それはもしかしたら、うさぎ達のシモネタにあたるのだろう、とぼくは思った。

——同時に、性の解放なのだろう…。

「もし、あたしがうさぎの時に、あなたの顎があたしの額の上にのせられたら、あたしは——とても逆らえない…うさぎにはうさぎの世界がある」

「…人間同士はそんなことをしない。ばっちり目が絡み合って、相手とやれる、とわかったって、すぐさま、次の行為に移ったりしない…いや仮にそうだとしたって、僕等は…最低、僕は…もっとロマンチックだ。」

ふっ、とクレアさんが笑った。

やっぱり寝たふりしていたのか、という笑いにも思えた。

「——実はあたしもそう思う…本能は種族維持のもので、それはフェロモンや、あるいはあたしのスタイル、顔、色んなものから、総合的に判断されて、あなたに性的な変化が起こる。」

あたしは詩人さんを気に入ってる…でも、それはなにも、本能だけを、

露骨に表現したものじゃない」

ふっと、ぼくは思い出しながら、声を低くして、話した。

「十代で先輩の女性から誘惑された時、逃げだすのに苦労した…

ぼくは男だったし—でも、人間でいたかったし…ただ、そうするだけで、

気持ちよくなって、それで何かが満たされたとしたって、本能は排泄欲にすぎない…

しっぽりと女性の内部で果てたとしたって、開放感なんか、きつくない…

愛情の確認なんかできない—欺瞞だと思えた…そして、気がつく、ぼくは、

ひどく女性が嫌いになっていた。化粧したり、スタイルがよければ露出を多くしたり、

流行と言いつつ、ただ、自分の性を後ろめたく思わない不気味さだと思えた。

きつと、ぼくが盛んに腰を振ったって、どんなに興奮したって、

それは動物の性質のさみしさ、と思っただろう…人間の卑しさが、どうしようもない、

その性の在り方が、ぼくには、気に食わなかった…十代の頃—」

もしかしたら性に対して、ひどく消極的な意見を嫌ったらしいクレアさんは、

突然、口ぶりを変えて、どこか怒ったように言った。

「うさぎで、そんなことを言ったら、本当にただの馬鹿。

あなたは、鍵を持っていて、あたしは、鍵穴を持ってる。

—でも、あたしは、人間であったとしても同じことを言うと思う…

あなたは、出したい-そうだ、それは排泄欲かも知れない。けれど、同時に、

生物の歴史が産んだプロセス…オスのあなたが、メスのあたしを、

ひどく魅力的だと思えたら、それはすごく素敵なこと…

そして、あたしはそれを、絶対に否定しない…うさぎだからとかじゃなくて、  
あなたがそうであるなら、あたしは絶対に否定しない。」

クレアさんの言っていることの方がずっと正しい—また、ずっと、大人だ…。

「…でもたまに思う、ぼくは、その先輩女性が、  
好きではなかったんじゃないか、と思う。

話したり、あるいは、色んなよいことを見つけている内に、  
そういう状態になったけど—結局そこまで行き着けなかったのには、  
ぼくの中に、何か、相手に対する理解できない種類の負の感情を、  
あるいは性のプロセスの暗躍を了解するほどの、無意識の感触を、  
ぼくはそこで持ったんじゃないか…と—そんな風に思える…」

「詩人さんの性的な性の考察。」

「でも…もし本能がなくて、もっと色んなものから自由になれば、  
という考えを、いつも、ぼくは持ってる—

ぼくは、たかだか反応のシステムにすぎない性に翻弄されて、  
女性の身体つきや、顔に騙される…」

「それも個性だと思える世界なら、ずっとよかったのに…  
うさぎの世界なら、そんなの誰も気にしない。考えたりしない。」

「自由にお互いを愛し合うっていうことが、  
どんな意味においても、ぼくはただしいと思う。

二人-つまりこの、二という数字には、鏡の意味合いがある。

だから、これは神を求める上でけして欠かすことのできないものだと、

ぼくは思う…でも、魂が正しいなら、本能を持った肉体も、

正しい。そしてそれを理解する、常識という名の鎖も正しい。」

「—でも、それなら性はただボディタッチという意見も正しい。」

「—うん、すごく嫌だけど…正しい…」

ぼくはいつも、性に対して、たとえば、精というもの、

あるいは、生命というものの盡きざる営みを思う。

でもやっぱり、何が正しいのか、ぼくにはよくわからない。

ただ、自分はそういうのが嫌だ、と思っていることは確かだ。

…理性をなくしたら、というのが嫌なのかも知れない。

僕は自分の中に潜む、もう一人の自分-情念を、直視できない—

「ねえクレアさん？ 少し眠ってもいい？…」

「どうぞ。」

「…ところで、眠る前に一つだけ、言っておきたいことがあるんだ」

「何よ？」

「—どうして、クレアさんは、うさぎから人間になる時、

服を着ているんですか？…」

読者からの素朴な疑問…

「企業秘密です。」

## うさぎさん、将来的にはエレベーターガールになってみる

---

クレアさんは、うさぎになると、

させられたくなくしそうであるようでありますまい、

——実に絶好調な、ぼくの曖昧語・エゴイストは間違いの知識、

多くのところ、不確実性の火花、導火線は少年の優しさと、

残酷さとの始まりだと思う——

「ふむ。」

と、クレアさんが肯き、ちょっと離れた所に立って、

我々はできるだけ幻想においてシンプルにすべきであり、

歩くように話すように、知恵の間違いにコマネチするコマネズミを、

考えたりするのであった。

(オヤジギャグかよ——)

「こっちよ……」と言ったクレアさん——

ぼくは、草叢の中を駆け抜けてゆくクレアさんの後を追う、

がさがさ——がさがさ……

草の燃ゆる匂ひがする——夜なるといへど、鼻につく、

このにほひが消えざる……

真実を求めている意見は都会の懺悔録に等しい。

「ここよ！」

そこにいるのは、罪深いメスウサギだった。

後ろから襲っちゃおうかなあ、悪いことを考えるなあ、  
しかし可愛いなあ…思うに、可愛いのを誤魔化するために、  
何かいけないことをやっちゃいそうなのという時に、  
わざと難しい言葉を使ったりするぼくというのは、  
実際、あるようでありますまいとしようとしたぜ。

.....

.....

クレアさんは、立ち止まった――

ぼくも急ブレーキする！…草叢の中で、  
そろそろと近寄ってみますと、小さな穴があいていました。  
穴は、実際、そろばんの隙間みたいに小さく見えました。

「ここに、ボタンがあります。」

「エレベーターガール！」

ロッカーなぼく。エレベーターガール、イエー、  
エラベネーター、へらでお好み焼きなんか食えるか、  
もんじゃ焼きだろ、エスカレーターガール！

…何言ってるんだ、ぼく。

「…でもその前に、この薬を飲んで」

「飲みます。それが青酸カリであろうとも！」

「トマトジュースでも！」

「パインジュースと見せかけたオレンジジュースでも！」

「…ねえ、」

と、クレアさんが、会話遊びを打ち切って言った。

「実は、さっき、あたし、あなたに飲ませた薬に、  
精力増進剤を入れたの。」

……トンボが飛んだ……

…カモメとかも飛んだ…

「じゃあ、もしかして——」

「まあよくある間違いっていうかア、さりげない失敗っていうかアア、  
その、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、というかア！」

「ふむ。」

と、ぼくは、理性を取り戻しながら言った。

でも、よく間違いじゃないというかア！

さりげない失敗ではすまないというかアア！

「でも詩人さんは、たまに羽目を外した方がいいのよ。」

「ふむ。…あの、それで、

そこにぼくの、自由意志とかいうのは？」

「あるわよ！…もちろん、ところで、これ、中和剤です」

誤魔化しに満ちていたメスウサギ！

うなぎのようなメスウサギ！

くらげのようにふわふわしてる、耳にメスウサギ！…

「ありがとう」

ごくんと飲むと、嘘みたいに、

身体がすっかりクリアになってきた。

なんというか、優しい心持ちになってきた。

「感情の実験です。

わたしたちは、本能的なものに感情を作られている」

「ふむ——あの、それで、

いつ、ぼくは、その実験に参加したのでしょうか？」

「ふむ…男のくせに、そんな小さなことを気にするなんて、

ケツの穴の小さなオスウサギ。」

「ふむ…悪いことばかりするメスウサギ。」

「ふむ——でもそんなことを許すのが男の寛大さじゃないか、

と思うのだぞよメスウサギ。」

.....

.....

「クレアさん、

この薬は何なの？ また、精力増進剤？」

（あ、笑った——）

「酸素ボンベ代わりになります。

…ボタンを押すと、不思議の国のアリスよろしく、

長いトンネルがあり、でも滑り台風に改良され、

お尻に段ボールを敷いて、滑り下りてゆきます」

「…ねえ、地上には？」

「地上には専用のエレベーターがあります。」

「ねえ、」

と、ぼくは言った。

「ねえ、地上には専用のエレベーターがあります、  
じゃなくて——それで、うさぎの国まで行ける、  
エレベーターじゃないかと思うメスウサギ。」

「メスメス言うと、段々と、  
反抗したくなるのよオスウサギ。」

(…あ、クレアさん、笑った。)

こほん、とクレアさんは咳払いした。

「最初だけ、こういう方法もいいんじゃないかと思って。」

「うん。」

「——ねえ、詩人さん、怒ってる？」

「…怒ってないよ。」

「いえ、それは怒っている眼です。」

「怒ってないよ。本当に。」

「…じゃあ、仲直りね。」

「というより、元々、喧嘩してないよ。」

「仲直りに——この精力増進剤の薬、  
もういっぺん飲んでくれる？」

.....

.....

ぼくは、もちろん、クレアさんに襲いかかり、  
ヒヤッ、とか言うのをしり目に、  
がうがう、とウサギらしからぬ雄たけびをあげながら、  
クレアさんを組み寄せ、額の所に顎をのせた。

「冗談よ。どいてくださる、ライオンさん。」

「いいや、駄目だ。」

しかし、クレアさんの瞳を覗きこむと、  
なんだかむしろ、誘われてるような気がしてきた。

「アン。」

「いや、アンとかいうこと、してないし。」

なんだか、赤毛のアンまで、違う発声の、  
アンみたいになってるし。」

——支離滅裂・支離滅裂だけれど、

大体、うさぎになってから、

そういうことしかしてないな、とふっと思った。

「ねえ、実は、楽しい？」

と、ぼくが、聞くとニヤニヤしたクレアさんが言った。

「ちょっと。」

ぼくは、クレアさんを組み寄せるのをやめて、

背中についた土を、ぱたぱた、と払ってあげた。

もちろんだけれど、ぼくの、前脚はちゃんと使えます。

もちろん——そんなこと、誰も聞いていなかった。

うさぎうさぎどっどこむ、ていきょうは、どくしゃさーびす、

さーびすせいしんの、けーえーえむおーえむいー。

「それじゃあ、行きましょう」

ボタンを押すと、パカッと大きな穴がひらいた。

クレアさんは、とことこ、と穴の中を覗きこむと、

よいしょよいしょ、と大仰に段ボールを取り出した。

「落ちないように、ちゃんと、

安全ベルトもついています。」

むちゃくちゃ、切れやすそうなロープだった。

「…ねえ、」

と、ぼくは言った。

「気のせいかな…そのロープ…いや、安全ベルト、

ひとり分しかないよね、気のせいかな。」

「大丈夫、がんばればなんとか出来ます」

…そうだね、頑張れば何とか、

出来ねえよ！！！！

「ほら、ぶつくさいってないで、装着してください」

「します。しました。」

「あ、あたしも装着させて下さい」

「これ、二人用なの。」

「一人用です。」

しれっと、して、言った。

むんぎゅむんぎゅ、とクレアさんは身を押すつげながら、

ぼくが抱っこをするような形になった。

「では行きます。」

「行こう。無理矢理な感じで。」

「あ、このオスウサギ、心の狭い感じで、

あたしを非難しているような気もしないではない」

「あ、気のせいですメスウサギ、メスウサギ、

反抗的な、メスウサギ、それは気のせいです」

(あ、笑った一一)

すうっ、と侵入する嫌な気配のあと、穴がぱちんと閉まり、

それは爪切りのような音を立てて一一

ずうううう、と滑る気配が始まった。

長い夜に一一なりそうだった…。

## うさぎさん、それとなく寝てみたりする

---

「クレアさん…ぼくは思うんですけどね…」

と、言ったのは、かれこれ、十分くらい経ってからじゃないか、と想う――

ぼくの身体は、ぐぐぐっと変化が起きて、人間に戻り――あ、という間に、

蔵閣の長い滑り台から、ひゅう、ガタン、ドコッ、と音を立て、

トロッコのようなものに乗こみ、乗り込むと再び、ドコッと背後で音がし、

――どうやら、そういう仕組みらしい…でも、不自然だ。奇妙だ。

(でもそれに勝てるか勝てないかの問題じゃない！)

[そうだ――慣れるか、慣れないか…だ！…]

クレアさんは、抱っこしている内に、何を思ったのか、

ぐう、と狸寝入りをされ始め、そしてやっぱり、人間に化けて、

かなり不自然に――眠っておられた…寝ておるのじゃ、とぼくは思った。

もちろん、クレアさんは、ぼくの言葉に返事なんかしなかった。

「勝手に喋ります。」

(喋れば?…)

と、言いそうな、クレアさんの声を想像しながら。

「ゆっくりとしてゆるやかな変化を、人はあんまり望まないのかも知れない」

クレアさんは答えないので、頭を撫でてみたりする。

近頃の眠っている、うさぎは…うへへ、うへへ、とか言うみたいです、お母様。

へべれけ人形、という文句を思いついたりした。

しかし、例の如くだな。

ぼく一流のセンスの中では、さほど、素晴らしいとも思えなかった。

「クレアさん、人生を肯定するのは、楽天的な態度だと思う。」

「そうよ。」

――彼女は、いつだって、生命のともし灯。

(混じり気のない、濁りのない、澄んだ瞳をしてる。)

だから、彼女の声は、目が覚めるドアベルと同じくらい愉快だ。

半笑いになりながら、

「眠ったふり、してましたね。」とぼく。

「死んだふり。」とクレアさん。

「熊ですか？」

「人は大体のところ、熊みたいなもの。」

――金属を精錬する、精神を醇化させる…

浄らかに高まるまま、ぼくは、嘘偽りのない、自分の心を探そうとする。

治癒-回復という手続きの中で、緊急直結電話-ホットライン。

(懐妊した時の聖母マリアの表情を…想像するような…)

「小人は夜、家に忍び込んで素敵なお仕事をする。」

「小さな花ね？」

「そう――」

(嘘だ、ぼくは、トンカチを持って、

真夜中に、かんこち、かんこち、とやる小人のことを考えていた…)

「そう――きれいな花が…」

(枯れた、皺涸れた…しゃがれた、内側に熱気のこもった声にする。)

——そして、後には、何にも言えなくなる…

満たされていた、普通のやり方とは少し異なるけど、既に人間でもないけど、

ぼくは満たされ——ぼくは不要な自由…嘘に覆われていない世界を、

望んでいた。それは違和感がある。そうだ、外国や異国という響きと違う、

常世…非日常だ——でも現実と離れてゆくことで、花が、何処にあるのか気付く。

「そう——きれいな花だ…」

ぼくは、クリアさんをすっぽりと包み、まるで終電を逃してしまった恋人のように、

途方にくれた二人組が——そうするみたいに…

縛られないこと、呼吸するみたいに人の心を休ませることを、

社会が忘れてしまったことに、ふと思い当たる。

(恋が、) ——あるいは、《愛が》…

嘘をついた瞬間、人はただ、きっぷのよさ、相手をなだめすかす包容力に、

誤魔化される。浮気や不倫はきっと、そういう種類のものだ。

——人は、変わらなければいいのに…いつも、相手にとって、

特別でありたいと、そう想い続けていればいいのに、

そう、そんな時に(小さな花)が——《心の中に咲く》のに…

まるで抜け出せない蟻地獄の中で、もがいているようだ——

でもそんなぼくの心を知ってか知らずか、クリアさんは、何も喋らず、

あとは、ふたたび、ぐう、だとか、ぐおお、だとか、

わざとらしい、躰を立てるのみだ…

「（出口は見つかるか？…）」

誰に言っているんだろう——自分に？…それとも、自分の中の誰かに？…

声は虚ろで、ハンドクリームみたいに、こすっている内に、てかてかした指になった。

きっと…と、ぼくは、何故だか、そうしたくなって、

クレアさんの胸を揉みながら、（順応）——あるいは、《適応》…

「（きっと、ぼくらは——心のどこかに、

裂け目があると信じてるんだけど、そうじゃなくて、

実は、小さなひび、夏の公園の正体不明の黄色い砂で死んでるミミズみたいな、

列に加わって、その小さなひびの数を増やしていくんだ…）」

クレアさんは、それにしても、意外とデカいな…

うさぎさん、モーツァルトな世界へようこそ、と言う

---

らせん階段のカタツムリ、天の川だけの銀河・トロッコは、回答なし。

"はい。"

"はい。"

"はい。"

——睦みあう前戯。性質に深く浸透するドレス襞の花。裏通り——背中に描かれた模様。

彼女は朝のそよ風に揺れる、蜂のようにブンブン揺れる。喜びと生命の完全な美しい、暖かい

夏の日。悲しみや苦しみの秋・

フタの穴、鼻の穴、息の穴、洞窟の穴、もしくは [穴、]

(穴、) はWE

"はい。"——*We will!*

"はい。"——*We were kissing, weren't we?*

"はい。"——*We can talk as we go!*

…僕は。王冠の名声。眉のととのえ。

「ととのえてどうするのよ」とクレアさん。

ととのえて、レオタードを着る-

ああ、言い間違った**タキシード**なお年頃。

「しっ、クレアさん、また襲いかかるよ…いま、ゴルフクラブを握って、あの、穴の中へとゴルフボールを入れなくちゃいけないんだ。」

クレアさんは、いま、美女の姿から、ぼぼん、とうさぎに戻った。

そうして、クレアさんはうさぎになる薬を渡してきた。

「いまだけはちょっと、飲んでおいて」

いいだろう、とぼくは思った。

彼女がいない場合、それはあなたの背中に羽がないようなもの。

「うん。」

自然に幸せになって彼に与えられたすべての手段は本能による車輪の駆動。

——トロッコを降りると、あたり一面に花が咲き乱れていた。ガス欠か？——減速する…

世界は田舎のように徹底的なグリーン・エメラルド。動物は、おそらく、うさぎだけしか

いない、という、かなり偏った方舟の中、ぼくらの目の前には、数十匹のうさぎがいた。

ととこと、と、いつか夏になる——続きは明日！

「ねえ、詩人さん、うさぎの国よ。」

——そうだ、ここはうさぎの国だ

日曜が来れば、月曜は来る——

ベンチの下から猫を取り出す（冷蔵庫の、ペットボトルのように、）あやまってうっかり

、うさぎがこぼれる——のだ…

のだ！ の-だ！

のだ！ の-だ！

…って何、動揺してるのぼく！

「こぼれない。」とクレアさん。

「でも、うさぎの国だ。」とぼく。



「いや、わかるのか、オイ。おい、わかるのか王様」とクレアさん。

——というか、そんな奴いねえよ。

それにしても、こんな口のきき方ができる国というのは素晴らしい。

「いやあ、ナハハ…一日二食の菜食主義者」

とうさぎ王は照れ、もちろん、うさぎの顔をして、喋って-そう、日本語をしゃべって、シユールなことに、…その間、うさぎの薬を飲んだぼくは、うさぎになり、彼は、一日二食の菜食主義者であることをアピールした。

でも考えてみると、うさぎはみんな菜食主義者ではないのかも知れない。

と——いきなり、ジャックロンドンなワイルドさ！

「やあや、これは非常に二枚目なうさぎ。」

「いやいや、王様も非常に素敵なおじいさん。」

…僕等は、その瞬間、タクシーに乗れるかと言って、長距離タクシーに乗っていた。徹底的にワイルドなアメリカ横断を考えていた。そして僕等は、ポーとボードレールが両方、世の中にとってはたんなるアルコール中毒者にすぎなかった、と思った。でも、ポーとボードレールが違うというぼくでも、ポーとボードレールが、両方とも人間として生きにくかったことは、うっすらと感じていたので真夜中の幽霊地下鉄でヘブズゲートをくぐり、第三次世界大戦という名の永遠の共産党に怯えながら、僕等は有刺鉄線のはりめぐらされ、強制労働のさなか、クタクタにつかれながら、隣に、ふと、時間がない！…と書いた天才数学者ガロアを見たと思った。あるいは結局破壊兵器を作っただけのノーベルの愛と痛みを見たと思った。——そんな、頸動脈を時計にして、野性の呼び声…ぎゅっと、王様とぼくは、握手をし、たったらたったらと少しワルツし、『やっぱり、チョッキを着てくればよかったな』

『でもうさぎはやっぱり、普通の空気が純粋な成分』（と、）たった一瞬の間に、数十年分の研究-たとえばエジソンが九千回も実験をして十分な結果を得られなかったにもかかわらず、いや、成果はあった、と言うように――僕等は、前向きになること、そして知りたいと考えること、頌め称えること、相手を認めることは文化的な儀式とばかり、そういえば、こんな小さなふるえるような感動ひさしぶりだな、でもクレアさんからいっぱい教わったなと思、そんなよくわからない酸っぱい想いをして、思いあまって抱擁し、セレモニーは終わった。最終的に、王様はよい人で、ぼくもよい人でありたいと思った。

のだ！ の-だ！

のだ！ の-だ！

[ゼリーは話していた]

あなたの手とあなたの口を見てください！

なぜそんなにこだわる？

…スプーンやフォークやナイフ、箸…でも手がある、手づかみで食べられる。何だったら、あなたはそのまま口を持っていけばいい。なんだったら、そこにお尻を寄せたっていい。どうせ出てくるのだ。

何が出てくる？…た、たまご？

「クリアくん。人間観察のお仕事、ご苦労さまでした」と王様。

「あんがと。」

…本当にいいのか、本当に王様として敬わなくていいのか、と心配になるぼくをよそに、おら、肩揉めや、といわんばかりのクリアさんをちょっと見ていた。というより、クリアさんは、さっきから、ぼくのことばかり見ていた。

ほぼ同じライン上に、動きや様々な組成物…音符のようなもの、ワカメなもの、あるいは、黒とか白なもの。

(ぼくは、抽象的な思考の中で、モーツァルトは偉大だ、とおもった)

いいから、AとBとCを押しながら、裏ワザを始めるんだとぼくはおもった。

その内に、オセロで白が殆ど黒に一気に変わる。柵を乗り越える機会を得て、現実は崩壊する。そうだ、狡猾さと機知の奇跡は連続する。

(絵本の中で、挿絵が動く…)

うごく、うさぎ-うさぎ国民たちは、そろそろ、と可愛く何処かへと歩き去っていった。そこには一切の規則性がなく、たとえば羊飼いを追いかけているライン川の震え。あるいは、夕暮れを追いかけている、無数の瞳、Sunset…

[たとえ、これからサイコホラー調の物語が始まっても、おかしくない]

セレモニーの間中、ぐう、と鼾をかいていたらしいウサギは完璧にオチたままで、やっぱり眠りこけていた。そこには、うっ…うっ、おっと、涎れがというような、昨日ちゃんと寝なかったの?…というような、やりとりはなかった。

でも、もちろん、いわば、そうですね、そうですね、そうですね…

ですね、もしこれが人間社会だったら、誰もが話を停止。

(もし仮にうさぎの軍隊があったとしても、やっぱりこんな光景が見られるのかな?)

…規則正しい生活で八十歳まで生きた禁欲主義者にして純粹理性批判のカントが見たら、おいおい、上着のボタンが外れている、と講義中みたいに狼狽するだろう。いや、秩序ある社会を希望する人々にとっては、血のたれてる旧約書の一部かも知れない。

厳粛な足音の冬、…人間は隠れた。

結晶結露する、深紅のフィン—無力な、不名誉な古い時代に突然、南風が通った。光はそれを解剖した。そして明るく調和のとれた世界を激しく糾弾した。毒煙の中のオパール、そよ風の中の埃…司祭の難解な教義—一人は隠れ、動物が現れ、魚が無数に死んでいた。

永遠のタイタン、特徴的な才能の文字が猶予…地底に閉じ込められた古代の神…

揺さぶる心は狂ったように打っている！ Shadow…

[色彩の豊かさ、明暗の魔法、表現の正確さ、]

モーム、花嫁募集の広告を出す。

「一応、夜には歓迎のパーティーをするので、よかったら、来て下さい」と国王。

自然人類全体の原則、および解放の永遠の魅力、とぼくは思った。

「もちろん、来たくなかったら、行かなくていいのよ。

強制はしないの。」とクレアさん。

「あんがと」とぼく、クレアさんの真似。

「あんがと」と王様も言う。

「でも行きますよ」とぼく、すぐに。

すぐに、――ハイパーシナリオプレイ、パズルバルブは回したか！

…感覚に触れる塗料の甘さ、はげ落ちた青の落下。禿鷹を読み解く、流星――ダリは言う、自分は天才、でももう一人の天才は自分の妻…気にするな、合鍵をくれたアパートの女なら誰もが美女になるエンディングシュールなグラフィック一覧。

(あまおとがするわ。)

あまいおと、とかくのね、甘音…

いいやかかないよ、あめのおと、と、かく、雨音…

(でも、そんな、しんきろうをみていた。)

都市というより田舎にひとしい、町の中で、ぼくは、ふと、クレアさんとかわした言葉を思い出して、胸が締め付けられたことを思い出す。フランクリンの避雷針みたいに、役立つことと、役に立たない日々の暮らしの中で、ぼくは、クレアさんとの会話を思い出す。ねえ

、雨の方は大分前にあがった。雲は少しあるけど、太陽がまぶしいくらいだ。紫陽花みたいに色を変えて屈折する散乱を見ながら、

（あまおとがするわ。）を思い出しているぼくは、

――たとえば、商店街にあった町の小さな写真館-カメラ屋にあった、何処かの、きれいなお嬢さんの写真を思い出しているのかも知れない。センチ過ぎる。

（でも、あまおとだわ。）

…幸福を恐れたドストエフスキよ、ぼくもまた、束の間の幸福を握りつぶす超然たる病気が欲しい。意志ではなく、罪の意識という病気が――

世界がたとえ、この瞬間終わっても、ぼくは、

ブブーッ、ブブーッ、ゴゴ、キキッ！…

「…それで、どうですか、うさぎの国は好きになれそうですか？」

着々と進む、うさぎの国移住の話。

ぼくは、こくん、と肯きながら、何だか本当に、馬鹿馬鹿しいくらい、何かすごく色々なものがきれいに抜けている-あるいは、くりぬかれているような印象を感じた。たとえば、東大との確執をした牧野富太郎の自由奔放さ。

あるいはセザンヌの農家で起こった火事-自分が炎の研究をしたいばかりに、銃を取り出し、消防士にすごむ彼。そして農家は燃えつきる/でも子供時代のセザンヌには、同級生のゾラがいた。貧しいゾラ。ある日、このゾラと話している所を見つけたセザンヌは、同級生にぼこぼこにやられてしまう。それを知ったゾラはお見舞いに、籠いっぱい的林檎をプレゼントした。セザンヌに林檎の絵が多いのは、ゾラの顔を思い出したから？…

——（が、）ぼくにはあった。

ぼくは、多くの人とちょっと思考回路が違うし、人よりちょっと時間がかかることも感じていた。時には恥じた。でも、重要なことは一瞬にある。たとえその選択が間違っているとしても、そこで感じたこと、考えたことは、波の崩れた後のように、やがて心を濡らす。

王様は、ぼくが肯いたのを見ると…微笑み、ぼそぼそ、と囁いた。

「実はね、わたしも昔は人間だったのだ。」

——（が、）ぼくにはあった。

時計じかけの林檎…

ねえ、手塚治虫、ぼくには、わかるんだ、アンタはたぶん、暴力的なまでに人を蔑んでた。うまく言えないけど、感じるんだ。ぼくにも、そういう所がある。でも、同じくらい、自分の中に、処理しきれない種類の人間に対する好奇心があるんだ。それを、愛と呼べるのか、あるいは本能と呼べるのか、考えてる——いまのぼくさ…何千年も、何万年も、知性がある生き物に、じいっと覗きこまれてるような気分。ねえ、アンタは、それを見たかい。ゾッとするぜ。でも、惹かれるんだ。頭の中が全部、見透かされてしまいながら、だから、見透かされまいとして色んなものを夢中で考える。強迫観念のようにある。下着の中に、まったく別のものがある、そういう気分さ…ああ、アンタ、愛なんて甘っちょろいもの、信じてるのかい。本能は、それより強いぜ。でも、本能の奥にまだ見ぬ、何かを感じるんだ——宇宙の開闢、まったくの虚無、あるいはまったくの愛と呼べそうなもの、笑いそうな、そして、世界中に原子爆弾を落とせそうな気分なんだ。一体何を守ってるのか、何がそうさせるのか、長いこと考えてきたけど、わからない、そうさ、わからなさすぎて笑える…

——（が、）ぼくにはあった。

古い手帖の中のブラックコーヒーの汚み…

うさぎさん、まちにすむひとびとや、かいわさと、あとみっくはあと

---

### the opening act

疲労、熱、足が地面に固定されている。胡乱な表情。

耳に鎌を投げた、嘘の建物！で…僕等はジャケットのボタンを外していた。

だむだむ…だむだむ…

シャツの襟を立てる！と…夜の鑪、駐車場の壁。うめき声、ため息——漠然とした影

と光。監視カメラがある。ダンスもしていた。バスケットボールもしていた。一杯飲んで仲

直りもした——偶像崇拜-集団幻想を犯す僕等の武器。悪魔（は、）

再三の要求を宣言。

要求を宣言。

宣言。

「えっ、」とぼく。

口蓋に触れる舌が味わう溝——排水孔には、鼠の鳴き声。

音節、はるかに少ない信号…。

…注意は静けさの中で……*Mirror*の外観…

……根を越えて…（そう、）茂みを通して……

「本当よ…昔は外資系の会社に勤めていたの。英語ぺらぺら。海外勤務してたこともあるのよ。でも、ある日、野原であたしとあなたのように、うさぎに出あって、いま、ここで王様してる。うさぎ達はよくも悪くも、何かを能動的にやるってことに長けているわけじゃないから、きちんとやってくれる人は、そりゃ王冠をかむらせて、王様」とクレアさん。

「…なるほど」とぼく。

人間社会でうさぎの飼育をしていた-あるいは知っていた人が、こうしてうさぎの王様になる。なんだか、タイムマシンの手続きみたいだ。科学的な交渉をいくら入れた所で、現在の時間を脅して、別の時間へと行ってしまっただけのことだ！と思うのは、どうして？…

地獄の風、野生の風、平手打ちする血液凝固…

おいしい夏の空気は、穏やかな静けさに似て、蜜蜂の眠気だ。

## Act 2

頭の上のいがぐり。蟹のいる葉の赤さ。足指の痛さ、背伸び

(修正を抽象化し、擬人化した後、幸福が印刷される…)

水玉模様/市松模様/格子模様/千鳥格子/縞模様/矢絰

雷門/青海波/唐草模様/麻の葉模様

『酔っ払いが喋っている、千の天使…』

「あ、パソコンとかもありますよ。…いちおう、人間生活で出来ることは、殆ど出来ます。ただ、人間をしていた…頃に比べると、最初はちょっと物足りないことがあるかも知れません。でも、我々は悪意がないし、誰かに何かを強制しない。争いも起きない。あなたの好きなことを好きなだけやっていただいて結構です。ただ、一つだけ犯してはいけないのは、我々のことを、人間に教えてはいけないこと、それだけです。その場合、我々は最悪、あなたを殺さなくてはならない。これは脅しでも何でもなく、あなたを殺す。」

## Act 3

点滅。冷たい水の頭部-あるいは底の見える何処かにある解釈のKey

『キャバクラはないけど…ストリップ劇場ならあるよ』

(うさぎ達も、口笛を吹いて、ビール飲んで、やらしい顔するのか)

装置はすべて正常だ。すべて準備完了だ。スタートオーケーだ。

——ようこそ『STARDUST』へ…

むふふ、と変な笑い方をする、うさぎ、見るからにオッサン。

向かってきた球をゴールキーパーがこぶしではじき出す！

リードは、音を出すバイプレーター！

『お兄さんも好きですなあ、安くしとくよ、』

(ウサギビームにやられて、ぼくは鳩、ぽっぽのぽぽぽぽぽ)

「承知しました。」とぼく。

しかしそう言うと、王様は、ぽんぽん、とぼくの肩を叩いた。

「でも、もちろん、君がそんなことをする人かどうかは、クレアくんからよく聞いている。

君は選ばれて、ここに来ているし、君がここに住むなら、我々にとっても、つまり文化的にもよいことだと思ってる。ただ、時には竜宮城へと行ったウラシマよろしく、人が淋しくなることもあるだろう。でも、我々は、基本的に孤独であるものだし、それゆえ基本的に相手に対する盲目的な信頼を持ってる。これがうさぎの考えです。」

#### Act 4

ゆっくりと回転する頭、アスキーアートがイラストに思えるストアで

クレア：ねえ…ねえン…肩ひも外して下さる？…痛くって——

ウサギプレイ・うさぎプレイ・うさぎプレイ・

へっぽこ詩人、やらしい詩人、何だか唾を呑み込んじゃう悪い顔の詩人、

なんか、鼻から出とる！ なんだか、青い目しとる！

クレア：あの…それ、どういう——

再三再四の要求を宣言。

いわば唯一無二。

宣言。

「なるほど、素晴らしい。」とぼく。

太鼓で街からたたき出そうよ、ビール党！…

いや、とぼくは言い、すぐに訂正した。

「コントラストとハーモニーは唯一のガイド。」

(あるいは、良い味を、復元する展開。)

キャバクラに、インテリアショップに、ショーパブ、

書店や、マッサージ専門店、レンタルビデオ店、

バー、コンビニ、薬局…多角経営が基本——

### Act 5

うさぎの国に、新しいことを導入したい、と話す詩人とうさぎ王

『ボウリング場にゲームセンター、すし屋に、韓国料理店、』

(アイスクリームショップ…バッティングセンター)

…それで、うさぎの国がどうにかなってしまうとしても、

新しい時代を作るなら、昔のままではいられません——

『将碁やチェスやオセロ…まだ、わしは好きだ。でも、わかる』

(コインロッカーも作りましょう。公衆電話も、)

《そして、電気自動車のタクシーで、もっと都会化を…》

「いずれは、少しずつ人間たちをうさぎの国へと移住させていきます。アーティストや、

音楽家、演劇、色んな最高水準の文化を、取り入れます。…そして、我々は好きなことをする。もう嫌いなことは誰もしない。好きなことを好きなだけやり、正しいことをいつまでも正しくやる—もちろん、議論はします。争いとはいかななくても、小競り合いだって起きる、でも、進歩する概念と、適者生存は違う、嫉妬が違うことはあなたにならわかんと思えます。…あなたなら、もう望んでいたことかも知れない」と国王。

「…あの、いま、うさぎになって幸せですか？」

うまく言えないが、ポケットから小銭が出てきて嬉しいような気分、と王様は言った。

「—幸せだよ。ヨガとか、瞑想とかもやってる。仏教も調べてる。宗教についてたくさん調べてる。宇宙人…あ、ここには宇宙人がやってくるんですけどね、神様との話をしたりしてくれます。宇宙がどれだけ広くて、世界がどんなに狭いものか教えてくれます。」

「なんだか、聞いていると、いいことばかりですよね」

## Act 6

ぼくと、クレアさん、話す。彼女の、小さい、あたたかな家

『あそこが、ベッド』

…ベッド、とやたらと強調していた。

だむだむな感触、もあもあ、ふかふかのベッドに寝転がるクレアさん。

『どうする？』

我々はもちろん、その、どうするの意味を哲学的に考えたのだった。

どうするは、どうしてうさぎ達の退廃ではなく、うさぎ達の楽園的態度…

(真夜中のガンダーラ、秘密の夜遊び道場スマイル…たこがに合戦—)

『トカゲ、カエル、サンショウウオにでもなった気分だ』

そうすると、クレアさんは、いわくありげに、パンとトースト、

パントスト…パンスト、と変な呪文を唱え出して、ぼばん！…

「…そのはずですよ。でも、それがいいかどうかは、その人の考え方次第です。我々は、あなたが何にもしなくても、よいと思ってる。」

「詩人さんは、働き者よ」とプンプンする、クレアさん。

一度ここで…ステップオーバー、私はあなたにスーツを与える！

うさぎさん、それはわたしだと、それはあなただと、こころのなかでつぶやく

---

(静かに、気になる。)

(人って、何処で、その気になる。)

...そっとさ.....そっと、風が動く...

.....そして僕等は、*風の中で*、本当の答えを聞く...

「知っていますよ。・・・クレアくん。ただ、我々には本当にそういう所がある。実際、あなたがそれでいいのだ、と言うことは、いままでの人生を否定することになるかも知れない。一体あなたはこれまで、何の為に社会で働いていたんですか？ どうして、我慢して、睡眠時間を削り、世のため、人のためと言っていたんですか。安定した暮らしがここにはある。人類愛から――うさぎ愛に移り変わる。」

「そうですね、・・・」とぼく。

.....先祖から非常に異なっている、文明の進化。

.....革新的な強度を有す、陽気な曲の中。

向こう見ずな火災を見た..そしてそれを拒否する者たちの声の前で――

不幸を選択し..人は呪われる――全体の世代に取り返しのつかない、責任を・・・

(自分のせいではない、ということで、更に――逃れた..)

口先の言葉で、手軽な愛で、何が出来るというのだ...

「まあ、もちろん、人間しながらうさぎの国に、――という、新しいスタイルについても、考えてもらっていいんですよ。わたしは、歓迎します。」

アカシアの木が咲いていたし、空気は花の香りに満ちていた。その周辺の丘は緑の夏のド

レス。腰をかがめるように、思いやりをもっている、木々の枝――

白昼夢はいよいよ熱して鮮やかになり、冰雪と荒廃の占める場所にも、あらゆる愛情と親切が宿る。痛みの兆候もなく死ぬ、肉食動物であるならば、こうはいくまい…

(何が出来るというのだ…) ――《そんな、なまくら刀で…》

(何が出来るというのだ…) ――《見窄らしいドロップのような涙…》

じゃあ、わたしはこのへんで、と王様は言った。

「あとで、クレアくん、ひとつよろしく頼む。例のあれね。」

そう言うと、ぞろぞろ、やっぱりうさぎ達をぞろぞろ連れて去って行った。

クレアさんは、頃合いを見計らったように、ぷっ、とふきだすと、ぼくのもあもあした頬っぺたに唇を寄せた。人生は運ぶために重い負担だった！…ため息が消えた――

「…なんだかかんだ言ってるけどね、国王さまは、あなたの詩のファンなの。」

「ファンなの？」

「サイン色紙が欲しいんだって。…書いてあげて。」

「いや、でも書かないよ、ぼくは。」

作ったことがないし、まず、自分の名前をどうすればいいのかもわからない。

「でも、うさぎの国では書くべきよ。人間の国では書かなくていい。あんなのは馬鹿な作家にやらせたらいい。品性のない奴等のおどけ顔を見てたらいい。」

(でも、本当に昔ね。クレアさん)

(サインの練習をしたことがある。)

…字体を崩し過ぎて……もう、文字が読めないんだ…

……そして言葉は、 なんだか 、泣いているみたいに…

ブリリアントグリーイン（な、）お嬢様…お手をどうぞ――

エメラルドグリーイン（な、）お嬢様…手を伸ばして――

「いままで、あなたの書いた詩には全部、眼を通してと思う。国王様は、さっき、人間だったと言ったでしょ、すごく文化や、芸術というものに餓えているの。それに、見知らぬ存在、たとえば宇宙人に対するあこがれ-未知に対する飾らない感情を、ずっと胸に持っていたのね。いままで、自分が切り捨ててきたことを、取り返そうとして必死だし、それと同時に、いままでの自分を棄てられた人だと思う。」

（おもちゃの浪費と、そこから突然めぐってきた自分の順番、）とぼくは思った。

《あるいは、風景画家の最初の場所、》とぼくは思った。

…見つけにくいものを、いつのまにか、――忘れていた…

あの時に感じた考えや、感触、イメエッジが正しいなら、それは多分…

“精神の…”

“精神の…”

“しゆくふく”

（報告）――（連絡）――（相談）…

「なるほど」

そうやって考えてみると、確かにあの達観した口ぶりも肯ける。

でも肯いているのは…小さい頃の、僕で――

「…あなたが大変だろうなあ、とよく言ってたわ。よっぽど、何か感じるものがあったんだと思う。あの人はこれまで猛烈な仕事をして、お金を稼いで、働く辛さやしんどさも知ってるし、だからこそ、保障や救済措置が必要だし、それでも、理想が必要だってことを強く

知ってる。でも、詩人さん、人間社会はあなたに何をしたの？..わたしはそれを思うと、すごく、胸が痛くなる。下らない世界では、いつまでも低次元なことが繰り返される。」

「—そうだね、..うん」

(思い出の中で、考える。)

(人の笑い話を、考えてる。)

...馬鹿な子がいてさ.....それで、自分も馬鹿だなんて気付く...

.....そして僕は、ひよんなことから、世界の生まれた理由を知るんだ...

"あなたは何が必要なんだろう？"

"あなたはそのために何を与えるんだろう？"

—イエローカード、テレフォンカード、ホワイトボード..

「理想を持っている人にどれくらい人が冷たくするかは、もちろん、国王さまにはわかっている。たぶん、彼はそれで傷付いたことがあるし、やむなく呑み込んだことがあると思う。正義が通用しない、言葉が平気で見過ごされていくことも知ってる。—だからこそ、きちんとしてる人に、いつまでもここにいて欲しい、と言ってるのよ。いずれにせよ、あなたには本当に戦わなくちゃいけない敵がいるはずだし、心の敵もいる、毎日しなくちゃいけないことがあるはずだ、というのを、彼はあなたに感じたんだと思う。見ている人は見てる。それがたまたま、人間じゃなくて—うさぎってことよ。」とクレアさん。

「そうだね、うん..」

なんだか、淋しくなってきたぼくは、肯きながら、うなだれそうになった。

(神聖なものや場所のための深い畏敬の念。)

《あるいは、輝いている数分間。》

…人として人として、人として人として、——人として…

空の広大さ、光の目映さ、平和な夜の月、森の薄気味悪さ、すべて…

“精神の…”

“精神の…”

“しゆくふく”

(報告) —— (連絡) —— (相談) …

「とりあえず、詩人さん、いま決めろってわけじゃないけど、…本当に人間生活に未練な  
んかあるの?…あんなゲスや、ゴミやクズばかり世界に一体何の未練があるの?」

…ぼくはそれまで、自分でそう言っていたこともある。いまは、それを、クレアさんが言  
う。そこに対する、感情は、ぽっかりと大きな穴があいていた。

(とてもとても大きな穴を見ながら、風の音を聴いた…)

——結局そういうのって…どうしようもないことの方が多い…

(百年先に純粋な成分がある。)

(昔はそう信じられたことがある)

…あの日とか……ある日とか、言っている内は…

……そして時間は、瞬く間に過ぎ、人を変える…

駄目になっていく(棘が、) 蔦が…たとえばイバラが——

そしてもう口には出来ない(夢が、) ある日…終わる——

[でも、長い時間が経つと、たまに、よいこともある]

「愛してるわ詩人さん。…毎日、朝目覚めたら、キスするわ。それで、何処かへと散歩に

行くの。――毎日、朝ごはんを用意するわ、あなたの好きなもの。それで、楽しそうにと、よかったら、手伝う。」

そうだね、――そうだね…とぼくは、いつのまにか、片手で顔をおおって、目がしらを熱くしていた。一体これまで、ぼくは何をやってきたんだろう。そしてこれまで、ぼくは、人のことばかりを見て、どうして大切なことが、人の心-違う、そういううさぎの心の中にあるかも知れない、と気付かなかったんだろう。クリアさんは優しい。そして、前向きに色々な問題を乗り越えていこうとする強さを持ってる。

…その時、ぼくは、ピーーツ、という、うさぎが笛を鳴らしてる音を聞いた。

ぐるぐると、きょろきょろ、とぼくはあたりを見廻した。世界はメリーゴーランドみたいに、めまいが伝う。そして、ぼくはここにいた。目の前に彼女がいる。

「ゆっくり、考えてもいいのよ」とクリアさんは言った。

彼女の顔を見ないぼくの背中に、ぎゅっと、重みが加わった。

「ねえ、あたし、幸せよ。」

ぼくは、ぼんやりとしながら、くるりと振り返り、彼女の手を…もあもあしてる、前脚に、やっぱり前脚を重ねた。ちっとも締まらなかった。でも、想いを重ねた。

誰も茶化さないし、いまさら誰も笑わない、自然な愛の姿がそこにあった――

## うさぎさんと、やっぱりお尻

---

低いテーブルで、雑誌を置くことができ、コーヒーまたはカクテルを出す喫茶店。

百回も聞いている。少年の声。水の中…どこかで響いている声—

「…ぼくも、幸せだ。」

—トロッコの降りている間、アリスのことをぼんやりと考えていた…んだ。旅して見た世界、効率を無視した不思議な世界へと続く、儀式みたいなもの。でもそこで、ぼくは、君に対する気持ちを、すごく整理してたと思う。やってること、教会でロックを学んだプレスリーさながらだったけど、あるいは、ヴィクトル・ユゴの女性遍歴さながらのことをしていたけど、でもトルストイが日記を妻に清書させてたとかいう精神的迫害という一面とか、あるいは、ゲイなのに、教え子の求愛に負けて結婚してしまうチャイコフスキー。

…でも神聖な本は…新たな混乱だ……

……だからこそ僕等は…無意味なことを口にする…

「…ねえ、クレアさん、おしりさわってもいい？」

「—え？…あ、はい…」

クレアさんは、ちょっと驚いたような表情をして、なんだか、いまここで、というバツの悪い感じが広がるけれど、まあ、この人こういう人だし、という風に肯いていた。

でも、軽い泡のように、それはやがて来る…まったく別の重い引き出しへと続いている。

百回も聞いている。少年の声。水の中…どこかで響いている声—

響いて—頭から出てくる創造の鎖…

「いや、さわらないよ」とぼく。

「さわらないの？」

クレアさんは、耳を立てて、ぼくの顔を見ていた。

ぼくも、ピンと耳を伸ばして、尻っ尾をゆさゆさと振った。

(素敵な尻っ尾ね。) ー (そうだろ、ぼくのチャームポイントなんだ。)

「…うん、でも、君は、いま、ぼくを人間とってる。そしていまでも、きみはウサギだ。できるなら、いま、ぼくはウサギになりたい。そして、きみを人間にしたいー」

「それは、..あの、」

「ずっと傍にいて、ということだよ..」

(傍にいてほしい、)

……シャンパンのような、軽い口当たり。

……魔法のようなワインの一口。

うさぎの国に、住むかといえは、こういうのもいい。うん、ぼくは住みたい。でも、君に、もっと僕のことをわかってほしい、という気持ちもある。理想を崩していく生活がぼくには必要だ。同時に、いつも完璧な答えがそこにあつたらいい..

ーその時、クレアさんが、人間の女性-美女に見えたと言ったら嘘だろうか..でも、ぼくには、はっきりと見えた。取消不能の形で変更せざるを得ない、服、謎の服。

そこに、魂の、肉体の、心の声がちゃんと聴こえた。

...何かを思い出す助けとなるメッセージ...人前で取り乱す君は...

.....コンピューターの記録装置...たぶん、アタッシュケースの書類...

... (どこかで、エラーレベルのハプニング。)

「ぼく、ゴッホのね、ありえないくらいの誠実さが好きなんだ..歯に衣着せぬことを言っ

て、一日で画商クビになったり、貧しい生徒から集金出来ずにやっぱりクビになったり、あるいは、美術学校で、ミロのヴィーナスのデッサンをして、腰をでかでかとかいて、教師にそれを破られて一何するんだ、女は子供を産まなくちゃいけないから、という、彼がね。ぼくは、なんというのかな、うさぎの世界にいたら、本当におかしな作品を作りすぎてしまうような気がね、する。」

「はい、」とクレアさん。

「どちらかをやっぱり選べなかったけど、それでもいいかな、曖昧な答えだったら、ごめんよ。でも、できれば、あっち行ったりこっち行ったりする生活、そんな風に暮らしてはいけないかな、生活全部-目の前にあること、よいことも悪いことも創作の対象として、ぼくは生きたい。そんな風に、君のことを愛してはいけないかな？」

これらの言葉のあと、クレアさんは、微笑んだ。

百回も聞いている。少年の声。水の中…どこかで響いている声…

……不気味な空気の爆発！

(彼女は選び、僕も選ぶ——ともに生きること…)

「でも、ウサギの国がよくなったら、本当に本当によくなったら、ここで一緒に住んでね。でも、もし、あなたが、苦労したくなって、人間になりたくなったら、それも言って。その時は、覚悟を決めて付き合います。」

…目の前に、ぼくは、大きな大きな光を見る。あるいは、トランペットのように、印象的な声が何処かで聞こえるな、と思っていた。気が長い彼女のことを、とても愛おしく思いながら、約束手形、商品、コマーシャル・ペーパーのこの世界で、フロッタージュという、物体に当てた紙をこすって模様を出す絵画技法を感じる。

—うさぎの国では、おめでとうございます—

—いや、そんなのないけど…

「—じゃあ、うさぎの国、案内するね、詩人さんに見せたいものがあるの。」

「…うん」

と、ぼくは、彼女がぴよんぴよん、と飛び跳ねていくお尻を見ながら、ああ、可愛いなあ、とすっかり、とぼけながら、ケプラーの宇宙をふとぼくは思う。ガリレオの暗号が、ケプラーの宇宙でもあるんだぜ、ただ少しスピードにのりすぎて、イノシシみたいに思いっきり樹にぶつかったりする。転がって足をバタバタさせて、ようやく、いろんな間違いが空からひと想いに落ちてくる。そうだ—木、石炭が燃やされるふくらんだストーブ…

(あるいは、映画を作製するのに使用される強い光を出す炭素アーク灯)

百回も聞いている。少年の声。水の中…どこかで響いている声—

……まだ冬じゃない！

**(I remember you when I walk past**

**the apartment you used to live in.)**

(クスクス、とぼくは笑う。いつのまに、そんな過去形に？…)

「If you want to skate well, you should take it up seriously.」

…それは、詩人さんの方でしょ、クスクス…クスクス—

百回も聞いている。少年の声。水の中…どこかで響いている声—

## 世界で一番美しい歌

---

うふっ　ときみが微笑む

あはっ　だー

.....懐かしい　胸くすぐるようなメロディー　.....

...覚えているかな？　...

ななめ後ろらへん

おでこ　後頭部に違う女を眼で追う

たとえば“魔女の集会”の

フランシスコ・デ・ゴヤ・イ・ルシエンテス

（すんなりとした優雅な撫で肩・・静寂が漲って、

耳を澄ませば――あの人の海……）

――豊かな肉付きは、神への祈りのように、

『その人自身』（の、）「心に引き留めている契約」《を、》

……瞳に……映る……庭園を　……

……その炎を　……掻きたててみたい……

…そう……願った……夕暮れ　……

でも　くすくす笑い合う

欲しかったの　は　こんな空気　…

[ 一一牛乳瓶のなかの花が揺れる、二重、一重…

二又…いや、岐れてはすぐに戻る…永遠がその人自身の姿…  
何ひとつ映さない虹彩の膜はそれに似ていて、どんな細い腰も、

乳房も…太もも、可愛らしい手も、あなたのもの一一 ]

……夏の喜び、次元上昇の宝石の群れ…音もなく、翼は ……

…一枚一枚ヴェールを剥ぎ取っていく …

一本の線によってへだてられた空間を、越えて、

ワッサーファル

空虚な紙の上から、あなたは 滝 …

ちゃぷ、ちゃ、ぷ…菜の花、董、、

「 ああ 過去に祝福…銘々勝手な、それでも生意気な誰だって、懶うい麻痺のために痛む。

乱視の世界で生きているみた い だ…青白いきらめき が一一女神を認める…  
もあもあの羊の やわらかい空気

が 二人にはながれる一一一 ]

……この星は、月桂樹の森の近くにある……

…初めて出会った時から、眼が醒めた時から…

うふっ わた毛

ああ ちぢれ毛

[ 一一色んな約束、幸福を羨むように…自然の姿に、動物の鳴き声に…

酔いながら…満月が巡ってくるたびに、あなたと水浴びをした…  
ウンディーネ…人魚姫…いいえ、わたしの大切な恋人—

この心も…身体も…魂もすべてあなたに捧げた— ]

.....へその緒をちぎった瞬間から記憶が起動するようなふしぎな味わいで

とぎれとぎれに ひらひら ふわふわとしている

…桜の花びら

( ちりぢりに打ち捨てられた僕の記憶 )

またひとひら、翅が燃え尽きる

ひと ひら ふた ひら

—燃え尽きる…まで…

—白く浄らかな、細い月の見える、なだらかな丘…

『弱者』（よ、）「それは遠い昔の話」《だ、》

…表現が…世界を…変える ……

…魂が ……人生を豊かにする…

…情熱が…真夜中を…焦がす ……

しろい壁紙に目が潰れてしまう

たとえ ば 交わっている時にだって

“ダナエとしてのラング嬢”

アンヌ＝ルイ・ジロデ＝トリオゾン

そう さ おかしくもないことまで

ぼくらはわらう——笑う、笑うことが、どんな石頭にも、間抜けにも、

ねえ——ねえ・・・

「あたらしい風をみつきたいんだ、ねえそれもすぐに、・・・

陽に浴す生き物でもあるように、草根や木皮そのものになるよ、僕の髪の毛、  
僕の皮膚・・・ねえ、太陽の光をあびた若草色のクローバー  
うぶ毛が石けんで洗われて光るように甘くて苦いしずくが浮かんで  
きこえ、て、いるでしょう？  
ゆびおり数えたぼくらの春は

月並みに終わってゆこうとしている」

・・・桜の花びら

となりに座っている女の子にはちょっかいを出せないくせに

まえの席の斜めにすわっている男の子にやれてしまう心理

（きこえていますか？

シャープペンシルを首筋に刺す／射す 光、光、、光、、、

.....手足も、身体も、青白い顔も、鳥餅のように何でも掠め取る、

冬の光にも似た――手厳しい、人類の裁判・・

見かけが何でもいい、という人がいて、

それはつまり恋の話で、その人は、顔もいない、という。

でも人間の見た目は七秒ほどで第一印象が決まるのに、

顔形のシンクロ現象、・・・顔、顔、顔、のくせに、

見かけを誰よりも一番気にしているくせに、

平気で嘘をつく。ひかり、ひかり、、ひかり、、、

## ――言葉を信じて ..みたい..

――顔も声も、知らなくても、・・

『気付いて』（くれる、）「そして僕が誰かわかってくれる」《よね、》

.....君を.....知ってる.....最初から .....

.....恋する運命 .....

.....君を.....探していた.....んだ .....

.....見かけや、欠点なんか、どうでもいい、

後先のことを考えずに信じてみたい。信じてみたいよ。・・

.....さくら の はなびら

・・・さくらの はなびら

「あなたがいてよかった..あなたで本当によかった...  
愛してる—愛してる..愛してる...  
恥も外聞もすべて棄てて、僕は本当の僕になれる—」

.....そして 僕は、あなたのいる世界の喜び.....

...あなたが 人生に迷わぬように願う瓜二つの魂...

Yeah yeah yeah—woo woo woo..

のびすぎた爪が毛布に絡まって

途方に暮れていた無重力遊泳はおしまい

どんな美術館にだって

ぼくらのヌードが展示されるよ

「マリオネット」..それとも、『形見の品』...

[オーライ]..それとも、《オッケー》

...だって ふと胸を衝かれて

こんな感じだったかなとおもうから—

.....思うから

.....思う (から、)

「そーいや そーだって 想っていたんだぜ !

ぼくら立派な愛に傷付いてきた世代です...」

紙吹雪のように 空間のあちらへこちらへ

微笑みが零れて ただよう沈黙

かつて僕が天使と別れた場所へ..

かつて僕が魂の酔いどれ同然だった時...

【些細ないたずらも君が笑うから 君がそれにやさしく目を細めるから  
美しい瞬間になる／きこえていますか？  
ねえねえねえ、――強張っていく、すべてが結合するはずもなく..  
僕はここで肥大した心臓を震わして、居ながらにして居ない君を想いながら、  
ねえ、幼子よ..盲人よ――】

「神の霊に導かれ――」

心を.....そのまま...

あなたの.....足音に.....した.....

生きている肝臓、窮屈な僕という黄色い顔、

(...声が僕の口を衝いて出る アウラ)

堅くて噛めない麵麩の耳

―― (～ができる、) .. 《～をあたえる》――

円-球体 -正方形- 長方形

ア、トランダム、バルウ、ン

(――サンプリング)

カットアップ・リミックス…  
「正しいのは…」 (全部、フェイク…)

それは歌ではないのだ！…言うなれば！…つま先立ちの踊り子！……

入り混じる[相反する]——空に突き上げる天使！

Fast “fast”——It is over now.

*from now—hence—ago*…「像の記述…」 「貨幣の価値——」

(ああ、気分がよい——)

……………戻れなくとも  
——戻らなくても

心は！…*Brandy, …Brandy, Brandy, …*

『唇の合間に』 (その酒が滑り落ちてきても？…)

…憎しみはもはやなく

…悪戦苦闘すら無駄な毎日

(斯る切なき思ひ…)

——雪のしたより燃ゆるもの…

針で突き刺されたような

鈍痛 に

しろくはじらう

……………うふふっ あははっ

ああ あれねで飛び跳ねだす…心配が杞憂？ 違う、明日は湾や入り江…

半透明の暗褐色——独特のとらえ難い

僕等は、朝を待つ…

トリックアートのように 3Dのように

僕等は森から鹿を出す

鷹を崖からとびたたせ

毒蛇めがけて ひとつかみ ！

向きを巧みに変えながら 広げて

向きを巧みに変えながら 濡らして

向きを巧みに変えながら——

——どろどろとした欲望を

——くろく塗りつ ぶ す

…桜の花びら

( ちりぢりに打ち捨てられた僕の記憶 )

…桜の花びら，花片，花卉，はな-ピラ，（それは、）

籠の中の鳥・・・籠の中の 鳥・・・・・・籠の中の・・・

なかば砂に埋もれかけた空き瓶の口

[ ---やさしいバネで動く

スケートリングの女王のように君のスカートが揺れる  
身じろぎひとつしないのはもうあきらめてしまっているから

---でも玄関のドアノブを掴みまわすと ]

感光部の？（腐蝕、） [違う、薬品処理さ..]

---濃淡の階調を微細な網点？（腐蝕、） [違う、ゲエムオオバア]

..おいおいもう十八になるんだぜ---また膨らます、..膨らます、..

また膨らます、..また膨らます、..、.....答えを..探す...

はっとするような表情が---きみの魅力...

そう し て.....猫はしましまの木かげで.....

ひと休み.....わが手にそひきたる...

## --花の種..

---わかるかい ? たしかめあえ る

『もっと ふた り』（自由、）「に」《なれる、》

.....一斉 にひら く 傘.....ものいへぬ蟲.....

.....魂は .....波まか せ.....

..風 ま か せ.....

ねえ—ねえ..

「 こうして授業を受けるのは将来のためなんかじゃなく

ただ すこしだけ魔法の延長。ふたりが笑顔でいられるかぎり、  
いつも美しい花びらが舞い落ちた.....毎日ががらりと変わった、  
...剥がれていくペンキ、（いつもの会話が続かない、）高鳴る鼓動、...

僕の世界はこんなにも変わるものだったのだ 」

.....波まか せ.....

..風 ま か せ.....

あ の 夏の日

浴衣をき て

(——旅人のために外した 門の門..)

魚みたいに跳ねてる珠玉のフレーズに 飛び込んで...

《インパクトの瞬間》

.....溶けたようなカタチ

さくら紅か く

咲くなみ に

ド - レ - ミ ♭ - ミ - ファ - ソ ♭ - ソ - ラ - シ ♭ - シ

くらいせいかくの やつ パブリック・イメージ

くらいせいかくの やつ タクシー・ダーク・ホーン

(ヒュウ・・・口笛が鳴る一一)

〔あじさい色の

綿菓子をはおばっ てい た〕

.....いるんだろう?

いるさ

一一一いるような気がし・・・て.....

雲に焦がれてい た

椰子の実に焦がれ てい た

「会えない時間が僕に罰をあたえる、・・・恋してるなんて言えない、

傍に居てとは言えない、金もない車もない頭もよくない、・・・

けいたいでんわがふるえる、ぶるぶる、ふる、える、

(・・・こんな時の僕はとても正直!) ..早く出してくれ、

ただ 逢いたい、.....すぐ 会いたい..」

きらめいている、砂の粒子、

たえずそれも一つの色彩に、

うねる波。毛虫や蛇のうごめき、

あまねき命の爛熟。

あたかも紅緑相交わる月色の雲翳。

[と け て 消えるような恋

クリーム あ い す シャーベット

うわの 空]

.....波まか せ.....

..風 ま か せ.....

...桜の花びら

( ちりぢりに打ち捨てられた僕の記憶 )

...うす桃色の花びらは (それは、)

永遠の海に似ている...

.....似ている

.....似ている (かな、)

「 木洩れ日と麦わら帽子がのこる

そんな“LOVE”の残り香 ...」

本当の君を探していて…

本当に君を探していて…

本当の君を僕は…

Yeah yeah yeah—woo woo woo..

うふふっ

と なんだかなあ いま こうして日曜日

森の落ち葉 に かくされながら

愛し合っている姿を君は知らない

知らない森の中で… (誰と出会ったの?…)

知らない愛の深みに… (どんな落ち葉を踏んだの?…)

心と魂は、夢想する。

これまでのところ、これを閉じてきた*Long story*

おどるよ、*Endless waltz*を。

ああ、酒とバラの日々、

.....*Don't stop the music (Don't stop!)*

.....*And now?...Now, look here,*

真夏の夜の、処方箋。

「ことばを忘れてしまってもだから大丈夫 ！」

それはよくやる癖だから」

I have recently realized that...aware that he had exceeded the speed limit.....

バーガンデイ・クラレット　ダイキリ・フィズ・ブラディー・マリー

ききとった…おとから……

聴き取った音から空白をつくりだすことくらい造作もない

ああ…その……

ああその濁った水の中じゃ——透き通った泡——

I found the button loose...became conscious that he was being followed...

ウィスキー・ブランデー　リキュール・ジン・ウォッカ・ラム

Ah...ah.....ah.....ah...　まだよくわかっていない　武器…

Ah...ah.....ah.....ah...　高い壁、銃を持つ兵士、投降を求める声…

みんな　わたしの顔を忘れて帰って行く

青く、そして、感情的なヒット・チャート数曲聞き流してお出掛け

…愛は、間近にある

Ah...ah.....ah.....ah...　君は、もう間近…

Ah...ah.....ah.....ah...　空は、もう近い

ド-ミ-レ-ファ-ソ-シ-レ

これらの愚かなものは、ワイン、及び、バラの日

本当の君を探していて…

本当に君を探していて…

本当の君を僕は・・・

「また巡り会う  
その美しい光の中で  
何度も 何度も きみに―――」

・・・着地点など定めずに コール・アンド・レスポンス !

素足で山道を歩いた時にマメがたくさんできたことを話しました

そ し て 喧騒のうえに幸福があるのだとわたしは話しました

ブルー・ライト・・・

ブルウウ・ラァアイ・・・

「季節の去ったホテルのバルコニーに立ち尽くす自画像。

夏のさまざまな思い出が、鎮魂歌をうたい。  
遥か彼方の、エメラルド・グリーンは風の波面の  
おびたしいきらめき。  
でもすべてがシュール・リアリズム！・・・  
愛は暗殺を 愛は死刑を！  
求刑する、交代制の生命のために。  
ああ、誰もが幸せを求めて旅をしてきた、ひとつひとつの輝き。  
幾つもの季節をくぐり抜けてきた循環器の中で、

そっと指で撫でられるような、夢見ている鼓動―――」

レッド・ライト・・・

イエロー・ライト・・・

ド・レ・ミ・b・ミ・ファ・ソ・b・ソ・ラ・シ・b・シ  
ド・ミ・b・ファ・ソ・シ・b

ぼくは透明な絵はがき のよう に

着衣のマハをすべりこませ

モナリザをすべりこませてきたけれど

やっぱり僕はムリーリョ ！

(いまも…いまも…)

今 も はなれない

今も離れない

岸から船は

花のよう に

風のよう に

雪の よ う に……

「いつもきれいなままなのさ——かぎりなくすべてが——

ひとりの者によって うつくしく歪められていく…

うつむき加減に歩いて胴体を支えるからだはちいさくなる

反対に影はどんどん大きくなる

一步一步がちいさくなってゆく

やがて触れられないうちに ！

時ダケガ知ッテイル——安らいで心地よかった——

帆になろう 風を受け よ う (時ダケガ知ッテイル)

そし て 時が止まる

きれい な きれい な きれい な

草いきれを、ただよう 靄を、

錐でついた穴のような無垢な楽器のポイントは、

少女じゃいられない、

そんなドラムを思い出させる。もう一度……

もう一度、メロディー・ラインだね。

積雪した公園の消しゴムで、修正液で、この目薬を、

楽の如く吼ゆる星のおしゃべりを、

孤独な時間に、かえてしまおう。

ああ、そしてどのくらいこの怠惰な時間が続くだろう？

うふん ついに笑いが止まってもだいじょうぶ

あはっ だ——

.....ぼくは忘れないから そのかわいいお臍 .....

...そのとうめいな陽の光をうけた背中のライン ...

しなやかな 脚線美

そして よろこびにみちた露わな胸

.....ぼくは忘れないから きみのいたこの世界 .....

...何処までも続く、君という、永遠の幻 ...

だれだって天使を乞うた 女神を盗んだ

半透明になるもの 天鷲絨のもの

.....そして鎧っていたものを脱がせ .....

...かづくで犯してみたいと思った ! ...

でも オスじゃないぼくには も う

その 心配 は いらない

そうそれ は “ぶらんこ”

ピエール=オーギュスト・ルノワール

(どうして芸術がきれいではいけないのか？

不快なものは世の中にある)

——そ う ルノワールみたい に

『もっと』 (の、) 「のう天気でいられる」 《から、》

……もっよ……声高に……さわやかに ………

……続けられる ………血の気もなくなるほど……

…に……愛撫……続けられる ………

——さあ、ベイビィ

...多重露光の世界で...

.....波まか せ.....

..風 ま か せ.....

【 (…Simulation game) 遠くにはいつも近くにいるとは思えないほど  
険しい現実の壁があった 自分の気持ちをもっとセーブしなきゃ  
たいくつ、という魔物をかみころしている、あくび、、  
でも血管に麻薬がみちる／おはよー と手を軽くひらひらさせて  
制服姿の彼女が肩からすとんとショルダーバックをおろす時に  
いつも何か場違いな台詞を僕は言うてしまう

ばーか／自分の気持ちをまだ落ち着かせられずに】

.....へその緒をちぎった瞬間から記憶が起動するようなふしぎな味わいで

とぎれとぎれに ひらひら ふわふわとしている

…桜の花びら

( ちりぢりに打ち捨てられた僕の記憶 )

かぎりなくあざやかな、あまい接吻け

ひと ひら ふた ひら

—共に過ごした仲間…と…

—せめて 愛を 覚えつづけていられたのなら…

『サンダル』（記憶の水槽へ、）「プール」《青く、》

……ゆれる……谷間……瞳をとじれば……

……しろく……霞んでゆく空……

…止ま……った……時間……

……（声なんて どんどん かすれていけばいい）

……（もつ とユーモアやナンセンス に）

……（打ちのめされりゃあ いい ！）

「ふるえてるのさ

可憐な薔薇を思わせる パーティドレス に ふんわりと  
した ファーがついたアイボリー色のコートが  
せつない 魔法を かける から  
バネ のようにはずむ 鼓動 ねじきれるほど

人をみじめ に おもわせる *I love you*」

君じゃなくちゃ 嫌で…

君が誰でも本当は よくて…

ねえ、本当に本当に本当に…不思議な気持ちだったよ…

「また巡り会う

その美しい光の中で

何度も 何度も きみに——」

(……………)

「封じこめられていた気体にこそ

ぼくらの歌があるね」

……………感じています

…ときどき 顔 を 出して しまう から

……ここ へ 空気中に つたわって

(酸素が欲しくてたまらなくないんだ !)

ときめき は すこし 苦い から

あたり に 包んでいるのは

(硝子のような硬度、思案投げ首の体)

きれい な ことば で

——水面そよがす風も ある

(しずかな海岸を、しずかなだけ渡っていく)

…ああ 風はきつと きつ と きつ と ね

暗く先の見えないトンネル ．で

涙をこらえて い・た

…耳が千切れそうだ っ た(し、)

……吐き出す息が白かつ た

放電管に入ると 美しい色を出す ネオンのように

すこしだけ そう すこしだけ

……うっとり しな が ら

——なまめかしいア・ル・ペツ・ジ・オ

ふっと・いん・ぎ・どあ・てくにつく

Gameに・ に耽って・ ・に耽って

…みんなが得をすることを考え続けた。

液晶に浸かった神経——

Gameに・ に耽って・ ・に耽って

おふいしゃる・ぶるうのおと… れっどのおと…

いえろおのおと…

——この身体にあやうい灯が

…沁みるように瞬いて

「ぼくらはもっ と 不思議な世界へと ゆ く

蜂は剣をもっていて」

「中身のないラブソング——」

すりへってゆく……スポーツ・シューズの底……

光があたへられただけで……裸は……甘酸っぱい……

サアーンとした風までそう だ

(…不健康なアダルトのビデオを見ていたら)

いつも脅迫的な電話を思い出す ！

—— (パラノイアへ、) …《ネガティブへ、》——

円-いけない -果実- のような！

快樂の傾斜を

(——滑り落ちていきさえすればよい)

wine glassがおちてわれるような、  
「サイレンが……」 (全部、なだれ…)

ポケットいっぱいの秘密をかかえながら、鳴り止まぬ拍手 に——

天の配剤を促 し て い る。[のぞき出して]——いるような気がした。

Fast “fast”——It is over now.

from now—hence—ago…「アイロンをかけていた…」 「糊を——」

(かけた、時代に——)

……路上に散らばった

——歪な夢のかけら。

心は！ …Brandy, …Brandy, Brandy, …

『唇の合間に』 (その酒が滑り落ちてきても?…)

・・・I loveの 暗闇に馴染むほど

・・・I needの 網膜剥離

(斯る切なき思ひ・・・)

——ひょっこり と・・・

裏手から廻っていく坂道

土瀝青の濡れ た

雨が蒸れた匂い

……………うふふっ あははっ

そしていつかは つたえるものを 聴 いて いる

霧が映しだし 不均衡なガスを拡散 する ピ・ツ・アア・ノ

——きれいな ことば

軽トラックが砂埃をあげてゆく舗装されていない道

粗目の、ガラス片が、夏が終わった死者を葬る。

けれど 夏の夢に魅せられた、

だ け ね。

学校前のくねくねとしたゆるいカーヴ

ながく尾を曳く、重い扉、どんなに透けて見えそうだったか。

荷台の幌が ぱたんぱたと歯ぎしりしている――

――でも語ろうとはしない、あれは古い絵

「路肩に沿ったガードレールの

錆ついた部分が袖口をしろくよごした時 花粉だと思った」

――ルウベンス、のような情熱なのに、いずれ雪に埋まる…

だろ？――だろ？…

…桜の花びら

「風をなぞるようなその人差し指は天然のチョークだとおもう

ぴょんぴょん飛び跳ねている兔のような粉はたんぽぽのさいごの姿だ  
はっきりと断たれていく僕等の進路／太股より密着するパンツのように  
おそろしいほどの魅力を放っている天使が、天使が、、天使が、、  
（和音、不協和音、、）どんなことを考えているのか、  
…あのくりくりした瞳の奥で、、あのほそい足首、、  
あのマクドナルドでのいくらかの会話、、  
いつも口にしようで僕は恐かった、、、、  
ひらひらはらりと花びらが散る、…

砂が口の中でじゃり、じゃり、、じゃり、、」

でも くすくす笑い合う

欲しかったの は こんな空気 …

〔 ー牛乳瓶のなかの花が揺れる、二重、一重・

二又・いや、岐れてはすぐに戻る・永遠がその人自身の姿・  
何ひとつ映さない虹彩の膜はそれに似ていて、どんな細い腰も、

乳房も・太ももも、可愛らしい手も、あなたのものー〕

.....豪華なフラワー・アレンジメント

・こわれたギタア。セルリアン・ブルウ .....

...硝子瓶の手紙・・・あるいは、天使の懈怠。 ...

一本の線によってへだてられた空間を、越えて、

ワッサーファル

空虚な紙の上から、あなたは 滝 ..

ちゃぷ、ちゃ、ぷ・・・菜の花、董、、

「 思い出せーでも蝶はふしぎな如雨露でフェンシングを す る！

そしてあなたは何を為すべきか？・忘れ てーよもやまた忘れて・  
もあもあの羊の やわらかい空気

が 二人にはながれるー〕

.....この星は、弔鐘を聞いている想いがする.....

・・・さまざまなバランスが僕と君を隔てていった・・・

うふっ わた毛

ああ ちぢれ毛

〔 ーだれもが そうし て・魔法を、信じた夢の中・

あたらしい恋で無智になった・風はざわめき、また静まった・  
腰を降ろして・風が吹き出した・・・でも、吹き出したのはー

心の中の声…熱は去らない…君は去らない— ]

.....へその緒をちぎった瞬間から記憶が起動するようなふしぎな味わいで

とぎれとぎれに ひらひら ふわふわとしている

…桜の花びら

( ちりぢりに打ち捨てられた僕の記憶 )

またひとひら、翅が燃え尽きる

ひと ひら ふた ひら

—燃え尽きる…まで…

—満月が、黄金の鍛冶場だったら、夜空はきっと海だ…

『深海』（Deepに、）「僕の中の落としだね」《となろう、》

……慄く海は……夜曲の調べ……映画が終われば、……

……もろこしの穂 ……（のような、）痰……

…飛べない蛍……翅が……取れそうだ ……

「永遠はゆっくり腰を下ろしているんだ、  
四輪駆動車で急斜面 を 駆け下りるみたい に。  
心の奥にしまい忘れた 白く光るジャリの道  
リールもないのに、釣竿もないのに、  
僕は蜘蛛の糸を垂らしていた！ 音の響きは何も言わずに  
すこし伸びた髪にそっと 産み落とされた感情の総称  
あざやかに彩色されたミュージックだ よ。  
社会の仕組みや、枠組みを、僕は歌う street musicianみたいに――  
逃避の歌がもてはやされ、時計は、松葉杖のリズム。  
誰にも告げることのできない、その感情にふれて いる。  
さがすだろう ね 僕は……  
野にまいおりの雪の、退屈な答えみたいに  
mystery romanceを。涼しげに咲く白い花を。」

……うふっときみが微笑みながら泣く イメージ してるの と 違う ……

…で も うまくしゃべれな くていい 宝石でなくていい …

「林檎じゃなくていい きれいな花でなくていい  
綺羅荘敵でなくてもいい」

「…桜の花びら――」（僕等を言い表す――悲しい言葉…）

金網のむこうの用水路をのぞきこむと……降りそそぐ…

空の色……ああ あの ……夏の日 ……

自転車に乗っ て

（…蒼き波たたへた 川のほとり で）

………電車が をさなき影を踏んでいった

――（微笑 ん で …… 微笑 ん で ……）

.. 《音を立てぬうち 亀裂われ ……》 ——

円-胸を締め付け た -蕾のぶん- だけ

ふるさと の 蝉の声

(——にぎやかな 玩具売り)

二・三人の女の子達が泣いていた

「ワードを開いたが……」 (カーソルがない…)

「サイレンが……」 (全部、なだれ…)

ERROR MESSAGE ERROR MESSAGE…

ぬいぐるみを飾るのも カーテンの色を変えるのも——

また昔みたいに ERROR MESSAGE…——

Fast “fast”——It is over now.

from now—hence—ago… 「でも幸せだからよかった…」 「いま——」

(くちづけで、あなたに全部伝わったらいい——)

……………全部伝わったらいい

——それが、魔法…

心は！ …… Tシャツ, …… (と, ) リーバイス, ……

『キラキラしたのも濡らす』 (ひどい湯きの中で…)

…最後の KISS

…長い KISS

(あなたは くびをかしげる…)

——…わざと知らない数字を打っている電卓…みたいに…

ため息のかすかに伸びる 春の芽

このまま とじ込めたいのか

もう一度 生まれ変わりたいのか

……………うふふっ あははっ

「あの日 僕はクラスメートのところへ一目散に駆け寄っていた  
自転車に乗っていた彼女が 違うクラスの男とぶつかって転けた  
すべてをかき消してゆく、木々、…誕生日の蝋燭よりもくらく揺れる、  
差し出す手、照れ笑いする顔、三十センチの距離、…  
角度はおそらく35度 スカートの下のブルマを見せながら  
僕は生涯その手の温もりを忘れない  
チチチ、チチ、チチ、と雀がさえずっていた

エンジンオイルのこげた匂いがしていた」

一本の線によってへだてられた空間を、越えて、

ワッサーファル

空虚な紙の上から、あなたは 滝 …

ちゃぶ、ちゃ、ぶ…菜の花、董、、

「思い出せ——デジタルなライフ その豊饒さを与えられた本当の理由…  
そしてあなたは何を為すべきか?…カタカナ かなかな ——前世の記憶…  
もあもあの羊の やわらかい空気

が 二人にはながれる——」

(アンティーク、アンティーク、、)

ごめん、おそくなったあ、もう遅いよ、

どこいったの、

――昼下がりの散歩の光景が浮かぶ

……「私もそうです」というたったひとこと of 了解。……

…待ち合わせをしているはずの恋人はいまも何処かの電車…

うふっ わた毛

ああ ちぢれ毛

[ ーだれもが そうし て魔法を、信じた夢の中…  
あたらしい恋で無智になった風はざわめき、また静まった…  
腰を降ろして風が吹き出した…でも、吹き出したのはー  
心の中の声熱は去らない…君は去らないー ]

.....へその緒をちぎった瞬間から記憶が起動するようなふしぎな味わいで

とぎれとぎれに ひらひら ふわふわとしている

(アンティーク、アンティーク、、)

ハートブレイクしている時だって 飲み屋の六本木だって

ド-ミ-ソ-シ-ファ-ソ-シ-ソ 時間は待って くれ ない

――毎晩… そ し て 毎朝…

シヨビシュバ… yeah! ピタパタ… yeah!

(……………うふふっ あははっ)

「カーテンをしゃっと——

開けた窓からバス・ルームの水が噴出《ふきだ》す  
HとEとAとVとEとN。

居眠りしたくなる目も冴えてくる、観客のマナー、映画の予告で、  
ちらと君を見るけれど、流した涙のうらに、いったいどんな、  
想いがあるんだろうね——

君は肩をすぼめてしまった。いつも最後のひと部屋で、  
蒸気が上がっている。それをティー・カップの湯気と見紛う  
振音の音を聴くよ、——きくよ 雑木林の名もない石に腰掛けて、  
なかなか換えない 電球は 食べてはいけない 木の实  
うつらうつらしてフチどるよ風景観察官！

いつも、ねがっていたよ輝かしかったスロオプから、  
無邪気な笑顔のあの子がやってくるのを。  
筆を取りたいような芒原で まぶしそうに ひとり、

次第に更けてゆく朧夜に——」

素直になれ ない 心

幸せを うまく 求められ ない 心

ぼくを知って いる

ぼくを知って いる

(こころがうまく伝わらな い 優しさだけが

ぼくの病んだ魂を知って いる——…)

——ミッキーマウスがぼく、ぼく、、ぼく、、、

アイミイマイン……アイミイマイン…woo……

『と いていた』(た、)「マザー・テレサもいた、」《よ、》

……瞳に……………騙されないで……答えは ……………

……夜の淵 ……………人のさみしさ……

…そう…………あさましさ……は 終わらない ……………

でも くすくす笑い合う

欲しかったの は こんな空気 ……

(アンティーク、アンティーク、、)

うそつき 百年の恋も ピピピッピ ピー！ ピピー！

…いっきにさめ——た…はずなのにまだ恋しい…………

——もう一度生まれ変わりたいというあなた

——あたしだけを 見つめて…

(…………議論の余地 ほど) 『損か得かの二元論、社会の要求、弱者』

……人びとの…………かくあるべし……右向け右 ……………

……で 隊列ならえ ! ……………刷り込まれた先入観。……

…“観る”ことは“観られる”…………男らしさ……女らしさ ……………

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
君が言い表したいものが込み上げてくる

——下品な言葉もあるけれど ……瞳の奥にある光は本物さ

…遠くに ……この気持ちの 遠くに

…どんな 言葉なら よかった

．．．よかったって 長い孤独の後で ．．．

．．．よかった って．．．

## ——君は笑ってた

飲みかけのペットボトルの蓋をしめる

虫が入り込んでいた a それはみるみる赤くなり

b 股座から溢れる蜜を掬い出し c ゆれるゆれるぐらぐら

d しろくて濁った水 e それは死へのはばたきをみせた

…FF あたしはあなたの魔法使い

——君の声に、ずっと想い焦がれていたの…

ふわわあってそらにとんでいく

ふわわあ ..

そう それは“野草と女”

オディロン・ルドンの象徴主義

あなたは それを失ったことになります。..致命的な欠陥を共有したって、

修正テープを張って.. 束の間の 鏡像に依存し...

参加型臨場感。 の。——笑顔がうまれます。

笑顔がうまれます。..

なるほど！..と肯きましょう。

下さい。

たっていい、それは面白い、と手を叩きましょう。

あなたがフォークギターでも

動物の目からすれば不格好な 腑抜けな笑顔と 大声で泣く声と 沈黙

チョコレート噛むたびに 体感温度7℃ の 夜景画

(うまく笑えなかった) —— 《うまく、笑えなかった》

...うまく話せなかった.....うまく言えなかった——

——

うまく笑えなかった時間は

——記憶からこっそり消されていくでしょう。

...桜の花びら

(  
ちりぢりに打ち捨てられた僕の記憶  
)

...消されてしまいます モンブラン・ケーキ は

消されたくなかったはずなのに ショー・ウィンド は.....

(それは、) 生き存えるための技術…魔法のように酔わせた

深夜音楽番組…ダイヤのついていないバスに乗る

このケーブルを走る――

「魔法のようにあたしを酔わせた向こうでは――

雨のように降りに来る、もしくは、光りに来る。」

…光よ、降れ…ほかの人という時も――いない時も――…

……枯れ葉を舞わせる いたかるやかな気流――…

「泥の海の ガラス屑の やわらかなオブジェ。

記憶されずに記録されるものを愛してしまう

何か柔らかいものを踏んだ 青磁のようにみがかれた骨

SILHOUETTE …夏が終わりかけてた――…」

[ 一喧嘩した／ばか／ながい溜息をする彼女に平手打ちをした

(まだそこまで行くことはできなかった、絶交の二文字…)

ちらちらと浮かび上がってくる

ただせめてやさしく噛もうと思って下唇を噛んで思いきり血が出た

雨に濡れた 長時間雨に濡れたせいかふらふらして何度か転んだ

そうっと手を伸ばして／ばかね はいどうぞ

そう言って絆創膏をくれる彼女の姿がとおい夏のように思える

…明滅する交通誘導棒、台風のニュース、オールスター、

メールを読む、…削除、…メールを読む、…削除、

子どものわすれた片方だけのサンダル、サンダル、、サンダル、、

「…ごめん、ちょっと言い過ぎた」

風邪を引いた、風邪を引いた、、夏風邪を引いた、、 ]

乳の光は (滴らなかった) [世界でいちばんかたい…]

――物質の心臓の鼓動は闇に鎖され (腐蝕、) [緑青色の藻が]

..やわらかい“球”になって ——“間”になって“空気”になって..  
また膨らます、、また膨らます、、……答えを…探す…  
はっとする——それは睡りの儀式のようにひびく…

SILHOUETTE …いま も はなれな い……………

(いまも…いまも…)

今 も はなれない

今も離れない

岸から船は

花のよう に

風のよう に

雪の よ う に……

ひと休みの内に……………本当に愛していたことに気付く…

—花の種..

—きみのしらない 波音がささやく

『あの娘への想い、もっと』（I LOVE YOU）「おかしなほど」《鼓動、》

……感じる の さ…………ふしぎな国にさそわれ る…………

——さそわれる遠い彼方 の RHYTHM のまま で

…………魂は ……………波まか せ…………

…風 ま か せ…………

ねえ—ねえ…

「点 滅 は 死 の サ イ ン

そのまま進む／水を掻きながら前へ進む  
胃や腸を満足げに蠕動させながら  
自転車をこぐ／髪の毛を口に運ぶ

免疫低下する 危険因子になる 非依存型タイプになる ノートの。  
最初のページの緊張うおーみんぐ・あつぷ ゆらゆらしていた  
コンビニの奥にひそむ 欲しいものはどんどん増えていく

暗い世界は嫌なんだ  
初めて触るものは 嫌なんだ  
よみがえってくるものは 嫌——

新しい鯉もない 藍もない 自大もない ……どンドン間違っていけばいいじゃないか  
おまえがマイクを向けるだけで インタビュアーは困る  
メインディッシュって何だ ? Woo~ yeah

コンビニエンスストアの裏口に カウンター・バーに  
ジャム・セッション… 煙は、あなたの目を集める 嫌…

——与えられた時間と 奪われた時間」

…………波まか せ…………

…風 ま か せ…………

あな た は

これからどうしようもな く

(一一透きとおって しま う …)

見えるかい … 桜の花びらが鮮やかさを増して …

《駆け抜け る 》 … (いま も ゆれるまま)

……………光 は 一列にならぶ

落とされたもの …

落としたもののため ………

ド - レ - ミ ♭ - ミ - ファ - ソ ♭ - ソ - ラ - シ ♭ - シ

蝕まれ 突き崩され 弱い眼は射し込む力をもたない

「 流す涙のひと粒ひと粒に僕等の切れやすくて、  
…でも中々切れない、腐れ縁がある、…  
蒼白く灯る卓上電気のダイアリーがある  
人通りがなくなるといつも思いだした真夜中過ぎの  
会えない時間…」

(ヒュウ…口笛が鳴る一一)

「あ ふ れ る 光に  
遠ざかる 空」

……………いま も さか道 を

駆けおり ていけ ば

———YOU FOR ME あなた と……

雲に焦がれてい た

椰子の実に焦がれ てい た

「 幼い頃に書いた作文を何故だか古い新聞に感じるような瞬間があった  
映画館の横の路地で配られていたポケットティッシュ  
古い新聞を燃やす、…はじめてのデート、…  
しろくふわりと舞っていたスクリーンからの光で見える埃が  
少女から大人へとうつりかわろうとする女の子を主役にした  
その隣でくろくゆったり沈んでいく自己卑下する案山子…」

雲をながめていた頃 の

をさない記憶

「 たがいにさよならをいったけれど  
しあわせは色のように夜 を濡らす の  
ときめくだけ の 恋 なら ば 夢をみたまま の少年で も  
いい。 えり首をしっかりと 握られる こと もな い  
抱き締めることもな い から 。」

信じさせ て ぼく の やすらぎ

こころ という … 謎 ………

「汚された皿 いつものあたしの部屋の匂い  
空の瓶 馬の骨 干 郵便局 (有) 世界おやつ  
二つ前の駅前でドーナツ食べて ミルキー  
…ERROR MESSAGE

え…ら……あ……………  
How? Yes! 自覚症状はあった  
咳がやたらと出て止まらなくなった

…空のジッパーがゆっくりとおろされてゆく、  
突然スクリーンのようなものがあらわれ

線香花火が消えないように 赤信号  
あたしの手の形をあなたは覚えてる?

痩せているのに肩幅がひろくて  
サワークリームのおい 蟹(?) それとも(蚊に?)  
マヨネーズが出ればいいのに

マネエチャア諸君! ((声のヴォリュームを上げて  
じつは筋肉質の 着痩せするたいぷのその男にみんなが見惚れている。  
腕まわりが好き 手首 肩まわりをストレッチしている姿が  
でも 肝心なのは シャツでも 運動服でもない  
ただ その背中に抱きつきたい の さ  
いいにおいがする、ワン、トゥー、スリー、フォー

最初の物質だと信じている——砂・砂・それは・砂——  
最も小さなものに触れ て(お・も・ち・ゃ !)  
あらしの先なのか後なのか それとも  
ちがうのか ! 時ダケガ知ッテイル時ダケガ知ッテイル  
追いはらわれていたもの が

物象を作っている」

ずっとそそがれた、

綿菓子のような夏の旅の熱りを、いつまでも、

ためら っ て る。

ああ なにか忘れ物 を した気がするよ 今でも。

なげき

悲歎の壁に、重い天気の記事詩だ。

なぜ我々はこちらなのか?

戦争は終わったのか――

それとも管理された、天気予報ということなのか。

だから醜態を演ずるよ、いつまでたっても――

Don't stop me now。美しすぎるよ mistake。

そして誰れでも、それを ね蝶の翅のようだと思う、

そのかすかな瑠璃色を。

また情熱の狂想曲さ。の きこえる だろう夜に、

身を 横た え て――

うふん ついに笑いが止まってもだいじょうぶ

あはっ だ――

.....ぼくは忘れないから そのかわいいお臍 .....

...そのとうめいな陽の光をうけた背中の中のライン ...

誰だってそうだよ

と やさしくあやされて

...気持ちの整理がつかない

よ 時には **どんなことを考えていた**

**どんな風に喋っていた**

――流行遅れの帽子 ...初めて見る海には麦稈が似合う

…遠くに

…この気持ちの 遠くに

――夜。…砂が あるだろ。…風が

僕等の隙間から吹き込んで吹き抜けていくだろ。

恋人は海。…君は優しくて

誇らしくて、僕を限りなく愛してくれる。

. . . , 歌を忘れて 波になりたい時があります . . . ,

. . . , 声じゃなく 風に . . . ,

うふふっ

そうして きみは眠りへと就くの さ 安らかな眸ざしで

季節のうつりかわりを ふたり みていようね ?

ああ そう 秋の箱庭 で

一人ぼっちは痛い… (あなたが創りだす景色に… )

呼吸ひとつびとつ、… (分かっているだろうか… )

心と魂は、夢想する。ああ、僕はそれを視たよ！

ずるずると移動する蛇を、街灯に一瞬てらされる、

青褪めの顔を。それは、こまかい格子縞の、

眼球を覆う、毛細血管。

gold collectionさ。

揺れれば消えるから、うしなわれるから……

けむり

紫煙を mirror する。

そうしてりゃ、狂いも、壊れもしない ね。

そして忘れないよ恋人たちの予感を。

を——

これまでのところ、これを閉じてきた*Long story*

おどるよ、*Endless waltz*を。

ああ、酒とバラの日々、

.....*Don't stop the music (Don't stop!)*

.....*And now?...Now, look here,*

真夏の夜の、処方箋。

「ことばを忘れてしまってもだから大丈夫 ！」

それはよくやる癖だから」

映画監督！

スクリーンの中で、君はどんな化粧をして、

鏡にウィンクするんだろうね？

どんな想像を裏切る、リアクションで。

天気予報は外れた ね 親子連れだ ね、

と くつろいだ様子で言うんだろう。

ごまかせないよ——

木の葉は、二階の部屋まで這入ってきて、

動物園の飼育員が立ち会った感動的な瞬間のように、

剥き出しの笑顔、を 僕に望ませるから――

パステル・カラーで、いろどられた王子様ではないのに、

しげしげと覗き込んだ、閃光弾で、目がくらむような光。

髪の毛を撫でるような、さびしい、林のはずれで、

ゆらりゆらりとシンフォニーはながれる！

しんとしていた道端の草・・

I have recently realized that...aware that he had exceeded the speed limit.....

バーガンディ・クラレット ダイキリ・フィズ・ブラディー・マリー

ききとった…おとから……

聴き取った音から空白をつくりだすことくらい造作もない

ああ…その……

ああその濁った水の中じゃ――透き通った泡――

I found the button loose...became conscious that he was being followed...

ウィスキー・ブランデー リキュール・ジン・ウォッカ・ラム

Ah...ah.....ah.....ah... だれも語ろうとはしない。・・

Ah...ah.....ah.....ah... だから鎮まらない！ 優しくなれない！・・

男らしさ・女らしさは、まるで貼り付けられた蝶、

いきれる（ズボン？）なぜ（スカート？）

なぜ“わたし”と“ぼく”または“おれ”で、

更衣室やトイレは別々。

…愛は、間近にある

Ah...ah.....ah.....ah... 君は、もう間近…

Ah...ah.....ah.....ah... 空は、もう近い

ド-ミ-ト-ファ-ソ-シト  
これらの愚かなものは、ワイン、及び、バラの日

本当の君を探していて…

本当に君を探していて…

本当の君を僕は…

「また巡り会う

その美しい光の中で

何度も 何度も きみに―――」

(……しかしながら、しかし)

フロッピーディスク…、まじめにはたらいてよ！

(…びよびよ びちよびちよ)

アイマスクを早く外してほしい

会いたいな スカートをめくった短パン姿のあたし

ハズカシー！ でも見せたいくせに

ボイスパーカッションの舌打ち 磁石

砂鉄 ようやく夜を一つ越えたね

(…時計のネジがとける音)

ようやく夜を一つ越えたね

月明かり が オカリナのように響いている

くす玉がわれた ら SAYONARA DARLING

……………うふふっ あははっ

そしていつかは つたえるものを 聴 い て い る

霧が映しだし 不均衡なガスを拡散 する ピ・ツ・アア・ノ

——きれいな ことば

…きみだけの ことば

いつかわかった

蝋燭が吹き消されてしまう ま で

まだ時間がある——

だからその優しい名に包まれながら、

大切な箱を開こうとした

いや孵すんだ。胸に宿して、

サルファー・イエローの、

鈍いヒヨコをいま眼の前で見るのは、

特別なワン・シーン――

でも 墮落への道が いましずかに満ちていく格好で

<今夜わたしに教える・・・ わたしにに対する愛をつくる>

――ピ・ツ・アア・ノ 人生は燃えて

…………もう悔やむの、

終わりにしましょうね、

い つの日もふり向いてばかり。

落穂を拾う、年老いた人々の手 は、

泥だらけの靴に な る。名声を獲るには、

大荒れの天気。どこからともなく、ペンギンがあるいていく。

もう悔やむの、

終わりにしましょうね。

さ よならにくちびる

噛んでばかり――

…………ああ なにか忘れ物 を した気がするよ 今でも。

蠅が飛び交っている、集っている、

いちかばちかのすべてで憂鬱なbabyが、

駈けまわっている、あなたの夢を壇にいれ た

はずですが ghost。避雷針のあたりに、

毒素をぬくのはむずかしい。

わたしには耐えてはゆけない——

曲がりくねった並木路で、

あの回路に通っていた、仲間たちに、

言ってやるがいい、知らない人にとっての、火事は、

ラスベガスの悪夢。

最後の夏の、メートルの範囲内で

どんな白日夢が起きたの か を。

.....へその緒をちぎった瞬間から記憶が起動するようなふしぎな味わいで

とぎれとぎれに ひらひら ふわふわとしている

...桜の花びら

( ちりぢりに打ち捨てられた僕の記憶 )

またひとひら、翅が燃え尽きる

ひと ひら ふた ひら

—燃え尽きる...まで—

——美味しいものを食べるために生き ..

『世界中の』（よ、）「いろんなところを旅するために」《生き、》

・・・かかれています 糖質 タンパク質 脂質 ぶるう・のおと

肝心なのは IDでもない いや 口座でもない。

ひ つ よ う なのは 必要なのは

・・・表現が.....世界を.....変える .....

.....魂が .....人生を豊かにする.....

..情熱が.....真夜中を.....焦がす .....

紙袋ががさがそ動き出す 独裁者によって裸にされても

たとえ それが同意のものじゃなく ても

世にもまれな魂まで奪い取れた正義はなかった

そし て それをつかみ取った技巧はなかった

そう さ おかしくもないことまで

ぼくらはわらう——笑う、笑うことが、本当の勝利

ねえ—ねえ・・

「 緑の芝のうえで君から違うクラスの男の子に告白されたことを聞いた  
(千の舌、万の舌、、) 熱が舞い上がりBrown そしてBlind でなけりゃBehind

透きとおったあおい空から この午後 僕は白昼夢 』

…桜の花びら

一親指と人差し指で、フォトグラフ。

手を繋ぐことも恐れていたから…、不器用だから…、

次生まれるときは人間 ! ヴェランダの生乾きの洗濯物みたいに

だばだ。 だば。 だばだ。 だ…

\*\*\*\*\*手足も、身体も、青白い顔も、鳥餅のように何でも掠め取る、

冬の光にも似た——手厳しい、自己不信…

(音が無クナッテ 音が無クナッテ )

…オタマジャクシ 世界中が溶けそうな夜

息を止めてプールに潜る 瞬間その瞬間が FINS ..

I の 宇宙へ はてしなくつづく DIVING 風に強く作用する

魅惑する? (骨抜きにされる?)

そしてどこで ? EROTIC きみは跳躍し 疾駆する

液体それはひとつの核弾頭

でなけりゃ恋におちた MAGIC

彼女を見てればわかることがある

見ていたい———見ていたいのさ———

得体のしれないかたちになって（呼吸をして！）

ふれられない髪になって

あたらしい旗を迎え入れる

ここは VENUS の街 の BAR

まだ快樂にひたりきらないうち——不安だ——

やわらか く ねむたげ な（その 声 ！）

いまも小麦いろの見も知らぬ 扉を KNOCK すれば

時が止まる そうさ

さそわ れ る——時が止ま る——

帽子 を とりながら BELL を（鳴らす VELVET ）

きみの甘美 な SPIRIT に

もつれて でてこない酔いがまわ る

それは EROS 夜明け色の蜜

あおじろい恐怖がつきまとう SECRET

場所ノ記憶アナタガ寝テイル間ニ BACK STROKE

めまいがしそうなほど ふたりだけの BED が

す れ ち が い絡み合い と け あ う

SAND CASTLES ………、

# -- 言葉を信じて ..みたい..

-- 顔も声も、知らなくても、 ..

『気付いて』（くれる、）「そして僕が誰かわかってくれる」《よね、》

.....君を.....知ってる.....最初から.....

.....恋する運命.....長い間ずっと.....

..君を.....探していた.....んだ.....

.....波まかせ.....

..風まかせ.....

呼び掛けたもの

つたない亡骸

(--さめてゆくものの冷質..)

いましずかに頬を濡らす雨

《インパクトの瞬間》

.....溶けたようなカタチ

呼び掛けたもの

つたない亡骸

見ないか ら …… もう わるい夢

見ないから ………

愛の海で わかちがたい 時を手に入れた い

君のすべて に

宇宙のトンネル………

未確認飛行体

ふしぎ な 髪 をほどい て

おもひだす いま に も

褪せていきそ う な

シャワーの音 砂をはらった ま ま

過ぎ去った かぎりない “昨日”

駆けおり ていけ ば

ME FOR YOU あなた と

┌ (ひとつの世界がつくられる、) とっくにおなじ世界にいないこと  
凍る間際の水のように溶けているのか固まるのかわからないまま  
ボウリング場でハイタッチしていた  
(かすかに、かすかに、ざわめきはじめる、、、)

トンチンカンなほど君にいつでも触れられ┐

ああ あなたと

おしゃべりしていた頃

あ あ 夕焼け

魂 は 知 っ て い る ね ？

そ し て 僕 が 手 に 入 れ た も の

い ま も …… この 胸 に ……

……………波まかせ……………

…風まかせ……………

たいせつにつくえのなかにしまっている

ハートが表示されないファンタジー

あなたの海に波は要らない あなたの瞳はサイダー

……………で、知ら ーる

オカマじゃない、

それといってニューハーフ ない。

“なし”だ、“あり”だ、GAME、

ジャクソン！…ティーヴィー

行き場のない感情 画家の前で服を脱ぐ

そんな写真を一枚もっている

ニユウヨオクのツウルじゃない

パリのあるカツフエでファイル

地図にも載らない楽園

「腕から鎖骨にすべらせた指を首筋に喰い込ませ

鉄筋コンクリートのなか…これから改装するこれから回想する

—透明なの？青なの？ えぶり、ない——ビルの上からダイブ！

辞書をしらべるのはめんどくさい 値段ではない（美はどこ !）

ベイブルウスとよばれたい、たまに織田信長になって、

トヨタって、TOYOTAして、

トクナガっていたい（時間は不滅…）

…応えてくれるはずのない腕、腰、、があって、

いまは肩 いまそうして あなたの歯があたる、、、

泣いてしまう、痛くて、、痛くて、、

ぜんまいを巻いても巻いても進まないロボット

からだの奥底から湧いてくる疑問

払底できない=蛆=喪失する記憶

いまま誰にも理解されない AMUSEMENT PARK

うつる雲 ゆく風 みずのなかの温み凍てつき

世界はちょうど死んでしまった人の夢に船酔い

操作ミス で データ消失……

枯れて折れて死んだんだ。それは“病気”だったんだ

このさずかりうまれた心に凧と嵐と

人恋しさのデ・ザ・ツイ・ン

もう少し掘ってほしい——手が傷付くまで——

濡れていてほしい（濡れていてほしい！）

根の硝子細工をつくりし妙手のわざで

血が流れてほしい」

大切な ことは 感じるほどに 強くなる

大切な ことは 感じるほどに 強くなる

日陰の中で、珈琲が欲しくなる

…弱いランプの眼でいたくなる

. . . , よかったって よかったって . . . ,

. . . , よかった って. . . ,

——運命 が

なん だ っ て 言うんだ

なんだって…どうしようもなく——

嘘をつけなかったらいいよね…嘘は咄嗟かい？ ——白痴さ…

引き攣る指が津波

まっしろなまっしろなまっしろなシーツの風

なんでそんなに臭いの、、、

教えてくれないの …駅では（オス？）それとも（メス？）

駅でくばっている、われらがポケット・ティッシュ。

（…………くず箱に廃棄処分 不安なコケティッシュ。

ここに“しわ”が見つかる。

化粧も筋肉の付き方もノオ・プログレ。

あ まり（区別？）カンケイ（区画）。

肉体的機能によって二次的三次的な役割、

サンプルにカヴァーにリミックス、

（…………生殖や、自然の摂理は有名な話）

ときどき不公平だとかんじる。逆らいたくなる。

……………波まか せ……………

…風 ま か せ……………

かんしゃく玉を すてて も

君は このひと時 を

……………消せやしない

せつなさ 抱き し め てたか ら——

「何がしたいのかイライラしていた僕は草をぶちぶちと引き抜く

しかしそれはまるで使っていない電話器のようなのだ

（何処にも差してない、）根っこはまるで てらてらしたみみず

生々しくはなく ただ干乾びて気色悪い」

やがて 草原 は ふゆ枯れへと近づ いて

翼をひろげて鳥は旅立つ

向かい風 の ストーリー はけれ ど

いまも この世界 の すこし うち側で

まわり つづけて る

“まわりつづけて る”

“どっか 頭のおかしい しろい部分”

“そ う まわりつづけて ら”

“あたまの うえに 扇風機”

.....波まか せ.....

..風 ま か せ.....

ティーヴィーがなくなっても

SOSレディオ。

キッチンでは電子レンジの音がきこえる 鳥籠と

そしてうつくしいカナリアと

南国の花 音楽がはじまる。 花びらが飛び交う。

靴ひもを結びなおしなさい！

転職 それとも結婚

あるいは未踏の人生へのチャレンジ

ピアノのペダルも踏むことができなくなっちゃって

ピナコラーダ ！

シャバドゥビ・ドゥビダ …

成功のため！ あなたは銀行をもっています

そしてあなたの預金通帳には

お金が振り込まれ続けています

さあ いつものをくれ！――

ピナコラーダ ！

シャバドゥビ・ドゥビダ …

うふっ ときみが微笑むから

とろけたように 死んでもいいというから

僕はそういうものを紡ごう ね

夢を見て傷つくことのすばらしさを

考えた…って ――わからないはず なの…

はぐれて…いるんだってこと ――わかってるよ ってこと…

――どんな 気持ちになるの？

「奇跡だって思うんだ 心にとどまるって

思うんだ 」 …彼女でなくちゃ

なくちゃ――って…

テープレコーダーが絡み始めてる

玉になる それで頭にきたりもする

愛情の—— 裏返し…

——海沿いの公園で ……蜘蛛の巣になったみたいだ

…遠くに ……この気持ちの 遠くに

いまじゃ 君が僕の心のように思える… 素直になりたいの さ——

素直になって… 笑い話 で—— 盛り上がりたいの さ…

——あの時 傍に いるだけ で …

、、、  
この感じで 惹かれた

…どんな 言葉なら よかった

何度でも味わう た め の

やさしい嘘 が

ああ そし てい ま も

まわり つづけて る いち枚の羽根

今度のもっ と 素直になれる か ら

やさし くなれる か ら……

うふっ　ときみが微笑む

探していたのは“innocent”

…桜の花びら

(  
ちりぢりに打ち捨てられた僕の記憶  
)

なだらかな稜線をたどる、イメージの羽根…

ひと　ひら　ふた　ひら

—燃え尽きる…まで—

抑圧からの解放　いまこのひととき　が

とおいゆめのように　さそわれる——かわされる——

．．．．よかったって　僅かに遅れながら　．．．．

．．．．よかった　君に出逢えて　．．．．

季節はふたつの間を　飛び越せない　！

だから飛躍がうまれる　感情は亢進する

とお　い　とお　い　ゆめのようにはるかへ

さそわれていた い——さそわれ る——

とまる時..すなわちうつろう時！

もつれたことばと孤独がつりあっている

そしてしゃべれなくなる 饒舌れなくなる

こじれそうになる

. . . , よかったって 僅かに遅れながら . . . ,

. . . , よかった 君に出逢えて . . . ,

アイスボックス

携帯用冷蔵容器に手を ！

入れた瞬間にイソギンチャクでよかったオクトパスでいい

えぐ れ た 氷上の筋となっ て SKI PLAYER

板のままゆらゆらと歩き続けよう

重たい躰をかかえ て

うごめいた群れに消え よ う

透明で美しいものだから 恋で目が眩んでしまっているに違いない

きみの指の爪となって——PICK となって——

弱められた反響となって..ねえ 星は出ているかい？——

ねえ 星は出ているかい ANGEL 曇っているか晴れているかも

わからないほど ROMANCE さ LIGHTHOUSE さ

ああ きみがぼくを見つけた日 の

ぼくが きみを見つけた日

僕は くだらない男だったって 何処にでもいる奴だったって

——そう思う そう思ってみるんだ

．．．．よかったって 僅かに遅れながら ．．．．

．．．．よかった 君に出逢えて ．．．．

「もう、…行くね」

振り向きはしない背中姿に

手を伸ばそうと、する、、

…もう誰も見ていないよ、、

長い間の気まずい空気も、、

花びらが取り巻くように漂うよ、、

「好きだよ、、ほんとうに好きだよ、、

何も考えられないくらい、、

好きだよ、、」

振り返らない、振り返らない、振り返らなくていい、、、

…もう誰も見ていない、、、

…もう誰も見ていないよ、、、

———桜の花びら、

*Spring has come.*

春が来ると、「アイ・アム・ザ・ウォルラス (I Am the Walrus)」を思い出す。ビートルズの曲。「ストロベリー・フィールズ・フォーエヴァー (Strawberry Fields Forever)」と並ぶ、僕にとっての春の曲だ。琥珀、ばらまかれた・割られた硝子。打ち砕かれたベッド。おや、学校のチャイムの音。驚異と感激と恍惚が腰を下ろす、椅子が歩く、電信柱が座る。鴉が話す。――曲がりくねった山坂をよじ登って来る、季節の声。

スポンジ

・・・海綿だ。一五〇二年にクリストファー・コロンブスによって発見された。イスラス・デ・ラ・バイアという所がある。僕が一番気になるのは、島の歴史ではなく、ヘヘンという日本の蚊を小さくしたような虫のことで、これに咬まれると痒くてたまらない、とウィキペディアで説明されていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・  
町ぜんたいに阿片を受け入れて・・・

冬はたとえば、寝台車の上段のカーテンをピツタリと鎖しているようなものだ。

「ブリキの時計に息吹を吹き込む、ということかい？」

セム語で“主”を意味する。嵐と慈雨の神・・・バアルよ！

カエル、猫、または人間に似た姿で現われてくれ。――

・・・・・・・・・・・・・・・・  
サイケデリック音楽。リヴァプールにある戦争孤児院は閉鎖し、修道施設となった。

何もない空虚の闇の中に、急に小さな焰が燃え上がる。祈祷や瞑想。

――背圧、と彼は言った。

——原動機における排気側の圧力。

付け足すと、正常動作できる背圧の最大値を臨界背圧と呼び、排気側の圧力がこれを越え  
ると、吸気側への作動流体の逆流などを起こして大惨事になる。

原動機にとってはそうだろうが、人の運命にとっては、こう言い表わされる。

、、、

「即死する！..」

\*

周囲がまったくの無であったら..まったく系統のちがった、違和感に満ちた社会が存在す  
ることになる。ストレスは皆無。プレッシャーは無し。人もいなければ、物もない。

僕はそんな時、多座配位子と金属イオンからなる連続構造を持つ錯体のことを考える。も  
ちろん、超限数でも、ユークリッド空間でも、小数点でも構わない。

鼠の色に似ているハイイロアザラシに無限を感じ..て——もらっても構わない。

でも配位高分子だと、二座配位子Lと二配位の金属イオンMからは(-M-L-M-L-)構造が無限  
に連なった配位高分子が生成し得る。

この感じは一九八四年にフィンランドのヘルシンキで結成されたヘヴィメタルバンド、ス  
トラトヴァリウスの「アイ・ウォーク・トゥ・マイ・ワン・ソング(I Walk to My Own Song)  
」を僕に想起させる。——もちろん、二、三度バウンドしてから落ちたボールや、硬貨のこ  
とを僕は考えている。ヘヴィメタルって大体そんな感じである。

遠景に弧形の地平線が現れ、その上部は次第に白光を放つが、ある日気付くと、ジャック  
と豆の木風の安普請の庭に、よくわからない内に鑿たれている、広場の小石。不条理だが、  
うが

誰にもわからない。何故広場の小石があるのかも、どうしてそれが鑿たれなければならないのかも。でも、まわりに雑然と、何らの組織も配置もない気分の時、僕等は大抵バイクに乗る。サイド・スタンドを外して、変装する二の腕は把持しながら兵士のように脳内の指令者に随いながら、羸弱な感電体となり、唯一のストップモーションであるエンジン・キーをいれる。差し込んだこの鍵が、旅という鍵の拡張を始める。清々しい少年の姿、黒髪で、煙草をふかし、ブランデーを呷る、発作的に詩人ランボーの代名詞となる若さの神経を纏った孤狼。アクセルをひらくと、鍵サーバーから鍵をインポートする機能が追加される。キーボード入力、ワード登録。さながらトイレタンクに浮かぶ聖書。

――革手袋の下のグリップがすこし硬い。楚囚の詩の北村透谷のように硬い。

ハイ・ウィッカム空軍基地に一九四四年から一九四五年にかけて、アメリカ陸軍航空軍の部隊が駐留している、イングランドにあるイギリス空軍の基地にして、バッキンガムシャーのウォルターズ・アッシュ村である回りくどい表現も少し硬い。

ハードボイルド作家だけに夜の生活も野生的である、というのも硬い。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、

せいっぱい爪先立ちをし、クラッチの操作をし、かじかんだ両手にいち、に度軽く息を吐いて暖める。そんな時、僕は決まってオニオングラタンになってしまったような気持ちになる。確かに、ピッツアだったらよかったのに、と思う時もないわけではない。

いや、グラタンとピッツアはまったく別物である、と思う時もないわけではない。

――しかし、実社会とは直接何ら関係もない淋しさが硬いのだ。

つい、先刻まで僕は力の発散する湯気のようなものを思い描き、しかしそれが沈澱して固形の石鹼のようになってゆくイメージに随分やられていた。部屋の中でぼうっと過ごしてい

る、暇人という僕にも、美と名誉くらいある。

ロードレース世界選手権で活躍していた、僕の好きな選手が事故を起こし、そのまま、病院に担ぎ込まれた。ニュースの扱いは不当なほど小さなものだった。

咽喉をしめあげてゆく憎悪が蛇の斑に思えるまで、花卉は散った。

――ああ、マルク・シャガールの“散歩”が思い浮かぶ。・・

\*

…………友だちの死に想いを馳せた。

呼びだす世界に分け入る平野、第一次的第二次的、

音楽の吹込みに立会いながら、思い出の深い踊り

曲の奏されるのを聴きながら、

それは哺乳類固有のパイエル板・・。

バイオアベイラビリティ

ひろびろと見晴らしのいい曲がり路へ出ると、生物学的利用

有機生命体の脳・・腐敗させない、常に一定の温度の液体のなか、

計算するのではなく人間の脳のように考える、コンピューターシステム。

情報パフォーマンスの向上・・反応速度を引き上げる常に最適な電圧変化！

*凹凸のはげしい石畳……夕方にする、紫蘇の匂い――*

「ポーズ機能の中にヒントが入っている、誘導装置・・」

彼は高校生。自国風に異なった発音で、コーコセイ。

毎日、東から出て、西へ入るたびに、それは少しずつ失われてゆく。

今朝は、その希少価値的現象（V S 両親。）

ホール正面の、階段のあるステージ。校門前で僕と出会う。

観覧車止まる静止画像——エンドレスリフレインしますか？

『宇宙探査機パイオニア—O号・—号に取り付けられた

金属板に描かれた、人間中心世界思想』

カウントダウン…カウンタック——

おはよう、の代わりに、糞、という国民的悲運を表現した彼は、

接近戦向きの武器であるサブマシンガンの性質同様に唾を飛ばした。

そして、その映像は美化修飾され、高感度ガンマイクさながらである。

隣室から電話の通話を聞けるし、—km先の微弱な音声もキャッチできる。

「凝った水を啜っているかと思うよ」

「アイエッリ (Aielli) は、人口—五〇六人のイタリア共和国

アブルッツォ州ラクイラ県のコムーネの一つで…」

一つで…ひとつで——（遅れてゆく、思考）

「瓦の形に似てる」

食堂、シャワーカーテン、…グラウンド、屏風のように、

薄っぺらな建て方で、校舎が見える。（ズームしますか？）

（しなくていい）と打ち込むが、死に切った静けさの闇夜、

ヴァンパイア達が群れる…謎の隕石に精神を操られる——

ゆえに、獣は曲った毛むくじゃら。



「世も末だ、…名刺サイズのコレクションカードみたいなことを言う」

(いいかい、坊や！…そ・れ・は・嘘・だ！)

夕陽のシルエットのなかで膝をかかえて、愚痴やため息を、

キャベツに変えて、…シンデレラとデートする喫茶店。サラという子。

冬の女王と異名をとるサラ。相手を一瞬で凍らせる超冷凍波を放つ。

「やあ、今度デートしようぜ！」

「ごめんね、今度はまぐり拾いに行かなきゃいけないの、また誘ってね」

(はまぐり拾うなら仕方ないさ、と慰め合う二人の男の子)

、、、、、、

僕等はいつも、その教室でクラブ活動をした。

生徒たちがいなくなるまで、色んな話をした。サラや、

ベトウヴェンのような顔のマスターも混ざって。煙草やビールも少々。…

「そして、塩と胡椒と砂糖を入れると、王国になった！」

「羽ばたきになった…暮れてゆく空の色をうつして——」

将来かれはトラック・ドライバーになるのもいいな、と言った。

口癖のように、時速120キロで暴走して、——(樹木、灌木、草)

…色んなことを忘れてゆくよ、広葉樹、針葉樹、森林、サバナ、砂漠。

「サラ、あの時、…君はこんなことを話してた」

「サラ、日本の中でも他に見られぬ固有のもの…」

違う…言語がおかしい、そうじゃない、感情の使い方が間違ってる！

機能回復…他校との練習試合？——そう。…サラが、僕等以外の奴と、

話してる。そう…サラはニコニコしているが、——内心困っているのは見てとれた。

デートの誘いを断れずに…マスターもいなくて…そう——僕等は突然、

金属バットで奴をこてんぱんにするために、…トラック運転手になった！

「うちの兄ちゃんさ、この前、自分の彼女を口説いた奴、半殺しにしたって！」

大きな声で——もっと、大きな声で！

男は逃げ…サラっていう、おまわりに追っかけられるんだ。

そしてそんな風に僕等はバイクと、ビリヤードと、

クラブ活動の生活をおくっていた。ぺこぺこお辞儀している。マスターと、

バイオメトリクス

生体認証…でも指紋はもうない、パリやロンドンの町に降る雪が、

彼を攫ってしまったから…リップムーブメントではもうわからない！

時計とカレンダーはそこにはなかった。がらんとした、喫茶店。

ただレコードのうえに黒い鴉が居座っている。——（またとない！）

\*

——若い僕等には、有り余るほど時間があつた。ジョルジェット・ジウジアー口のカーデ

ザイン。俗に「折紙細工」と言われる直線とエッジの利いたデザイン…で、ホメーロスの

『オデュッセイア』の中で、オデュッセウスはキュクロプスの国を脱出した後、風の神ア

イオロスの島に着き、西風ゼピュロスの詰まった袋を渡される…（第十歌）——何は

ともあれ一週間しても一向に帰って来ない返事にも割と平然としていられた。たとえば、悪

質な電話勧誘販売への対策として、ナンバーディスプレイによる相手側番号の識別や非通知通話を受けない電話機設定などが一般化するに伴い、着信時にフリーダイヤルの電話番号を表示させるように電話勧誘販売業者が「フリーダイヤル番号通知サービス」を利用するケースがある。..そこに一つの形が決定せられ、時が止揚せられると考え、一一意識は必ず意識された内容をうつすと信じ..走りながら想った一一単調な窓外の景色である！と。

「時計はその一つの便宜的説明にすぎない！ 時計のリズムは脈拍にすぎない！」

時々近くで雷が起こった一一曇天の下に吹きつけられて来る白い煙、腹の減り方や眠けの  
コーディアライト  
催し..地歌のように思えた。まるで堇青石、多色性が非常に強い。観察する角度によって色が群青色から淡い枯草色に変わる。..まるで森の深緑に光線の直射している強烈な色彩の泳ぎ。  
スリッター  
もつれている..鋳刀切断機。

「サラ、どうしてお金がなくてもよかったのか、と思うよ」

もう隣の席に座らない彼..しかし彼の代わりに隣に座る、サラ。

動く絵と新しき夢幻一一要塞建設のためにリベラ区 (es) が廃止され、一二〇〇軒の住宅が壊され、修道院のあった場所は灌漑用運河にされ、約四五〇〇人が住む場所を放棄して退去したシウタデリャ公園みたいに。気長く待っているうちは、三十秒が三分間になったっていい。三時間となれば一か月になるとしても。

...でも、紅茶を啜っていると気付く。汽車の時間だ！

入口は一つしか無い。入口は即ち出口だ！一一

「アイ・オブ・ザ・タイガー (Eye of the Tiger)」はアメリカのロックバンドのサバイバーが一九八二年にリリースした楽曲。面倒な台所を、非難するのに飽きてそこを厨房にし

たくなったら、大抵この曲を聞いた。…試験前—

あまりに空を意識している、…僕の心…そしてサラの心。

ブラジルの見えない壁＝ジウベルト・シウバ。

「それは多分、僕等が学校生活に心底うんざりしている、劣等児であったからかも知れない。学校にうんざりしていたのは、時間と金をかければ良い作品ができる、という映画の迷信を思ったからさ。才能を…でも、わかっていた。僕等には有り余るほどのお金がなかったことを。でも、そうでもない、二五〇〇〇以上の座席がある、アイオワ・スピードウェイを僕等はやっぱり駆け抜けたのさ」

何でも、自由なものを書いたら、うねうねした坂道になり、ポエムになり。…いま、何時と聞くようなものさ—地に足がついてない。背中に翼が生えてる。でも仕事をする顔つきが変わる、人はどんどん社会に操られてゆく。

—乾燥の声の如く、ああ、奇体な無関心さ！

エンスタタイト

頑火輝石の…バターの匂い！

「…両親のこと、上辺で付き合う友だちと呼べない人々のこと—口では利口なふりをしている、矛盾と知りながら、正義や理想を想ってる。学校は社会の縮図だ。一日のうち何時間か働く代わりに勉強して、何時間かは休息して生活している。でも会社ではないなら、もっと青春してみたいと思う。でも僕等は醒めてた…古い礼拝堂の方にある、土塀の間にあった小門へとロートレアモンの影、ポーの影が消えてゆくみたいに、とても象徴的な瞬間だった。悲しみが僕等を生かした。切なさはむしろ生きる教訓だった。夜ふかしする癖に、タイムレコーダーは冷たい。締切はさみしい。でもそれを趣味だのという商品陳列所の方へ行

ってしまうのは馬鹿げてる。僕等に必要だったのは、自分の肌で感じられる哲学だ。その時、その時に見た色や、景色や、感じ方だ」

マーク・ガートラーの“メリーゴーランド”という感じだ。・・

「ねえ、顔をしかめて立去る、ゲームの話題。流行さ、・・その風邪を僕等は嫌った。女の話をもっと嫌った。口先でサラと接したことはなかった――僕も彼も・・」

知ってるわ、という風に、磁場中のある一定面積を通りぬける磁束線の垂直成分を足し合わせたもの。磁束・・磁気誘導束――でもたとえば頭脳はそういうものを愛した。愛しながら、気に入らない僅かな素振りや言葉に、不機嫌になった。

趣味は読書、ゲームかい？・・なんで漫画って言わないの――面接で。いや、その作られたプロフィールに心底腹を立てながら思った。可愛い社会か？ 女も付け髭をし、腋からぼうぼうと汚いものをぶら下げればいい。

ああ、理論上の成長率。内部成長率。サステイナブル成長率じゃない、本当の資産とは何だ。心の糧を送るのは、本当に余裕のある心なのか？・・

ねえ、ピアノ演奏の技術を身につけても、誰かに自慢する・・あるいは自慢できない程度の技術だから、プロにならないのかい、・・特技なのかい？――それ、必要なのかい？

「多くを与え多くをうけることは、不自由な要素じゃないか、と学校生活を見ていて思う。青春なんていうご都合主義的な概念の期間を死ぬほど嫌った。夏休みの宿題が嫌いだった。サボテンのツンツンしているところがどうにも好きになれなかった」

――ほら銀蠅が恋を口にするぞ、ああ蛆のシャワーだ！

思ふぞんぶんにXYZできるといいんだけど、完璧な現実の予感の前で、欠陥の多い現

実世界は大手新聞のようなものだ。身体じゅうがしいんと鳴りをしずめる…本当に欲しいもの、本当になりたいもの——福音書を書くような態度で、熱意で、この世がまだ望みあるような態度で尾鰭があることを望んでいた。未来がある。…各人各種の技能の花を咲かせる。でも、すうっと熱が引くように、しみじみとはかない身の上。

疼痛・腫張・発赤、発熱…自己形成の時期だ、第一人格から第二人格へ、小さな戸を押し開いているみたいな毎日だ。時間は。そう。…時間とは、愉快にすごすのも退屈してすごすのも、空虚な大元に操作されている、感情任せという現象によって生まれている。規則を破れば墮落する。でも人には、あのいやないやな落ち着くことの出来ない、孤独しかないのか。絶望しながら過ごす、でも生きている…サラと一緒にいる瞬間。

特技がバスケットボール、スノーボードだということを、愛せそうだ…

この時間、砂にもなる。花にもなる——本質的教示を含んでいる、満腹することのない、この怨霊から、眼をそむけること、…

「なんだ結局僕等、いちばん青春していたんじゃないか——？」

\*

ニア・ソーリーと言え、ピーター・ラビットの作者であるビアトリクス・ポターが半生を過ごした土地だ。半生の懺悔がわかるほどの年齢じゃないが、杭が残る、無数の追憶的風景画を残した絵本を想像するたび、世間的、人間的な苦酸を十分埋め合わせるほどのものはない気がする。ただ、その対蹠点に、炎に触れるがはやいか、役には立たないものの脂肪の燃焼力きょしょう いんいんのようなものを思った。巨鐘の殷々たる響きしょうらい。松籟の爽やかな響き。

「そしてそれが美なのだった。」

張り切った鋭い矢音・槌音・張ってある網の絡み・

…なぎさふりかへる我が足跡も無く (尾崎放哉)

ざ・ざざ・ざざざ

空隙に現れた心の影。轟と棲んだ喪心——夢遊病者・

長い漂泊の苦痛。たとえば、アメリカ合衆国ノースカロライナ州に拠点を置き、かつて存在したタバコ製造販売企業。ブラウン・アンド・ウィリアムソン。

…なんだか、まるで映画の台詞みたいだ。

「ところで、ブラウン・アンド・ウィリアムソン？」

白粉を真白に塗っている、喜劇役者みたいに、沈思な一心がすぎる。

ざ・ざざ・ざざざ

ちちち、と千鳥が鳴く。

なお、僕はビアトリクス・ポターのことを、イアサント・リゴアの描いた『エリザベート・シャルロット』のように思っている。——

\*

気層の底の、そらぞらしい響き。

底空の果てからの、頭を抱え込みたくなる響き。

僕と彼は大概バイクで海岸へと出掛けていった。

そして聞いた、――ポッポッポッポと…

切符売場で切符を求める時のような、響き渡ってやまない、誘惑を…

熱情の底に漲っている、人の会話。

レストランのBGM。

缶コーヒーを飲んで、掌、足の裏に到るまで、闇の底を感じながら、黄昏の海を見た。

…クラスメートの誰かが死ねばいいのに、と呟いていた。

きれぎれな語法のように、リズムカルなベルの音、次第に濃くなる闇。

“ゴク”という液体を飲む咽喉の音が絶滅してゆく。

歌劇的な情味の――《賭博》…ちりばめられた言葉の響き。

建築材、排水溝、トイレ。階段。何の前触れもなく頭上から舞い降りてくる落ち葉。

そんなの命の遣い方じゃない、そんなの無駄遣いだ、全然輝いていない。

――ハーブやドライフラワー、ポプリ。

――自動車、船舶、航空機などの移動発生源。

…少なくとも、そう言えるだけの感覚――、眼に映じ、耳に響き、肌に触れ、心に感ずる

様々な事物が、…不幸な生存<sup>しず</sup>を伝えた。隠れて窺まりかえっている海岸にも、無意味に思え

る工場や煙突があって、遊園地があった。滑稽だと思えた。

「猟犬でもあるまいに」

…「まして、鉄道線路でもあるまいに」

イアン・クロッカーが二〇〇四年のアテネオリンピック代表選考会では、一〇〇mバタフライで自らの世界記録を更新する五〇秒七六を出して代表に選ばれるが、本番ではフェルプス

に一〇〇分の四秒及ばず、銀メダルに終わった。

気層の底の、そらぞらしい響き。

底空の果てからの、頭を抱え込みたくなる響き。

滑稽で、そのじつ、中身がないことを知っていた僕等の。

「ある意味では…という意味の——手紙。」

\*

バッティング・センターから出てくる親子の姿に混乱した。

カラオケから出てくる友達親子の姿に吐き気がした。

政治家のポスターを見るたびに僕等はブルースだと思った。

演説をしながら自分に酔っている校長にパイナップルを投げつけたかった。

——慰安婦関係調査結果発表、と官房長官は言う。

——伊江島空港、と地方管理空港は言う。

自分が嘘をつくことを認められない僕は、キチガイじみたアンダアスタン！

小狡い大人になれよ？ やだよ、…仁王門通り？ ジャッシュウモン！

中間管理職で、イジメをへいきで見過ごす教師はキングな牧師！

——窒息死した牛の写真。

——空気に触れ酸化したため、赤く変化した僕等の血液。

「ライク・サムワン・イン・ラブよ…永遠に！——」

\*

喫茶店のアルバイトの女の子サラは可愛い奴。

マスターは風変わりでラムネの瓶を買っては水槽にビー玉を落としている奴。

(以下永遠に繰り返す)

\*

僕等がやって来ると店は *closed*

たとえばサラはマスターの娘という *nonsense*

\*

「ねえ、わたしのこと好き?..」

「サラ、わからないな——襟をつまみあげる、その響きをもって人の心を誘う」

「あ、あの..」

「わかる——困惑する。泥濘とたのしい雨だれの響き」

「泥濘とたのしい雨だれの響き」

「繰り返し続ける、泥濘とたのしい雨だれの響き」

「..アンタ誰よ」

「——サラ、人生を形づくる魂の完全な音楽の演奏」

「…遠まわしすぎて、よくわからない」

「想像してご覧、薄暗い電灯、カーテンの揺れ、車輪の響き…」

「薄暗い電灯、カーテンの揺れ、車輪の響き…」

「繰返し続ける、薄暗い電灯、カーテンの揺れ、車輪の響き…」

「ねえ、…？」

「わかってる、氷りを細かく砕く音。錐のような先端部のアップ。」

「……………」

「でも君はマスターの娘だし、しかも、彼は君のことが好きだ」

「あのね、」

「仄暗い封建のしきたりに閉されている、将来有望な男子」

「う、うん…」

「光る電車がばっちり走ってる。きゃあ、何あれ、流星群？ 何あのフォルム」

「うん——」

「席にいる友達に眼をやりながら、苺のへたがなくなってしまった、君の赤色に触れたいなる。これは本当に重症だ。どうしてこんなに腫れあがってしまったんだい、オヤもう君ときたら、すぐにこんなになるまで放っておいてしまう。不覚だ、しかし君の卵焼きは美味しい。なんという不覚だ、君の笑顔を夜の部屋にまで連れて行ってしまう」

「クスクス……」

「胃腸が弱い人を僕はずっと気の毒に思っていたけれど、今度から宗旨替えして、僕は心臓が弱い人のことをすごく気の毒に思う。でも同時に、その人のことを、僕と共通の未熟さ

というものについてにしか反応しなくなってる」

「あなたは、いつも気障…」

「ミルク色の海と湛えた霧のなかに、僕の魂がある。——見えるかい？」

「いまはちょっと…でも夜になったら、想像することはできるかも」

「君なら想像するだけで充分だ。淡く溶けこんでいくと、きっと水の流れになる。目覚ましい水煙をあげてくれる…そして口笛や、朝の陽射しが見えてきて、周囲が少しずつ明るさを取り戻していく。すると、僕はそこを谷だって思う。いつしか、ひとりでに年を取ってしまった、陽のあたらない場所。谷——」

「光と熱の響きにからみついて緩やかな独唱をする彼の谷」

「朝、そっと誰かに抱き締められてみたい時がある」

「あるの？」

「うむ、あるのです——たとえば、緑のへたを永遠に失ってしまった、詩そのものの苺に。実を言うと、その苺、…イチゴの味がしないらしいんです」

「あなた、真面目な顔をして、冗談言えるからすごい、と思うわ」

「でも…ねえ、君——想像してご覧、その谷に、野生の…野苺があつてね、その野苺が大好物の狼がいる。狼はその苺のことを、とても大事に思っていて、いつしか、食べられなくなって、腐らせてしまうんだ」

「うん…」

「でも一つの教訓がある。僕は狼じゃなくて、人間だということ」

「ここ——笑うところ？」

「ううん、..キスするところ」

\*

僕等三人に、多少の変化はあったものの、一八歳、ということにつながっているという不思議な縁のもと、彼が死んだ。これほど忌まわしく、おそろしい言葉はない。ねえ、友達、僕等はあれから幾度となく君の墓へ行ったけれど、そのたびに、墓の景色が変わるのを、  
とても愛おしく思ってる。友達甲斐のない奴だって思うかい、友達、淋しいよ..でも、人の心の中にまで、君よ、触れないでくれ。僕等は親友だった。僕等がいた、その季節は永遠に思い出のアルバムの中にあり—永遠に君は僕の親友だ。..君の墓へ行くまでに、お気に入りの櫛の木があって、そこで、シートを敷いてサラが作ってくれたお弁当を食べてる。墓参り、まさか、ピクニックだよ。こんなに素敵な天気なのに、どうして友よ、君がいない。

\*

### **Summer has come.**

鵜飼いがそうするように、僕はいつもいけない子の口から、竜胆いろの鮎を取り出してやらなければいけなかった。枯蘆の根のような水の中で。素描。緋の袴とおぼしき夏なのに、  
玉蜀黍のことばかり考えてしまう。この日が暮れたら、君の声が起こりそうに思われる。  
家出少年みたいになっている、夏休み。ホームレスに近い自由で気ままな生活..

イエスタデイ・ワンス・モア (Yesterday Once More) —もちろん、カーペンターズ!..

素敵な蟲惑..最初よりずっと素敵になった、蟬の声。草原をなびく、夕方近くの風。

ああ、子供の時っていいな、晴れた日が続く！..嬉しく素敵な気分が続く！..

このまま根なし草になってしまおうか、職を転々として、町から町へ渡り歩く..人になってみようか。小市民的卑俗さ、閉鎖的封建的な因習など忘れて..ただ自由に生きてみようか。棒を捨てて、石を捨てて、矢を捨てて、そう...文明に逆らって！..

ニキ・ド・サンファルのカラフルな作品！ ポップでいて、マジカルな、ナナ！..

夏の雲..夏の風！..童心に帰ったように、すごくはしゃでいた僕は..やっぱり人間生活の空しさを承知してしまったんだろう、と思う。

彼の死から始まる夏の物語..空気がいちだん澄みわたる。遠い物音が鮮やかに聞こえる..時に打たれ、死の印象に引きずられ..金もないのに、別の人になったように、朝から晩まで放浪した。十羽二十羽がひそんでいそうな夜霧に怯え、夜道。

、、、、、、  
静寂と汗で濡れ、また蒸れた僕のズボンやトランクス..逃げ水..地鏡..

イエータ運河みたいな川もあって..全然違うけど..黄河だ！と信じていると..アマゾン河でピラニアを見つけ、鱶にも喰われちまいそうな自分の半身が見つかって..。

「サラ..」

さらに遠くに見えるもの、遠くにあつて、実はとても近くにあつたもの..。

彼女のことを思うと意識が混濁して、..けれど、心入れ替えるような劇的な変化もなく、敷石の上で寝ころび、シケモクを灰皿から拝借し、..ジュース飲みたさに自動販売機の下に指を入れたり、さりげなく、..覗いてみたり。

あんまりにも腹が減って、カードでお金を下ろすのも面倒で..牛みたいに草を喰ってみたこともある。不味かった..こんなに不味いなら、走って泣きたいほどに！

庇には白いレエスが揺れている…揺れ—て…いる…

漆のような夜…穏やかな *Key* の雨が降ると、董の色。水玉模様が散る…優しい人達に  
さえ毒づきたくなる、土管の中…あるいは森の中—飽き飽きする！

ニキータ・フルシチョフのような彼…でも、自分を知っていると言えるか、ランボー！…  
それでも葛藤は消えなかった。賽銭箱からあやうくお金さえ盗もうとする程に！…

雨の音を聴いていると、レディオヘッドや、J・S・バッハのリュート組曲第3番 イ短  
調BWV 995 第5楽章ガヴォットなんかを思い出してしまう。でも見なれたものから眼を  
そむけていると、醜悪なものの中で色を失っていた自分が、やわだと思えた。未熟だと感じ  
た。後ろ指をさされるのが、そんなに怖いか。人を信じなければ生きていけない、と考える  
ことは弱いか？…どうか—吹雪の恐ろしさ。

でも時々にはおせっかいな慌て者が、僕に、お金をめぐんでくれたりした！…

本当に、不思議なのだが…道を歩いていると、一万円札が落ちているのである！

やったあ！…ありがとう、とりあえず飯を喰い、パチンコ屋へ行き、ファイバアア！…

、、、、、、、、

嘘みたいな本当の話—素敵な夜で、風呂にも入れた、奮発して、漫画喫茶で眠ったりも  
した。…でも結局、ひとり楽しんでいる、自分で生きているわけではない、という真理が、  
僕には信じられた。かれこれ二週間くらい馬鹿をやったのだろうか、目が覚めて…サラのい  
る喫茶店まで歩いた。彼女は僕を見るなり、いきなり僕をしばいた。既に精も根も尽き果て  
ている僕にサラはドロップキックをかまし、よろよろ転がったところで、脛をすかさず蹴り  
、転んだ僕に馬乗りになって平手打ちを数発かまされた。恐ろしき恋人！…

がぱっと抱きしめられ、相当泣かれた。

「なんて格好をしてるの？ ……みっともない！ 自分を粗末にして、何やってるの！」

——たぶん、その半分くらいは、いま君にやられた、と言いたい僕だったけれど、わんわん泣いているサラは、取り乱しているようだったので、何も言わず、とりあえず、世捨て人になりやすい僕と、激情に駆られやすいサラ、と考えながら、ドラマみたいな取り合わせと感動を装ってみたりした。でも、世間から褒められるような話じゃないな、…

、、、、、、、、

帰りを告げる電話で、うっかり、放浪の旅をしていたというニュアンスを伝えたのがいけなかったのかも知れない おお——*Lover, come back to me.*

そして、もちろん僕は、都合の悪いことは何一つ話さない、飼い犬であった！…

「優雅な旅をして参りました。ひと回りもふた回りも大きくなって戻って参りました。…

野宿？ハテ…しておりません。あんなの咄嗟の誇張癖。草を食った？美味しいのですか、そのハウレンソ。——汚れた服、アアこれ実は貸し衣裳！」

、、

また、平手打ちを食らい、三十分後、喫茶店に隣接した自宅のお風呂にはいり、鏡を覗きこむ頃には、ネコの爪痕！…マスターは、頬の腫れあがった、そして、マスターのパジャマを着た僕を見て、かんらからから、と懐かしい笑い方をし、ともども飯を食べた。

「尻に敷かれている…というより、もうすでに、コレで」

頬っぺたに傷があるような感じで、頬にジグザグ運動する指。すると、これか、と頬っぺたに手のひらをあて、オカマか、というジェスチャーで。

でも不思議だけれど、自分の家より、ここにいる方が家族という気がした。

「…いや、大分前からそう思ってたけど、もしかしたら、——いや別にリップサービスじゃないで、前世とかがあるなら、本当に家族だったかも知れないですよ。あるいは友達だ

ったとか。いや案外——コレだったのかも！」

こゆび、いや違うかこれか、と、なかゆび。

——コツン、とサラに軽く頭をこづかれた夕餉である。

結局泊まりということになって、サラが、廊下に布団を敷いてくれた。僕は、真面目に本気でそういう洒落を受取ってしまい、..なにしろ、僕、野宿していたのである！——ありがとう、と言って本気でそこで眠りそうになった。しかし布団に潜り込むと、サラが、あわてて言った。「じょ、冗談だからね..」と。..そうなのだ、気付きそうな話なのに、言うまで、本当に僕は気が付かなかった。

、、、、、、、、

不思議な話である。——不思議だけれど、その夜、..友達の夢を見た。

目覚めると、何一つ覚えていなかったが、どうしてか、..手鏡にうつった街を見たくなくて、朝——空を見た。雨が降っていた。..その雨は、どんなに穏やかな雨のうちであっても、一時間もすれば、ずぶ濡れになる種類のものだ。それがわかっていて不味いコンフレークみたいになるのは、ふやけるのは、あたたかい缶コーヒーが飲みたいからだ。

*Good - bye for now.Goodbye till tomorrow.*

*say good-bye or bid farewell*

\*

ジョーカーを取り出しているトランプゲームは紳士的だけれど、——きっとゲームはしていない。たとえば日本人が人生八〇年の間に出す尿の平均量は約三五トン。

…ああ、僕は夜の電柱に身を寄せて、ピストルの煙という自分自身をしごきたい！

ほとんど戦々兢々たる態度で、完全な絶望というやつを、しごきたい！…

「尿道括約筋を、ウェーバであると考えるのは正しいだろうか？」

…その声で、浮き桟橋に留まっていた数え切れない

数の鵜やペリカンたちをびっくりさせてしまった！ああ…

待った無し！ 生か死か？ 俺が無敵の磁束の単位！ SI組立単位の一つ！

—ゲッティンゲンにあるガウスとヴェーバーの記念像は偉大！

「モールスに先駆けて電信機を製作した偉人だが、…ああ世界の歴史とは偉人！」

イエー オーソドックスなダメージ方式の横スクロールシューティングゲーム！…

ウウイエー ウェーバーの主題による交響的変容！

…その像は皇帝が枢機官に司祭の名前を尋ねるのに似ている。

「ある閉曲線を通過する磁束の変化とその閉曲線のまわりの電界とを関連づけるファラデーの電磁誘導の法則に基づいて定義することができる。一秒あたりウェーバの磁束の変化は、一ボルトの起電力を生ずる(E-B対応の場合)」

このはづく、コノハズク、コノハツク、このはずく

—意味不明！

このはづく、コノハズク、コノハツク、このはずく

—意味不明！



深刻なる印象！…亡命者や被追放者の群れに立ち交じって、君がいたら…

主義に反し、自由と平等と友愛とに反し、毒気と無知と暗黒とが底力となる！

たとえば、…沢山の人が貶めていた特殊なものが真に普遍的になる！…

邪念に驚異の臉を開け！——腐敗さえ、汝たちの抽象となろう！…

言葉を信頼するな、感情を信頼せよ！…  
あめんぼきりぎりすごきぶりしょうりょうばった！…  
舞い舞い蛾！…まいまい（が、）…

\*

サーフィン雑誌の話題、自転車雑誌の話題、そして父親がパソコンの打つ音のきこえる書齋での小言から、いつの日にか僕はゴルフクラブを握るいつびきのけものを思い描く。

アンチョビー、エンゼルフイッシュ、

グッピー、シーラカンス、ピラニア、メルルーサ ——

単調な毎日の車…フロントガラスがヘッドライトに照されて見る——羽虫の群…柳、ひきづく…炉の石が触れて、腿。

（カスタード・クリームのようにぷちゅっと弾けている僕…）

、、、、、、、、

ジロリと睨まれても、意に介さないが、やはり、ほつえかえていた服のような破綻だ。

うらがれの林、白薔薇が散る糸…最初は踏み消さないようにしながら、歩く雪の道だが、途中から血痕が落ちてる。僕はスピードを上げる。やがて有力な手掛りを発見して、茫然とする！…呆然！——陶然！…白磁器は陶然！…シルエエ…

アカシア、アスター、アネモネ、アボカド、アマリリス、アロエ、

オクラ、オリーブ、オーキシン、 ——失われたエーデルワイス。

(…もう長い間…僕の心の状態は、河原の石を洗っているようなものだ。)

十九歳、僕は家を出た。枝から枝へ飛び移って行く猿のように、…電球——街燈。

「ビリヤードはもうしない…」と誓った。故意と元気よく告げた——。

代わりに、バーへとたびたび顔を出すようになった。

レバノン出身のカナダ人俳優キアヌ・リーブス似の僕は、左利きであることも一緒に、カクテルに詳しくなった。もちろん、サラとはいまでも続いている。何処へ行っても、用ありげなせかせかした足どりの蟹だが、サラに会うと、色んなことを忘れてしまう。寛いで、炬燵のなかに足を入れて冬の蜜柑を食べているような気がする。

、、、

たけれど、色んなアルバイトをしたり、単位をとったりして、

(深く深くと思って、力いっぱい押し込んでいたんだ…ペニス)

でも、サラじゃない——他の誰かと、寝たりするシチュエーションで。忙しかった。何処へ行くつもりか、それは分らなかった。フリルのついたピンクハウス系の衣服を着た、サラは可愛かった。時々スカートをガバッと自分で持ち上げて、パンティーを見せて「元気出た？」というサラ…「男の願望だよ、」とおでこにキスをすると、頬っぺたにしてから、耳にそっと触れて、唇にしてくれるのもしとやかさの、艶めかしさ で…。

(サラは、上目づかいに僕を見…インドの『カーマ・スートラ』——)

、、、

実際の所、サラのことをすごくすごく愛していたのだけれど、一線を踏み越える行為がど

うしても行えなくて、*・・*紋切り形の抽象的な記載、浮気とはいえないような行為*一一*

*(カンガルー感覚でコアラ・・僕は神聖生命、超絶生命なるものを出す)*

でも、最も密かな感化を与えてくれる、彼女のことを、僕は粗末にした・・

頭の中がスクランブル・エッグみたいになる。スピロヘータ、リケッチア、淋菌みたいに  
思える顕微鏡の中*一一*下りかけたのか、上り掛けていたのかわからない、踏板の瞬間から、  
既に、自分はきっと滑って転んでいたのだろう。傾斜が分らなくなってくる。平らだと思  
うと滑り出す。ひらひらひらとたわむれている、増殖する不快・・サラが僕のことを愛している  
のに、*一一*いや違う、僕はサラのためになら命を落としても構わないと思ってる。でも複雑  
な事情にしてやられ、*・・*サラと会うと、いつも親友のことを考えた。一緒にピクニックに行  
く。デートもする。ほっそりした彼女のお腹をすべって、垂れ下がっている粗いスカートを掴  
んで、パンティーに触れてみたこともある。指を入れてみたこともある。しんといやしづむ  
、指・・のそりと匂っていき、静か*一一*彼女の声、彼女の蒸れたような、照れと羞らいにみち  
た表情の静か・・しげりにこもり*一一*きりにこもり・・しづもる・・静か。

、

でも、結局それ以上できなかつた。不思議だけれど、勃 起しなかつたのだ。

*(何度かやっていく内に、*・・*彼女の口の中で、僕は大きくなった！)*

「たぶん、一時的なものだと思うの、*・・*それに、わたし、インポでも構わず愛せるわよ」

・・嘘じゃない、と思う。本当のところ、遊びを覚え始めたのだって、自分が、*一一*もしか  
したらゲイじゃないか、と疑ったからだった。ところが、全然そうではない。女性と寝たの  
は実のところ、寸前で、我に返って・・僕はゲイだの、オカマだのと罵られながら*一一*結局、  
ただの一度もしていないのだけれど、まあ、そういうことってわりと世の中にはあるので、

僕はバーで、いや彼女のあそこがさあ・・と害にならない程度の軽口を飛ばしておいた。

(入れてしまえ、と思わなかった――と・・言えば・・嘘になる)

実際、バーで女性と接することは、有難かった。目的がもう、殆どの所、それしかないの  
で、おお、勃ってる！・・という瞬間は、何か、ピラミッド建築を初めて見た異国の旅人の感  
動に等しい。でもたまに、――女性の誘いに、そのまま乗って・・サラのことなんか忘れてし  
まおうという気分にならない自分は本当に聖人だ。敗色が濃かったが、サラに惚れてた。

、、、、

「ありがとう、・・君をマリアにしてしまう僕を許して下さい！」

・・もしかしたら僕は妙な性癖があるのではないかと疑ったこともある、――いつか  
、サラに変な衣装をさせたり、変な道具を使ったりするかも知れない。あるいは、やっぱり  
バイアグラかなあ、という気もしてる。でも特定の場合だから、精神科医に通うべきなのか  
、などというようなことを思いながら、いや結構明るく、サラと接してる。

(でもどうしよう、君の髪を引っ張ったり、鞭や蝋燭を使うようになったら！・・)

・・ただ、いつも思うのは、サラは別に僕とそうならなければいけない、という理屈はない  
ということだ。輪廓の表面が透明に思えるほどに・・知力までも情化する・・ああ、快活な声が  
、受話機を滑って・・打ち水のように、叩きつけて――水蒸気の多い、物懶さ・・

被害者と加害者、専制と隷従、

性的暴力、強姦、過小評価に責任転嫁・・世の中の嫌な面。

「まだ、・・諦めるのは早いわよ」

味わえば味わうほど深い味を示してくる、唇や、声の、入浴をそそる午後なのに・・気がつ  
くと、僕は、スケートリングのペンギンみたいに、靴をかちゃかちゃいわせている。

、 、 、 、 、 、 、 、  
…僕は空回りしてる。そして彼の呪いのようなものを感じる。

「でも、たぶん自分自身の粘土が、…泥土が足についたためだろう…」

おい、でも知らないのか、と僕は思った。

いまだって彼はポップコーンのようにフライパンから飛び出して、お前の口に入ろうとしている。アイデンティティーを獲たつもり！…でもきっと〇〇7になれない、僕だ—

喫茶店で、いずれ引き継ぐことになるけれど、アルバイト料金（お小遣い、といえそうな気もするが、）を父親に請求し、貯めた、なけなしの金をはたいてクーパーを購入した。

氣息、氣息音、清音、

無声、無声音—深夜のひととき

特に用事がなくても、二日や三日に一度、僕のアパートへと遊びに来ては、甲斐甲斐しく料理をつくったり、洗濯をしてくれた。そして夜になると、僕等は思う通りにならない動物

的快樂の實驗をし、それでも、すべからく太陽のように麗わしく—いつか、果てた…

（でも「合意書」「示談書」「和解契約書」などの書面を作成しておくべきだ…）

（僕は浮気してない—でも、いっそ、…そう想われた方が…）

思い出はみんな時の流れが奪っていってしまう。一〇〇〇万ドルの使い道なんてわからない僕は、もちろん、ロックンローラーになりたいと思わない。でも、彼だって深い悲愁に沈む日だってあるだろう。銀の鎧のように。時の流れが僕を日々の澱から、すこしずつ溜まっていってしまうガスの請求書や水道代から、アパート代から、どんどん欠落させていく。そして日常を僅かに繋ぎとめている、サラの好意でさえ、ときどきは心底鬱陶しく思った。

「シャネルのかおりだって嗅げない…でもマリリン・モンローじゃない！—」



——何か少しおかしい気もするけど・・・うまくキー・ホルダーできない——。

「知り合いにビールをこぼしてしまう。」・・・こぼしてしまう・・・

ぬえ

奴延鳥・・・いやらしさと醜さに、右の頬にほくろ・・・

\*

、、、、、、、、

気分を変えようと、パチンコ屋へ行ったり、夜の店へと行ったりもしたけど、

「あなたの判断で左右されます」・・・あなたに決めてもらいたい——

\*

僕の行動範囲は、一時的にとつともなく広がったように感じさせるだけで、可能性はどんどん断たれていく。地に足をつけていく人生はどんどん醜くなり、長生きすればするほど、豚になるようだ。パスタのなかにオレンジとバナナをいれてしまう。

たとえば、ヌエストラ・セニョーラ・デ・サンタ・アナを、ヌイテオコ・セニョリータ・ウ・アンタ・オナにしたって別にそれで構わないような気がする。笑えないうえに下品だが、人生に疲れた馬鹿どもは笑う。世の中のジョークセンスや、ギャグなど大抵こんなものだ  
、、、、、、、、  
。君が犯したがっているものは、大抵君の卑屈さが導き出したものだ。

ゲスな世間に、おまんこだの、デカチンだのを繰返す俺——

哄笑しながらだっけ泣きたくなる・・・そんな欲望一体誰が求めてるって言うんだい、都市よ、君に操られているかよわい仔羊たちが、人生の死を選んでく。

まだ何かよくわかっていないふりした、無気味な胃袋を見るような瞬間・・・

古池や蛙とび込む蛇の音。 (松尾馬招)

どうだい？…温厚なふりした君、口の中に入れてしまえば、蜘蛛だって、ゲテモノの料理のように、それなりに理由や説明がつけられる。川柳？…ハロゲンヒーターのなかに虫が死んでいても、君の肉体の大切な一部が切除されない限り、別に悲しく想ったりしない。卑しただけだ、文化的な生活。五十年や百年で大きくなったのは、勿体ないほど、立派な図体をした奴等のセクスの繁栄と…その反作用としての過剰な防護壁のような気がする。

それでも、あかるい下半身を求めて、日ごとに裏切りという名を胸に刻む。でも認めない、もしそれを認めたら、僕ががきちんと生きることをやめてしまったということだろう。君は誰かを憎んでる、妬んでる…

——でも本当に殺したい奴は、君自身だ！…

\*

そんな夏のある日、顔を中々なかなか合わせる事がなくなっていた、喫茶店のマスターと街でばったり出くわして、「お前、どうしたんだよ、この頃…」と言われた。いわばこれは流行的なラブ・ソングが陥りがちなある種の集団妄想だ。恋の歌を、色んなマイナス面も熱情を引き立ててくれる。しかし現実には、恋のために知り合いを蔑ろにしたり、冷たくしたりしていると、手ひどいしっぺ返しを食う。「淋しいじゃないか…」

べつにお前みたいな豚好きじゃない…洗濯機の修理でもしてこいよ——俺よ、しかし、それはげんに起こった。あなたの娘がぼくの家に来るが、別に何もしていない、と報告する義務があるわけでもなく、たんにそれだけだった。

「元気にやってるのか、…うん？ ちょっと顔が暗いな——」

(世の中はどうか知らないけど、世の中の彼は、優しいと思う。)

そして、僕はその日、親友の墓場へ行き、その帰りにサラに電話をかけた。

聞き覚えのある声だ…サラだ、いつだって僕の心を魅了する天使の名前…

「脅迫の電話だ、ハハハ！…」

一瞬背中越しに、人が立ち止まる気配がし、すみません、冗談なんです、と頭をぺこぺこ

下げた。道ゆく人は、ちょっと笑い、会釈し、去っていった。

「…どうかしたの？」と電話口から聞こえる。

「いや、何でもない——ねえ、今度、旅行に出掛けないか？」

「どうしたのよ…急に？」

「うん、どうしたんだろう——本当に…」

サラ、君の名がいよいよ高くなるにつれて、色んなことを思った。ちょっと遠くから見ると古風な洋灯のようにも見える。時間って不思議だ、人の心が色んなものに変化していく。

新鮮な生命に、しなやかな姿。…サラの声に、僕の声が寄り添っている。誰が何を言おうと

お構いなしに、絶望のすりきれてノイズみたいになった声同士が…

「愛してる…」と言う。愛してる、は酔漢の呼び鈴だ。——

肩や肘を掠める…寒さ——うん、とか、はいはい、とか言ったかも知れない…

なにせよ、サラ、そろそろ秋だね…。

\*

## *Autumn has come.*

夢の中で、舟が遠くからやって来るのが見えた。水のなかにいる船頭の顔、北へ、また洞庭を通ったところで、大風。・・・太陽の中に多くの季節が消えていく。舟べりに手をかけると、はや次の運動が波立ちあがり巻き返す。マグカップのコーヒー。カップヌードル。揚げたてから冷めたフライド・チキン。夏は過ぎた・・・夏は知らない間に過ぎた――ボート小屋まで数キロの道のりの霧。しんしんとさびしくひくく潮・・・みづうみ。前照燈のハイとローの切り替え。「舟が一艘岸へ漕ぎ付けんとすれば、転覆する舟を出さざりき。」・・・突然見える電話ボックス。岸の草原の奥へひきあげてゆく対向車や標識。底紅の花の群落。花びらのとがった先は白色。銀河系を構成する星の数約二〇〇〇億個。躁病と鬱病。煙突、煙突、姓名判断。跳ねる音がひびいてきた。幾つも浮いて通った。あどけない顔をして笑っていたサラ。むぎわらぼうし。みんなリュックサックのなかに詰め込んで・・・短い夏が過ぎる、やがて――秋など忘れて、厳しい雪の季節がやってくる。

くすぐったがりやがこんな時に、

やさしくわらったりする――

、、、、、、

秋風がつめたい。中腰になって網の中を覗くと、足もとがグラッとゆれるよろめきは矢よりも早くゆき過ぎる。・・・砂糖とミルクがあるかを聞かない。蜻蛉のように小さく震えるアンテナ。「水にひびく灯は低く沈む」――うしろにぬくもりのある、そしてうれいを帯びた身

体。人魚。商品陳列用人形。揺れたら消えはしまいか？　するどい排気音は谷底に消えて、マフラーと花束を彼にくれてやる。舵が少し狂うと舟は蘆の中へずれて行く。暗い夜、呼んでも叫んでも返事はない。閉められたあの家の窓。暗黒な大石。谷底。「いい奴は、みんなすぐに死んでしまう…」と僕は言う。五、六歩で左へおりる。風車が、くるくると回っているように、僕もその方向へと回りたい。吊橋やはね橋が架けられ、人びとはそこに降りる。バス停。この、望遠鏡を覗く。「時が癒すわ……」とサラ。僕の青臭い台詞につき合う。背後から刃物で斬りつけられたような気分になる。瞼。目眈。ザアッ、ザアッ、と早足の雨がうなあって通りすぎる。頭部。顔。僕はまだ、真っ直ぐに見つめられない。舟が闇に乗じて忍び寄って来た。舟は、暗い。霧がおりた流れだ。でも、じっと黙ってる。黙ったまま、僕等には僕等の世界がある、と思った。彼には彼の世界がある――

そんな風に一七歳の時のことを思い出す。

思い出すと…いろんな間違いが見つかった――

、、、、、、

近くで野営をした。しきりに揺れた血が、身の内を走る。匂いが鼻を掠める。水面に達する幅の狭い斜面。森の中で狸を見掛けた。「星がきれいだ…」と僕は気障に言う。こぼれてゆく、声。乗りこまんとひしめく岸の群衆。逃げる舟を追う。逆らって帆が捲れる。舟は、陸へ向かって打ち寄せる怒濤。「ええ…」とサラは毛布をかぶりながら、僕の顔を見て肯く。秋は悲しい…陽が陰るように、雲が空を蔽う。あの檜の樹も、いつか灰か煙りになる。自然に対する反逆の言葉。昼間の舟の在り処。「サラ、死ぬ覚悟ってあるか…」と僕は真夜中に目覚めて、サラに訊く。サラは眠っていなかった。また、寝ぼけてなどいなかった

。寝たふりをしようとしなかった。ごく些細なことが寄り集まって、しみじみと物思う気持ちになる。小さな虫達の鳴き声。秋に吹風…秋に立つ霧――。寝袋ががさっと乾いた音をたてる。テントのなかにいる二人は真面目だ。夏の夕闇に浮いている、かなしい蛾のようだ。暗い岸の砂を嘔むようだ。火の手だ。「…ないわ」とサラが冷たい声で言う。心が渴いていた。焚き火の音がぱちぱちと聞えた。どこか遠くで夜の鳥のすさまじい声がひびいた。僕はサラの頬にキスをし、抱いた。哀切かぎりなく、ウスノロで、凡庸な事実。彼女に触れると、それがすぐ眼の前を通りすぎ、舟があがった。小刻みの音にとても息苦しくなる。引力を感じる。水を止めたい。でも、人間は、身体の中に半透明な光をただよわせ、周囲の世界の悲しみが自分のからだに滲み込んで来るのを、強烈なアルコールと思う。神経中枢に劇的な変化が起こる。急速に意識を昏迷させる、内気さ。危く水が入りさうになる。舟酔いする。心が何処かへと、…ただ何処かへと氾濫する。

はじめて出逢った時からずっとしたかったんだ、

と言えるわけでもなく、ただ、棄てがたい、

その完成した美しい女という本を捲る――

みづうみにサラを誘ってみる。切株のベンチ。センチメントの悲しい顔。ほそい青銅の枝。絶えまなくきこえてくる、多量の含有物を有っている都会の空気。色彩の変転。ほそる悲しい想い。舟が眼の先きの闇の朝の海。朝早くボードを漕ぎ出した。水の底の藻は髪の毛をしていた。不思議の世界に木の橋があり、橋がかかっていた。魚は無数の瞳のように泳いでいた。月夜の晩、水中に飛び込んだ若者たち。悲しい悪夢に見る気配が、いよいよ濁るとき

、いよいよ悪臭となる。それでも秋の陽がうっすらと照らしていた。空に半円を描いて鳥が回る。鳶。「…どうして？」とサラがふと思い出したようなふりをして僕に訊く。一方の舷から他の舷へと飛び移る。水面に、ぶくぶく出る無数の泡。風邪をひいて熱のある額のように、恐いような、恥かしいような、秘密の世界。いつのまにか月の影も消えはてて、すっかり明るくなった。ボートは岸からどんどん離れていった。秋たけなわの季節。そして恋人はいつまでも黙り続けている。それでも舟はいつか向う岸へ、また元の場所へと戻ろうとする。こまやかに思い合った過去の方へ——小鳥の囀りが永遠におもえるほど、イヴァン・シーキンの“榎林”に近づく。どんな誤解も始まりの前では、ちいさな一歩にすぎない。波が砂を洗って、この罪の朝は彼等を歓迎する…安らかな空虚へ——。

寡言な温順な人

いまでは雑草のはびこるまま泣きそうになる自分を前に据えて、

羞らう。背中にどんな重いものがのしかかろうとしているか、

知ろうとしてはいけない。少し俯向き加減になって、

暫らく啞然、視線は膝の上…

――高まる騒音、自分の好奇心な行為、

(しばらく連絡のなかった友人からの

急な連絡を深夜に受けた)

小・中・高・大と一緒にである、

久しぶりに会う彼は精神的にとても不安定な様子で、

そうだと噂されつつ鬱・精神疾患、

「咽喉をかつ切ろう！」

偉大なるファラオを困惑させる！

あるいはコロンブス、…視点のズームアップ・アウト

スペイン女王からインドへの新しい航路を探す命を受け…

見も知らぬ道、帰る家もない薄闇――泣き声、話し声

夜のメリーゴーランドやお化け屋敷、

ジェットコースター

「セーターも何処かへ行ったんだ…」

雪の骨をもとおす寒さ、すべての食欲と諍い。・・

コンビニ、酒屋、退屈で単純な信号機を渡り、

重たい影が全身垢にまみれ檻樓をさげた彼等のいる地下道。

石段を下りて何処へ行くか詩人。舌うちを交えながら

長い苦難を物語る排気ガスを嗅ぎ、道路が川のような表情になる。

「誰にも愛されたくないのだ――私は・・」

神経をひきしめ、山脚を洗う丘陵に流れる水の音

一溶かしおおせない鴉の翹

うねうねとたなびくこれ見よがしの炊煙

ノンバレル

蚊柱が立つ-火薬の匂いがする 無類の

パッション

――あとには不気味な静寂。受難曲

耐え難い思い出を、悲惨を、さらに烈しい飢えをぼんやりと

長い槍のようにぎらつかせる。縦軸と横軸の数字をヒントに、

白いドレスの女とは誰のこと。

虫眼鏡の形になった。

鉄-門-の-閉-ま-る-音

風は林のこずえで烈しく吠えたてている！

ここは、（「ぐにゃぐにゃとしている」）

詩人が最後にたどりつく場所・・煉獄――

ぱっくりと頭の割れて血を流す人

鼻の先から滝のように落ちかかる。背中にのしかかる重荷

肉まで喰いこみ、眼には鞭の音がする…

、、、、、、、、、、

水音を微かに聞く地点、激動せよ、

いんしん

大街道の殷賑たれ——

名前もない、年齢もない、国籍もない、

砲車は前に進む。コブラやクロコダイルを踏みながら

刑状持ちで執行猶予、鑢のような驕りか

それとも塞き止めか！

ああ、人と自然との間で

倒れた木や道をふさぐ岩——

*ビクトリア朝の大きな屋敷。*

*各文明の象徴となるオブジェクト*

おおむね懐柔している…

所詮この熱い思いゆえに渴きが鎮まることはない、

(「成功を夢見て都市にやってきたサクセスストーリー」)

アラビヤの砂、奇怪な植物、フルーツ農園、

藍と卵色の空。私の知る煉獄とはそれだ、

カウンターの上の空の瓶…

ピクルスやシュークリームやそらまめを出す。

私は静かな店内のバーテンダーとして、

(用心深く、戸外のおぼろな樹影と

あかるい月の光とを頭で描きながら)

喉の渴いた客たちに私は。カクテルや、酒類全般、

下戸にはジュースを。店内にはジャズが流れ、市内ニュースとして

マグニチュード

新聞の片隅に載るほどの話題提供義務。恒星の光度

自家用飛行機に、クルージング用のヨット、

高層ビルのオフィスから都市を見下ろし…

自分と同じ状況に陥った被害者たち！

あまつさえ君たちのおののく肉体、春の快い陽射しも受けないで

ぜいぜいため息が洩れる。死の巷ビルディングの谷間の迷路で

強 姦。内戦の砲火とどろく戦場。

ああ君たちという美味しそうな料理。歯茎を震わせながら

行き当たりばったり。人の冷たさに抵抗をこころみても、

スチームでは溶けることがない。

私は科学。エジソンは発明家でいつもいろいろな道具を使って、

摩訶不思議な発明品を開発し、愚かな夢に溺れる。

## 2

アカベラ

礼拝堂風に…空っぽの腹をかかえ、

俄かに生きものらしい衝動的なざわめきを起こし、

行方不明の息子を探して数か月

ミニオン

かわいくて繊細な…は 何処？

日が沈んだばかりの…煉獄は日常生活にある現象全般と殆ど変わらない、

氷の王国、神秘の森

幻想装飾曲・・・

ああ！それゆえ・・・退屈な一日に花を添える――

もともと生きたとしてもほんの束の間であり、

要らなければ・・・さっさとしまい込む。抽象名詞、

抱いたり、突いたり、引っ張ったり

宇-宙-的-独-楽-傾-斜-地

されど星月の旗が下ろせるか！

「あおくすみきった空を見つめていると・・・」

葉裏を白くかえし、じろじろと覗き込む精霊たち、

彼等は知っている、決して本の上に心がないことを！

進行方向を示す矢印

キーボードやマウスを使って

「砂漠の風か、金属製の砂！」

すでに一つの誤謬であったのにもかかわらず、エルフは

ふくよかな温み、耳のそばで力強い呼吸。

椅子にかけられた上着。上着の空っぽの袖が移動する。

右に往ったり左に往ったりして中々ひろがらないが、

握-る。握ると・・・マンドラゴラ、ものすごい悲鳴をあげて、

、、、、、、、、、、  
私のこめかみを延焼する。

頬をなぶるつめたい北方の風を感じている窓で、

「君と彼女の距離は海のようにかけ離れているぜ」

(海の上に腕を落とした男と、一面の雪の話。

カウンセラーはいないが、やがて私がその役目をする)

ぴちぴちと細かな音を立てる！

でもけして入らない——窓を開けると、

蝶のように逃げてしまう！・詰り物用かんなくず  
エクセルシオール

やがて訪れる幾多の喜びを知らせる。

ここはいまずっしり重い機械、ここはいま枕木を置き

レールを敷設したばかり。たえず図面に線が引かれ、

いまでも自動車は多くのガソリンを求めている。・・

八歳になった時から知っているドワーフは、

私のことを見ながら、駆けつけ三杯を滞在中やり続け、

多分嬉しかったのだろうが、それは自然と人びとの口から口に

うつくしい野花や野草のように語り継がれた。

*心深く生きている詩人の伝説*

*「半額！ 売出し中！」と書かれた農場——*

詳らかにこれを察すれば、半信半疑ながら、

フィルムはすでに回転している。

皮帯のよう強靱である、団結。

*精神病院について書かれた手紙*

*青銅器時代の遺物の発見！*

ああ対話としての魅力、我等の揺り籠、

ああ、虚しく屠られてしまった、

流失する蹂躪の記憶・・・黒雲四方に遮れども、

歳月は内容豊富であり、波瀾にとみ、五月の緑風が、

雪をこらむる峰のごとくに光りかがやくばかり！

われらは猿の脳味噌を食べる、

われらは鼠をミンチにして食べる

――すでに時間そのものが、ものの動き

泣きわめけ、ぶるぶる震えろ！・・・唳唳と鳴る喇叭

ファンタジア

物置小屋を捲きあげてしまうほど旋風が、頭上の幻想曲

涯のない四方から暗い。右手の奥のほうに一カ所かすかに

くすんだ空の色が、重く。右へ左へと延びてゆく、

黄褐色の大渦巻き。ああ！この砂嵐の過ぎる間、・・・

鋭い犁で地表を掘っくりかえすように、二本のレール、二本の腕

ごうごうと突き進む。薄暗いトンネルのなかを突き進む、

ししのめ。それをタイムリミットとして、最後の一塊の石炭の燃えつきる、

私の滞在記となろう、見知らぬ洞窟で目を覚ますかのように・・・

何故暗黒の夜は更紗、白紗

尽きることのない翅をいつまでもひろげ、素早い光のうちに

大海原を駆け抜け、失われた財宝を手に入れる――

、、、、

幻想の耳よ。いちめん真っ黄色になった景色を思えば、

定型生物ばかりがのさばる地上の屈折したイメージ！

それが私の深い心の中を過ぎる時

…掃いても掃いても、

いやこうして掃いたばかりに祓いきれぬ悪魔は

眼の及ぶ限り、悪評と痛罵であろう！

(全身に隈無くはりめぐらされている鋼は

深い怨みをいだきながら息を引き取ろうとしている)

さながら足枷、猿轡。重苦しい空嚢を山のように積んだ、その中に

小さい弓を想起させ、一一底に薄く残ったワインの自由な炎の一滴は

修錬の指を思わせる、あの空は羽虫の唸りではなく、勝利の歓呼にして

靈魂を高く掲げる半ば白骨と化した我々職人たちの唸り！

### 3

夕方それ見たものか…あの空の赤いこと、

しなやかな柳も折れるほど、砂はサラサラと洩れる

どこからともなく悲しい小さい声で歌う遠吠えは

傷付いた手？…それとも 誰かの便りであろうか！

*ベッドの中で見る夢、美しい古代インド*

*頭の上に吹き出しの絵、こがねの馬*

*注文の多いカップルや困ったお客様*

山は生殖器の象徴であることを知っていたが、石臼でもある、

それは恐怖の城であり、三角形の恐怖！

不意に夢から醒めたように我にかえれば、どんなに、

耳を左右に動かしているか。かくも快活に呼吸ができるか！

きりぎし

おそらく蛇！…断崖を思うからだろう、試練の

死の河の波、昼の川のキラキラ…あるいは海の鹽の味…狂喜と破滅が

ああ！煉獄の大地を祓ってゆく…

見たまえ、このささやかな動物を！

ここは心の中に潜んだ曠野、荒れ果てたものに、

名をつける場所！合唱隊、劇団…

何の変化もなく過ごした日にありふれた自らの火を掻きたて

（「とらえようとする事もさらに乗せてしまうリズム」）

さながら熱帯の植物を採集するかのよう！

眼を大きく見開けば、かくも私の心を揺れ動かすもの、

十三月！…曰く他に求むべからず！…とかの哲学者ニーチェの霊

サウンドスケープ

自由が我々目指してやってくる！…音風景

*世の中には通常の人間の能力や常識では、*

*計り知れない特殊能力を持った者がいる！*

戦場へ兵士となった者は、「村よ！丘よ！…」と泣き崩れる

アトランティス王国は滅亡の危機！といったところ、

あの血なまぐさいあのあたり、沈みゆくアトランティス！

——その獻き声は空っ風、どてっ腹に心臓に穴があく！

近寄れぬ不平の河岸よ…されど人を面白がって殺したからではない、

海に消えた悲しい思い出が残る場所、煉獄の奴隷にして、

村の年寄りのような君！

機械仕掛けのぜんまい人形のような君よ！

い…な…い……

(銃は、弾薬は…何処に埋めたのか！

ああ、骨を指さして叫ぶだろうに違いないこと！)

「友はまだ帰ってこない！」…

君が苦しむがゆえに――頭髮悉く白くなる。ああしかしこの、

広々とした草原や森は、すばしこい鹿たちの場所。

兄弟、まぎれもない射手にして、勇敢な羊飼ひ、何を悩む

夜通し鳴り響いてくるかのような雷鳴は鎖にかわり、

それはそのまま君を石の崖にくくりつけでもするようだ、

ああ蝋燭の火を無駄遣いしたがために起こるというのに――！

いったい誰が誰に宛てた手紙なのか？

夢を見ていました。ドラッグ&ドロップ

《花が咲いていますの》

――燻っていますの…

しかしまだ、石門をこじあげ、炎がめらめらと

あがるようだ――その体躯のようだ…

古-代-の-隕-石-の-か-け-ら

ジグソーパズルや、間違い探し、いや

つぎつぎと燃えあかる焰は鎖さえ打ち砕く、

すらりとした斧のよう！

崩れた牆なら補修せねば、そして過去に墓をつくらねば、

その手はがっちりと黒く以前にもまして雄々しく

抜け出られぬと思え！…有難くないの何のと、

贅沢を言ってみたところで、諸行無常、どこもここも釘

美しいサカナや水槽が凧に思えるほど、

思い出したい、コオロギやカマキリやトンボ

「美観」…「環境」（誰が計算したのだろう、）

——溢れる川のようにシチューや、カレーの匂い

我々は自然の恩恵に手をこまねいているようだ、

野原を走ろう。青い池を愛撫した空気のひとつの戯れのように、

走ろう！…しかし我々は縦横に奔る、怪物。

歳老いて、自然をも飼いなすことができると信じてる！

「なにか騒がしいよ！…談話をまじえない習慣」

同じ軽さ重さで叩く、己自身の弱さ——

火花のように燃えていた噴水は、自由に歌った！

訝しいほどにほとぼしる…君は何処に住んでいるのか

一つ一つふくらみを帯びて、ぼうっと赤みをさすまでが

地殻の変動。恐竜たちのわがもの顔の歩行、氷や雪に凍てついた日

*アクアリウムの中のタツノオトシゴ*

*灰黄色の地層のうえにまだ消えぬ碇*

*紋章の描かれた扉…*

この土色の顔の愁い懶うさは、やはりここも人生の旅、

新鮮な空気を吸えば反語的

うすぐらい空の痙攣よりも車輪であるはてしない荒野をつらぬく

北国の人びとの悲しみを軋ませながら、メッセンジャー・ボーイ

——異様な服装

非望明滅する君は旅びと！…この路から、あの路へ

濁った紫色、ぐったりと萎えしおれた芋のように君は

魅力的なシルエットが表示され

時折まるで一頭の餓えた野獣のようだ！

前かがみに栓を抜いた香水の瓶を——数え切れぬほどの、

蒼を爆発させ、忍従の墓穴から靴、血のしたたる、

「ピンクの蓮の華…溶ける」

星ひとつ出ていない夜…

タラタラと中身を流しつくしてしまった秋のよう！…

4

神話のような夜のなか…何処からやって来るのか人よ、

思わず胸が鳴り出して危急を告げる！パズルのジャングル！

ああ、私は笑っている…かつての彼はこんな風には笑わなかった、

『欲しい』（と、）——「感じていた」

《そして、》…想っていた…憑り依かれていた——

敵を求めていた！

自らの生を求めていた！

勇敢な両眼は前方の光を睥睨していた！

ああ！…顔を覆えば、厭な寂しい心地――

十数年の屈辱のなか、粉乳は安価でこの術に懸念することはないが、  
さながら砂嵐のなか、よくよく、面の皮が磨滅しないものだと思う。

愉快です、若い花の妖精…サフラン

ちゃんばらごっこでもしたい気分だ、

いやモンスーンの雨でも請いたい気分さ、ああ…

百万足の靴でもプレゼントしたい気分      !…

押しつ押されつ、魚のように喘ぎながら、

(「やせつつふとる」)

掻き崩した紙屑の中で、その内部を凝視する私は

悪税・物価高を想う！――諸君らの機械…舗装道路も、国交も

ほんの豆粒サイズの話だ、屋根のうえに投げた歯のような話だ。

――外国人か、日本人か、それとも混血児か。

はるか遠く、果てしなく続く海の向こう、

ポリフォニック

高くそびえたつ山々の奥深くに、多声音楽

精霊がいて、彼等は人に魔法を与えたという――

うとうとしていたら、風琴を好む、この一步一步

あらゆる所でぎらついている肉食獣の眼よ、銃口のドアのノックよ！

こうありたいという真へと前進してゆく一歩！

あなたは爪を噛む、あくびすれば不満顔

ケーキを焼いて、デコレーションしても友達と話すばかり！

まるで私が恋人に出す手紙のような疲労と羞しさを覚える頃、

石器時代、古代エジプト、中世のフランス、明王朝、

ああ机につつぶして憩んでいる時も、私は採鉱夫！

(青) から… ( ( 赤 ) )

——どこから来たのであろう…

一字、一字、ほらまた一字

かかえきれぬほどの食料と光を供給し活字となってゆく、

ウォーミングアップ、ランニング、スパ、マッサージ…

さてよう食ったもの！…鈴りんを鳴らし、店に来る客は、

さまざま！…文豪もいれば、サラリーマンもいる、宗教家も

ラグビー選手やチアガール、ボクサー、乳搾りの乙女も——

料理学校を卒業したホルスタイン女史に叱られながら、

ケーキや、クッキーなどを焼きながら、

彼等の大好物である驢馬なり馬なり牛なりを用意！

さて、どれほど私は煉獄のことを、

よく知っていたと言えるだろう、さても土地よ、

お前は我々のことをどれほど知っている？…

最初は驚いたが、腹を割いてみると中身がない、

ただ皮を喰らう、——栄養は皮にあり！

もはやナンセンスの域を超えて意識がくらくらしたが、

確かに煉獄らしい！..年に一度、フルーツと一緒に、

また野菜を餃子の皮のように包んで食べる！

バーガーやお土産を提供し、

約束の地で煉獄の神聖な日を祝う！

..憂鬱の気が立ち罩め、一人前になる為の試練を与える

いまでもしみじみと思う、あのかなしい眼！

かなしいなつかしい少年と、少女..通過儀礼！

あるいは人でないもの、動物たちの悟りは..

この煉獄の狂おしい蔑みのこもった言葉で、

こういい表わされる——虫けらめ！

私に向かって先輩たちはアドヴァイスし、

泥土に埋める種子のごとく、

「どんだん言え！——どんだん言え！..」と背中を叩き、

あたり一面にミルクの匂いが漂い始めるようだ。

——罪のない者の虐殺に心はかき乱される..

みんなのごつごつした掌に触れられながら、

狂おしく堪えがたくなってゆくような気分に襲われながら、

毒物の研究..喪失感は癒されぬまま、

豚野郎、このクズ野郎！

運命はゆっくりと、しかし確実に動き出していく

悪魔憑きと診断されていた私にも、血と汗の肥料がある、

ああ！ひりひりとする借金がのしかかる…

(しかし、すべての草や、木や、土や、生き物の中には、

まだ沢山の秘密が隠れている、)

――滞在中に名の知らぬ詩人に教えられた…、

一日とて詩と離れたことのない私だが、彼の言葉という鞭でぶたれ、

さながら首を吊らされ、表現過剰としても、

私を餓え死にさせるかのようだ！しかし…

深い血の繋がりを感ずる、

「蕾の中に、ちょうどひと筋の炎がある。用心深くあれ、しかし

発見すること。世間に交わる煩わしさとは別の本心に気付くこと。

あふれるばかりの涙を凍らせよ、あてがわれた淋しい夜中に、

まだらな白髪となった祈りを氷結させよ！

一種異様な恋！　されど、快樂の宝庫にして欲望の顕現！

いっしんにはるかな戦地、黄色い空が、黄色い大地が笑う！

疲れ果てる！と思えば成長がない…心の中では極めて静かな、

自由になるがため怒りの案内者がいる――手を動かさず、刈り取れ、

深く感じよ、そして億劫なほどやりたまえ…競争主義に、

掠め取られるな！――だが与えよ！

暗澹たる心を持ってぬ内に誰が詩人と言えるものか！」

シェリーや、エリオット、ダンや、

ホイットマンや、マラルメ…

シェイクスピア、ゲーテ、さまざまな外国の詩人がいたし、

皆、とてもよくしてくれたが、実話に基づいたストーリー、

実在する歴史的ビデオさながら、心に散りかかる詩の影たち！

無論、朔太郎や白秋や光晴、賢治や中也や、小熊もいたが、

私は彼の話をよく聞いた。

——生きていたからといって厳しい態度をとってはいたが、

所詮井の中の蛙、実らぬ望みの嬰兒か…私はこの詩人がのちのち、

ポーであることに気付いたが、

おそらく、とぼとぼと…気圏の底でも歩くように、赤銅色の銃身！

おおまるで万年雪の、永久凍土の旅びとの黄色の熟れ、

おお！…夢はあわれにさびしい感傷に甘え、暗夜も焦げるほど、

私の自尊心はしずかにつるべをくりながら、

結構やられた！——されど起こって来た変化は顕著であり、

範囲を大きくして国家的、もしくは世界的の重大問題と変化した。

「彼等に捧げよう…彼等に“僕”を見せよう……」

（そして、君は泣くのだ…夢の中で——）

秋が過ぎて、恣しいままに冬が来る！

日常から異界へと誘うかのような音の連なり…

苦しみの世界からさらに苦しみの世界——

白羽の矢が刺さったのだ！

どっぴりと違う世界に涵ったのだ！

そこの産物なり地勢なりもたとえようのない。

荒れ果てた雪の街の亡霊さながら、甘い想像に駆られながら、  
滞在中よく歩いた、夢と苦悩の抒情詩を想像しながら、朝と夜、  
胸をときめかし、胸奥で燃えている逆巻く波濤が小さな沼に、  
…なるのを知りながら、灼熱の渴き、

——養蜂場、製粉所

神の木と呼ばれる菩提樹を見に行った。

その傍に一角獣がいて、背中に乗せてもらったりした。

「詩人、詩人、ひひん！」

（「後ろ向きにへらへら笑う私」）

ダ-イ-ナ-マ-イ-ト-の-炸-裂-音

刈り入れが終わった稲畑みたいだ！

——閑話休題

私は午後から看板を出し、よっこらせと持ち上げ  
店の前に出す、西部劇に出てくる酒場のような店…  
そして今日、詩聖ダンテ氏が店にやって来た。  
最初は全然気づかなかったのだが、常連の一人が、  
「おい見ろ…」

——おい、おっさん、俺は忙しいんだ。

しかしすぐに彼は笑う、お前が詩人だと言うなら、  
彼は佛陀だ…

「いや、…唯一の神とでも言うべきか…」

店を閉めろ、と詩聖ダンテ氏は言ってきた。  
客は皆、突如として帰った。三分もしない内にガラガラになった。  
コントのようだったが、お約束でもあった。  
選択肢の余地などひとつまみもなきもの言い、

「一緒に来なさい」（幾重にも雲や霧がかかるばかりの声！）

神の居場所は空の遙か彼方の場所

イノシシや羊などの動物に等しい私は、すぐさま

仕事などほっぴり出し、とことこと後ろを歩いた！…

野草が霧の中で跳ね、大根足が踊っているように見えた！

急勾配で踏めばギシギシ音のする、ついで畳の匂いを思い出す

変な音を聞きながら、詩聖ダンテ氏は、

「ミチゾーを知っているか」と話しかけられた。

（道造、…たぶん、立原道造。）

「はい、一一店には来ていませんが」

詩聖ダンテ氏は、不服そうなブルドックの表情を浮かべられ、

私は空を見上げ、竹久夢二の絵なんかを思い描き、

やはりブルドックな表情を浮かべたりした。我々と言ったら、

駄目だろうな、格が違う…私は芸術家のコロニーに行けない。

詩聖ダンテ氏は、「ジャポニカはどうだ」と聞いた。

私は首を振り、賢治さんのふりなぞして、ミンミンと言った。

…「詩人なら、ミンミン言わなきゃ」

……「げろげろげえろ、も忘れずに」

うまくかわすために、心平さんの得意技、蛙の鳴き声！

いろいろの心持ちを感じながら歩き、詩人ってみんなバカだな、

でもかくいう僕もバカだな、と思った。詩聖ダンテ氏は、

「今日は特別な日だ」と言った。

みやびやかな心持ちになり、もやもやし、全身のエネルギーを感じながら、

呼吸する。詩聖ダンテ氏はそう言うと、ここで、と言って去っていった。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、

私はもちろん途方に暮れた。追いかけることもできず、

しかしランボーもあんな人だった。ヴェルレーヌにいたっては、

酒を飲むなり、ジャッパーンを連呼し、去って行った。

（「きょうはとくべつなひだ」）

思いもよらなかった秘密

森林火災の消火！

竜巻被害！

未知の寂寞のなかによこたわっているように、腰をおろして

日々終わってゆく上っ滑りのする上等な絹のような小川が、

もえさかる憤りをつかんだ。ザワザワ波のようにさかんに

手足を動かして、ザリガニとなる。

いつかお目にかかりたいと思ってからすでに久しい、運命の流れは

もう涸渇。泉は突然に涸れ、強く迫るものは鏡の機能だが

サワサワと顔の髪はゆれ、どっと大地にいくえもいくえも樹が風に揺れ

いまや錆び蝕さる気配。対角線的によく見えていた、砂利や砂の、

夜は明るく燃える広い河床。雨期に大雨があれば、平地に氾濫する

叫びながら駈けてくる鉄砲水の河床。

復讐を誓った邪悪な魔女！ オリエンタル・ファンタジー

ほのかに耀るいその心！

浅くそうしてだんだんに沈積物で埋まり、いまに、

動く意志もなくなってしまうが、そこはかたなく、

轍のあとがしるされ、影浮きて、胡蝶は舞い、水を求めるかわりに、

井戸で水を汲む二本足で歩く羚羊。馬。牛。

「…いやあ、昔、人だった頃もあるんですよ」

(歌声がそよと耳の辺りをよぎるように

さかさにおちこみゆれる水)

二すじ、黒ぐると斜めに通っていた轍のうえを、彼等は

自動車の警笛を真似たり、人の会話したり、鼻歌したりと、

識別できるが、それらは事実の上にこそ展望され、実をもぎとる、

私、影のように纏いつくわたし、何をひそめているのだろう、

やはり奴隷のように重い荷を背に積み―― どうする

どうするって――どういう意味です…？

(きらきらした布――タオルや布切れのようなもの…)

「話すんだ、話すんだ！」その言葉を最後に、

口をつぐんだ。詩聖ダンテ氏は何を言おうとしたのだろう、

あらゆるものを成熟させるため人を惑わす歌の作者たち！

すばらしい白樺林が続き、葡萄の匂いがする、

ああ伐採されなければならなかった森、掘らなければいけなかった

大地。風はハミングする、建築技術や専門知識！

「技術力や生産力向上につながりますよ…」

恋焦がれていた、霊の声…

ああ北方における我々の祖先の系譜は露西亜だろうか、

それとも中国だろうか、それでも、本能的な反感の古い根

民族的社会的意識。土地の開墾や建築…煉獄の散策で、

私が出たものは掠奪を緩和する人びとのお祭りの悪知恵。

ある朝届いた手紙が

歌声のように風のまにまに揺れていく

落胆したり！腹立てたりしたこともあるが――

滞在中の私が店を手伝っていたBARも、RESTAURANTも、

その風俗は周囲の人びとと同じ仲間であることを証明し、

行きつ戻りつはするもののけして立ち去ろうとはしない、

そして面白そうに喋りあったり笑いあったりしているが、

心の奥底では遠慮深げに距離を取る。煉獄とはいわずに信じ切っていた、

人との繋がりを、待ち焦がれているが！

車が故障してしまった。助けを求めて駆けこんだ…

ああすべては交響曲！反対しないで、夜の光…

でも、薄々は気づいている、病気。けれど、

求めている、けして飽きることのない真理…

それでも行かねば、行かせて下さい…

水がめの水がなくなる前に、森の中へ、

夢の霧の中へ溶け込むまで――

古代建築物

カラフルなグラフィック、馬よ、もう少しゆっくり馳けてくれ、

うらやましそうな眼が光る、すてきな人達よ――

まだ 流れ星が暗い空を流れるように飛んでいるだろうか？

枯樹の下にはいまも焼きつくせなかった廃屋が残っている。

――ディベアが置き去りにされている

君はこっそり私の名を呼んでくれたであろうか…

キャンディーの味する精霊の魔法書…

出現・甦生・復活…おぼろげに聞き囁っていた妙な調和、

心に君と故郷の面影がよみがえる、少しも、変わらない

「まるで気にしない…みんな同じだから！」

…聞こえない、走る音

…そうだ、聴こえない 鳥の声

――科学や芸術の話に花を咲かせていても、私はぼかんとした顔だ、

その瞳は黒い瓜だが、もしてのひらの上にそれを吐き出せば

西瓜の種子――もえさかる胸の内の炎は、こっそり植え付ける

白昼追いはぎ、南北にこだまする短い歌。

洗礼でも受けたような。天使…永遠に知られている声

――でも、ぴったりした言葉は浮かばない

王国に平和を取り戻すことができるでしょうか？

乳母により恐ろしい運命から救われ

枯れたような枝の尖が人の指に見えてくる林、

「周りじゅうにいるみたいだ――」

古城の客室で幽霊を目撃してしまう人さながらに、

くつわをひきたてて鞭をあげていっさんに――ボートに変わる、

果物をジャムやジュースに加工…メイクやファッションに関する論文

いろんな打ち明け話をしたい！この人生のたゆみない旅…

遠くで誰かの歌が聞こえてきた..

(雲は流れ去る、ちらりと見たまま受け取ろうともしなかった

ポケットティッシュ..)

種々様々な雑草の枯れ死んだ中、小人達が鳥のような巣を作る。

特報/予告/TVスポット集

ノンクレジットオープニング/エンディング

みな、醜く皺枯れた老人や老婆の年齢に達していた。劇場用パンフレット

前売鑑賞券！..このうるさい口をふせぐためにダンスする、

健常者であれば歩いててもさして時間がかからない距離でも、

小人たちはたっぷりと何倍もの時間をかけた、悠ったりと歩いた、

冷戦時代。英国諜報機関..限りなく不可能に近いミッション遂行

火は風をよび、真紅におこり、朝焼けの雲のよう、

点々と次々に燃え広がる汚点を踏みしめるように、石榴の花、火の舌

皮膚の色艶に燃えゆらぐ、たきぎの栄養、

何かまったく別の糸を感じる。となりの国のもの、

...祈る あたたかさ

幻想的な雰囲気漂うその村は、迷信的な村人たち

各地で連続爆破事件が発生！しても、どこ吹く風..

叱られたように、さびしげにやさしく、だまって頷いたのを、

知ってた。ふたつのながくてひんやりした腕は、捉えていた

物いわぬ、笑わざる、歌わざる己自身の肌寒い淋しさに駆られて、

思う！..もぎ取るばかりの果物は少しも重くない

巧妙な罠を張り巡らせる。暗黒の儀式

不気味な装置、廃墟と化した病棟。流浪の者たち

何か言いたげな亡霊と実験用のマネキンや、太陽の

プラズマ—呪術用人形たち！

「海藻の枝..時には生まれたての小魚...」

現実と幻覚のはざ間で、鉛色の鈍い重たい空！

みどりの枝葉を空のひとつとこで絡み合わせている、

金のネックレスや腕輪みたいに見える！

「つながっていると思う…赤ん坊にミルクを飲ませるシーンも！」

塵埃に籠められ、網膜に小さな泥靴の足跡を想う、

——暗くなっていく空の下で 震えながら…

「ああ、何処に金持ちのいない国があるだろう！」

その深い溝に散らばっている印象は、彼等の異様に赤い唇。

空には死にかかった犬のような私の心、半透明な光、

迫力満点のカーチェイスとガンバトル！

剣技バトル、豪華絢爛な宮廷で繰り広げられる優雅な仮面舞踏会

ゴシックドレス、…科学の進化により老化を克服した近未来、

〈スラム・ゾーン〉と〈富裕ゾーン〉

そしてまた遠くに砂嵐！…太陽の翳りは見えないが、

めくらにとって闇夜の路はなお歩けない、でも、彼は彼にとっての

自分の言葉では読み書きが出来るに違いない！

空において行われる紫色の斑紋は、異国の地平線、無限の証だ！

空自体が生きていることを

裏付けた！——強暴な羽搏きに抵抗する、穴倉の中で山のような食糧に

儼が生え！…天気はさむいほど風がひどい…

哀れな運命を呪う程に…

夢を求めて未開の土地にやってきた開拓者たち！

わずかな資源とつるはしを手に、

荒れ果てた土地を切り開こう。

風に吹かれれば牛や羊が数知れぬ、舌のもつれるほど、砂地に落ちた

心はむごく死ぬ…全身傷付き血がしたたり、

太陽が西に沈むころにはまだ虫の息があったのに

誰も知らない伝説が、今、幕をあける——！

「おそれ入ります」

と、迫る夜の闇…

空にはただ、膨大な容積。ただあのような、波の形！

まったく見るに忍びない、

歯を剥きだしていたゲテ物喰いの顔にかかる虫の汁気！

コレラだ。毛が抜け雀の冬ごもり

耳を澄ませると、雁の群れの鳴き声が聞きたくなるほどに…

ちょうど衰れをしらぬ征服者が追いやったように

おののく、ほの白い薄！

そのままじゃいけないってんで、

冬着に春服の準備をする――

夜の羽根はやはり黒一色ではたはたとさせ、青い色で、

そのひと塊が深い大きな眼を持って

昼の暖かさをこわばりの中へ吸い取ってゆく！

…骨の疼くような悲しみ、ピエロの悲しみ、

孤独でゆらゆらと揺れている常に暗い影、危機に欠乏した

叫び――狂うまいとする自分自身の叫び！

それは怖ろしく荒涼とした情景で、言葉として伝えられている

「この煉獄一帯を包む空虚」…

高性能ロボットたちは煉獄のひとつの一面ではある、

夢もプライドも失くした元ボクサーさながらか！

遠くから敬愛するばかりでは見えてこない、ああ私は

手帳にメモや詩の断片を書いたりしながら、

露骨で殺風景で、じゅくじゅくした無果木のような沼の心で、

一体何から逃れているのかとずっと問うていた！

集金人に民家を巡回させて家賃を徴収すれば、

**手拭で包んだ氷砂糖** ！

小さい時から苦勞を重ね、

ああ二つのぱっちりうるんだ大きな瞳には、

満ち溢れる明るいものが頻りに感じられ、良い悪いは別にして、

ただ綺麗な、みどりの弾力に

私は逃げてゆく人――

7

羊の群れを想いながら口笛を吹けば、

耳慣れぬ文句を嘲笑うべき、瑕瑾。首を振れば、寝返り、

しかし眠っているのか・醒めているのかはわからない

知らなかったシイツ・からだにあふれる力、

大人になったことを恥じる、蚊は血を吸う、蛭は皮膚に貼りつく

でも 知っていたのは眼窩の暗さ――

不慮の災難によって奪い去らるる

永劫呵責！ 囚人！

――幸いなことは、消化不良！

歌えるけれど、うろたえれば、口に出しては言えぬもの、

釣瓶の網が短くて井戸では水を汲めぬもの・

――しかし適応能力

こそこそ触れて何をする、いつも腹いっぱい食えなくて、

どうやって生きてゆく。真面目な心はお金にも劣らない、

善ならず悪ならず・金持ちをこの上なく憎んでいる、

幾十万の人間の様々な愛の破片！ 精神的に異常な男、

怒鳴られた犬のようにしおしおと頭を下げる、

灰かぶりの者たち――真実を知る覚悟はあるか？

大型ショッピングモールのグランドオープンの日！

失踪特集番組、女を憎む男たち、

外と内とでは呼応して、天国へも地獄へも行けぬ煉獄・

「これっぽっちの記憶もなかった・」

ある少女が言った。

真実・私は、あの時の不気味な息苦しさを回想するたび、

現世は邪悪と欠陥とに充ちた脂汗と呻吟の、でたらめばかり、

それでもただの一文すら貰いもせぬ受刑の魂――

ああしかし生気のない沈鬱な顔はどっちか！

ホテルのマネージャーが何者かに殺害されたというニュース、

身近な話ではガーデンニングショップ！

経営不振でバイヤーも従業員もみんな辞めてしまった

自我の追求をすれども赤裸々な懺悔！ 壁！壁！そして壁！

昼はもとより夜も眠られぬ、水をせきとめようと、

蛇口は必要だ、..しかしポートは揺れる、

( 失われたものが懐かしい )

「気が気じゃない！」

独坐無言なれども雪なす小手！

しかし気を失えば水をぶっかけられたよう！

私は人道か？..ひとこと言えば睨みつけ、

金は持たぬが眼は見える、ああたけり狂って気違いのよう、

それは正義か！と問えば..

顔色が悪く、拒食症患者のように、がりがりに痩せた女。

何の痕跡も残さず消えた少女。

「自分は、煉獄で時が来るのを待っている」

顫えがきたり、しびれがきたり、

耳は赤くなるし、頬は火照るし、蒼ざめる。

描いた絵に命を吹き込むことができる不思議な力を持つ少女

「日々こうして生きている存在の理由とは何だ..？」

義務か？..労働か——それとも宿命的な神秘へと向かうための

退屈な準備期間か！美と狂気がせめぎあう

——不気味な影のうごめく町

パンパンと銃声が轟く、空中が焼ける、

「白鳥の湖」のプリマ！

そのうえを衝動という名の道筋がレエルをつくり、

クレジッド。静止画が見せる正体不明のアダム

——私か？ おお、私ならばこう続ける..

「風よ——コカコーラの壺よ…」

(それにしても…少女よ、

ミカエルやサタンの名を口にしない少女よ！)

気休めの報酬…うすら冷たいそのうえをぺたぺたと歩き廻って、

太陽が出て空がすっかり明るくなった時には、もう彼女はいない

沢山の足跡が残っている。冷淡な風を浴び…決闘をおっ始めるかのような

冷酷な眼…非常過ぎる生き方！

清い泉の中でしたたる水は絶えはせぬ！

粘土ができる水、粘土があれば人形ができる、

こねてはこわし、こわねてはこわし、顧みる暇もない！

上流から下流へと、あるいは下流から上流へと私は歩き、

濁ったものはやがて水中に沈むように、熱っぽい空気も

蜃気楼のみせた幻花におもわれる頃…

夢の中でアザラシやセイウチが現われたよ！

8

石垣のようなものがどこまでも一直線に連なり、

何故こんな目に遭わねばならぬのか、敵も味方も、かかわりを失い、

やがて涙を湧き立たせる…何故だ、煉獄よ！——

かくてくらがりの地獄の底で、サケンデ ソトへ デテユク

夜だというのに もう夜が来たというのに…澱んだ熱い空気

消えかかろうとうごめく姿、異常なショックが均衡を破り、

幽鬼でも出そうだ、突然変異でも起こしたように硬化する肉体

豆粒になって消えてゆく夜、千人に一人の、

届くあてのない想いが、いつ出来たのか——どうして 生まれたのか

見失われる いらだたしい時間…

災難が根絶やしになるというわけにもいかぬ、難破船のような

不幸よ！…錯乱と閃光の狂気！ 戦争が起こる、

人びとのつまらぬ小競り合いが起こる、ニョッキリト ノビル

(死は無の中に神を作った)

(骸骨のような鉄筋が回想の幻となった)

悟りは開かれぬと知りながら――

起源ともいうべきその宿、煉獄に

地球はみるみるやつれていき、今また血みどろと瓦礫の悪夢、

苔むした、貝殻となった、しずかに文字は

小鳥の翼のように囁いた…

私が谿谷のいまにも崩れ落ちてしまいそうな木橋を思う頃！

わずかな利潤のため、市場を作った。嘆きながら、泣きながら、

抹殺することのできない、暴力！

ターキーやジンジャークッキーは消えてゆく、など と

J・R・オッペンハイマー博士は知らない…

猛獣使いが猛獣に噛みつかれる、ああ人として人にそうされる、

はげしい民族の憤りを死の商人たちは知るか、奴隷は、解放へと向かい

平和は岩塩の結晶へと向かう…彼方の爆弾を ふかく吸いこんでゆき

蒸せるような。お互いの耳が コチコチという音を聞く

燃えさしにも針が降る、猛勢一挙に、…夜空の不吉さ、冷や汗の慄え、

長い間の不在は濃く、熱く、忌々しい過去となった。

壊れるか…沈むかしかない煉獄よ！…石畳を知っているか、

ああ、お止みなく雨が降り、無数の蛆のように見えた

濡れて光った。ケロイド達、血の川…生きていることさえ、

見せかけの思いやりに思えるほど、この穢れた水脈は極彩色となった、

されど遙かに多くの閑暇を持ちながら火のような、砂、砂のひとつぶ、

猩々緋！見えはしないか、みじんに砕かれた骨粉、

ああこの砂埃にまぎれていかないか？

ああ事柄の継起による因果関係！

バイオテック企業で冷凍され、

いつ目覚めるのか？――ぶらんこを夢見るだろうか――

眼の注がれる方向を夢見て…

宿業？..それとも魂の鎮経剤？

ああ！——このひろい煉獄に、現世の答えはない、

あるといえば傾斜、空しい記憶の重み、地異のかたみ、

次第に妖しい燐光を放ちながら生命の深部へと、

ソドムの日 ゴモラの日..

あるのは過去ばかり..過去は民衆の餓えばかり！

渴くもの、仔羊よ、その想いを人の世の大道につなぎ、

罪ほろぼしのつもりか、聞いたこともない呪文を唱える者もいる、

樹木のない街はさびしい、

ありふれた人間達の言葉は淋しい..

サンタクロースの仕事は山積みだ！

「あれは科学者だよ..」と教えられた。

私は煙草に火をつけブランデエを煽る。

ひとつかみの灰、電灯を消すと残光の影響か、

林檎を想う、昨夜の星がきらめく頃まで——

「あれが科学の敗北か——」

己にか..それとも他へかわからぬ飢餓に迫られ、がくりと首を

落とせば。深淵にふるえる、過ちは再び繰り返された

黙ってゆく流れることはない、たまゆらの波また濤、

万年失業者のような顔をし、失墜や墮落や委縮のテンポとを

ああこの荒涼の地で何に変えようとしている！

かけ離れたスピードで呵責を覚える間もなくビルが林立し

人と車があふれる——非業の死を遂げる夢。これらはもう一つの装い

どうすることもできないまま時間だけが経過し、膨らみ続ける不安は、

彼女の死という絶望に変わる。

(眼球よ、光のアラベスクを透かして枯れた風)

(凄惨な怨恨の呪詛、知恵の限界、閃光の悪意)

されど、きざみつけられた轍のあとまで眼と心に沁みるが

裁く者は見えない。踏みつけた小さな骨に凍てつく大地。  
ああ無意識の欲求である人びとの驕りきった考えの前では、  
冬の歳月を、優しい心の姿の街と思うばかりだ、  
堪えがたい汗が集合することなく、雑草となったかのようだ、  
いや、それとて、すさみきった私の穢れた心もまた  
暗い仏殿の奥へと踏みいるかのように！…見覚えのない  
岸壁で。唐突に覚醒した。記憶が不確かな、花模様  
もがき苦しみながら、心はついに切れることなく、  
弾痕をさらしながら堪えがたい古疵となったか！…

9

だが、私の目には何の感動も与えず、  
一瞬で 黒髪は真っ白になって、散らばった靴も、  
透明になった。誰もいなくなった、苦しい胸、年が経つほどに  
南米のジャングルで遺跡発掘を手伝う！  
破綻しかけた――撮影が止まった時、泣き声が…  
使い次第でそれは善にも悪にも使われるもの  
言いたいことと、言わねばならないこととを区別し  
トロピカルフィッシュショップ  
ダイビングコンテスト  
クラゲ、カニ、ドラゴンフィッシュ  
窮屈千万な方法で――これを許した…  
からだごと焼けるが、いつもよりはるかに大きく見えた  
現実を殺して、夢に生きようとした私は、この煉獄で  
何を見たのだろう！  
散り花の形はまぶたにたまっている涙  
右肩のあたりが血に濡れ、うずくまり呻いている声のようだ、  
偽善は非常に便利な言葉だ！…誰も死んでいない、魂は死なぬ！  
このかなしい煉獄を愛すると言えば、吹き募ってくる、声に重なる、

屈折して重なる、怒りとも悲しみともつかぬ、ああ洗いながら乾かされ  
無邪気な振舞いすぎると言えようか。万里の闇、ぼやけた奥から  
墓銘はぼろぼろと崩れ落ちてゆく！

船が沈没したあの夜のできごとを語りだす！跳ね返ってきた…

血と涙が似合う焦げ果てた土地、夏の時をつづる、川べりのくさむら、

川に落ちかかる人の影、生活が歌につづられ—

だがあの砂嵐がとうとう通り過ぎようとした時、

お迎えが来た—まっしぐらに人間の存在を薙ぎ倒してゆく、

この黄色に富む色彩の風が屋根を包んで過ぎると、

消火用の給水塔

**歯車の形に変化する携帯！**

ほんとに正気の沙汰とは言えない本能というものを、

特別に美しいものの中へとあつらったのだ。焼かれるバリアだ、

いちめん倒れ、だが、しがみつき、確かなことを待ちわび、

不信の潜在する中で悲しみにめぐりとられた胸の一部となった

黒雲に映える雨…明瞭な意識、たとえ愚劣と無自覚の標本にすぎない、

愛と死を演じわけるとしても、どう考えたらいいでしょう、

無実の火種であろうと時代的にしか生きられぬ…台本よ！風に舞う衣よ

奇妙な時代の寒気を感じながら私は目覚めた。

真珠の目を開けば、名もない死体—

月の光にあるばかり…

『友への友情は、固い殻の下にひそんでいるのがいい。』

ニーチェの名言も思い出した…

ああ、苦しみと無関心の中に相変わらず死神は坐りこんでいる、

ぶよぶよした資本主義を呪う者、時間的にも地理的にも、

生きていても仕方がない現在の爛れから、

完全に離れようとするいま、透きとおった知性は、

生あるすべてに胸を敲つ抽象名詞たち、瞬く間にすぎる、

天使の眼が無償の行為を求め始める。サイクロトロンや電動機！

歓喜を産む可能性のない苦患、わがままで不精な者、おしなべて  
ハンドルの向こうで吊り下がった登場人物はフィルムの陰画の如く  
この極端化の法則！ この悲しい入港とそのまったく同じ船は、  
嘆きに溺れる人の如く、いっそ沈没するべきだろうか！

しかしレンズを覗けば一望千里だ！

洞窟の偶像はいまだに胸の内にとろどいているし、

熱で乾きあがったものが冷たく尖る曖昧化と神秘化…

——文明精神に則って大量生産をただちに開始し、枯死の擬態をし、

この最高の知識を修めようと思う、民衆の反逆者は数千年の歴史の結晶、

この国土の伝統の顕現であるスクリーン！

キリストの無言の接吻！揺れかえる霧を浴びたまま…

滝の水冷々として、行き交う人たちの手となり、傘となり、

鉄となり、——想像力の鋼索が、明日にも断たれるかもしれない

そう思う。張りつめた青い空よ、しだれ柳の前にたたずむと、

深い因縁の涯しないさびしさ。首尾一貫せず、矛盾の上にある

あの煉獄、永年の霜を置く！

私はたとえば鬱勃たる気魄、有数な季感の多い国土の民として、

——すじの血脈を感じてみる、呪われた伝統を！…

とうに足を洗った金庫破りをもう一度やれという脅迫の電話！

ああ川へと舞いもどれるひと群れの鳩よ！

——わたしには大事なものがある、だから守らねばならない、

常識家よ、ネジは抜けた。天の導きのように消された街の名、

積み上げる肉塊、名簿なき始末の悪いランビキヤフラスコ

芸術であり美術である以上…私の苦悩は霊の不滅のなかにあるだろう…

月の裏側に不時着した謎の物体！

幼児であった顔も、いまや名前は挺身となる、

完璧無垢の妄想となる、鋭い切れ目を見開いた

経験を超絶したる祖先よ！

「溶けちゃったんだ…」

羊の群れがああ荒野の地肌を縫って彩りを添えていた、  
あい色になりて、いや模糊としていまや靄の詩人となりて、  
牧夫が芦笛を吹く・私はこの耳でしかとそれを立聞きし、  
稀有な癒の高い強い声で高鳴きをし、

スウィートルームの改装！

エクスプレス！エクスプレス！

声・歌・ダンス、そしてピュアな情熱！

ああ、晴れた空が遮るものなく遠くまでひろがって、  
不思議な印象を引き起こす、日々衰えていくはずの私に  
慰め。ああ祈りをどれだけ掘り下げれば、小さな光の波動  
そのものとなるだろう。髪をくしけずっていた女性、  
化粧した女性、..その薄光りする翅でも揺すっていたように、  
ああ何の遮るものもなくひろい黄昏の光の消え行く頃  
細胞分裂と自己増殖。メキシカン料理やカントリー風  
風景全体が悲しい風情を帯びて、風と共に去ってゆく、静かに散ってゆく、  
沈んでゆくものはああ黄土の嵐であろうか。煉獄という精神の地層に、  
ズタズタに裂かれた知覚は限界を感じ..開陳、  
節度の欠如を認めながら、飛びちらって、生の果ての生の暗い地中  
蟬。永久の平和の願いと悲しみの象徴である、私の骨が  
この青磁器のなかにまじりこみ、蕭然たる響きが、呪いの中と、  
ぼんやりと響く鐘。それがむごい屍體のながれる、枯れ葉に思える頃  
こまやかな脂も肉も溶け、数々の衆生の骨はもろく、  
真理の誤謬。より細かく鏤められ、物質連鎖と食物連鎖の  
この空に埋もれよう！しずかに埋もれねばならぬ歴史の散華  
一一見れば見るほど冷たい水に浮いている私の空は  
存在の苦悩、生の悲哀をはかなくかさね映らせる。  
煉獄の貧血にして、栄養不良の不気味な一塊！

心ここにあらずの男。

いつの間にか人との絆を失ってしまった者たち。

それでも様々な歴史の中で、交流による心境の変化…

素直になって心を開いて、懸命に想いを伝えようとする姿に、

誰もが胸を揺さぶられずにはられない！

もう一度目を向けてみる必要がある、もくもく渦巻き立ちのぼる、

この思索——結末への矛盾を私は感じ続けてきた！

遠ざかる風景を初めて見るように、真面目な顔になる、

私はここで名誉のみならず、栄光であらねばならなかった！

道を作ったのは暴君と奴隷だ、襲いかかる自然を作ったのは神だ

菱形の窓、屋根裏の天井部屋で見えるような、パンダやエミュー

奥深い樹木と樹木とのあわいにまじりあった光の粒子

人間の魂——それは一体何に値するというのだろう！…

ミノタウロスの迷宮

オーストラリア沿岸のサンゴ礁、

濃淡の翳を帯びた薔薇色の頬…

私は問う、山脈が蜿蜒としてつらなり入り乱れている奥地から

朝霧をまとい、鬱陶しい梅雨の季節の前触れを。相次ぐ崖崩れを。

地盤沈下を。されば敗北も辞さぬ覚悟ながら、孤独な単細胞

自由裁量に委ねよう、…あずき粒となった、

もうこの空を解放しよう！——

（その人はマスクをかけたまま現われた）

（呼び出される悲哀と苦悩の果ての果ての虚体）

絶望しなかった比類なしの伝統の彼等は死に、すべては芝居になった、

隷属の契約は産業となり、流浪し、純情の涙をこぼしてきた、私の空は、

——健康だった。

深く湛えた湖水の青く研ぎ澄された水の面に似て

私は新しい生活の第一日をふたたび遠ざかってゆこうとしていた、

私は…造物主か？ 天性の——美か！

いや大小数多の昆虫類である！…空は森と繋がっており、

そこに浮かぶ透明な矢のような微粒、重くて重くて口に運べない  
徐かな風景！何気ない光景の中に思いがけない事件が潜んでいる…

（記憶の永劫の停止、…小鳥は影となり、魂は水となる）

（完全に無感覚の物体——人間の影が光の鎖に思えるほど）

もはや制するにも堪えないが、縛るにも堪えない、  
所詮この痩せた土地、さもしい心の彼等がつくりだした夢…  
何の夢を与えよう！…無数に無言の火を天に振りこむような、  
言葉はもはやおらかな意識を与えてはくれないだろう。

——ふざけた呼び名、合掌？…拍手の間違い

人間らしさとはもはやニヒリズムのことではないか！

と 私は…特殊なアナキズム、つき飛ばされながら、  
時代が悪いというのか！しっとりとした手でつかんだ、

異様な赤と黒！謎の怪人・ファントム

違う、鋸齒…重圧するこの言語にまわりつく彼等の卑しさが、  
無知蒙昧さが私には嫌なのだ！

しかしあてもなく彷徨う、

大地は常に芽吹こうとしているのに、日々はこうして過ぎてゆくのに、  
永遠にまだ明日が続くと思いきやこんでいる賤民根性！サイレンの響きとは  
違う、蟬しぐれ、突然のシュプレヒコール！

烈しい火焰の下をくぐり抜けた私は獅子だろうが、

めまいも、ふるえもない！ライトブルーのうすぐらい空間…

「だがひとつまみも、明日のことなど信じてはいない！」

やがてこの国にも、大雨による洪水や火山の噴火に見舞われ、

我々は土地を捨てて移り住むだろう、

いつの日にか、この惑星を捨てる日も来るだろう！

——人よ、煉獄を心に響かせろ、この悲しい国の挽歌とせよ、

宝のもち腐れのような、まだ真実に徹し切れぬ態度よ。

鮮やかな緑を帯びた暗い電波の反射、先刻言及したものの反問、

それでも、…この国こそ、この土地こそ

煉獄の愛した無為そのものの故郷！

破れた咽喉の細い穴から、密度の高い屈曲したものを  
感じる、  
ゆえに、私の愛する尊くて強い、盛んな  
苦しみや悩みのある、  
心に傷を持った者達が  
眩いている・圧倒されるほど凝縮した、  
被害者意識に空気が  
売買される！

「不安な・雪靴がぎしぎしいわせている！」

盲目を装った  
真実の愛の地！

それはきっとあなたの家の反対側にある！

――壁のない世界で、自分たちが  
かつていた場所

…たまに 思い出すんだ――。